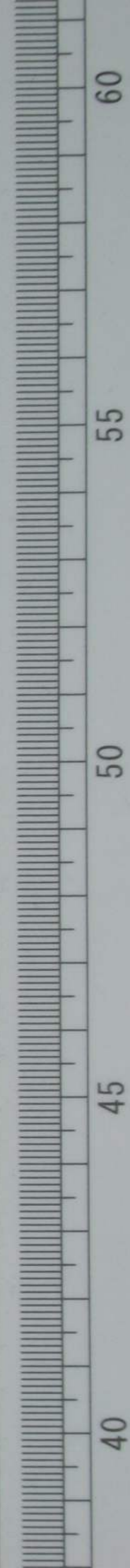


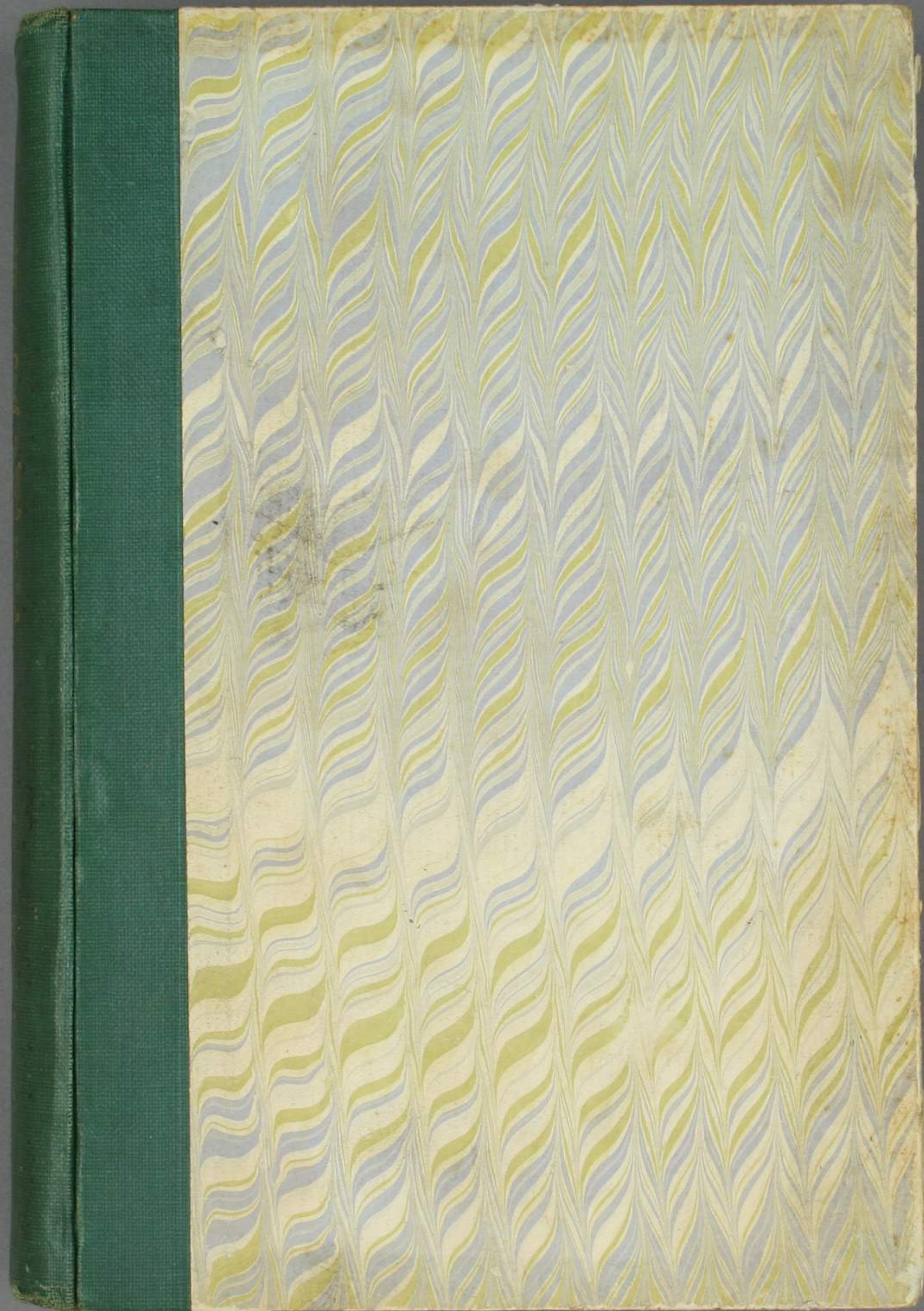


小精廬雜筆



小精廬雜筆

市島春城著

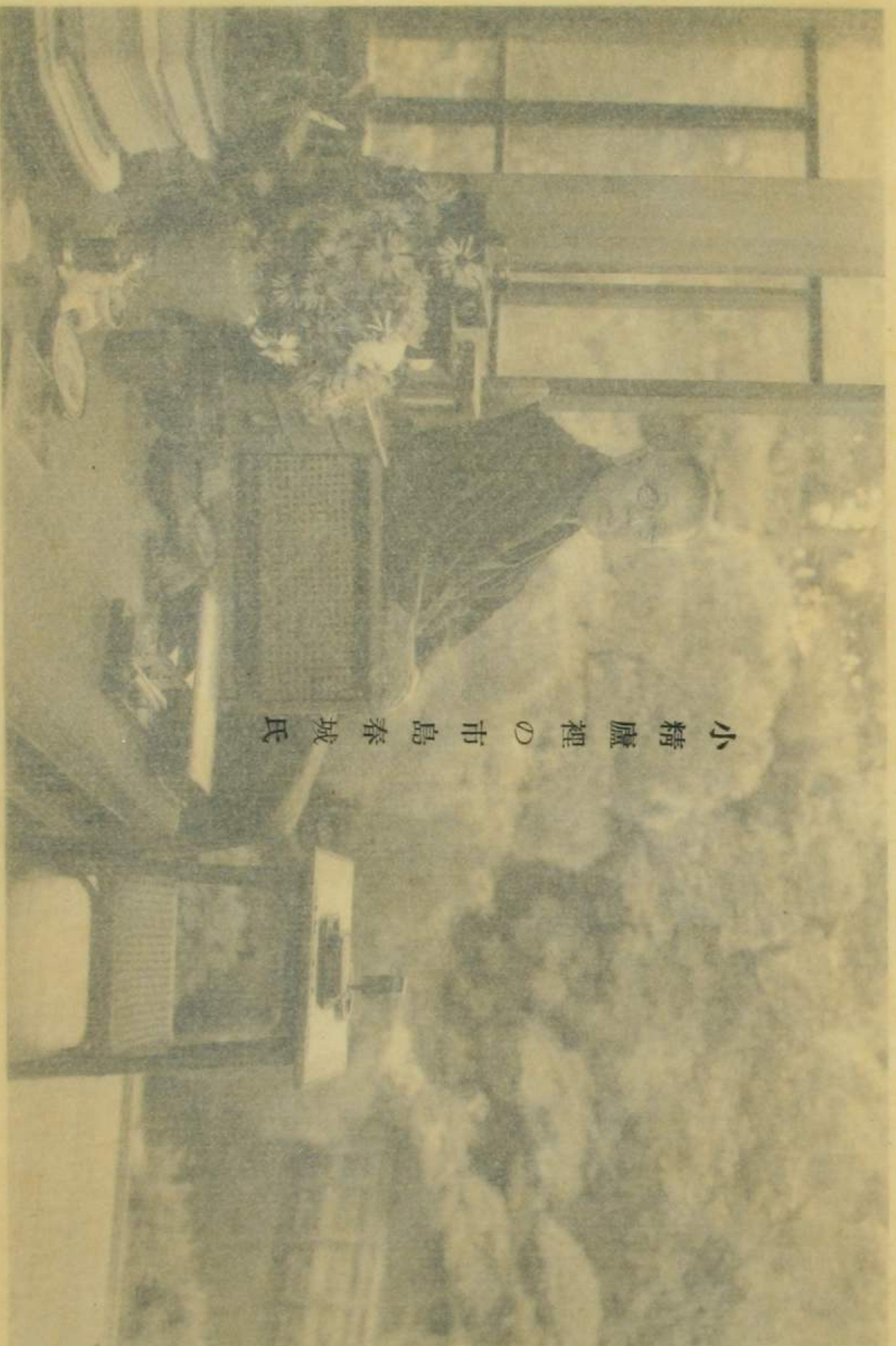




市島春城著

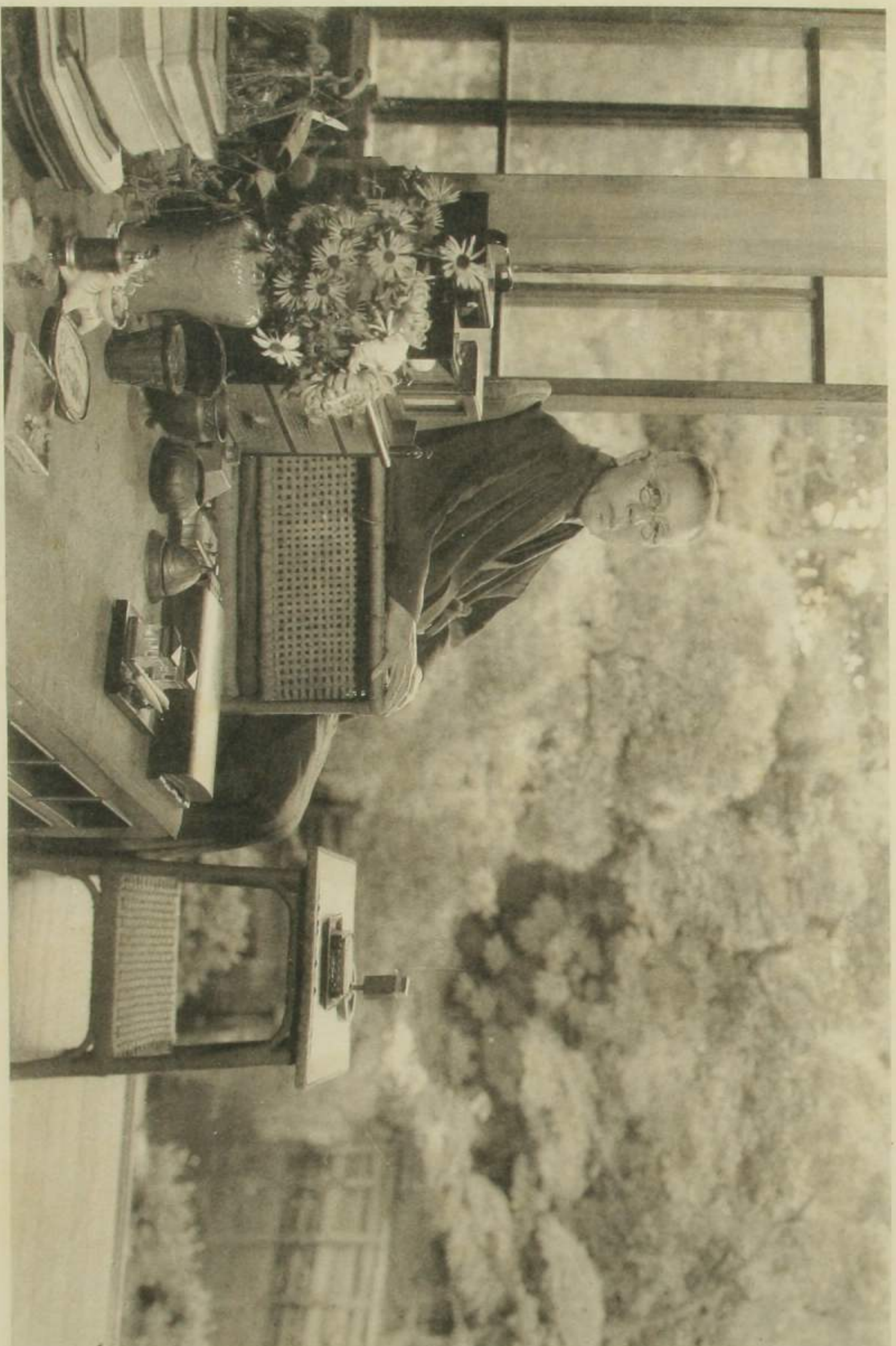
小精廬雜筆





小精庵裡の市島秦城氏

小 替 嵐 野 の 市 島 春 英 丑



小精廬雜筆

はしがき

ことし三伏炎熱の日、閑に任せて、昨年来折に觸れ閑筆を弄した
雑稿を取り出して點檢する折柄、庄司淺水氏入り來り、座邊に取り
亂しある反故を見て、予に勸むるに編して一冊の隨筆となし、刊行
すべきを以てされた。

予云く、近年俗務を離れて多少の暇がある、老來光陰を惜めども、
疎懶の性、讀書に没頭することも出來ず、何等かの事を研究する氣
根もない。時に無聊に困^くんでは、漫りに筆を驅り、無用の事を書き散
すことが習癖となつて、毎月雜文案頭に紛然堆をなす、勿論人に示
さんとするにあらず、唯だ自娛のすさみに過ぎないから、讀むに足

るやうなものは無い。殊に今非常時に當つて、警世の文なら兎も角、斯る無用の閑筆を公けにするなどは心外であると云ふと、庄司氏云く、世には「無用之用」がある、貴下の無用とするものを採り、之れを活して世用となすのが吾等の務めである。願くば吾が爲すに委せよと。

予思へらく、世には余と同じく光陰を惜みながら、二六時中、汽車や電車にあたら時間を茫然徒消する人も少からざるべし、斯る人の徒然の時が、宛かも余が無駄書をした時と同様でもあるから、そんな因みに無用の書を其人達に排悶の一助として薦めるのも強ち不可であるまいかと。

遂に氏の慫慂に従ひ、多少舊稿を整理し、更らに幾許添加する所

あつて、編次校正一切を氏に委し、たのが此の隨筆である。書名に小精廬とあるは、予が書齋の名だが、隨筆の各篇皆小なれども何れも精を闕くは予の甚だ遺憾とする所である。

若しそれ余の隨筆觀は卷頭に掲げあれば、茲に贅しないが、隨筆の病とも云ふべきは、言はねば免がる、拙や醜をさらけ出し、爲めに大方の譏りや笑ひを博することになる。これが隨筆の病であり、又隨筆禍でもある。必竟賢き人達が慎んで隨筆を出さないのも此故であらうが、愚かなる吾れは危道を踏んで之れを敢てする。若し盲蛇の勇も尙ほ怯に優るとして大方の寛恕を得ば幸ひである。

昭和八年十一月小精廬に於て

春
城
しるす

目次

目次	目
一	隨筆小言……………一
二	夏……………二
三	「屈」の辯……………五
四	家庭は合作藝術……………七
五	母……………一〇
六	プロ階級と醫者……………一四
七	危険の思ひ出……………一七
八	舊夢談……………二四
九	記憶すべき逐鹿戰……………二六
一〇	條約改正の斷末……………二九
一一	一つ橋時代の大學同窓會……………三〇
一二	藏書家の耽溺……………三七

一三	大名の藏書家	四
一四	ハンターと光悦	四
一五	圖書館で取扱はぬ圖書類	五
一六	古本屋	六
一七	校正難	六
一八	活字因縁	六
一九	書名の奇を忌む	六
二〇	圖書目錄の應用	七
二一	表具屋	七
二二	二顆の印	七
二三	印趣味の鼓吹	七
二四	亡びんとする木版彫刻	八
二五	切支丹殉難の圖書を讀んで	八
二六	一文人の遭難記事	九

二七	ホートン先生と沙翁	一〇
二八	天才世阿彌	一〇
二九	良寛禪師	一五
三〇	良寛の書を紹介した一人者	二一
三一	廿年の無人島生活	二三
三二	貧民窟	二三
三三	玩具小品	二五
三四	裸體美人の像	二八
三五	大量趣味	二九
三六	水と日本の國民性	三三
三七	世界早廻り	三四
三八	人間と牛	三七
三九	悠久山の犬塚	三八
四〇	酒	三三

四一 酒と個性……………一三四

四二 山と酒……………一三八

四三 酒席の悪客……………一四三

四四 酒豪樽次の事……………一四四

四五 麥酒漫談……………一四七

四六 天麩羅……………一五三

四七 上方料理……………一五五

四八 郷土料理……………一六一

四九 燕巢……………一六三

五〇 梅干禮讚……………一六五

五一 岳麓の五湖に泛ぶ……………一六七

五二 大月驛……………一七三

五三 一日のドライブ……………一七五

五四 箱根の舊道に雲介歌を聴く……………一七九

五五 大名の荷物……………一八二

五六 最後の箱根關……………一八五

五七 野州鹽原の紀功碑……………一八七

五八 會津道中……………一九〇

五九 景色と吝嗇……………一九三

六〇 山岳形態論……………一九六

六一 自然を愛する日本人の趣味……………一九九

六二 作庭藝術……………二〇七

六三 外人の日本畫觀……………二〇八

六四 模倣藝術……………二一一

六五 蚊帳を背景とする美人繪……………二一八

六六 葛飾北齋……………二二〇

六七 書畫を見る餘徳……………二二三

六八 日本橋々上の二儒……………二三四

六九	翁反故	三二七
七〇	都會と俳句	三三〇
七一	美術品の海外流出	三三四
七二	詩畫その本領を異にす	三三六
七三	藝の秘訣	三三八
七四	繪具の研究	三四〇
七五	活人畫	三四三
七六	大隈侯遺事	三四四
七七	坪内逍遙翁數則	三四三
七八	佐久間象山の遺事	三四九
七九	中島力造博士と語る	三六一
八〇	薩摩琵琶の名人西幸吉	三六四
八一	碁の名人岩崎健造	三六五
八二	プロレタリア歌人磯丸	三六九

八三	山東京山は越後をどう見たか	三九三
八四	瀧澤馬琴翁を偲びて	三九四
八五	文藝家の御幣擔ぎ	三〇〇
八六	世界文學變徴の一考察	三三二
八七	舞臺装置の新傾向	三五五
八八	豊公と淀君の短篇劇	三八八
八九	ジャクマ馴し	三三〇
九〇	紅葉山人を偲ぶ	三三三
九一	「硯友社と紅葉」を読む	三三七
九二	日光廟史談	三四〇
九三	琴の因縁ばなし	三四三
九四	太田道灌と紅皿	三四五
九五	あこがれの詩の國讃岐	三四七
九六	川柳の語る尼寺	三四九

目	次
九七 自殺禁止の困難	三五三
九八 浪人	三五五
九九 刺青	三五八
一〇〇 花屋の今昔	三六〇
一〇一 花	三六五
一〇二 チューリップ	三六八
一〇三 公孫樹	三七〇
一〇四 偕老同穴	三七三
一〇五 植物界の奇観	三七四
一〇六 竹の漫談	三八〇
一〇七 高山植物に就ての感想	三八五
一〇八 雪國の今昔	三八八
一〇九 アルピニスト	三九六
一一〇 屋上登攀者	三九九

目	次
一一一 指紋	四〇一
一一二 温浴史	四〇三
一一三 生殖器崇拜の餘風	四〇四
一一四 偉人の暗黒面	四〇八
一一五 羅馬法王とミル	四一一
一一六 花魁吟味	四一二
一一七 貞操帯	四一七
一一八 合理簡單化は容易ならず	四一九
一一九 無駄征伐	四三〇
一二〇 百貨店は街路の延長	四三四
一二一 デパート	四三六
一二二 旅館は汽車の延長	四三八
一二三 旅舎と茶代	四三〇
一二四 早稲田田圃の頃	四三四

目	次
一二五	古い銀座の回顧……………
一二六	銀座暗黒面……………
一二七	銀座……………
一二八	銀座の懐古……………
一二九	用語の變遷……………
一三〇	新しい言葉……………
一三一	同盟罷業と高野山……………
一三二	文明の行づまり……………
一三三	「笑」に就いて……………
四五四	
四五九	
四六三	
四六四	
四六七	
四七一	
四七三	
四七五	
四八〇	

一 隨筆小言

隨筆小言

近年自分も誤つて隨筆家の班に置かれ、兎もするといろくの雑誌から執筆を頼まれる。暇のある時は書くこともあるが、それに就て常々思ふ事は、隨筆などは思想の斷片をアツト、ランダムに書き散すもので、纏まりのつかないものだ。文學の範圍に入るものではない。併しこれも文學だと云はゞ、餘興とでも云ふべきであらうと、コンナ風に隨筆を卑下したこともあるが、又ある時は反對に隨筆を辯護して見たこともある。隨筆ほど自由に書けるものはない。筆者のテストを現はすにも、筆者の性格を現はすにも、筆者の氣分を現はすにも、これが第一のものだ。隨筆なかりせば、その折々の思惑は書きとめらずに消え失せて仕舞ふであらう。ある時ある境の感興、友人などとの交り、家庭の事などは隨筆あつてこそ書かれもし、それが案外人の興味を惹くことになるが、然らざるに於ては此種の瑣事は皆雲散霧消して何も傳はらないであらう。日々のことを書きしるすには、日誌があれば、日誌の體は略記を要とするから、云はゞ覺書に過ぎない。讀んで興味あらせる

夏
ものとは全然異なるものだ。學理や考證などの類に至つては、思想が纏まれば一部の著書ともなるが、其の纏まるまでの経過中の思想を書いて置かねば、その経過中の様々の思想は腹笥にあるまゝ遂に葬り去らるゝであらう。隨筆は百貨店の如きもので、どんな項目でも書けないことは無い。一部の著述と纏まらねば世に出すことが出来ないとしたら、断片的のあらゆるものは皆消へ失せるであらう。隨筆は玉屑の如きもので、屑ではあるが棄て難いものだ。此の屑の内から拾ひあげて、史傳を補ふ材料としたり、劇や小説の材料にしたりするものがいくらかもある。簡単な書き方が隨筆の特色で、心掛けがあれば誰れにでも書ける。亦讀む人にも敢て勞することなく、匆忙中でも一寸讀めて、興を感じ、亦往々啓發することもある。今日の雜誌などは大體皆な隨筆であることを思ふと、繁劇の世の中には隨筆も亦棄て難い文學であると、思ひ直すことも毎々ある。

二 夏

毎年招かざる客が訪れて来て、二ヶ月位必らず滞在する。ことしも七月に入るとやつて來

夏
た。此の客がやつてくると、必らず蠅や蚊が踏いて来て、五月蠅くつき纏ふのに困る。毎年の例とは云へ、長く滞留してゐるのには迷惑である。やつと此の客が去つたから云ふのだが、ことしは随分惱まされた。幾んど一ヶ月に亙つて一と粒の雨も降らなかつたので、井水も渴する、池も底を露はすやうの事で氣温は日々九十三四度に上り、随分閉口した。此の客は如何にも暢氣なもので、此の位の暑氣が何んだ、臺灣などは年中これよりも遙かに熱して居るぞと云ふ。一體、これ式の暑さに辟易して、海に山に避暑をやるなどは贅澤の沙汰だ、全體人間は暑の底ふべきを知つて、暑の喜ぶべきを知らない。吾れ請ふ卿の爲めに語らん、暑候は卿等の身體に攝養を與へる時だ、卿等が赤裸となつて大氣に接するは此の時を措いて無い。五穀の登るも亦此時である。一雨の來らざるを人間はつらしと云へど、これで無ければ五穀は登らない。今年の豊作は旱天の續くからである。卿も田地の所有者であらば、豊穰を祝すべきであらう。凡そ都會地に於て閑靜の時を求むるとせば、此の暑候の外にない。日々數多の客に訪はれて應接に忙殺さるゝ人も、此の暑候には訪客が絶へるので、こゝに安息の時が生れる。夏の日永を彼是れ云ふ人もあるが、それは光陰の貴さを知らない人である。平生俗事に忙殺されて一時の餘裕も持たない人は、此の靜閑の日永

夏を喜ぶべきでないか。人に妨げられず、停滞の家務を處したり、疎遠になつて居る人を訪ふたり、書を讀んだり、筆を把つたりするには此の時が絶好の機會である。卿の如く讀書を好み、且つ日々執筆を事とする人には、別して夏の静閑な永い日をしみじく喜ばしく思ふに相違ない。蠅や蚊は誰れも庇ふけれども俗客の頻々來つて人を煩すに比すれば、問題とならないではないか、早起清涼を味ひ、日中蟬の音楽を聞き、夜に入り流螢を弄し、枕上蛙聲を聴くのもわるいことでもあるまい。卿の如き酒好きは、冷却のビールを飲んで禮讚しないこともあるまい。涼簟を延べて墨甜郷に入るも、浴後爽快を覺ゆるのも夏なればこそである。卿に語を寄す、夏時は殊に清潔を旨とせよ、書籍や衣類の蟲干を忘るゝな等々、黙して聽けば際限もなく語るが、中には其意を得たことが無いでもない。兎角四季には美醜兩方面があつて、普通評判のよくないのは夏と冬であるが、わるい方面のみに即して自から惱むのは賢しと云へない。どうせ斷り兼ねぬる四季のお客に對して、よい加減にあらねばならぬが人生である。と云ふ内に秋の客が玄關までやつて來てゐる。

三 「屈」の辯

屈といふ字は普通惡しざまに用ゐらる。卑屈、屈服、屈從などがそれで、全體事窮まつて通するに由なき時の態度が「屈」である。勿論屈の原因は様々ある。或は事窮まるにあらず、臆して屈するものもあり、之れを卑屈と云ふ、人の多く賤しむのは之れである。すべて勇怯を論ずる時に屈を以て勇の反對とする。乃ち怯の態度となす、故に屈と云へば不名譽となし、男子的にあらずとなす。然れども屈にも辯あり、決して臆怯の形とのみ見る可からず、人の世に立つ、如何んぞ直情徑行を以つて終始するを得んや、事に當つて斟酌をなす、これ既に屈なり。多少の考量分別を加ふ、これも亦屈也。屈は複雑の形である。鍛鍊を要する態度である。橋洲の狂歌に「世に立つは苦しかりけり、腰屏風まがりなりには折かゞめども」とあるのも、世に處するに屈の已む可からざることを云ふたのである。全體屈は忍ぶの形である。世に處するに如何に忍ぶことが時に大切であるかは、必ずしも絮説を要すまい。しかし、忍ぶにもいろいろの態がある。勢に恐れて忍ぶものもあるけれども、畏るべき勢

がなくとも忍ぶものもある。そして識者は畏るべきの勢なくして忍ぶものこそ真だと云ふてゐる。勢に畏れて忍ぶなどは卑屈とも云ひ得べきだが、畏るゝ故にあらすして忍ぶのは深い分別があるからで無ければならぬ。沈重事を察し、輕舉を厭ふものゝ態度はこれである。屈するが即ち改める動機であることが往々あつて、人は之れを以つて美德としてゐる。學者の態度がこれで無ければならぬ。自からの誤りを指摘された時には何時でもフランクに屈するの雅量が無ければならぬ。ハックスレーは曰く、「理學者は決して誓を立てるものでない。其の信する所は軽く握つてをり、其説が大なり小なり事實に反するものがあるときは快く之れを擲つてを以つて義務としてゐる、だから自分が非を感じた時は直ちに人の前に毫も赧然なる顔色なく、その變説を公示することを憚らない」と。これ即ち屈するのである。學者の屈するは改めるに吝かでないからで、斯くあらねばならぬ。實は屈するのは乃ち伸ぶる所以である。屈することを俗にヘコタレルと云ふて意氣地のないことゝしてゐるが、決してそうではなく、屈するにも大なる力が要る。大いに伸びんとするには大いに屈する必要がある、畢竟反動の理法に據るものである。よく譬に取らるゝ尺蠖の伸びんとする前、先づ身を屈するのは誰れも目前に見る事實である。すべて飛ばんとするものは先づ

翼を伏し、奮はんとする者は先づ足を踏し、拒まんとするものは先づ口黙す、此等は皆屈するのだが、起たん爲めの屈は力強いものであらねばならぬ。螫龍の深淵に潜むのは昇天の意氣を養ふ爲めである。人事に於ても大事を爲す人々は往々忍辱の態度を見るは珍らしからぬことだ。屈伸は天則で、天地間何物でも屈伸のないものはない。鐵鋼の如きですら此の理法の前に立つ譯に行かぬ。人體などは尤も造物主が精美の技を盡したものであるから、屈伸自在で無ければならぬ、此點になると西洋人などは立つことが出来ても跪くことが出来ず、身を屈めて耕作することも出来なければ、潜水艦の如き狹隘の處に身を置いて自在に働くことも困難である。西洋人のダンスは直立一調子であつて、日本のダンスの如く屈身が無い。彼等の態度はブッキラポーで圓融を缺き、天恵が五體に届いて居らぬ。此の點日本人は寧ろ誇つてよろしいのである。偶々感ずる所あつて「屈」の辯を作る。

四 家庭は合作藝術

家庭は銘々の安全地帯である。小なりと雖ども一城廓である。清い楽しい家庭を有つ程

幸ひなことは無し。

家庭はどう形づくられるものであるか。或る建築技師の談に、吾々は物の安定（スタビリティ）を求めるに、三點を欲する。例へば一本の棒を立ててもグラ／＼して安定しない。二本立て互ひ／＼で支へると輒々安定を得るが、しかしまだ充分でない。三本立て、互ひに支へることになると、爰に初めて充分の安定が得らるゝと云ふたが、如何にもその通りで、家庭に就て云ふても、一人だけでは家庭を爲さぬ。夫婦があつて初めて家庭を爲す。更らに子が生れ、ばこゝに三點となるので、家庭はシツカリして来る。家庭を形づくることは、家族の共同動作に據るものである。若し家庭を形づくることを藝術と呼び得るならば、それは合作藝術であらねばならぬ。藝術には一人で爲すものと、數人分擔して爲すものがある。例へば彫刻などで云ふて見ると、馬上の人物などでは、甲は人物を作り乙が馬を作る、これが合作である。亦畫に就て云ふとあるものは樹を描く、それに配するに或るものは石を以てし、若しくは家などを以てする、これが即ち合作である。合作藝術の難いのは、縦令手が幾人かに分れても、宛がら一人の手に成つたごとく、ピツシリ呼吸が合つてよく調和しなければならぬ。調和を度外に措いて、銘々勝手な手法を弄することあら

ば、その作品は總合一體となり得ない。如斯は醜穢見るに堪へない悪作である。數人寄つて一句一句附け合ふ詩などで、前句をよく承けて、縫目の分らないやうに甘く附けねば、藝術品とは言ひ兼ねる。合作は或る意味に於て一人が全部を作り上げるのに較べて、寧ろ難いとも云ひ得るのである。諸般の藝術で一人一手に成るものは少なくないが、家庭を形づくる藝術は、その性質上どうあつても合作で無ければならぬ。必ず分擔して作り上げねばならぬものである。昔から云ふごとく男子は外を司り、女子は内を司る。そこに分擔がある。子の撫育はどこでも女子の務めと極つてゐる。平和な幸福の家庭を形づくるには、各々の分擔に就てベストを盡さねばならぬ。散じては銘々の擔當に立働くが、統れば立派な一體とならねばならぬ。宛がら詩や彫刻や繪畫のやうに、幾人かの手に成つても縫目の分らないほど、よく調和したものとならねばならぬ。それに就ては家族は同一心體であらねばならぬ。古臭い言葉だが、夫唱婦隨が大切である。一家の秩序を保つには家長が號令して妻が、それに隨はねばならぬ。夫婦は同身一體で、一つの體の前面が男でその背面は婦である。たとへば、男は外部を司り、女は内を司るからだ。然るにその一身同體の前面が右せんとするのに、背面が左りせんとしたら、どんなものであらう

母
か。それは半身不随と同様で、何事もトンチンカンに成つて仕舞ふ。どうしてうまい家庭の合作が出来よう筈はない。

家庭の合作には愚作もあり、濫作もあり、駄作もあり、亦傑作もある。これは常々何人も見て知る所である。一家夫婦が和合せず、互ひに疑ひ互ひに猜み、嫉妬憤怒で始終風波の絶えない處に傑作の家庭が成り立ちやうがない。朝夕夫婦喧嘩の聲四隣を驚かして、動もすると他人の調停を待つ陋態を演ずる。これが濫作愚作駄作の家庭であつて、藝術品ではない。斯かる家に生れる子女も恐らく駄作で氣の毒な不幸に運命づけらるゝであらう。要するに家庭を形づくることを藝術と見做し得べくば、最も高尚で且つ最も六かしい藝術であらねばならぬ。多くの人々は種類の藝術に精進するが、大切な家庭を閑却して、愚作駄作を毫も意としないものがあるけれども、最も傑作を欲するものは家庭であることを思はねばならぬ。

五 母

鶴見祐輔君の小説『母』に

我々は誰れ一人として、このまま死んでゆきたくはないのだ。何かの足跡を残して死にたいのだ。何かの印象を地上に留めて死にたいのだ。

その一番大きい痕跡は、墓石よりも、空名よりも、ある個人の胸に自分の人格を刻み込んで死んでゆくといふことだ。宗教家が一番深い存在として地上に残つてゆくのは、大勢の人の胸の中に、烙印のやうに自分の姿を焼きつけて死んでゆくからだ。

この人格的烙印として、最も生々しい、最も深いものは母が子の胸の中に焼きつけた愛の烙印だ。その烙印が、子孫へと傳はつていつて、そこに人間性の地上における不朽の姿が現はれる。

それは母の子を思ふの情操は、利害も虚榮もない純情な一心なものであるからだ。

固より母たるの情は、民族と人種とにおいて差別はない。しかし環境と教育とは、人間の性質に深刻な變化を興へる。日本の社會環境は、日本の婦人を驅つて、母としての任務に専念せしめ、従つて母としての情操を洗練せしめた。ゆゑに多くの場合において、日本の子供たちは母に對して、燃ゆるがごとく思慕の情を持つてゐる。

それは逆に言へば、日本の婦人達の生活に狭き限界が設けられてゐた反映であるともいへる。

日本の婦人は内助といふことをその理想として教へられた。その内助といふことを、日本の男性達が可なり濫用してゐた。男性はどんなことを外部でも妻は内助の徳操にしがみついて居なければならぬ場合が澤山にあつた。そのために不幸なる婦人達は、勢ひその子供に對する愛情に最後の避難場を求めてゐた。

勿論子供に避難し得たことは、日本の女性として感謝しなければならぬ。或る外國において子供をも女性から奪つてゐるところすらあるではないか。

さうして茲に日本の母と子との特有なる生活と情操とが展開せられた。それは日本生活中の最も輝ける一面である。

こんな事が書かれてあるが、自分もこれと略ぼ同意見である。母の胎教が兒に影響する事も否み得ざれども、産れた後ちの撫育も至大の影響があるはいふをまたぬ。母の撫育は眞に献身的である。愛といふものほど感化力のあるものはない。あらゆる教育よりも愛は兒を感化する。母の魂魄は全く兒に乗り移るので、靈的作用がある。女子が専ら内を掌る

日本の如き習俗のところにおいて、女子の第一の任務は兒を撫育するにあつて、日本の兒童ほどふんだんに母の愛に潤ふものはない。日本の兒童は幼にして母に抱かれ、長じても母に抱かれてゐるのだ。日本婦人は愛を良人に捧げるよりも、より多く兒に捧げてゐる。往々良人に背いても兒に愛を捧げる。歐西の婦人にはエゴエスチックの性があれども日本婦人は兒に對してほとんどない。兒を産まない婦人は完全な人間といはないわけも、愛が發揮しないからの事だ。兒ある婦人の神に近いのも愛が純真であるからの事だ。女の涙は愛の滴りである。男女その位置が顛倒してゐるところにおいては、父が母に代つて穉兒を抱擁するところもあり、富豪の家庭に兒を婢女の撫育に委するところもあるが、皆純眞の愛に遠ざかるものでその結果は知るべきのみだ。世の不良の徒の年少時代を繹ねてみると、多くは母の愛に恵まれないものである事を思ふと如何に純眞の愛が立派な人間を造るに大切であるかゞわかる。鶴見君の小説に婦人が良人に疎まれて靜思の末、妻として良人を待たんより母として待つべしと態度一變これより良人の不行狀に對する嫉妬も消えて、良人はために感動し舊との愛を復するを得たとある。母性愛の神聖なるまたもつて見るべきかだ。

序でだから話すが、鶴見君のこの小説『母』の女主人公は、熱海の大工小田島某の女だとあるも、もとより實在のものと思つてゐなかつたが坪内君（逍遙）から聞くと、同君が荒宿に作つた別荘は現にこの小田島某の手に成つたもので、その女も實在してゐるとの事で妙に興味を感じた。

六 プロ階級と醫者

誰やらが醫はすなはち威だと云ふた。これは強がち牽強附會でない。病魔に對して醫法は威壓で無ければならぬ。醫は祛魔の劍である。しかし病魔はなか／＼醫を恐れない。或る疾患は醫を少しも威とせず全然平氣である。今日不治の病と云はれてゐるものに對して醫は全く權威がない。併し醫者が自覺せずしてその威力で病を治すことがある。それは大なる門戸を張つて大家らしく氣取り、典藥とか博士とか云ふ大看板を掲げると、縱令本尊は庸醫であつても患者の疾病が輕快に赴くことがある。これは患者その人の心理作用で、飽まで醫者を信じ、所謂翹の頭も信心からと諺にいふごとく、患者自身が醫を威たらしむ

るからで、實は自分が自分で治療してゐるのである。多くの疾患は精神作用で治し得ると今更云ふまでもない。

プロレタリア擡頭の今の世の中、プロ相應の醫師が出なければならぬ筈だ。醫は仁術だと云ふが、施療施藥まで敢てするで無ければ仁とは言ひ難い。醫者が段々偉くなつて自動車で回診し、少なからざる車代や藥料を取るとあつては、プロ階級は濟はれないのである。昔は町内をテク／＼歩いて病家を訪問する醫師があつたが、今はトント見當らぬ。この流の醫師こそあらまほしいものである。昔から言ふことだが、醫者の格式が上ると同時に病家が減ると。これは貧戸の病者が謝金の多きに恐れて、足を絶つからである。昔の御典藥などは籃輿に乗つて多くの供勢をつれて歩く。その往診を請ふとなると、五七の供勢にまで手當を要するから、到底プロ階級の相手にならぬ。これに就て可笑しい話がある。戯作で名高かつた二三治は、脚本家で有名な南北と懇意の中であつたが、此頃には惡戯が流行して往往人を困らせた。ある時南北が病んで臥してゐると聞き、二三治は懇意な典藥があつたのを幸ひに是非駕を枉げて、南北の爲め一診をと頼んだので、諾して出かけて見ると、陋屋にゐた南北は、驚くまいことか、大醫の來診は、病氣の爲めにはこの上のない喜び

だが、さて待遇に困り、供勢の手當などに膏を絞られて、時ならず頭痛を覚え後には悪戯と感づき、二三治に對し復讐をしたとあるが、兎角大家は大なる門戸を張るから、貧人は鬪が高く恐縮して入り兼ねる。多數の貧者に對しては、いくら名醫でも一向役立たぬのである。醫に仁の一字を許すことの出来るのは大家でありながら、貧者に治療するのと、毎日腰を低うしてテク／＼病家を訪問するものである。淺田宗伯などは大家であつたが、毎日貧病者を近づけた。兎角醫者には博士號が濫授され、博士となると俄に高調子になつて、プロ階級を相手にしないから、都門には調法の醫者が段々に減つてプロの病者は困つてくる。プロレタリア藝術と唱ふる者まで出る世の中に、プロを標榜する醫者は何故まだ出ないのか。

吾郷國に生れた長谷川泰といふ人は自から本郷の立ん坊だと云ふたが、あの人は自から治療の出来る醫者では無かつたが、今考へるとこの人が丁度プロレタリア式の醫者を養成したと云へ得るのである。濟生學舎と云ふ學校は随分貧弱な下宿屋に似たやうな學校であつたが、貧乏人で醫に志すものは多くこの學校に這入つた。こゝを足場にして他の高等の醫學校に進んだものも勿論あらうが、濟生學舎卒業丈で全國に散つて醫業を營んだものが

どれほど多くあるか知れないほど出身者が多い。寒村僻地に洋醫のあるのは全くこの學校のお蔭である。醫學の程度は高くもないにしても、プロ階級の爲めの多くの醫者を作り出した功はこれを長谷川氏に歸さねばならぬ。濟生學舎は庸醫の製造所だなど、罵るものもあつたが、洋法醫術の全國に擴がつたことを考へると、其功績は決して少なるものでない。自から立ん坊と名乗つた長谷川氏は流石にプロ階級に對して涙があつた。

七 危険の思ひ出

過去七十餘年の生涯のうちで死生の間に立つた事や、畏怖を覺えた事や、悽慘の感に打たれた事などを記憶をたどつてみると、幸ひに餘り澤山はない。幾回も戦争はあつたが、それに參加した事もない。兩刀を帯びた時代もあるが、斬り合つた事もない。まことに無事の生涯であつた事を喜ばねばならぬ。しかしその太平の幸民たる自分においても、多少の危難がなかつたわけではない。一步を誤つたら、この世のもでなかつたかも知れぬと思ふ椿事は、少年の頃郷里に越後府（水原において）を建築する時、私の家で用材を献じ

た。その材木を載せた車の上に壯丁に抱かれて自分は乗つてゐた。その車が建築場附近急勾配の橋を過ぎる時に、自分は保護者の僅の懈怠のため、その手を離れて車より墜ち、墜ちた刹那に車は橋を下らんとした。それが不思議に抑止されて壓死をまぬかれたのは、自分が佩びてゐた小脇差が墜ちるとともに鞘ばしり、丁度車の輪を遮つたので、さすがに、重量のある車體が止つて格別傷もうけずに助かつた。脇差は曲つてきずを生じたが名刀だけに折れなかつた。この刀は助命の記念に後ちに修理して、今も大切にしてゐる。これより先き戊辰の戦争には、避難して郷國越後西蒲原の吉田新田といふところに、所有田畑を監督するため田家があつたのを幸ひとして、そこにゐた。然るに大洪水の襲來で信濃川が氾濫し、深夜堤防が破壊したから、堤下にある田家は一とたまりもなく水に没するといふ騒ぎで、平生より備へてある船に倉皇乗せられ、辛うじて門を出たが、半夜濁流に漂うたのは小兒ながら恐ろしかつた。茅屋がどんどん流れて来るやうな悲惨な光景を翌朝目前に見た時には暗夜にこんなものに、わが乗船が觸れたならば忽ち溺死するのであつたらう、と思ふと悚然たらざるを得なかつた。新潟新聞社に赴任の時、妻を伴ふて清水越の雪路を踏んだ。毎度通過の時だから道は十分承知の事と、妻に合力を附けて先きにやり、自分は

道伴れと共に雪路をたどつて行くと本道よりいつしか外れて妙な谷間に踏みごみ、終に斷崖絶壁のところに至り、道が絶えたので進退窮まり雪下に溪流があるので樹に攀ぢねば、溪流にぬかる虞もあり實に窮した。幸ひに二時間餘を経て救ひのものが來たから助かつたが、然らずんばどうなつたかも知れなかつた。思ひ起す毎に怪餘を覺える。越後で政争の激甚であつた時に反對黨の奸計で誘ひ出され、夜中新發田の清水谷の濠端を乗車して通過の際、三四の劍客に前後から襲はれ、車もろとも濠へ投げこまれた時などは、幸ひ負傷をまぬかれたけれども、マカリ間違へば、随分危ないものであつた。

敢て危難といふでもないが、悽慘の感に打たれたいろ／＼の場合を考へ出すと、なんといふても十年前の大震災、それに伴ふ大火災は一生涯中比類のない大變であつた。幸ひに自宅は火災をまぬかれ親類に死者もなかつたけれども、門内の空地に疊を敷いて二夜そこに明かした事を思ひ出すと、戦慄せざるを得ない。大自然の威壓より生ずる畏怖をいへば、海洋中の濃霧ほど危険を感じるものはない。支那より歸りがけ朝鮮海峡で出あつた濃霧は、十數時間の長きにわたりて咫尺を辨ぜず、船の衝突を恐れて各船より打鳴らす汽笛や、銅羅の聲は悽愴の感を一層深からしめた。別府へ行く途中でも同じ事に出會つたが、それは

短時間であつた。北海道へ渡る時に颶風に逢つた事もあるが、船に案外強い自分はさまで危険とも思はなかつた。書生時代山のまだ開けない時に富嶽に登り、途中烈風に遇つて進退窮まりヤツと六合目にたどりつき、まだ人の氣のない石室の戸を明けて、じみじみとした土床に一夜を明かした時などは、なによりも心配に堪へなかつたのは食料が盡きんとするの、食料のない二人の登山者が來り投じたので、それに餘裕のない食料を頼たねばならない事が生じ、一段の困難を感じた事あり、これも危難のうちに數へねばならぬ。幸ひに一人の合力が烈風を冒してある地點まで、食料を取るために下山した。そのものが幸ひに登つて來たから助かつたが、それが薩摩飛脚であつたらどうしたであらうか。信州の御嶽に登つた時、山中で一夜を道者の多數と群居したなどは、むしろ滑稽であつたが、淺間の噴火口にたどりつき、噴烟の止息に乗じて坑中を下瞰し、硫氣で黄色に彩られた重疊の山を見おろした時は、眞に悽愴の感に打たれた。旅も昔は今と違つて妙に心細い感じをひき起したものだ、木蘇の棧道を黄昏時に通過した時や、木蘇路から甲州路へ出で、二日間漠々たる人里遠いところを通過した時などは、血氣時代でも凄味を覺えた。しかし賊にも狼にも襲はれなかつたのは仕合せであつた。

何人も多少畏怖の感をまぬかれないのは、鑛山の坑道であらう。エレベーターで暗中何千尺も下る時などは、地獄におちるやうな心地がする。空氣が薄くなり、冷かになり、氣息が奄々として、瀕死の時のやうな氣がする。自分は足尾の山も、夕張の山も、佐渡の金山も入つてみたが、どこにもおなじ感があつた。坑道と似て否らざるものは暗渠を舟行することである。暗いことは坑道も同様である。一條の水道をたどるので、前方から來る舟が衝き當りはせまいかとの虞もある。一時間もかゝるほどの長い水路だから、矢張り坑道の如く冷氣も襲ひ來る。船の前面に提灯が吊してあつて、燈火の水に映するのは快感を起しさうで却て凄味を起さしめるものである。これは琵琶湖疏水のために出來た暗渠で往年わざと通過してみた事がある。燈臺もなんとなく畏怖を起さしめるところである。暗中螺旋線の階子を拾つてだん／＼に登るなどは、探偵小説を想ひ出さずにはゐられない。登りつめると案外に風が強く、回轉する燈の周圍には鐵柵があつて安全になつてゐるのに、ここに直立すると、なんとなく全體の塔が動搖する如き感じがして、不安の思ひのあるのは慣れなためでもあらうが、強風の時などはどんなであらうか。燈臺守の境遇に哀れを感じざるを得なかつた。殺氣漲る工場に臨んで訓示をする時の感じも、一種の凄味がある。自分は

印刷争議の節體驗したが最も悽慘の感に打たれたのは、決死の職工が同盟罷工を裏切つて輪轉機三臺を動した時である。この決死の職工は、前夜トラックで貨物の如く積まれて工場へ運ばれ、翌日業務に就いたが、不穩の空氣の漲る間になすかゝる行動は、どんな騷擾を外部からひき起さないと限らない。いふまでもなく、輪轉機は四隣に震ふ聲を發するものであるから、罷工職工に對しては一種の挑戦である。幾百の職工が襲ひ來らないとも限らないのである。それに對しては相當の防備をしたといふても、手薄のものであつた。また自分は工場神聖論を飽くまで主張して、場内に警官の入る事を謝絶した。いよ／＼輪轉機を動かす時に、自分は社長としてその工場に臨み、簡単に激勵の演説を試みた。それが濟むと、三臺の機械が汽笛と共に運轉を始めた。この工場は薄暗い陰鬱な室であるが、殺氣が手傳つて眞に名狀の出來ない悽慘の氣に打たれた。

終りに臨んでもう一つ書くべきは獄舎生活である。いくら獄則が昔と違ひ、獄舎が改善されたといふてもコンナ不安の場所はない。社會と全く杜絶されてゐるから秘密のところであり、罪惡の淵藪である。兇徒を取扱ふ獄卒も一種違つた人間である。この中でどんな虐待をうけても、たとひ殺されたにしても殺され損である。こんな脅威も犯罪を矯正し懲

罰するの方便でもあるのだが、牢に慣れない間の不安は實に名狀し難いものである。あの普通より高い黒塀、その門が開いてそれに吸ひこまれた刹那の氣味のわるさ、あだかも鯨の口に飛びこんだやうな趣がある。瑣細の事を挙げれば以上の如くであるが、さて畏怖の最も大なるものは戦争であらう。國を賭して戦ふので勝敗があらかじめ知れぬ。萬一負けければ國が亡びるのである。しかし一個人に畏怖を感じしめるには、戦争は餘りに大き過ぎる。自分などは戦争に参加した經歷はないが、戦争に出會つた事は、内外大小幾回もある。戊辰の戦争、西南戦争の如き内國戦は皆小なるものだが、大戦は日清、日露それから世界の大戦、皆大規模のものであつた。が、ありていにいへば畏怖の念が起らなかつた。敵愾心が畏怖の念を壓したといふやうな事もあらうが、事態が餘りに大であると、茫漠として畏怖の念が起らないのであるかに思はる。幸ひに日本は戦争に負けた例はないから、潜在的自負心が畏怖を制するかも知れぬ。事實戦争よりも、戦争の端を發しはせぬかと憂慮せしめる國患には、却て畏怖を感じしめた。かの湖南事件などがそれである。露國の皇儲が大津漫遊の折、その警護に當つてゐた警吏が皇儲に斬りつけたといふ椿事は、あとがどうなるものかと、わが國の朝野は擧げて戦慄した。ありていにいへば自分なども、その

混沌たる圏氣裏に新聞記者として筆を把つてゐたが、一時は全く畏怖を感じた。なんといふても非は日本にあるので、どう先方が出て來ても仕方がないからであつたのだ。自分の如き單調の生活に畏怖を多く感ずる如き事のなかつたのは、むしろ幸ひといふべきだが、私ともいひ得ない畏怖を天變地異以上に感ぜしめられた事が、ないでもない。それは多くは人心の離反、騙詐に關する事で、昔からいふ如く、人心の嶮は山よりも嶮、水よりも嶮といふが最も畏怖を感ぜしめるものは、この方面にあるのだ。

八 舊 夢 談

大正七年六月新潟縣に圖書館大會の開かるゝを機とし余の高田に入るの日、高田新聞の社長伊藤泰藏君は余の高田新聞に舊縁あるを思ふて余に懷舊談を求められた。各地の巡回繁劇の中なれどもこれを諾し舊夢談を試みた。その一節にこんなことがある。圖書館大會の一行中に偶ま大學同窓の親友貴族院議員石渡敏一氏があり、高田市に入る途中、石渡氏は余が先年高田に繫獄の厄に遇ひたる當時につき云々する所あり、余も亦當時を追懷して

感慨に堪へざるものがあつた。依つて高田新聞社の社員諸君に對し、先づ左の感懷談を陳べた譯である。

自分が高田新聞に在社中、繫獄の厄に罹つた時、友人は皆私の身を案じてくれたが、唯一人親友に一面憂へると共に一面喜んだ者があつた。その人は石渡敏一君であつた。兩人が帝大に在學してゐた頃刑餘の人を待つ法の數ヶ月に渡つて研究したことがある。刑餘の者の二犯三犯を防ぐに何より大切なものは彼等を保護して相當の職に就かしめ、それに由つて改悛に導く事であらねばならぬといふので、兩人は斯かる方法を種々考案して居つたのである。ところが深く研究すればする程、幾多の暗礁にぶつゝかつて來た。兩人とも監獄に少しも經驗がある譯でなく、所謂坐上の兵法であるから行きづまるも無理は無かつた。終には兩人筆を投じて歎ずるに、どうも獄内の事情を詳悉するのになければこの問題は解決し難い。お互ひの内一人が監獄につながる身と成つたなら、爰に始めて解決の鍵を得やうかなど、笑つてこの研究に段落を告げたのであつたが、何ぞ圖らん、その後二年も経たぬうちに、私が幸か不幸か實地を踏むの貧乏圖を引き當てた。石渡君が憂ふると共に喜んだのはこの爲めであつた。

先刻偶ま石渡君とこの事を話し、特に昔年の事を追憶し感慨無量である云々。

九 記憶すべき逐鹿戦

昨今は寄ると障はると選挙談で持ち切つてゐるが、それに興味のない自分は五月蠅いので相手にならん、併し選挙に就ては思ひ出がないでもない。自分の體驗した最も大規模の選挙は、前年大隈侯が首相で議會を解散したその揚句の總選挙、ことに石川縣の金澤市に於ける選挙は永く選挙史に記録さるべき價値のあるものであつた。自分はその節大隈伯後援會の會長で、別働隊の選挙長であつた關係から、金澤市の選挙には出張までして特に干與せざるを得なかつた。

この選挙は民政側横山章氏、政友側中橋徳五郎氏が候補者で、猛烈に競争をした。當時の横山氏は盛んに資力のあつた頃で、多くの會社に關係があり、常に市に住してゐるだけに大なる聲望があつた。中橋氏も金澤出身であるけれども、平素土地に居ない爲めに金力があつても、横山氏ほどの聲望はなかつた。そこで中橋側では、しきりに人物論を宣傳に

擔ぎ出し横山氏と比較をやつて勝を制せんとした。それを打ち破るために自分と若槻禮次郎氏は演壇に立ち、若槻氏は財政演説をやり、自分は「大隈か原か」といふ題を掲げ、候補者の人物論は抑も末で、大隈侯の政策と原氏の政策如何で勝敗を決するのであるといふて本流に棹さして、その比較をやつて散々に政友會を攻撃した。この演説は確に反響があつたので、中橋側は急に三宅雪嶺氏を東京から迎へて、自分の演説を反駁せしめた。その演説筆記は機關新聞三頁に涉つて四號活字に組んであつたが、それを讀んで見ると辯駁が餘程苦く、市島君は加賀の如き大藩に生れないから、人物のことなど分らないと言ふてゐたが、本流に就ての辯駁は頗る貧弱であつた。新聞も演説もたがひに精根のつゞく限りをやつた。自分は五六日間足を留めて總參謀をやり、しきりに新聞を指導した。むかし猛烈を以て聞えた盈進社は横山側であるのだから、働き手は充分にある。横山氏を推薦する實業團體は三十もあるやうな譯で、夫が新聞に列署してゐる。中橋氏はそれに對抗するために各地にある石川縣人何百名を書き集めて推薦者と爲すごとき窮策に出た。中橋氏が市中の商人それ／＼に關係を結ぶ方便として、要もないものを盛んに買ひ集めて急に得意となつた。其物を收めておく爲めに土藏を借りねばならぬことにもなつた。手當り次第いろ／＼

の物を買つたから相當金もかゝつたであらう。ユンナ鹽梅に双方の對抗運動はすべて大袈裟であつた。一時双方の勢ひは幾んど伯仲の間に在つたので、自分も内々終局を氣遣ひ、參謀會議の際に萬一の場合に處する苦肉策を立てた位であつた。自分が誤つて名參謀の名を博し、後に永井柳太郎氏が候補に立つた時加賀の有志者が大隈侯に市島を參謀にと望んだのも此故であつた、併し自分は應じなかつた。この選舉の際に大隈首相は應援の爲め關西へ出張され、到る處車中よりプラツトホームに群がる選舉人に演説された。二分でも相應に何か呼びかけられた。其際自分も會長として同行したが、何故か激戦地である加賀へ侯は行く事を欲せられなかつた。然るに大阪に著すると、加賀から委員が出て來て是非に侯の出張を望むと申して來た。巡回の日時が既に定まつてゐたのだが、侯は自分に時間割の都合がつくかと問はれたのを機會に自分も委員に加勢をして、曲りなりに日程を作つて急に加賀へ回らるゝことゝなつた。

これが勝敗を決するに此上ない力となつた。金澤の同志は老侯を車に乗せて全市を引き回した。丁度雪が降つてゐて、侯は堵列の市民に挨拶の爲め脱帽してゐられたが、禿頭に雪がチラ／＼かゝつてそれが爲めに風邪に罹られたけれども、この引回はしが演説より

も功を奏して大勢を決したことが數日後に分つた。侯の金澤入りは眞に大なる應援であつた。自分は侯に隨つて金澤を去つてその後の形勢如何と聞くと、確に横山側に勝算があることが知れた。唯警戒が最も必要となつて、開票間近には不寝番のもの二百人に懷中電燈を持たせて辻々に立せることもやつた。開票の前夜中橋側が各戸に撒いた名刺などは翌朝までに悉く取り去られて、扱當日の朝になると小學の兒童でもうば車に乗つてゐる赤ん坊でも横山氏の名刺を身につけぬものはないといふ有様で全市横山氏の名刺が、溢るゝまでに手配が届いたなどは實に驚くべきことで、開票の結果は千票も横山氏の勝つたのは、大隈侯金澤入りが如何に有力であつたかを物語るものである。選舉に可なり經驗のある自分にこれ程痛快味を感じしめたものはない。(昭和五年二月)

一〇 條約改正の斷末

今でも思ひ出すと無念で耐らないのは、大隈侯の條約改正の悲愴の斷末である。私はその頃、郷里新湯の新聞に筆を執り、大隈侯を仰ぐ政黨を率ゐてゐた。これより先き井上侯

の條約改正の時も、私は郷里にゐたが、あの改正案はすこぶる缺點が多かつたので、反對黨である自由黨と連衡して、私が反對の建議を書いた。其の時は自由黨の根據地に陣を張り、自由黨の面々は私の身邊を擁護してくれて萬端樂であつた。實は如何なる場合でも反對は容易で辯護は難儀である。井上案は破竹の勢で敗れたが、さて此の難事を繼承して大隈侯が衝に當らると、形勢は一變して自由改進の連衡は破れ、自由黨は攻撃の位地に立ち、吾等は辯護支持の衝に當る立場となり、前の共同者は忽ち吾等の敵となつた。乃ち前に私を警護した面々は今度は矛を逆まにして、ある時は偽書を作つて私を某所におびき出し、暗中に私を襲ふて、乗車もろ共濠の中へ投げこむといふ暴を爲すに至り、實に物騒を極めた。島田三郎君が應援の爲め越後へ來られた時などは、私の遭難地で演説會をひらく日、都合で自分も臨んだが、前に自分を襲ふた暴漢は此土地に名のある劍客で、それが罪に問はれたので、乾兒共は私に復讐するといふ意氣込み頗る不穩であつた所から、警察でも非常に警戒し、多數の警官に包圍されて演説會場に入つた様な仕末であつた。そんな殺氣の満ちてゐる所に、冷靜に條約案を細説せねばならなかつたから、苦心は一ト通りで無かつた。

大隈侯の案は井上案に較べると餘程進んだものであつて、先づ當時の日本の文化程度から見て、縱令ひ幾分不満足の所があつても、忍ばねばならぬと識者が認めたのだが、何んといふても當時の國民はまだ幼稚で、外國を畏怖することが甚だしく、第一内地雜居をいやがり、外人に土地を購ふことを許せば、日本の全土は直に外人の占有に歸しはせぬかと漫りに心配するやうな仕末で、それを然らずと會得させるだけでも、容易の業では無かつた。殊に國民の畏怖に乗じて疎枝大葉の反對論で保守氣分を煽る氣氳裡に立ち、條約案の細目を説明することは頗る難事であつた。當時吾々が如何に平易に内地雜居の恐るゝに足らぬことを説明するに苦心したかの一例として、演説の一節を記憶から呼起して、爰に笑資に供するが、それは左の如きものであつた。

内地雜居を畏るゝは謂はれない事だ。試みに婦人の頭髮を見よ、髪を飾る珊瑚樹は地中海の産であり、櫛に作られてゐる玳瑁は南洋の産であり、指頭に燦たるダイヤモンドは亞弗利加トランスヴァールの産であり、細腰に纏ふ帯は支那産の縞子であり、肌に着ける唐縮緬も亦外國製で、それが女の股の間にまで喰ひ込んで、外國品は既に最も弱い女の躰に雜居し、女子に寧ろそれを喜ばれてゐるではないか。外人に雜居を許すことが

なんで恐ろしいのだ。

といふごとき、今考へれば吾ながら稚氣……を愧づるやうな事をひねり出さなければ、聴衆の會得を博し得ないほどに一般が幼稚であつたのである。

知識階級でも其頃は保守氣分が頗る盛んで、條約遂行にはこれが暗礁で結局それで破れたのであるが、外人を延き來つて日本の法廷に立たせるでなければ、外國人は安心しないので、已むなく外人を日本に歸化させてそれを法廷に立たしむるといふが大隈侯の案であつた。これは窮策には相違ないが、憲法違反を避け、外人の満足を得るには、當時已むを得ない機宜の案であつた。然るに保守派の政治家達は理不盡に憲法違反を高調して俗衆を煽起し、終に内閣中にも離反者を生じて、大事去るに至つたのである。

私は當時を追懷して忘れ難い事の一は、矢野文雄君が大隈外相の背後に在つて極力この事業を翼賛された事である。條約案の成行に就ては君自ら筆を把つて、毎日郵書を寄せられた。私は地方にゐるも時々刻々の推移を知ることが出來たのは矢野君のお蔭である。危急の場合に臨んでは、日に二三回も君の手書に接した。よくも筆まめに報道せられたものと、當時感激して、その手簡は危機一髮録と名づけて今も保存してある。その書狀に據る

と、實は敵は外にあるのではなく、寧ろ閣中にあつた事も分つた。後に大隈侯の八十五年史を編するに當り、大隈家の文書を調べると、當時閣中の人であつた榎本武揚氏が侯に寄せた書簡が出た。それによると國家の重事を藩閥の私心より破るとは何事ぞと憤慨してゐる。それが宛ら當時の事情を語るものであつて、矢野君の内報を裏書してゐるのである。

私は郷里で矢野君から櫛の齒を引くごとく相踵いで來る刻々の推移の報道を見、どれほど焦慮したか知れなかつたが、大勢如何ともする能はず、遂に斷末が來た。それは頗る劇的シーンで、私と私の同志の最も大切な慶事をメチャ／＼に蹂躪し、私をして無念の涙を滂沱たらしめた。その仔細は外でもない。私等同志の會館の建築の工を竣つて開館式を行ふた日が、恰も大隈外務大臣遭難の日で、式の半ばにその悲報が達したので、吾々は爲めに色を失つた。幾十日間ほとんど晝夜を分たず慘憺たる苦心をした自分に取つては、實に終生經驗のない打撃であつた。私は席に溢ふる會衆にこの悲報を傳へた時は、幾んど歎聲を發し得なかつた。然るに爰に私の悲憤を更に刺激したものがあつた。反對黨から使者が會館に來て、私に面會を求るから、何氣なしに出て接すると貴黨の會館の落成を祝する爲め疎末ながらこの品を献ずるといふて三寶に堆く水引かけて積み重ねたものを出した。即

座にそれを改めて見ると、それは彼等の機關紙が發行した、侯遭難、條約改正頓挫の電報を印刷した號外であつた。私は憤然としてそれを突き戻したが、彼等もあらかじめそれを期したもので、如くで、三寶を引取つて戻つたが、門外には示威運動の爲め大衆が集まつてゐて、使者が門外に出るのを合圖に、萬歳を喧しく唱へて號外を撒き散らしながら市中を横行したことが私を極度に刺激して無念骨髓に徹せしめた。

一一 一ツ橋時代の大學同窓會

大正三年の十二月二十三日といふに一ツ橋大學時代の同窓會を、四谷見附の牛肉店三河屋に開いた。その記事が偶然存してゐる。丁度洋行中の高田早苗氏が歸朝したので、それを迎へるために、開いたのであつて、高田氏が発發のときにも矢張此處で送別會をやつた。今度も前例に倣つたのである。當日來會した同窓は二十名に迫んだが、そのうち今故人となつたものが少なくない。左の出席者のうち圈點を附したのがすなはち故人となつた面々で、十數年間の變遷に驚かざるを得ない。

高田 早苗	藤澤利喜太郎	土方 寧	田中館愛橋	横山又次郎
○中原貞三郎	藤田 四郎	田中 正平	○澤邊 春水	堀 達
鍋倉 直	山田 堯夫	○荒川義太郎	長谷川方文	○香坂駒太郎
隈本 有尙	原田 鎮治	○興倉 康隆	市島 謙吉	

右人名のうち山田堯夫の外は皆當年の同級生で、今は各方面に雄飛する豪傑連であるが、寄り合つて見れば、昔ながらの貴様呼ばりで、當年勝手に名付けた綽名も續々出て来る。鍋に向つて貪り食ふ有様を見れば、宛然當年の青二才で、爛漫たる天真、僞喜や衒氣などは微塵もない。そこに同窓會の特色がある。

在學時代には金七錢を投すれば、飯付一鍋を喫し得た。大枚廿五錢を投すればタラフク飽食が出來たのに、今夜の會費二圓五十錢はその十倍であるから、三十年間で物價が十倍となつた。お互の年齒もそれだけ老いたなど、口口にいひ出して、在學時代懇意な牛肉屋に借りが出來て、終に拂はず仕舞になつた事なども話頭に上つた。誰やらの發議で、銘々年齒を白狀すべしとあつて順番に何れも正直に歳をいふた。同窓であるから年齒に大差ないはずだが、あの頃の大學生の年輩は、かなり不同であつた。しかし出席者に五十四五歳が

最も多く、圖外れであつたのは鍋倉直の來年還曆に當ると長谷川方文の較々、それに近いのであつた。一番年少であるのが荒川でそれが五十三歳、それより一つ多いのが田中正平で、若いといふてもなか／＼の老爺である。一別以來會て遭つた事のない澤邊春水は當年美男子をもつて鳴つたものだが、餘りにフケたので卒然見て辨じかねる位であつた。

席定まつて開會の趣旨は最年少者より述べしと荒川に強へ、荒川が愚圖々々してゐる間に、今夕迎へられた高田が自から開會の趣旨を陳べ、且つ洋行中米國で一同が教へをうけたモールス、スコット、ウキルソン三氏の消息を傳へた中に、モールスとは電車の中で出遇つて共に謡曲を唄つて、同乗の客を驚かしたと、ウキルソンは皆々苦しめられた意地わるの數學教師であつたが、今は愛嬌タツプリで諸君によろしくといふた、などの談があり皆々悦に入つた。こゝに案外に思つた事は、鍋倉が來年還曆となるから祝ひをしてくれとみづから請求した事である。満堂異議のあらうはずなく満場一致で可決。還曆を祝するには赤頭巾を贈る事とせんなど、その贈を受くべき人を坐に置きながら布地の相談までもやつて、緋縮緬と決めたがコシナ無遠慮も同窓間には却つて興があつた。自分などは鍋倉の心事はわかり兼ねる。自分も還曆となれば赤頭巾がほしくなるか知らんと明らかに不

審をいふた。酒酣にして隈本が近年人の運命をトするといふにつき、誰やらの請求で會衆の運命をトせよといふに對し、隈本は出鱈目に先づ五ヶ年間は皆無事だ。但し金をほしがるものはこの限りでないといふた。これを聽いて田中館は起つてわれに長生の法あり、それは人生の常事を省くにありと。暗に妻君一去、再び娶らざる自家の境遇をほめかしたので、満堂の一笑を博した。この會を催した際は議會大混亂の折柄であつたので、自然政治談も湧いたが一時間も経ぬうちにポツ／＼飯を食ひ始めたのを見て、寄る年波は争へぬと感じた。

一二 藏書家の耽溺

世間には珍奇の書物を蒐めることに憂き身をやつしてゐるものがある。何事も凝つては往々常徑を逸して珍談の種を蒔くが、愛書家にもさまざまの珍談が傳はつてゐる。

昔京都に森川竹窓と云ふ人がゐた。書を能くし學問もあつたがひどく書物が好きで、夢中になつて佳書奇籍を漁つたものだ。随つて珍本も多く手に入つたが、此人によくない癖

があつて、藝者道楽をやり氣に入ると妓を落籍させるので、大切の書物を賣らねばならぬいやうなことが時々起つた。妓の引力が書物の引力よりも強かつたと見える。竹窓つくづく考へるのに、折角獲た大切の書物を賣却するのは残念だ。せめて最も大切なもの丈でも賣らないことにしたいと、深く心に誓つた揚句、印を彫つてその書物に捺した。その印文が振つてゐる。即ち「竹窓不換妓書」と云ふのである。所が藝者道楽がどうしても止まないもので、折角誓つて印まで捺した大切の書物を又々賣却せねばならぬことになつたと薄志弱行と云ふの外はない。

支那にも似たやうな挿話がある。明の嘉靖時代に、朱吉士と云ふ愛書家がゐた。この人は宋時代の佳本を得るに憂き身を賣した。吳門と云ふ處の舊家に、宋版の遠宏後漢記と云ふ稀なる珍籍を見た。その本には陸放翁だの謝疊山だの名高い文豪が手づから評を書いてゐるので、天下に二つとない奇籍である。朱はしきりに欲しがつたが、どうあつても金銭では譲らぬと持主が頑張るので、いろ／＼交渉を重ねた揚句、朱の最も愛してゐる妾と交換することになつた。朱は切に妾と別れを惜んだが、妾は一詩を留めて去つた。その詩は「無端割愛出深閨、猶勝前人換馬時」とあつたが、朱は妾を失つた悲嘆から折角珍本を

得ながら間もなく病んで歿したと云ふことだ。

井上蘭臺と云ふ人は、備前の藩儒で名高い學者だが、山水を愛し亦佳書を好んだ。暇あるごとに函根あたりに入浴かた／＼山水を賞するのが常であつた。或る時執事が先生は別に御病氣のないのに、時々入湯せられるのは何故かと聴くと、入浴したいのが則ち俺の病だと答へたとある。この先生が始めて日本へ渡つて來た佩文齋の書畫譜を二十金で購ひ得た時の喜びは、非常のもので、此やうなよい書物は塵埃の飛ぶ城市に在つて讀むべきでない、藩に休暇を請ふて、函根に出かけて十數日快讀したと傳へられてゐる。

支那の黄紹甫と云ふ人は有名な藏書家だが、毎年の除夜に例とし圖書祭を行ふた。その際には同趣味の人を會して珍籍を誇つた。昔唐の詩人賈島は一年の末に自身の詩を祭つたことは有名であるが、圖書祭は他に例がない。此人は一奇籍を得る毎に、必ずその書に因んだ畫や詩を同人に求めて記念にしたと云ふが、日本の愛書家や圖書館あたりで、これに倣つて圖書祭をやるのも一興であるまいか。

又支那の一挿話を擧げるが、張芙川と云ふ人は非常の愛書家で、其妻芙初女史と云ふが亦書物に鑑識があつた。圖書に夫婦が同趣味である例も珍しい。其藏書印に「雙芙閣」と

あるのは夫婦の共有を意味するものである。この家の最も大切にされた宋版の撃壤集の餘白には芙川が「南無阿彌陀佛」の六字の名號を血書してゐる。そして其の傍に、願はくば永久流傳、水火蠱食の災無らんことをとあるなどは本をお経扱ひしてゐる珍しい例である。支那でも日本でも書物を失はんことを恐れて「門外不出」を宣言してゐるものがあり、絶對に秘して友人にすら書名まで知らさないやうな人もゐる。併しいろ／＼の手段を回らして寫し取つた例がいくらもある。支那の某家の秘藏本を拜見に出かけた或る學者は門生を四五人伴ふて主客宴會に時を費してゐる間に密に門生に寫させたと云ふ話もあり、狩谷掖齋、市野迷庵などの好書家は紅葉山文庫に藏しある貴重書を見たいと熱申し、身を植木屋に寒して曝書期に庭に入り込み、偷み見たなど云ふ逸話もある。近藤重藏は幕府の書物奉行をやつた好書家だが、この人はなかなかの放膽家で、その頃狩谷掖齋のやうな富者でなければ購ひ得ない大部の皇清經解を藏してゐたが近藤は借覽して遂にそれを賣り飛ばした。持主の掖齋が或る書店にそれを見て、そつと買戻して素知らぬ顔をしてゐると、重藏は再び借覽を請ふたなどは圖々しさの限りである。とかく好書家には所藏慾が伴ひ勝で、他人の物に食指が動く。名は現しかねるが、或る名儒の子が、ひどく圖書に通じた揚句、

食指を動かしたので犯罪となり、家宅搜索の上其書が押收された。今も某所に其書があるが、披いて見ると第一頁に「押第：號」と押收の印が押されてゐて、いつまでもその犯罪を物語つてゐる。兎角凝つては常徑を逸する、圖書慾も節度が肝要である。

一三 大名の藏書家

昔し的大名で藏書に富んだ家は鮮すくなからずあつた。大名の資力で蒐集するのだから、得難いものでも手に入つたであらう。しかし名高い藏書家は唯だ單に藏書の數の多きを貪つたのではなく、随分圖書に鑑識があり、趣味的に集めた大名がある。三四十年來市場に現はるゝもので、此等蒐集大名の印記のあるものが散見するが、流石に稀覯の圖籍が多い。今左に淺野梅堂の隨筆「寒檠瑣綴」から蒐集大名の重なる氏名を摘録すると左の如くである。水府は云ふに及ばず、加賀宰相綱紀卿、奥州會津城主加藤式部少輔明成、保科正之卿、池田光政卿、脇坂淡路守安昭、木下肥後守曾定、内藤豊前守、毛利伊勢守高標、市橋下總守長發等

とある。淡路守は八雲軒、豊前守は菊山、肥後守は天芭堂と號し、それらの號が印記となつてゐる。昔しから大藏書家と云ふと先づ指を水戸徳川家に屈することが定例となつてゐる。梅堂も先づ水戸を擧げてゐるが、實は水戸よりも遙かに超越して天下の大藏書家であるのは加賀の松雲公である。水戸には名高い彰考館があつて、多くの歴史典例等に關する大部の圖書を編纂したから、相當に藏書もあつたに相違ないが、數量に於ても質に於ても到底加賀には及ばない。近年松雲公の傳が前田家から出版されたので、其事が頗る明瞭になつた。淺野梅堂の時代には、前田家の藏は雲深くして探り得なかつたと見へる。唯だ梅堂も同じ隨筆に其の一端を左の如く擧げてゐる。

加藩の儒臣大島岩藏と云ふ者の話せしとて、鈴木白藤語りけるは、藩の藏書如何ほどあるや、儒臣と雖ど知らず、書を曝すに、掛りのもの一ト間をしきり、一年中四時の別なく曝すよし。四書の部計も一月半ほどかゝるとぞ（中略）往昔は加州の海岸へも唐船來りて其船載する所の書籍は残さず買入らるゝ定めなりとぞ。文化の頃大島忠藏總宰して經史の古書を校讎して開彫の企てあり、先づ宋槧を搜覓して上杉家の史記、薩州の前後漢書を借出し影抄にかゝり、さて藝州の楊萬里の印記ある漢書、河州の穀梁傳、大村家

の韓非子などの類、追々借出す積りにて、第一に寫手を選ぶに、其人無く、市河米庵の養子三下次郎と櫻井久之助の其頃は、未だ部屋住にて閑なる身分故、漸次兩人を倩ひ、精緻を盡しければ、一紙の潤筆五匁づゝにて、膽しけるなど、多分費用もかゝり、手廣にもなりしほどに、會計吏に沮格せられて、忠藏は國勝手になり、其局も廢し、史記の影寫も半にして跡は米庵方に托して、潤筆も減じ、門人寄合つてそこゝに寫し畢りけるなり。

之れに依つて見ても、前田家の藏書は渺茫湖海を望むごときものがあつて、どれほどあるかすら端倪も出來なかつたことが知れる。吾等の聞く所に依ると、書物の蠹喰を繕ふ爲めに表具の上職人を多く傭ふて、一年中宛がら貴重古畫の損所を繕ふやうに、纖毫も蠹食の痕を残さないまでに精根を凝したと云はれてゐる。製本職なども多く傭はれてこれも一年ぶつ通し修補をやつたことは勿論で、今でも前田家には製本の様式が三種に區別され、漢書、和書、歌の本それゝ立派な板を以つて、宛がら書物そのものを見るごとく、表紙、とじ目、標題までチャンと示してあるものが存してゐる。製本屋は此の様式を範としたことは云ふまでもない。尙ほ梅堂の記によると、文化の頃に前田家は各藩にある名物の宋版

を覆刻せんと企だてたことが知れる。文化と云へば松雲公より餘程時代は後だが、前田家は代々圖書に興味があつたものと見える。流石に富んでゐる同家でも影寫に餘り費用が嵩むので、會計方から苦情が出たことも此の梅堂の記に據つて知ることを得た。前田松雲公は日本に於ける、空前の圖書の大蒐集家である。恐らく絶後とも云ひ得るかも知れぬ。公の抱負は日本の珍籍奇書は勿論、支那にまで手を延ばして佳書はその何たるを論ぜず、あらゆるものを網羅せんとしたのである。前掲梅堂の記にもあるごとく、支那より舶載の書物は残らず買取つたとある。勿論座して舶載を待つたのみでなく、人を支那に派して搜索せしめた事實も着々あるのだ。前田家の富を以てして何物も買へないものは無かつた。随つて賣るとあれば、足利文庫本でも金澤文庫本でも眞福寺本でもその他有名な寺社の所藏を買入れることは朝飯前の易々たることであつたが、寺社の寶物となつて資財帳に録してあるものは、いくら前田家の力でも買こむことは出来なかつた。亦名家の秘傳の書物などはその家には一子相傳のもので、それを賣飛ばせば、子孫が活路を失ふことになるから、それ等は金力で購ふことが出来なかつた。その頃は朝廷の典禮儀式などを司どつた種々の名家があつて、それがモノポリであつたから、その家に藏する書類は皆門外不出であつ

たので、到底購ひ入れることが出来なかつたが、斯る秘書は皆借受けて、原本宛がらの如くに影寫したものである。前田家がこれ等秘書を借り出すに就ては多くの謝禮をした。それだから幕府の命でも出すことを肯じないものが、前田家ならばと皆貸出すことを諾したのは全く金力に據るのである。洛の東寺には幾千通の天平文書があるが、一紙と雖も貴重なる寺寶でないものはない。前田家はこれを追々と借り受けて、全部影寫した。そして原書を返却する時に、バラバラとなつてゐる文書を一々巻物に仕立て、それを二十卷、三十卷づゝ立派な函に入れ、全部で百函に納めて返却した。東寺の百合文書と云はれるものは前田家が百函に納めたからの事である。前田家は借用のものを取扱ふに斯の如く鄭重であつたから、どこの舊家でも由緒ある寺社でも、前田家なら貸しても損はないと云ふたと傳へられてゐる。京都の三條西家に朝廷の儀式典禮に關する貴重なる圖書が多く藏してあつたのを前田家は懇請して謄寫したが、返禮にとその文書を納めた書庫を改造してやつたばかりか、書物を借りたことが因縁となつて、終には縁組までするやうになつたなどは面白い事實である。

松雲公と水戸の義公とは親戚であるのみならず、叔姪の間柄であつたから、義公が大本

史の編纂をやり出してからは、いろ／＼の参考書を加賀に借覽をもとめ、加賀でもその都度貸出したことが、同家の文書に残つてゐる。水戸でも加賀の蔵書を調法がつたに相違ないのである。加賀に存する手紙の内には、水戸が皮肉な事を云ふて吾等は有益の編著をするために圖書を蒐集するが、貴方は何んの爲めに蒐集するのだと皮肉に詰つた手紙が見える。松雲公はそれに對し、蒐めた上で仕事に取り掛るのだから餘計なことを云ふなと云ふやうな調子で答へてゐる。加藩では水戸ほど圖書を利用しなかつたやうだが、その蔵書に富んだことは、水藩の及びもつかない所である。

松雲公は圖書には餘程の鑑識があつたと見へる。殊に和書には當時學者達が及びもつかない鑑識があつて、採集には自身鑑別したらしい。當時加賀に抱へられた學者には木下錦里や室鳩巢などの大儒があつた。松雲公はこれ等の學者を冷やかして、君等の判るものは漢籍だけで、和書は一寸君等に分り兼ねるといふた逸事もある位、圖書に鑑識があつた。あの大藩の富力で殊に長壽を保つた松雲公が一代は愚か代を重ねてまで蒐集に努力したのだから、奇籍珍本は豊富であつたのも偶然でない。

一四 ハンターと光悦

日本には書物に興味をもち、書物漁りに憂き身をやつしてゐるものがある。珍書なれば價を論ぜず購ふ人もある。外國でも、この種の人は多くあるが、人の作つた本は愛が籠つてゐないといふて、自から作る好書家は餘りない。況して紙も自から漉き、活字も自から作り、自から印刷し、自から製本して徹頭徹尾、おのが手にかけてねば氣が済まぬといふ愛書家は決してない。頃日發行の裝釘同好會の雑誌「書物と裝釘」に稀有の一例が録してある。それはダアド・ハンターといふ人の経歴である。この人は廣く知られてゐないが、印刷業者を父に持ち、幼年から古版が好きでワシントン時代の手摺りの印刷物に古雅の味があるといふて、三十年間この種の印刷物を蒐集したが、それが二百種にも及んだけれども、それには結局満足した趣味を感じ得ず、溯つて伊太利の十五世紀、十六世紀頃の書物が如何にも古雅でふくらみもあり、光澤のない澁味もあるのでこれであればならぬと、機械萬能の亞米利加に生れながら大量生産の俗惡の書物に尻をくれて、一意伊太利に倣はんと

邁進し、伊國に渡つて手漉の紙を製する事を研究し、それからウイennaの工藝美術大學で活字版の研究を遂げた。かれはそれから本國へ戻つて自から紙を漉き出した。かれはいはく、紙に對する愛情のない職人の造つたものでは氣持ちがわるい。印刷もその通りだといふて自から活字を拾ひ自から印刷もした。かれがオハイオ州の居宅近く設けた製造所といふのは、小河に沿ふて古くから水車のあるところを相して、そこに麥わら葺のcottageを作り、そこで紙を漉く事にした。また活字の鑄造所も造り紙を漉かない日はハンター式の活字を鑄て、こゝにハンター本が出来る事になつたが、紙の製造高は一日七十五枚といふ位だから發行部數も、もち論二三百部に過ぎない。しかし世の好事家に珍とせらるゝはこのハンター本だといはれてゐる。多分伊太利の十五六世紀頃の古雅な面目を存したものであらう。亞米利加の如き國からかやうなものが出来ようとは如何にも想像外である。しかしハンターこそ徹底せる好書家といはねばならぬ。日本で古く例を求めたら光悦などがこれに庶幾いかも知れない。かれは獨創の紙を漉き、獨創の文様を印刷し、獨創の字を彫刻して活字を作り、頗る古雅の本を作り出した。光悦本といへば品格の上においても古雅の上においても嶄然一頭地を抜いてゐる。かれが鷹峰の家の下を流るゝ紙屋川に水車を廻

はしてそこで手漉きの紙を作り、色を五種に染めた紙を錯綜して一冊の本を綴つたり、連續した假名の活字を巧みに作つたなどは頗るハンターと同軌の感を抱かしめる。只光悦のハンターに優るところは光悦はハンターの如く範を外に求めたのではなく、己れより古をなしてゐる點にある。光悦の頃すなはち慶長時代には版本は極めて粗笨のものであつた。支那版の覆刻は古く足利時代にあつたが、光悦を満足せしむるものはなかつたに相違ない。光悦は和趣味に憚らぬところを己が手をもつて作り出した。かれが書、かれが畫、地紙や表紙に雲母に描かれた畫は版本に與へた空前の光彩であらう。徳川期の中葉頃に好事家が種々のものを版にしたけれども、光悦本の如く、流布を目的とした美麗なものはない。なほ光悦には嵯峨の富豪、角倉素庵のやうな門人があつて、同じ紙を漉き、同じ活字を用ゐ、同じ雲母文様のある書冊を出したので、ハンターの業よりも規模は大きい。この點も光悦が一段上であらうと思ふ。

一五 圖書館で取扱はぬ圖書類

大體圖書館と云ふものが、何を備へて、何を備ふべからざるかの定義も範圍も頗る曖昧で、西洋に於てすら甚だハッキリしない。委しく云へば、どれまでが圖書館の領域でどれまでが博物館の管轄だか、ハッキリとして居らぬ。先づ大ヅカミに書物の形をして居るものは圖書館に屬し、書物の形を爲さぬものは博物館その他に屬するものゝ如く考へられて居る。しかし書物の形をなして居ると云ふても一概にとち本にのみ限られてゐぬ。現に普通圖書館に屬するものゝ中に、帖子もあれば卷子もあり、一枚々々のプレートの様なものもある。又とち本の形になつてゐるものは、すべて圖書館に屬するかといふに必ずしもさうではなく、とち本の體裁になつてゐる圖書で、圖書館に扱はれぬものが後に云ふ如く、色々である。して見るとコンナ事を以て所屬を分つの標準とすることは出来ない。或は普通書畫と云ふ類は、圖書館の範圍外だと云ふて、境界を畫せんとするものもある。成るほど掛物や屏風の様なものも多く圖書館の管轄外としてある。單に形の上からでなく概して肉筆

の書畫は別物となつてゐる。しかしこれも甚だ曖昧な境界で、版刻の書畫は現に管轄内に置かれてゐる。

シテ見ると版刻や複製のものならば、書畫をも圖書館で取扱ふものと云ふことになるが、これも妙な境界と云はねばならぬ。又今は圖書館で取扱ふものゝ範圍が大分擴張されたが、或る時代には風教に補ひあるものゝみに限られたこともあつた。經子百家の堅苦しい書物は皆有益として取られた時代は、明治以前學校附屬文庫に見たことである。今となつては所謂有益と云ふ解釋も違つて來たし、又圖書館に置くものは必ずしも有益のものに限らぬと云ふことになり、曾ては風教のために有害とされた狭斜文學、シヤレ本や、惡所の細見俗謡の類に至るまで、當然備はるべきものとして取られる迄に擴張されてゐる。勿論有益無益を標準とすることは出来ぬ。兎角ハッキリと境界を畫してどんなものが圖書館の管轄でどんなものがそれ以外であると區別することは甚だ困難である。實際日本の如く、まだ發達の途上にある圖書館に於ては國立のそれと云ふても、經費が甚だ少ない爲めに、當然備はるべきものでも、購入費の乏しい爲めに備へずして已むものが澤山にある。例へば、上代名匠の手に成つた繪卷物などは原本が最も大切な役を爲す事は云ふまでもな

いが、兎もすると一卷一萬圓とも云ふべき價を拂はねばならぬ所から、それを一卷購ふよりも他にまだ備へねばならぬものがあつて、それを購ふことが急だと云ふて割愛を餘儀なくされるのであつて、管轄違ひと云ふので除かるゝのではない。圖書館が原物を去る事甚だ遠い版や寫しの複本を備へて満足するのは實に已むを得ないからである。又珍奇の圖書は圖書館に於てこそ藏すべきで個人の手に委すべきでない。天下に一ありて二なき珍書などは圖書館にあつてこそ永久に保護され、且つ役立つわけだが、これも價が甚だ貴いので購ひ難い爲めに備はらないので、要らぬから備へないのではない。兎角圖書館は經費のために制限されてゐる。西洋に於てもこの氣味がない譯でもないが日本に於ては國立圖書館でも國立大學の附屬圖書館でも今日の處、如何にも圖書購入費が微々たるものでこれが爲め範圍を狭めらるゝ。即ち實際の制限は購入費にありと云ふべきであらう。現代の日本の圖書館は版本に限られてゐるやうなものだ。而して最も大なる圖書館に於てすら必要なものは寫して備へるとまでには行つて居らぬ。そして版本も決して全部備はつては居らぬ。廣い全世界の圖書はおろか日本の版本でも備はつて居らぬ。強ち價の高い爲めだからではない、手が届きかねてゐるためもある。亦保管や取扱ひが面倒だといふて備へる事を忌む

内證もないでもない。されば一圖書館の藏書四十萬五十萬などいふと素人は洪海の如く感じ、何でも藏してあつて無いものはないかの様に思ふも無理はないが實は頗る不備のものであつて、ある種類のもものは殆ど絶対に無い様な仕末だ。そしてその絶対に無い部類は、圖書館に不用かといふと決してさうでは無く、實は大切なものであることを思ふと、圖書館の充實を見るのは前途遼遠の感がする。

私は今具體的にどんなものが圖書館に關けてをるかを精細に列擧することが出来ぬ。精細に云ふには餘り匆卒である、併し凡そは云ふことが出来る。即ち左の如きものが多く關

けておる。

- 一、古文書
- 一、繪卷物
- 一、舊鈔本
- 一、諸家墨蹟
- 一、法書
- 一、印譜

一、金石拓本

一、經卷

一、浮世繪

此内には價高うして容易に得難いものと、然らざるものがある。法書や印譜や金石拓本のごときは強ち高價のものではない。古文書や、繪卷物や、舊鈔本、諸家墨蹟の如きは、其の稀觀の點から甚しく高價のものがある。好事家が喜んで藏する所から、因習的に圖書館に不用の如く感ずる人もあれど、實は備へるに越したことはない。帝大に於ては史料蒐集の關係から、古文書は謄寫して多く藏せられてゐる。これを帝大の圖書館のものと見れば、不備とは云はれぬが、修史の材料として別になつて居る間は、圖書館に關係なしと見て論ずるのが當然であつて、帝國圖書館に於ても帝大の圖書館に於ても寫しにあらざる古文書が幾枚あらうか。實に寥々たるものであつて幾んどお話しにならぬ。然るに却つて此等の原本は離れ々々、に好事家の手に藏せられ、中には一人で少からず藏してゐるものもある。名家の書簡なども文書の部類である。新古併せて幾千通、これを有意味に利用せしむることは、圖書館の務であるのだが、これも圖書館には缺如して、個人の道樂に委し去つ

てゐる。舊鈔本は絶體に備はらないわけではない、足利以降に屬するものはチラホラ圖書館にも藏してあるが、卷子形の稀觀のものを藏してゐる圖書館はいくつもなく、藏してゐると云ふても其數は指を屈する程の少數であつて、多く著名のものは富豪の手に歸してゐる。繪卷物などは諸家の寶物となつてゐて容易に手に入らぬものだが、近年はそれが賣り物となつて多く市場にあらはる。併しそれを購ふことは矢張り富豪で、圖書館にもまた博物館にも一品と雖も落札した例はない。經卷なども上代の珍奇のものは矢張り富豪の玩具になつてをり、圖書館に藏するものは有り觸れた各時代の版本に過ぎない。名家の墨蹟は必らずしも掛幅などを云ふのではない。圖書館にふさわしい形のものはいくらでもあるが、それは圖書館の關する所ではなく、石版摺りの複本などで目錄を滿してゐる。浮世繪に至つては強ち關如とは云はぬ、繪本の類は可なりに多く蒐集されてゐる圖書館もあるが、プレートになつてゐる錦繪となると、これが又圖書館で概ね取扱はれぬものとなつてゐる。およそ此等のものは多くは價が甚だ貴く、到底現在の圖書館の貧弱なる資力では力が及ばないから購はないので、書畫に屬するから取らぬなど云ふのは瘦我慢の遁辭である。全體圖書館の務めの一つは貴重ものを永久保存すると云ふにもある。其上から見ても之を襲

藏し、永く喪失を防ぐべきである。況んや又學藝の資料として大切なる意味のあるに於てをやだ。法書、印譜、金石拓本の類に至つては、圖書館に全く闕如しては居らないが、實は大いに備はらぬと云ふべきだ。いくらあるのは偶然あるので、頗る貧弱であるから、誰れも此部類の物を見る爲め圖書館に行くものは無いと云ふ状態である。圖書館の衝に當る人は或る特別の例を除けば法帖や印譜の可否を辨する能力もない。金石拓本は種々の研究に必要な事が近來益々分つて來て、帝大などは追々支那で漁り、近來招來したものが少くない。併しこれも圖書館として集めたものでは無いから、矢張り私の論難には觸れる。一體拓本は取扱ひの厄介なもので、表装に費用のかゝるものであるから、圖書館に於て喜ばれぬ傾きもあるが、此等の金石類は決して價の高貴のものでないのにそれすら一種好事家の手に委し去られて、此等のものを見んとするには、圖書館は用だゝぬことになつてゐる。

以上挙げたものは普通版本の圖書部類を聊か外れたものだが、純然たる版本で有力なる圖書館に闕如してゐるものが多い。宋槧元槧など云ふ書物も絶無ではないが、僅に標本として少しく備はるまでの事で、此等の圖書も寧ろ圖書館以外に藏せられてゐる。岩崎文庫

とか帝室の文庫とか勝手に出入の出來ない所には相當に備はつてゐると云ふのも、必竟資力の關係から起る事である。この他天下一品と云ふほどのものは好事家の手に歸するが常例で、圖書館が與らぬと云ふのが實際である。苟くも文庫と名のつく所であれば、先づ散逸喪失の憂ひがないと見てもよいが、變遷の多い個人の手貴重稀覯の書が委せられてゐるのは、危険の甚だしいものと謂はざるを得ない。尙こゝに漏らすことの出來ないのは名家の自筆本である。これも唯一の點に於て貴重と云ふべきであるが、圖書館に於てこそ此等は永世保存さるべきであるのに、多くは最も危険の手に置かれてゐることを思ふと實に寒心すべきである。尙ほ圖書館に備はらないものがある。それは廣汎の種類にわたり數も多く、中には珍奇有用のものもあるのに、非賣品であるために、廣告にも出ず、ある範圍の人でなければ、その存在すら知らない部類のものである。之に就て何人も直ちに想ひ到るのは自分よがりの和歌や詩を刻したものや、何等かの紀念に父祖の遺物を刻したもの等もある。併し自分の云はんとするのは此れにあらずして彼れにある。自家の珍藏寫本を同人に頒たんにために板に刻したり、活版に附したりしたもの、名家の自筆を複製したもの、

頗る有益の著述編纂ではあるが、或は謙遜の意味で賣ることを欲しないもの、若しくは時流に投ぜぬ故を以て非賣品となすもの、禁忌の圖書で廣汎の流布を憚るもの、技巧の精を極めて出版に多費を要するもの、自家の趣味を満足せしむるを目的とし營利を度外に置くもの、凡そ此等は皆部数の小なるを例とし、同人に頒つ位が目的で、動もすれば内務省へ出版届をせぬものがある。これ等の内にはなか／＼珍奇のものがあつて、それが全く人に知られず年所を経て偶々市場にあらはれ、初めてこんなものがあるかと驚く様なものが此部類に多いが、祕密出版と同様、知るに由ない爲め通例圖書館に入らぬ。併しこれは閑却す可からざるものである。自分は常に思ふに此部類に屬する目録をとつて置く必要がある。追々知れるに従ひ書きつけたら必ず圖書館の参考になるだらうが、著述の折角の勞を發揚することにせらる。

一個人がある種類の趣味に偏して聚める圖書と、其部類は大圖書館と雖も到底及ばな^{So far as it is}ふてコンナ類を是非備へねばならぬか否やは問題である。併し圖書館に殆ど無い様なものが却て一個人の手にあると云ふことの實例となる。それはどんなものかと云ふと、世にあらゆる蒙求類をあつめて居る人もあり、あらゆる往來物をあつめてゐるもの

もあり、式目のあらゆる版本をあつめてゐるものもあり、あらゆる論語をあつめてゐるものもあり、あらゆる曆を有してゐるものもあり、茶書や武鑑や、評判記目録類などをあつめてゐるものもあり、その他いろいろ偏した集め方をしてゐるものがあるが、その一類の數は千二千にも上るほどあつて、一種の研究資料にもなる。これ等のコレクションは優に圖書館のその部類の數を凌駕してゐる。例へば春畫の様なものを禁忌圖書と銘を打つて若干はありとしても、先づ無いといふてもよい。春畫の如きは普通の閱覽者には見せぬが例である。併し或る研究家には必要の資料である。性の研究に於て將た繪畫の研究に於て。全體此等は淫褻の玩具として風紀上賣買も禁ぜられてゐるから、研究家が見んと欲しても見られない不便がある。その不便を充たす爲め圖書館に於て、從令禁忌部類に置くとしても備へ置くべきではあるまいか。又演劇に關する圖書も圖書館に於て甚だ闕如してゐる。勿論幾許は無いでもないが、臺帳や淨瑠瑠本や番付繪看板などになると演劇研究家は圖書館を眼中に置かない。この道の藏書家を訪ふの外に見る方便はないのである。演劇のごとき文化に關係ある事項に屬する圖書は既往は兎もあれ、今後は圖書館に相當備はらねばならぬと思ふ。

以上ザット述ぶることく圖書館に備はらないものを求めると、矢鱈に澤山ある。中にはその部類の専門圖書館に限り備ふるを可とするものもあるに相違ないが、日本今日の現状から見ると如何にも不備極まるも云へるのである。前にも云ふ如く、必竟購書費の少いのが其原因であらう。依つて自分の常々思ふのには、富豪などで圖書館を作することを企てる人も追々あるが、普通圖書館の企及し得ない、即ち費用の爲めに備付の出来難い様なものゝみを備付けることを目的として、特殊の圖書館を作つたら普通圖書館の闕を補ふ事も出来、天下の名品の散佚をも防ぎ、一舉兩得の利があるやうに思はれ、この計畫を勧めたいと思ふてゐる。實を云へば帝室などでこの式の圖書館を計畫さるれば最もよいのである。圖書寮には既に相當の圖書もある。それに附加へて追々高價の珍書奇籍で國寶ともなる様なものを集められたならば、永遠に保護も出来、且つ研究家の便益ともならう。今日のごとく圖書館に備へ付けたい様なものがどしどし個人の手に移り、それが追々と失せてゆくのは如何にも遺憾なことである。

一六 古 本 屋

學問知識の糧は何處にありやと問はゞ、誰れも學校や圖書館を先づ擧げるに相違ないが、本屋を逸してはならぬ。書物の豊富を論ずれば、圖書館に越すものは無いが、圖書館は讀書慾を満す處で、讀書人には他に一慾がある。それは圖書の獲得慾で、圖書館では此慾を満すことが出来ない。此慾を満す所は本屋である。本屋は獲得慾に對する供給者である。大體圖書館と本屋には以上の相違があるが、併し前者は極めて縁の近いもので似寄りの點がある。本屋は圖書館同様に店頭で多くの圖書を陳列して顧客をして任意に漁らせる。だから某の書物はどんな體裁で誰れの著は幾冊あつてどんな内容であるかゞ凡そ知れる。圖書館でも借り出して見れば同じことが知れるけれども、相當手數がかゝる。書庫に立入ることが出来れば、本屋の店頭で漁るよりもはるかに多量の書物に接し得れども、通例それは許されてゐない。本屋が圖書館に比して便利であることは先づ此點にある。

本屋は所謂ヒヤカシ客を卑しむけれども、客は必らずしも某の書を購はんとして、確固

たる目的で立入るものばかりではない。書物を漁る内或るものに觸れて卒然獲得慾を起すことが割合に多いものである。だからヒヤカシ容を卑しめてはならぬ。ヒヤカシは購求の豫備行爲と見做さるゝ場合が少くない。兎角、實物に觸れねば獲得慾は起らない。目錄だけを見ては、何んの感じも起らないものが、實物の體裁や版式や挿繪などで刺激されて獲得慾が起るのである。

同じ書物でも初版があり、覆版があり、異版などがあつて、普通本と同じからざるものがあると好書家を刺激する。禁版絶版書などは一層刺激を與へる。すべて稀觀の書物が好書家の獲得慾を起す誘因となるので、本屋は流石に職業柄よく心得てゐて、書物通を以つて任じてゐる人でも、本屋に教へらるゝことが往々ある。此點は圖書館の貸出係に比して優つてゐると云ひ得よう。

書物を求める人には種々雑多の別があつて、珍本ばかり漁るものでない。時には或る種のものに限つて搜がす人がある。例へば蒙求とか消息往來とかに限つて集める人がある。斯る客は本屋が餘り注意を拂つてゐない雜書の内から取り上げて喜んで購ふものがある。零本を所持してゐる人が、店頭で自家の零本を補足する他の零本を得たとすれば其人には

非常の仕合せである。それだから以前には零本のみを賣る専門の本屋もあつた位だ。

古本の商賣が、他の商賣と異なる一點は問屋が無いことである。そこで仕入に骨が折れる。別して稀觀の書物を手に入れるには非常の努力を要する。ツマリ藏書家からセビリ出すか、舊家の拂物をねらふか、藏書家の死を待つかの外はない。此點に於て古本屋就中珍本屋に大切味があつて、好書家が幾許敬意を拂ふのもこゝに存する。

古本の商賣は利益の細いものであることは、反町茂雄氏が嘗て雑誌「書物趣味」に書いたのが事實の告白であらうと思ふが、しかし本屋は上品の商賣であることは争はれない。その上品性が細利を償ふことも亦争はれまい。自分は曾て本屋を著述家の墓所だと云ふたことがある。普通の墓は石で作られてゐるが、書物は紙碑である。精神の籠つてゐる墓である。普通の墓は一基で寺域に安置されてゐるが、此精神的の墓は一基に限らない。各著述は皆それ〴〵墓と見做さるべきもので、十の著述があれば十基の墓があると云ひ得る。石の墓は物を云はぬが、此墓は物を云ふて世道人心に教化を與へる。靜的でなく動的で、どこへでも移し得る。石の墓は亡びることもあるが、此墓は廣く流布してゐるから亡びることがない。石の墓は血族に拜まれ、血族に據つて護られるが、此墓は萬衆に拜まれ、護ら

れて其の感化に浴する。だから古本屋は先哲の碑林で、店主はその墓守のやうなものだ、図書館も亦同様である。吾等の古本屋を訪ふのは、先哲の墓参に行くやうなものだ。

街頭に聖賢の遺蹟のあるのは古本屋ばかりである。古本屋を墓所扱ひにするのを當業者は厭がるかも知れんが、實は尊い營業である。好學の人の散策の折の大切な遊び場であり、亦趣味あるステーションは此商店であらう。三三五五の客が此のステーションに落合つて、兎もすると書物を漁ることをソツチのけにして、互ひに圖書に就て雑談に耽り時の移るを知らないことがある。本屋は迷惑がるかも知れんが、本屋の主人がそれを傍聴して書物の教育を受けるのは斯る場合にあるので、此の傍聴で偉くなつた本屋の主人が幾人もある。

古本屋は好書家や學者の倶楽部のやうなもので、曾ては二三有力な古本屋では座敷に客を導き、随意に雑談を交へさせたこともあつた。あれなどは確かにクラブの相を具してゐた。自分なども既往を顧みると、此のクラブに日參して、午時は辨當まで取寄せて、同好の人と語つたり、方々から集めてくる本を、吾れ先きに檢して、優先權を得るに汲々としたこともあつた。

今は座敷に客を導くやうな古本屋は無くなつたが、陳列場を設けたり、座談會を催した

り、雑誌を發行したり、書史に關係の書物を出版したりすることが行はれて來た。コンなことも時勢に應ずるやり方で、古本屋の活きる一法に相違ない。勿論間接に自家を宣傳する法ではあるが、一概に商利に拘泥しない所は美學として褒むべきである。兎角新奇を喜ぶ世の中に古本屋が前途どれだけの運命があるか、覺束ない感がないでもないが、吾等は好書家の爲めにレアブックを賣る家の健在を祈るものである。

一七 校正 難

書物の出版に先づ校正は頗る重大事件である。著者自身が校正しても誤りなきを保し兼ねる。況んや他人の校正においておやだ。別して古書の翻刻などの場合においては、校正は頗る難事である。動もすると底本に誤謬があるから嚴密の校正においては、その誤りをも訂さねばならぬ。わが國の如く漢文で書いた書物の多い國には、その書の覆刻の時校正が實に厄介である。なぜといふと訓點などに誤りがあつて、どうしてもそれを訂す必要があるからである。古書には訓點に多くの誤りがないが、だん／＼漢文が讀めなくなつて來る

と、滑稽至極の訓點を附するからとてもたまらない。校正家はこれを訂さねばならぬとなると、相當の學識を要する。時には佛典を引いたものなどがあると、佛經智識がないと校正は不可能である。世に校正家ほど椽の下の方持をやつて、不利の立場にゐるものはないが、文學上これほど大切な役目をしてゐるものはないと思ふ。早大の圖書館に大石理圓といふ人がゐる。この人は校正の堪能をもつて早く知られ、この人の校正を経たものには誤謬は全然ないといはれてゐる。自分の拙著七八冊は皆なこの人の校正に係り、疑はしい事があるとは徹底的に調べるといふやり口だから、自分はいつてもその忠實さに傾倒してゐる。ある時この人から書物に誤つた訓點の多く附されてゐる一例を聞いた事がある。それは源平盛衰記の片假名本に、羅什門下の四哲を人名と心附かず強ひて、訓點を附してゐるからどう讀んでもわかり兼ねる。すなはち訓點を附したる原文は左の如くだ。

故生肇融叔之倫、演說連城、防尙光基之類、間離爭錚云々

この文中生肇融叔は羅什門下の四哲、道生、僧肇、道融、僧叔である事を知らず、また防尙光基も四人の名で玄奘門下の四高足、神昉（防の誤刻）、嘉尙、普光、窺基をいふたのだが、それを知らずして訓點を施したのは噴飯に値ひする。なほ同じ様な誤りは林羅山の活

版本、後素説には經卷の名に左の如き訓點が施されてある。

偶見大梵、王問、佛決疑經三卷云々

訓點者は「大梵王問佛決疑經」は經典の名である事を全く知らないのである。佛典に關する事は假りに専門智識を要するとして、恕する事も出来るが、天工開物などいふ書物は有り觸れたものであるのに、それに天工開物と訓して書名と心得ないものがあり、經籍訪古志は名の高い書史であるのに、撰經籍訪古志など、御叮嚀に滑稽の訓點を附するものがあつて、この類は枚舉に遑ない。追々漢文修養が疎になるにつれて校正はますます難きを感じる。

一八 活字因縁

一將功成つて萬骨枯るとは、軍陣に多くの士卒を勞し、それを犠牲にして功は一將に歸することをいふのだが、この詩にはいろ／＼の含蓄があるとも言ひよう。巍然たる大廈高樓、其建築は某技師に依つて成ると言ふだけで、他の従業員の事は全く没却されてゐるが、

煉瓦を一つ／＼積み上げねば、この大建築は出来ないのであつて、何萬何十萬の煉瓦を積み重ねる勞は宛がら士卒の勞に比すべきであるのに、そんな勞は全く閑却されて、功は一技師に歸するのが常である。活版などにしても煉瓦よりも何百分の一とも言ふべき細かなものをならべて版を作るので、採字植字の勞は容易なものでないが、それ等の功は表立せず閑却されてその掛長位が僅に認めらるゝ。自分などは印刷會社の社長をしてゐるから、多くの職工を犠牲にしてそれを己一人の功にしてゐるかにも見えるが、事實はその社長がルミ世に閑却されて、文學者や著者の犠牲となつてゐるものである。世の中に椽の下力持と云ふ諺もあるが、全く活版營業などはそれである。印刷された圖書の著者こそ世間に、持て囃されたりするが、印刷會社長などが名譽を些しでも頒たるゝものでない。私は青年時代から、活字に經歷があつて一生涯それで一貫してゐるが、その爲め文化に對し、相當の貢獻をしてゐるけれども、自分が心ある人から多少功績を云々さるゝのは圖書の著者若くば編纂人としてゝあつて、活版印刷者としてゝはない。實は損得論になると、これほど損なことはないのである。併し椽の下力持をするものが無ければ、文化は決して起るものではない。誰も彼も名と譽とのみに専らであつたならば、下回りの仕事は、誰が擔任す

るであらうか、椽の下力持こそ實は事業の大部分をなすものであることを思はねばならぬ。勞働者の擡頭も實は當然の事である、勞働者の功を認めない事は嘘である。

一九 書名の奇を忌む

名稱は事物の本體をいひあらはす記號でありとすれば、その名が物の大體と遠ざかるはよろしくない。書物の標題の如き、檢索に便するにはその内容をいひ現すものでなければならぬ。内容と背馳する名を命じ、もしくは内容の如何を推することも出来ない名を命ずるなどは、その書物を殺すも同然で、世に浮び出る機會がない。然るに書名を撰ぶに他人の著書と混同を忌み、或は奇を銜つて、慘憺たる工風を凝らし、名實毫も相關せざる標題を撰ぶ事が、日本にも支那にも或る時代に甚だ多く、圖書館の目錄掛を泣かせ、閱覽者を五里霧中に迷はしむるは、文學界の一弊といはねばならぬ。今試みに謝在抗が、古今書名に奇を好んだ實例中四五を摘出すると、左の如くである。

白癩髓(張中之著)、碧雲駟(梅聖俞)、眞珠船(胡侍)、玉壺氷(都穆)、鐵掃帚(擇日書)、珊瑚

木(類書)、蠶衣(祝允明)、佩觿(郭恕恕撰字書)、宵練匣(朱得之書)、鱗角(類書)、鼠璞(戴
 桓)天厨禁燭(惠共詩話)、仙島羽翼(惠洪詩書)、中流一壺

これ等の書名はその内容をあらはすものでなく、何種の書にも命じ得べきものであり、
 また何種の書にも命ずべからざる謎のやうなものである。奇を好み雅を喜ぶ支那癖は久し
 く日本にも禍して、その奇なる標題の書物は圖書館に多くありながら、一たびも役立たな
 いものがいくらかもある。名を正すの必要は最も圖書にありといふべきであらう。

110 圖書目録の應用

近年會心を覺えることは目録の作製が廣く行はるゝやうになつたことだ。何も宣傳の世
 中であるから目録の作製さるゝのは怪しむに足らないが、目録にもさまざまあつて一時
 の役に立つものばかりではない。保存して置けば他日役に立つものが少からずある。商賈
 が發行する書籍の目録等でも時價が書いてあるから他日は参考となる者だ。書畫の賣立目
 録は書畫其物が寫して收めてあるから、圖様を見る参考としても所藏者を知る爲めにも

考となる。こゝ十數年貴族富豪の書畫の賣立が盛んで頗る費用をかけた目録が澤山に出
 る。従前は大藩の諸侯の家者などは拜見も出來ず、どんなものがあるか想像もつか
 かつたものが、どん／＼目録にのつて出るやうになつた。

全體目録には、フアクシミルのあるのが進んだ目録の作り方であつて、書籍の目録にも
 これが必要であるが、書畫骨董の目録にはこれが行はれ出したが、書籍などには僅に二三
 葉の標本を收める位に過ぎぬ。商賈の目録は賣買の便に供する一時のものに過ぎないが、
 それにしてもいろ／＼の役立をなす、況して特種の研究の爲め作つたものゝ大切であるこ
 とは絮説を要しない。近年は各種の陳列がある毎に多くは目録を製作する。それには精粗
 はあるが委しいものになると、その物に就ての解説まで委しく録されてゐるし、學術的に
 分類もしてある。目録は斯くあつてこそ役立をなすのである。いくら稀覯のものを展覽に
 供しても目録が添はないでは、眞に雲烟過眼で陳列の甲斐もないのであるが、目録を作る
 ことは面倒でもあり、多少費用もかゝる爲めにこれ迄省略されたが、漸くこの勞を當然と
 するやうになつた。物の陳列をしないで特殊の研究家とその蒐集の材料の目録を公刊し
 たり、自家の私的蒐集の圖書目録を發行したり、地方では郷土史料、寺では宗教書の目録

或は國寶の目録、圖書館ではその藏書の目録、或は部分的に古活字本の目録、複製本の目録、絶版書目、禁忌書目、未刊書目録、焚失書目等々、研究家、好事家達が思ひ／＼に目録編纂に意を用ゐるやうになつて來た。好色本の目録などは昔既に出來てゐる。今も内證に作つてゐるものもある。春畫やあぶな繪の目録などもその道の好事家には作られてあるが公刊されないまでの事である。近頃は明治の初期の出版物に興味を持つ人が可なり多くなつて、蒐集と同時に、その目録を作つてゐる人もある。時代別に目録を作ることゝもわるい計畫ではない、過日は京都の好書家が書目の目録を作つて自分にも寄せて來たが、それには最近の書物屋の目録まで收めてあるので感心した。自分の處へ毎月寄せて來る各種の目録は決して少なくない。自分は目録に對して一種の理屈を有つてゐるから、大概保存して置くが、實に多きに堪へないので棄てたものも少なくない。それにしても千冊位は存してゐるであらう。私は一般の人が目録に對する理解をもつて貰ひたい。そしてそれを保存し且つ役立てるやう心がけて欲しいと思ふ。

二 表 具 屋

一夕幼時の事どもいろ／＼思ひ出した中に、表具屋の職を営んだら面白からうと幼心に思つたことを憶ひ起す。自分の幼少の頃には郷里に有名な表具屋がゐて數ヶ月屏風や幅のつくるひの爲め來てゐた、この人は田舎に惜しいほどの名人であつた。自分は毎日その仕事をする處に遊びに出かけて、下張をする處や裏を打つ所や裂地を貼る所や糊を煮る所などを見た。書畫の趣味など無かつた幼心はこの工藝を妙に面白く感じた。斯る幼稚な時代の思わくは、後に至り變ずるのが恒であるのに、較々長じてからも表具營業は面白いといふ念が去らず、自分はそれをやらぬにしても、誰れか一族の内に職を選ぶものがあらば、これを勧めたいと思ひ、勧めたこともあつた。思ひ出せば、戊辰の戦争歳のあとで戚家に寓した時、こゝにも表具屋が來てゐたので、日々その爲す所を見て、一層この職業の趣味を深くした。自分が書畫に興味を感じたのは二十五歳以後のこと、この趣味を生じては、その直接に交渉あるこの業を喜ぶのも自然の道行であるが、早く幼年からこの工藝に興味

を感じたのは多分それを日々目睹したから起つたのであらう。併し幼い時代に佛壇を作る爲に長い間自分の家に塗師屋の来てゐたことがある。その仕事場へも日々あそびに出かけて金箔をおく所や木地に布を着せたり、トノコをつけたり、漆を練つたりするやうな工程を目睹して面白いと思ひながら、何故か塗師屋を職業とすることをば欲しなかつた。ひとしく美術工藝であるけれどもおのづから取捨のテンペラメントがあるのであらうが、追々長じて書畫を弄ぶ様になつてから、表具屋の眞似ごとをやつても見た。拙劣ながら出来ると愉快に感じた。つくづくある時感じた。名畫の虫喰ひや汚損を繕ふて、その折れや皺をパツチリ直してこれに相當の裂を選んで立派に出来た時は、どんなに愉快であらうか、表具ほど原紙の器量上げるものはない、その出来上るまで名書畫に日々親しむ丈でも、他の工藝よりも内得があると。然し亦ある時は考へた、表具屋となつては襖も張らねばならず、幅の外額面や帖や卷子も作らねばならぬ。それはよしとして困つたことは他人の依頼とあれば、どんな偽書畫でも贋物でも手掛けぬ譯には行かぬ、これは困つたものだとも思つた。丁度その頃であつた。居を猿樂町に移したことがあつた。隣家に並木時習といふ書を能くする人の家があつて、その隱居の福田鐵五郎といふが名高い表具師で價の高い書畫の

表装の外は取扱はないと言ふ抱負で、弟子も置かず何も蚊も老人がひとりで遣つた。隣家だから毎日トン／＼／＼／＼刷毛で叩く音が聞えるので、表具屋となるならば此老人に倣ふべきだと贅澤な考へを起し乍ら、刷毛の音を聞く毎にドンナものを取扱つてゐるか雪舟か、典司か、唐畫か、古狩野、古土佐か等と種々想像を馳せたことのもその趣味があつたからの事だ。自分が老いてからの書畫道樂も大したことでもないが二十年にわたり神樂坂の彌歡堂に表具せしめたものは敢て少なくない。いつも／＼その出来上つて来るの待ちくたびれて近い處だから自ら催促に出かけたものだが、實は裝潢の成つたものを見ると一種愉快の感に打たれるからである。張り交も屏風も數度作つて見たが、これは按排と工風が要るので表具屋に任して置けぬので、いつも自宅に表具屋を迎へて張らせたが、その際は客を謝して表具屋と共に終日没頭したこともある。矢張りこの間に興味があるからの事だ。近頃は書畫道樂も廢し、自然表具屋と無交渉になつたなど考へて見ると、自分が趣味を感じても境遇其他の關係から其物を職とすることは出来ないものであつて、かへつて己の趣味としないものを職とせねばならぬことが世の中の常である。自分は十數年印刷業を営む會社の社長となつてゐる。商賣や營利を好まない自分がたゞ一たび會社に關係し

た譯は、この事業が自分の圖書趣味に交渉があるからのことでの職業は自分の衷心快とする所である。自分の経歴は青年時代より活字で始まり活字で終るものである。これは自然の關係であるけれども、表具のごとく幼時期待したものでは無かつた。

三二 一 類 の 印

人より揮毫を頼まれ書き畢つて印を捺さんと印筐を抜き、二類の印に目をとめて妙な感想を惹き起した。其二類の印は亡友山田奠南が余に與へたもので、四十餘年前余が高田新聞創立の爲高田に赴く時、特に彫らせてくれたものだ。刻者の名を逸したのは遺憾だがなか／＼の佳刻で、「鳥謙吉印」が白字で「春城」が朱字である。實は自分に印のあるのは之が初めてである、また余に春城の號のあるものもこの印が出来てからで、高田に謙信の遺蹟春日山があるのと余の俗稱に謙の字を冒してゐる處から、奠南が選んだのである。余が印に興味を覺へて、いろ／＼の印を蒐集し、今は頗る印に富んでゐるが、誰が余にこの趣味を教へたかを考へてみると、奠南は最初の人であつたやうに思ふ。そして印の趣味を感じし

めた動機は、二類の印を贈られた時にあるかに思はれる。奠南はその頃多くの印を藏してゐた。今考へて見ても刻は皆よく精選されてゐた。印の趣味に就てはまさしく余より先輩である。嘗て陶印の關防を貰つた事がある。それは語も刻もよかつたが、惜しい事にそれは散じて家藏にない。以上の如き因縁からしても此二類の印は、記念とすべき者である。他の私印は失つても此二類は存して置かねばならぬと氣が付いた。況して余が高田新聞に筆禍を得て、長野の獄に呻吟した時、同伴であつたものは此二類の印で、獄内の空氣に觸れて余と辛酸を與にし、余に慰安を與へてくれたのもこの印である。獄法としてかゝるものが囚人に伴はるべきでないが、余は高田の獄に官司の命で毎日揮毫を事とした。獄司の需めに應じて書いた者も少からずあるが、余の揮毫が獄内の工場で作る、屏風の材料となつた。そこで獄司は高田の余の宿舍からわざわざ印を取寄せてくれたので、こゝに圖らずも印が入獄する事になり、それが日々余の身邊に隨伴して苦樂を與にした。長野附近には監獄で作つた安屏風がよほどあるはずで、それに張られた余の揮毫には抵ねおほむこの印が捺されてあるわけだ。その屏風を所持してゐるものは恐らく誰の書とも辨ぜずおほむにゐるであらう。印心あるものは印が捺してある故をもつて、囚人の揮毫とは思はぬであらう。當時は書も拙

であつた。印まで捺して醜を貶す事は耻しい次第だが、とにかくかゝる経歴をこの二顆の印が有つてゐる事を思ふと、妙に懐しい氣がする。今は自分の私印のみでも二百顆もあつて佳印も少くないけれども、これほど経歴のあるものはない。箱でも作つてその次第を録して置かねば他日わけもなく散ずるであらうとも思つてゐる。

二三 印趣味の鼓吹

幾千年の風霜に耐へて、嚴然存してゐるものは金石に刻された文字である。金屬で云へば鐘鼎、石で云へば碑碣に種々文字が存してゐる。書冊などに絶対に傳はり得ないものが、金石に托してあるお蔭で後世に傳はり、それが種々の事を語るのに、金石學が大切な科の學問となつてゐる、印も亦金石の一種であつて、古るいのは漢魏のものも残つてゐて、他の金石類と共に史料になるものが少くない。爰に印の一特徴とも云ふべきは、其の形貌の甚だ小なる事である。碑碣は幾丈とも云ふべき大なるものがあり、鐘鼎其他金屬で製せられた祭器などは碑碣の様に大きくはないが、印に較べると、幾十倍も大きい。印は金石

中の最小のものであると言ひ得よう。乃ち印は國璽の如き最大のもでもタカが五六寸四方に過ぎない。その小なるものになると拇指大、若くはそれよりも小さい。斯る小品の金石が他の大なる金石よりも珍重される譯は、それが大抵名手に依つて刻されてゐるからである。碑文や鐘鼎の文などは、皆な石工や鑄工で作られてゐるのに、これは小なるだけ、名手が自から手を下してゐる。随つて筆劃でも配字でも杜撰なものはない。名手の精神の籠つてゐる金石と云ふたら、恐らく印に及ぶものはあるまい。印文は篆字で作るのが常例となつてゐるので、古體の字の存するものも亦印の一特徴である。

印が机上に他の文房と伍して筆硯を壓倒するの權威を有する譯も、文人に愛重さるゝ程の印は千年以上の風霜を経て、それが蒼古の雅色を帯び、篆刻に崇高美があり、文豪英傑の手澤を経た傳來などがあるからであつて、所謂骨董美が存するからである。決して實印と同じく自分の氏名が刻されてゐて失つてはならぬと云ふ、ビジネスライキの意味からではない。勿論自家の私印でも、名手が刻し、印材も鈕も優れて居れば、机上の璫とすることが出来るものもある。

印の趣味の中樞は何んと云ふても篆字である、字の按配である、刻の精美である。タカ

が四五字乃至十幾字さへ刻さないものであるから、篆字の書體が拙であつたり、他の字と組合せがマヅかつたり、刻が亂れたりしては、それは全局のブチ毀しであつて、半錢の價値もない。唯だ文字を並べてそれで濟む譯ならば、印判師の刻と何んの擇ぶ所があらうや。支那の文字は物を象形したのが多く、篆字には殊に象形のものが多いから、字の選び方と按排がうまいと宛ながら畫でも見るごとき趣を呈する。例へば鴛鴦の篆字などは上部が異なる計りで、全く鳥の形象をなし、それを抱き合せて刻すると、雌雄が辨じ兼ねるものとなり、如何にも繪の如くに見へて、印に心得のない人でも趣味を感じる。支那人は篆刻を形容するに花舞ひ蝶飛ぶなどと云ふが、全く精美の印を見ると此やうな感がある。普通印刻には凸字に彫るのと凹字に彫るのとあつて、前者を朱字、後者を白字と云ひならば、此の二顆を重ねて捺することが例となつてゐるが、これなども趣味的に考へると朱字は山嶽樓閣とも見るべく、白字は山川湖海とも見るべきもので、其上形象の字で彫られるのであるから、畫趣の横溢を感じるのも偶然でない。

印は必らずしも氏名や官名などを刻するとは限らず、游印となると詩を刻したり文を刻したりするが、何んと云ふても印面は狭いから多くの字を刻することが困難で、簡潔の語

を選ぶことが例となつてゐる。印文に往々寸鐵人を殺すの句のあるはこの故で、十字も二十字もあるのを出来るだけ縮めて、二三字乃至四五字とするから、含蓄のある句が出来るのであつて、印語には概して文學的價値がある。印文は詩文の素、詩文のエッセンスとも云ふべきもので、簡潔の所に侵す可らざる力が籠つてゐる。勿論此點も印に就て味ふべき所である。

尙ほ印文の外に文學的價値を認めるのが、刻者の落款である。普通落款は年月や誰れの爲めに刻すと云ふて刻者の名を現はすのだが、清朝時代から冬心齋など云ふ人が出てから、印の鈕に長文を刻することが初まり、其の文が印に一段の趣味を添へることになつた。此の文は恰かも畫幅に筆者が畫し難いことを文で書くのと同じやうに、刻者の意圖や刻してやる人との交情や或は刻印中の出來事例へば雪天酒を思ふ折柄酒を贈るものがあつた喜びまで刻し、往々鈕の四方を填めてゐるものもあるが、其文が巧妙であればこそ其の長きを厭はしめないものである。日本では山陽の外に、斯る短文を能くする人は餘り無い。漫りにコナナ事に倣つて悪文を矢鱈に彫りつけられては、それこそ耐らない。

印には亦美術工藝的趣味がある。乃ち鈕に人物、禽獸、樓閣、花卉等さまざまの彫刻が

あるのは、印に無理解の人でも目を悦ばせる。此の彫刻にも巧拙さまざまあつて、日本の細工は寧ろ巧みに過ぎて織巧に失する嫌ひがあるが、流石に支那のは粗雑の處に風韻があつて到底日本の工人は及ばない。これも長い間の支那の傳統から來た一種の刻法で、どんな名品でも皆無名の作家に彫られてゐることが、注意を要する。絲印などは元來俗趣味のものだが、さて其の鈕となるところとなく風韻があつて、俗に墮することを免れてゐる。日本は根付などの彫刻で藝術は進んで居るが、印の鈕となるとザングリの味を缺く所に申分を免がれない。矢張餅屋は餅屋で、日本の印人が往々素人藝で形象の鑄印をやるが、それが却つて印に折合ふなどは、見逃す可らざることである。

印に最も骨董趣味を寄せるものは其の印材であらう。印材の種類は金、銀、銅、牙、犀、竹、木、玉石、百端で、石には最も種類が多いが、印材の石に豊富であるのは何んと云ふても支那で、日本のものなどは到底比較にならぬ。日本の骨董商は大抵皮相ながら何んでも知つてゐるが、印材となると何故かサツパリ知らない。畢竟支那産の佳石を見る機會が乏しいからであらう。日本人は昔から印材を見ると、何んでもかんでも蠟石だと云ふてゐるが、實はそんな單純のものでない。紅玉などは日本の瑪瑙に似てゐるが、瑪瑙には織

維があるが玉には絶対にそれがない。すべて凍石と云はるゝものは玉に似たもので皆纖維がなく、其内の貴いものになると黄金を凌駕するものがある。鶏血石等は俗人の好むもので、相當價の高いものだが、凍石の田黄や魚腦等に比べると品位が下つて比較にならぬ。すべて佳石は硬軟の中を得て、ムラや針がなく、刀を揮ふに心地のよいもので無ればならぬ。其の色澤もさまざまであつて、佳石を並べると、五彩耀々目を眩するものがある。日本の水晶等は如何にも透明で一點のクモリもないが、さてそれが印人に喜ばれないのは、餘りに硝子に近く、刀を動かすとポロ／＼かけて甚だ彫りにくい。支那水晶はドンヨリして日本の様に透明でないが、ネバリ氣があつてうまく刀が利くので、水晶も矢張り印界では支那産が珍重される。印材の研究も一科の學問に屬し、簡單に説明も出來ないが、佳石を百個も机案の上に置いて一瞥すると、印の趣味を解しない人でもアツと叫ぶ程美麗なものである。

上來陳ぶるごとく、印は掌上に遊び得るほどの小品でありながら、これほど多角的に趣味のあるものはない。金石趣味から云へば、崇高の味を鐘鼎と競ひ、其の多般に渉る材は、金石のあらゆるものを網羅してゐる。詩趣もあり畫趣もあつて風流を極微の天地に納めて

ゐるし、骨董としては最も高雅のものであり、工藝としては最も風韻に富むものである、そしてこれが最も永久性のものであるから骨董界の王座を占むるものは、これであると云ふも誣言であるまい。

二四 亡びんとする木版彫刻

日本の木版彫刻は世界に誇り得べき固有の藝術である。日本の文化がどれほどこの藝術に負ふ所があるか絮説するまでも無からう。洋風の印刷術が開けた結果、惜いかな、今は追々この藝術が亡びかゝつてゐる。自分は他の同人と十数年稀書の複製を續けてゐる爲めに斯道の名工と親しみ、折に觸れて、彫刻藝術の實際を耳にする便利がある。爰に聊か専門家より聞く所を語つて見よう。

現在東京の木版彫刻業組合のものは僅に百餘人しかない。木版印刷業者の數もそれに準ずる。彫刻業には字彫があり、繪彫があり、頭彫があつて、各々その業を分つてゐる。頭彫とは人物の肉體部を彫刻するものを云ふので、これが一番むづかしい。即ち第一位を占

むる上職人である。これが今日果して幾人あらうか。字彫と繪彫とを兼ねて能くするものは勿論名人である。印刷の方も墨摺りと色摺りの二つに分れてゐるが、今日では専門の墨摺職は極めて少ない。

昔は御家人が内職に彫をやつたが繪彫や頭彫などは、矢張専門職工で無ければ、出来なかつたので、御家人のやつたのは、大抵字彫であつた。

彫は一寸考へると機械的のやうに思はれるが、實は矢張り精神的修養を要するとその道のもの云つてゐる。美人彫の上手と謂はれた或る彫工は常に遊里に出入した。人はその放蕩を嘲つたが、實は成るべく若い女に接近する機會を作つて氣分を若やがせる爲めであつた。彫刻師も氣分を尙ぶこと創作家や畫家に譲らぬのである。版木を見たばかりで、老人の彫つたのか、壯年の彫つたのか判断が容易に出来る、老練の版木師は云ふてゐる。

版の彫方に就て古今多少の變遷がある。享保あたり、若くばそれより以前の版木の存してゐるのを見ると、大體頗る深彫である。何故かと聞いて見ると、彫方が後世と違つて、後世は刀を先づ字や畫の輪廓に着け、餘白の處はノミで浚ふが例となつてゐた。大體淺ぼりであるが、昔は字や畫の輪廓に先づ刀を着けず、餘白の中央にノミを入れて、周圍に段

々廣げて彫つて行くのを例とした。後世よりはいくらか骨も折れ、敏速も缺いたわけである。専門家の云ふのに、版を彫る時は、嚴正に版木を机案の上に置き、字も畫も正しい位置に置いて刀を揮ふことを例とした。言ひ換れば、板木を顛倒すれば彫りやすくあつても決してそれをせぬことが法となつてゐた。これは形式に擒はれてゐるかにも見えるが、そんな譯ではなく、斯くして彫らねば、刷る場合に墨に淀みが出来る。刷毛のサバキもよくなく、随つて刷つた結果がよくないからだと云ふ。

今では寫眞(濕板)で寫したのをガラスよりはがして、それを板に貼りつけるのだが、このはがした濕版は薄いのを尙ぶ。勿論薄く寫すのもこれをハガスのにも専門的手腕を要するのだ。理窟から云ふと色版を幾枚か作るに、同じ物を寫眞で幾枚か寫し、それを色それぞれ版下の繪に充つればよいやうであるが、實際は同じ物を五枚寫せば五枚共多少の相違があるので無雜作に同じ物を略同じ時寫したからと云ふて、それに依頼するとトンダ喰違ひが生ずると云ふてゐる。如何にも全く時を同じうした寫眞でない以上は、いくらかの違ひはある筈である。彫師が唯寫眞にのみ依頼せず、實物を傍らに置いて、之に則るのはこの故である。彫師と姉妹關係のあるのは摺師である。彫刻がいくら精良でも、摺りが

よくなければ、彫の成績が決して發揮されぬ。だから、彫師と摺師とは同心一體で、その呼吸がピッタリ合はねばならぬ。浮世繪のごとき色版をいくつも重ねるものに於ては、摺りが尤も大切で且つ熟練を要する。板を重ねるに就ては、兎もすると板と板とが喰ひ違つて吻合しないこともあり勝だが決して斯かることは許されない。美人繪の色版の内で口紅だけを點するに、他の紅色と異なるために一版を要するが、僅に一點だけを添へるのであるから、少しでも位置が外れると全局のブチこはしとなる。上方では面倒がつて筆彩色でそれを點するが、江戸ではそれは版でないと云ふて取らない。流石に江戸の摺師はそこに見識がある。熟達の摺師になると手におのづから尺度があつて決して過つことがない。色の濃淡に就ても、刷の緩急が大なる關係をもつ。人間の柔かい手で、うまく加減するのでそこに機械の能ぐし得ないフツクリした味が出る。繪の原作に比して、幾等優れたものが印刷されるのは、全く摺師の働きである。

摺師の武器とも云ふべきバレンと櫛形の製作を聞くに、その用ゆる材料によつて三種に分かる。第一は竹の皮の纖維をより合せたもので、これが最も廣く用ひらる。第二は捻紙條(コヨリ)をより合せこれに澁を引いたもので、アタリの軽い印刷に用ひる、第三は

鐵線(ハリガネ)をより合はせたもので金銀箔を摺る時に使ふ。材料が何んであらうと、四本捻、八本捻、十二本捻、十六本捻と、適當に組糸風により合せ、それをうづ巻線香の形に巻上げ、更にこれを竹の皮で包むのである。包み方にも呼吸があるといふ。すべてより方は指先の破れるほど堅きを要する。八本捻が一番使ひ頃だとしてゐる。鐵線バレンはもと京都職人の秘傳であつたが、今は廣く行はれてゐる。

櫛形は刷毛の一種で、墨摺りに使用する。大きさは三寸乃至三寸五分。馬のヱリ毛で拵へたものを、摺師の手で毛先を焼き、鯁皮でそろ／＼とおろし、天鷲絨のごとくシヤヤカにして使ふ。中本から大半紙本まで縦に四度、横に三度刷毛を使ふのが定法である。色摺用の刷毛は大小幾種か要するけれど、概して寸法は櫛形よりも小さい。墨摺りのツケ墨は、折れ墨を漬込んでから一年位の所が最もよい。餘り古くなると、膠が薄らぎ過ぎてよくない。駄物にはドブと稱する劣等墨汁を用ひる。色摺りの繪具に、姫糊を交ぜたり、奉書摺に水飴を使つたり、刷毛の代りにタンポを用ひたり、バレンの代りに掌でこする場合などもある。

洋風印刷に壓せられ木版印刷の亡びゆくことを慨し、吾々は特別保護をなすべしと曾て

主張したこともあるが、當業者に聞いて見るとそんなことでは逆も維持が出来るものでないと言ふてゐる。全體これは生活を援けて保護するので持續し得るものでなく、昔は五年七年の年期で丁稚小僧を仕込んだから、その習熟が一の名技ともなつたのであつて、今の時代にその年期奉公は實行が出来ない。年期奉公でなくとも五年七年の修業は逆も今では出来兼ねる。そこへ保護などがあつては益々氣が緩むばかりで到底維持は困難である。要するにこの藝術の持續は強ち生活問題にのみ繋がつてはゐないと云ふてゐる。

二五 切支丹殉難の圖書を讀んで

最近、切支丹宗門壓迫當時の事を書いた出版物が、ぽつ／＼出て来る。私はキリスト教に信仰を持つてゐるわけではないが、殉教の事蹟は私に興味を興へて此等の書物を概ね讀んでゐる。

私が此等の書物に興味を有つ譯は切支丹の書物が永らく國禁であつて、ほとんど見ることを許されなかつた。従つて日本ではこの方面は眞暗で、わづかに西洋で發刊されたもの

を見てそのいく分を知るといふ位のものであつた。しかし西洋の書物でさへ永い間見る事が出来なかつた。それがだん／＼自由になつて近年は研究も始まつてゐるために、その書物も公に出版されて来る。それを讀んでみると全く明るみへ出るやうで一種興味を感じる。この部類の書物は今は少なくない。異國叢書があるし、姉崎博士の著はしたものもあるし、和田博士のモンタヌスの日本紀行を翻譯したものもあり、天正に羅馬に使した少年使節の紀行があるし、その他松崎氏の著はした切支丹殉教記、なほその他江戸の切支丹屋敷の事を書いたもの等、いろ／＼な出版によつていくらかこの方面の事が知れて来る。

この切支丹といふのはカソリック教のことで豊太閤の慶長頃から徳川氏に及び、ほとんど百年ばかりの間に日本に擴がり、それを禁壓するために非常な力を入れた。でその禁壓のために非常な慘酷なる刑が行はれ、教徒が教のために殉じ、また外國から來た宣教師が、同じく教のために倒された。その悲惨なる歴史はほとんど世界に例がないといはれてゐるほど、それほど慘酷なものである。一面から見れば、宗教の信仰に對して殘虐な刑を科したといへば、甚だ野蠻國の仕打のやうで文明國に對しては國辱ともいひ得るが、しかし一面においてその難に遭つた宣教師や、または教徒は如何なるトアマメントに對しても、依

然として恐れず、如何なる誘惑があつてもそれに従はずして悠々死に赴いた。その事蹟を見ると實に外國に對しても、誇るべきものがある。だから一方の國辱はまた一方の譽れをもつて償ひ得るともいへるのである。

そも／＼慶長二年に秀吉が、異教徒二十六人を刑に處してからその刑場にあてた、長崎の立山はその後幾回となく、同じ刑場に用ひられて、その山は殉教者の鮮血をもつてそゝがれてゐる。その關係からこの山を聖山と呼ぶに至つた。この廿六人を刑するに如何に慘酷の法をもつてしたかといふ如き、詳しい事はこゝに省くが、ほとんど世界に例のない位のものである。それがために事實がローマ法王に報告さるゝと、廿六人の靈を聖列に擧げて、爾來神の如くそれを拜む事になり、維新前文久年間にローマ法王が世界の代表者を集めて大祭典を擧げた時も、この二十六人の殉教者を祀つて、これを世界に向つて手本とするに至つた位なものである。この廿六人を刑したのがそも／＼始まりで、それから後徳川氏に移つてもしば／＼繰返へされた。が、しかし壯烈な殉教者の死様といふものは如何にも立派なものであつて、決して前の廿六人に遜るものではなかつた。

この時分はいふまでもなく戰國時代ではゆる武人の魂ひは頗る盛んで、死を恐れない

精神といふものは武人の間に満たされてゐたのであるが、この殉教徒の死に臨んで恐れな
い氣魄は、その武人をさへ後へに瞠若たらしめた。かつまた非常な苛責に對して堪え切れず
に教をすてたものもあつたに相違ない。しかし如何に割引して考へても、この殉教者の壯烈
なる事蹟の多い事は掩ふべからざるものがある。又だん／＼年を逐ふに従つてその異教徒
に對する迫害はますます峻烈を加へ、拷問の法も頗る苛酷を極めたにかゝらず、殉教徒の
信念はますます固くしてそれを禁ずる事が出来なかつた事を思ふと如何にも當時のカソリ
ツク教の人心に與へた感化力の大きなものあるを思はねばならぬ。

で、これは詰り當時人心が素朴であつて、今日のやうな浮薄の氣がなく、また外來の宣
教師も犠牲の精神が盛んであつたので、そのために深く人心を收攬した故であらう。この
當時全國に散在したカソリツク教徒の数は、三十萬と傳へられてゐる。それを今日は宗教
の自由がある時であるけれども、わづかに十萬を數ふるに過ぎない。詰りカソリツク教が
衰へた事は人間の理性の發達で、その理性が邪魔する結果でもあらう。しかし抑へれば揚
り、壓すれば激するのが物の數である。昔の爲政家が一意鎮壓に力をいたし、いふに忍び
ざる慘酷を極めたのが却て反動を生じ、これがために信徒を多くし、その信念を一さう強

固にした傾きがある。その當時の殉教者は常に我々のそ／＼とところの血は後繼者を培養す
る肥料だ、とさげんだといふが、これはいふまでもなく、當事の爲政家はたしかに鎮壓の
策を誤つたものである。およそ何事でも一概に禁壓すると反動が起つて、却てその效を奏
しないものである。宗教に對しての禁壓などは殊にその一例と見るべきものであらう。

この異教徒のためにいろ／＼な慘刑が工夫された。その慘酷は人間の頭で考へ得べき極
點に及んだ工夫であつた。もともと殺すのが主でなく苦しめるのが主であつた、苦しめて
改宗を促し、また他の異教徒を脅やかすためであつた。であるからなるべく死にいたらし
めず、長らく苦しめる事に苦心した、だから礫木に縛して焚くに當つても、一時に焚ける事
を防いだ。例へば薪に水を注いだりして苦しむ時間を、長くする事につとめた。かうしてあ
りとあらゆる苛責が試みられ、つひに長崎に沸湯を吐き出す温泉山のあるのを幸ひ、それに
異教徒を伴ふて熱湯を浴びせかける事もやつた。これ等悲惨な苦しめ方の數々はいろ／＼
な書物に書かれてゐる。それは餘りに悲惨な事が多いから一々いふのを見合はせるが、最も
甚だしい苦しめ方は人情に背いた事を敢てしたのである。例へば夫婦を捕らへ來つて夫の
目前に、婦人を裸體にして大勢の面前で辱しめ、或は甚だしきに至つては裸體の女を非人に

與へて勝手に辱しめをうけさせたり、頑是ない子供を母の目前に苛責を加へて、母に改宗を促したりすることは實に人情に外れた苦しめ方といはねばならぬ。現に實例とせられてゐる一例を挙げると、三人の小さな兄弟を兩親の前で首を斬つた。首を斬る役人がさすがに刃を加へかねて、腕がひるんだために三人とも首を斬りそこなつて、やむを得ず二度も三度も刃を振つたといふなど、偶然ながら非常に苦しみを加へたものである。この役人も三人の子供を殺しては堪まらなくなつて、悶絶して倒れたといはれてゐる。なんとといふ悲惨な事だつたらう。

かうした苛責に遭つても、婦人もその意志を變せず、小兒までも從容死に就いたといふ事はほとんど信じ難い位であるが、しかしそれが事實である。

畢竟カソリックの教は自己否定といふのに歸著するから、肉を亡ぼす事などはなんでもない事である。かれ等は死を光榮とした。死は天國に至り神の膝下に行くものとしてこれを喜んだ。従つて處刑に洩れたものは、その殉教者を羨んで自から進んで強ひて刑に服したのもあつた位である。かやうな靈的心理に對しては肉體的の苛責は、なんの效力もなはずである。さすがにこの異教徒を問責する衝に當つた名奉行は、どうもこれは考へも

のだといふ事に氣がついて、この苛責の法を改めた。そしてなるたけ軟かい法に改めて道理を以て、説き伏せる事にした。その事の詳しい事は、姉崎博士の近著に載つてゐるからこゝにはいはない。

およそ自己否定ほど恐るべき力を現はすものはない。決死といふ事なども自己の否定に他ならぬ。かるが故に古來宗教戦ほど猛烈なものはない。島原の亂の如き、最初は百姓一揆のやうに輕んぜられたが、決死の亂徒は官兵に對してあくまで屈せず、遂に有名な松平伊豆守信綱は十二萬の兵を率ゐて島原城を圍むに至つた。この大袈裟な攻撃も實は甚だ力がなく、一遍に攻め落すことが出來ず、やむなく兵糧攻めをやつたのみではない。外國船(オランダ)の砲力を借り城の背後から攻撃せしめた。かやうに外國の力を借りたといふ事は大分物議を醸し、城内の亂徒にも笑はれ、さすがの伊豆守も恥ぢてその應援を斷つたといはれてゐる。島原の亂は平定したが、このために官軍の死傷はおびただしい數に上つた。これなどは、宗教戦の小規模なものであるけれども、如何にもその力の大きなものであつて、悔る事の出來ないものであるのが知れるであらう。世界のいろ／＼な宗教戦が、何時も猛烈であるといふ事はそれに與かるものが、決死であるからである。むしろ死を喜ぶと

いふ戦ほど猛烈なものはないのだ。

私はこれ等の事蹟を読んで、ますますこのやうな事蹟の研究を経て明かならんことを望む。もしカソリック教が慶長以來迫害をうけずして、だん／＼盛んになつたならば日本はどんなになつたか。これがために日本の文化は、どんなに進んだであらうといふやうな方面までも、追て研究を要する事である。今日のやうな浮薄の人心に對し、かやうな強烈な殉教の歴史は、風教に裨益があるやうに思ふ。

二六 一文人の遭難記事

文政十一年八月九日は九州に大颶風があつて、家屋、人畜、船舶などの被害は非常であつた。この颶風に出遇つて、船は破壊し、已むなく身を海中に投じて纔かに免れた學者がある。それは肥後の細川侯に仕へた和學者で中島廣足である。この人は本居太平の門人で頗る著述の多い國學畑に隠れもない人物だが、斯かる人が難船にあつて、風浪と戦ひ、遂に一死を免れ、その體驗した風浪の記を後世に残してゐるのは、珍しい例で、如實に天變

を語る精細な記録と云はゞ、これに越すものは無からう。奇難に遇ふものは多くは文筆を持たず、文人は奇難に遇ふことがなく、徒らに閑文字を弄するのが常だが危難あつて文筆あるこの遭難は眞に文苑の珍とするに足る。這般の遭難記は原文に就て讀まねば、辛楚の味が知れないが奈何せん、一冊を爲す長篇で、その萬一すらこゝに抄録することが出来ない。唯大略を叙して往々原文を引くに止める。

遭難の事のあつた前年から廣足は長崎に淹留してゐたが、歸省を志した折、偶々長崎で役人をしてゐた門人志方之倫が他に轉任するにつき、その官船に便乗を勧められそれに乗つたのが八月の七日で、七里ほど行くと樺島といふ所があり、こゝぞ乃ち遭難地で、記に據れば、

こゝをめぐる船はかならずこの邊に寄せて、潮を待ち、風を窺ふなり、岬と島との間、僅に廿町ばかりなれば、潮の早きこと瀧ッ瀬の如し。

とあり、危険地なることがこの記にて知らる。一旦島に上陸して、或る家に就き酒など飲み、風はあれども船に戻つて寝に就いたその夜半、風は益々あらく、雨さへ加はつて、船よりおりんとしても暗中方角も辨じかね、幾十の船は皆同じ難に遇ふて叫ぶ聲のみ聞こえて

悽愴の氣天地に漲る。折柄烈風につれて何れともなく火團飛び來り、幾んど船に落んとするをよく見れば燃ゆる火にはあらで、何物とも辨じ難い光物であつたので、何れも畏怖の念に打たれた。しかしこれが廣足を助けたものであることが後に知れる。風は益々甚だしく多くの船は互に打ち合つて、しきりに破壊するので、危きこと限りなく、この上は海に投じて生死を賭する外なしと、危急の處を叙したる文には、

舳の方さけたる大船の我船の屋形の上に、浪と共に、おしあがりくるなり。我船忽ち傾きて、今一ゆりに、海の底に入なんとすれば、あはやとて、われも人も浪の中に飛び入りぬ。(中略)いと暗き夜に破れたる船どもの浪のまに、打ちあひ漂ひければ、事なく泳ぎあがるべくも覺へず、さりとて船と共に徒らに成りぬべきにもあらねば、今は命を限りに泳ぎて見む云々。

凡そ難風に恐るべきは、他船と觸れ合ふことで、この遭難地のごとく船ばかり多くして水路の狭き處が最も危険である。身を海中に投じて運命を天に任したる廣足も、不思議に二ツの助けを得た。一は暗夜を照らす前述の光物と他の一つは筏の如き竹で編みたるもの流れて來たことである。(これは鰯をほす道具だと云ふ)若しこれ無かりせば必ず死ぬべ

きをと廣足自から記してゐる。なほ廣足が海中に泳ぐさまを開けば、やう／＼岸の方へ打よするを見るも、たゞ此ひかりものゝみぞたのみなりける。今は十丈にも(島との間)足らずなりぬるに、岸よりもかへるあら浪につれて又も沖の方に出ぬべく見ゆればさらに浪の中に飛び入りぬ(筏を棄て)命をかぎりにおよぐ程、力つかれて危きに、忽ち大浪打來りて、海の底に沈みぬと覺ゆるに、大きな巖ほに打つけぬ。やがて其いはほに固く取りつきたるほどに、浪は引きもてゆきければ、急ぎ這ひ上りぬ。たゞ夢のやうにてものも覺へず。

この邊讀み來れば、人をして手に汗を握らしめる。さて岸に上つて島の人家にたどりつけば、多くは風に倒れて立寄るべくもなく、助命を得て島に辿りつきたる諸船の人々、女なども交つて呼び合ふ聲は悲慘この上なし。漸く同船のもの十人ばかり呼び集めたれど、志方の行衛知れねば、あちらこちらを尋ねて見出したるは最もよい家の中であつたと云ふ。遭難者の多數一所に集まりたることなれば、早く食料盡き果て、困難したること一方ならず、翌日に到り見れば、まだ安全地帯に上り得ず、岩などに取りつき居るもの百あまりも助けを呼ぶなど目も當られぬ悲慘にて、乗船は何れへ流れ行きたるか影をも留めず、廣足

はあらゆるものを失ひたれど、命のみを得たりと喜び、長崎へ歸りて後附近の被害を備さ
に聴き、書きとめてこの樺島浪風記の後に附してをる。自分は筆拙く紙短く、遭難の光景
の萬分一も描し得ざれど、今は唯文人の體驗記に斯かるものゝある事を紹介するのみ。

二七 ホートン先生と沙翁

外人で吾國に來て始めてシエクスピヤを講じた人は、ホートン先生である。先生は吾等
が大學に在つたころ聘されて來て、英文學の講座を受持つた。吾等がそも／＼英文學に觸
れて多少でも味を知り得たのは、この人のお蔭である。この人の國籍はつい近頃まで英人
あるかに思つてゐた。頗る品格の高い貴族風の人であつたから英人であらうと思つたのも
偶然でないが、實は米人であつた。その頃の年齢は四十近くであつたらう。鼻下並に腮邊
に髯を蓄へ、瘦さ方な長幹の人で、英人型の紳士であつた。この人はエール大學出身で、田
尻稻次郎氏が米國に遊んだ頃は、エール大學で羅旬語を教へてゐたと曾て聞いたことがあ
る。この人の教授振りと言ふたら、極めて眞摯な態度で曾て笑つたことがなく、流暢に懸

河の辯を揮ふと云ふ講釋の仕方ではなく、睡む相な音調で説く人であつた。全體寡黙の人で
要もないことは一語も發しなかつたが、學徒に對しては至極深切で、質問に對しては懇切に
答へられた。先生の服装は華美と云ふよりは寧ろ瀟洒であつて、誰もが金満家であらうと
察したが果してさうであつた。先生は母と妻とを伴ふて來たが自分等は一回も先生の居を
見舞つた事は無かつた。訪問した友人の話では貴族的生活をして、通例の米人とは全く
趣きを異にしてゐたと云はれてゐる。先生が温厚で生まじめであるのに乗じて、吾等若輩の
學徒は、時に惡戯を試み先生を困らしたこともあつた。英文の傑作集を教はつた頃、フェ
アリー・クエンの結婚の詩が、テキストには四五句省かれてある所があつた。それは新郎
新婦が閨房に入つてからの事を叙した句である。吾等は圖書室で完本に就て秘かに何が書
かれあるかを調べて置いて、さて白ぼくれて、先生にこの關文の處はどんな句があるのか
と質問すると、先生は微笑だに漏らさず、例の嚴肅の態度で莊重の音調も「You may guess
(想像せよ)」と云はれたので皆々二の句が出なかつた。その頃大學では實地演習と云ふて理
科の學生は、校費で旅行をやつた。法科などでも、横濱の領事裁判の傍聴に校費で出張し
たこともある。吾等がシエクスピヤを教はつてゐる頃、横濱に外人が沙翁劇を演じたこと

があるが、法科の學生が裁判を傍聽する例に倣ひ、それを見たいから、學校から出張させて貰ひたいと先生まで申出で、先生から校長に交渉することを頼んだ所、先生も尤な申出だとこれを諒とし、時の校長加藤弘之翁に談ずると、劇に理解の無い弘之翁はその交渉を一蹴し去つたので、先生は極まりわる相に吾等に言譯をされた時は、先生に對し氣の毒に感じた事もあつた。當時の吾等は英文學を味はふには餘りに幼稚であつた。然し先生は沙翁の種子を日本の學苑に蒔いた最初の人であつたことは争はれない。吾々の上級にゐた和田垣謙三氏などは先生の教へを受けてリヤ王の漢譯を試みたし、高田早苗博士は在學中早く進文學舎で先生の受賞をやつたし、坪内逍遙氏も在學中シーザーを譯したが皆先生のお蔭である。殊に坪内氏は半生の心血を沙翁全集四十卷の全譯に灑いで成功したが、先生の蒔いた種子は爰に實を結んだと云ふてよからう。先生の日本を去つたのは明治十五年で、その前年には先生始めて教授總代として卒業式に祝辭を演べられた。自分などはそれを聞かなかつたが、それは Young men in Young Japan と云ふ題で、頗る秀でたエロキユーションであつたと云ふ。

二八 天才世阿彌

日本に於て文藝界に元祿の傑物を近松とすれば應永の傑物を世阿彌とせねばなるまい、世阿彌の前には觀阿彌あれども能を味あるものとしたのは全く世子の功である。世子は天才である。天才なるが上に足利將軍の特寵を受けた、表面こそ藝人扱ひを受けたらんも事實は左右に侍するを許されたこと明らかである。將軍家の寵を得て一層天才を發揮する便を得たことも疑ふべくもあらず、併し一種のカタの殆ど抜く可からざる迄に至りたる藝術を一變して誰にも歓迎さす迄に工風したのは不世出の大自然にあらすんば出來難き事である。世子の談義に據るに世子の最も大切とし骨髓としたのは物真似といふことであつた。今日こそ物真似など云ふと、人はいやしめるけれど、全體物真似と云ふは人情に近づくの意である。今日のことばに云へば寫實と云ふと同じく、當時に於て斯ることに考へ至り、舊套の打破を試みたのは一大卓見と謂はねばならぬ。當時行はれた音樂は雅樂と云ひ、催馬樂と云ひ、田樂と云ひ、延命樂と云ひ、多くは時勢にかなはぬ人情外れの物のみであつた。

それを打破して人情に觸るゝを主として新案を立てた卓見と手腕は實に驚歎すべきの價値がある。勿論新案を立るには其の時迄に行はれたあらゆる音樂の粹を抜き、その長所を綜合したのである。この取捨綜合も固より天才でなければ爲し得ざる所である。或は今の謡曲研究家は文章の七五調を是非し、其引用語の無趣味を非難し、兎もすれば文章の脈絡徹底せざる瑕疵を云々するものあれども、實は思はざるの甚しきものである。新作を當時に行はんとすれば、成るべく其當時人口に膾炙し人耳に慣るゝの語を引かねばならぬ。多くの音樂より長所を取らんとには七五調のごとき文章を藉らざれば隨意にいろ／＼のものを取り込みがたき不便がある。他にも今日より見たらんにはいろ／＼の瑕疵もあらかなれども、過渡の時代、殊に流布をつとむる爲めには已むを得ない。世子は自から作り自からうたひ又自から舞ふた。此三拍子を兼ねた事は藝界に於て稀有の例であつて、獨逸に於てワグネルが不世出の才を以て恰も此三者を兼ねたので世界の藝術界はこれを稀有の例としてゐるが、世子も亦ワグネルに比して決して遜色なきものである。

二九 良 寛 禪 師

良寛禪師は如何なる人であつたらうか、予は時々自問自答することがある。名僧には附會の説や逸事が多くつき纏ふて、真相がそれに蔽はれ、人に因つて種々の解釋を受けるのも亦止むを得ない、自分とても従來禪師をいろ／＼に解した。禪師が書をよくし、詩歌をよくしたので或は繙林に隠れて文藝に游んだのであるまいかと、亦或る時は禪師が物に無頓着であるのを磊落と解し、豪放の氣、遣るに處なく、僧衣を着けて意の赴く所に逍遙したのだと、彼が一生寺も持たず、禪を修めながら眞宗の家に厄介となつて意となさず、僧として何等功を立てることも無かつたのを見て、僧は假托で無かつたかと疑ふこともあつた。併し愈々研究して見ると、追々吾非を覺り、純なる名僧であつたことに氣がついて來た。彼が幼少の節は名主の晝行燈息子と綽名を受けた位で、父母が心配したほど溫良に過ぎ、寡慾で沈黙で愚鈍に近い性質であつたと云はれてゐる。少くとも才氣英發の人でなく、世事に疎く、到底名主の家を繼ぐ資でなかつたらしい。但しそれに就ては左の如き逸話がある。

良寛の愚直迂遠を語るいろ／＼の話のある中に幼少の折、何かの事に父に叱られ、貴さまのやうな奴は蝶になると云ふたら、それを眞に受けて、海濱に佇立して多く時間を費した、母が捜して何をして居ると問ふた時、おとつさんが蝶になると云はれたから、蝶になつたら海に飛び込むつもりで、こゝに來たが、いくら待つても蝶にならぬと云ふたと云ふ話がある。亦小兒等と隠れんぼうをやつた時、師は人の家裏に隠れたが、小兒等は皆な散じて仕舞つても師は尙ほ隠れてゐた。その家のものが師を發見して怪んで問ふと、小兒等とかくれんぼうをして居る、其内に捜がしに來るだらうと云ふて尙ほも去らなかつたと云ふ話もある。

併し讀書は最も彼の好む所で、人を避けて讀書に餘念が無かつたと云ふから沈鬱の人であつたと思はれる。此人が名主見習中代官と漁民との間に確執が起つて、師が處理に拙であつて、代官に譴しかられたと云ふのも世才を缺いた一端を語るものであつて、それを動機に光照寺に走つて剃髪したと云ふのも、其の天稟の正直心から起つたことで、動もすれば考へらるゝ如き、事に激して不平の餘りなしたことも思はれぬ。師を小心で愚直の迂濶の人と見れば寧ろ當然の歸結と思はるゝのである。一説に師の剃髪の動機は盜賊が死刑を受くの

で出役し、歸宅後直ちに出家したとも傳へらるゝ、これが實説なれば寧ろ適當の動機と云はねばなるまい。兎角庄屋を繼いで吏務にたづさはる適材で無かつたことは明かである。彼が出家をして五年間如何に郷里に暮したかは明かでないが、備中の玉嶋圓通寺の住持國仙が北越に行脚した折、良寛が其徳を慕ふて圓通寺の修行僧となつたのは二十二歳の安永八年で、其から圓通寺に二十年の久しき修業に餘念が無かつたと云はれてゐるのを見ると、師の眞面目さが分る。此二十年の間には四國九州邊までも行脚した痕蹟があり、土佐のある草庵に孤居の時一夜の宿を頼んで師を目睹したその人の記事の存してゐるのを見ると、あり／＼と師の面目がわかるのである。師かがかりせにも人と語らず、如何にも無愛想でありながら人を救ふの温情のあつたことが窺はれる。兎角超越した人は細瑾を意としないやうなことがあるものだが、禪師は戒を守るに嚴重であつたことが事實である。苟めにも虚言を吐かず釋兒と戯るゝにすら些しも偽る事が無かつた、邪淫に就ては最も嚴重で若い時結婚したなど云ふ説もあるが、大庄屋ほどの家に嫁になつたものがあつたとすれば、それは地方に聞こえた家であるに相違ないが、そんな關係は少しも知れない、貞信尼が常に禪師に侍したと云ふけれども、これも草庵に同宿したことがないと云はれてゐる、魚類は一切

避けて口にしなかつたと云ふ、一休禪師の如き磊落坊さんとは甚だ選を異にしてどこまでも生まじめの人であつた。師が圓通寺にありしは二十年の長きに亙つてゐる、達摩の修行に比すれば倍數も長い、此の長い間に師の行蹟や逸事は一向傳はつてゐない、修行三昧に心膽を鍊ることが勤であつたとすれば、何事も傳はらないのが寧ろ本當である、翰墨の交はりでもしたとすれば何か存してゐる筈である。昔から良寛師を誰に比すべきやと云ふて考へるが、どうも比すべき人が無い。鵬齋は喜撰以後此人なしと云ふてゐるが、これも文藻の一面を見たのであらう。兎もすれば寒山などに比するものもあるが、それは餘りに師に對して氣の毒である、井上圓了は流石に良寛是佛、誤落人間、人間不識、此以寒山と云ふてゐるが、余が意を得て居る。師は寒山詩を好んで讀み且つ私淑した觀があるけれども、寒山に比することも亦一面の觀察に過ぎぬ。師は佛門に稀に見る解脫の人である。穉兒を愛して嘻々之れと遊んで餘念なく敝衣に生ずる虱を愛護して之れを汚穢とせず、食あれば食ひ無ければ強ひて人に求むるをなさぬ、興到れば筆を揮ふて往々人に迷惑をかけることもある。字を書くに位置の如何を顧みないから往々一紙に書き盡し得ないことがある。其時は平氣で字形を縮めて一向に構はぬ。時には知人より借り受けた書物を自家のものと思

て、己が名を署し後に覺つて啞然たりしこともある。奇矯の人往々之れに類することをなせども、師の爲すのは天真流露で、毫も衒氣がなく全く解脫の結果である。師は人に對して理窟を云はぬ亦法も説かぬ、あれほど長じてゐる書に就ても詩に就ても語る事が無かつた。唯だ云く、貧道の好まざるもの三あり、詩人の詩、書家の書、料理人の調膳と、これも解脫の一端である。師は無言の内に人を感化した。實家の若いものが放蕩で困るから説得を頼んでも何も言はず、その若いものに去り際に草鞋のひもを結ばせた時、一滴の涙を落したので、若いものも之れに感じて爾後行狀を改めたと云はれてゐる。師の扮装はいつも乞食同様であつたが、郷黨は相當の尊敬を拂つた、師は郷里に歸つた後、玉島に居る時よりも却つて難儀であつた。玉島を辭した時は既に四十にも迫んでゐる、京都に在つた父は入水して死し、師の國仙も寂し、郷里の實家は變つて悲惨であつた。おまけに越後は冬期雪深く老境に入つて寒氣と戦はねばならなかつた。玉島で修業を終つて又郷里に於て改めて修業をしたやうなものだが、何れかと云ふと異郷に於けるより郷里の修行がつかつたであらう。師は一生修行を續けて終つた。「身寒道富」と云ふ語は恐らく獨り師に就て許さるべきであらう。隨分世には高僧と云はるゝものに贗物がある。良寛だけは赤裸に解剖して

断じて質物でない。兎もすると良寛を揚げんとして却つて最負の引き倒しをするものがある。實は赤裸の良寛が偽はらざる良寛である、愚直迂遠釋兒に戯れ半風子と遊ぶ良寛が即ち赤裸の良寛であつて、自分が嘗つていろ／＼に考へた良寛も今に於て始めて實相を知つたやうな氣がする。

或は良寛を難じて云く、あれは寺もたず説教もしない、僧職の何ものも盡して居らぬと、良寛をして云はしむれば、吾は自ら修むるに是れ日も足らぬ、何の違あつてか他人を感化せん。師は終生自修にのみつとめたことは確かである。斯くの如きは頗る稀有の例に屬し、大悟徹底もしない、よい加減の僧は柄にもないことを説法したり、人を戒めたり人を導いたりするが、實はそれは習俗に倣ふのであつて、良寛が此の習俗を一蹴したのも彼の一見識である。師が死後百年を経て其の名聲が益々高く、嘗つて修業をした備中の寺にまで碑が立ち、生地にも良寛堂が營なまれ、都會にまで名聲の藉甚なるは彼が餘徳の發現と云はざるを得ぬ。大なる寺院を營み説法教化をつとめたものでも其人寂すれば忽ちに忘れらるゝが常であるのに、良寛のます／＼光輝を發し、一世の景慕を博するのとは同日の論ではない、良寛は死して教化を施すと云ふも誣言でない。

三〇 良寛の書を紹介した一人者

越後の良寛を東都に紹介したのは龜田鵬齋が最初である。これは多くの人の知るところだが、第二の紹介者に會津の人佐瀬得所のあることは知る人が少い。得所は戊辰後亡父を弔ふ爲め會津より越後に來て水原の小田島儀一郎を訪れたことがある。その砌、種々文藝談が出て小田島は越後に良寛のあることを語り、所藏の書、幾幅かを持ち出して示したが得所はこれを見て驚嘆した。越後にかゝる書聖があらうとは思はなかつたと心酔のあまり卒然兩刀を脱して主人の前に置き、私はこれを讓つて貰ひたいのだが旅囊餘錢に乏しい、どうかこの兩刀とこれを交換してくれぬかと懇望した。すると小田島は折角乍らこれは亡父の遺命に依つて譲り難いと断つたが、さらば借受けたいと望まれて母と協議の上貸附を承知したのであつた。そも／＼これがこの僧の書の東京に知らるゝ發端であつて得所はその後東京に携へ來つて同人にこれを示したが、こゝに於て良寛の名は漸く都下に騒然たるに至つたものだ。

三一 廿年の無人島生活

自分は漂流記を読むのを嗜み、いろいろの寫本を讀んでゐる。漂流者の辛苦は大概その揆を一にしてゐるが、異彩を放つものは元文四年五月無人島より二十一年目に歸來した遠州荒井筒山五兵衛船の楫取甚が、水主仁三郎、同平三郎の三人で滯島中同じ難に遭ふて漂着した江戸堀江町宮本善八船々頭、水主十七人の漂流談である。無人島に穴居して水は雨のしたゝりを吸ひ、食は禽や魚を漁獵し、衣類は禽の皮を用ゐ、火の絶へる時は附近の火山に求め、或は難破船の漂着に積載の米を獲、或は漂着の帆や板の類を取り上げて種々の用途に充て、二つの鍋一つの釜は携帶したまゝ二十年用を足し、金錢のみは絶対に必要なく、錢は朽ち銀貨はさびてたゞ形を存するのみとあるが、漂流船より獲たる米の内にモミの一俵あるを發見し、毎年耕作して若干の收穫を得たともあつて、その行跡はさながらロビンソン・クルソーに酷似するものがある。かれは假托なるに、これは全くの事實で、吹上の法廷の取調べに答へた書類について見るも毫も詐り飾りなく、口供は如何にも理にかなふ

てゐる。それにしてもよくも二十年の長い歲月露命をつなぎ得たるものである。これによつて見ても人間はなかくに死なぬものと思はれる。二十年の間一回といへども身を托すべき船の通過を見る事もなく、同じ運命の十七人が漂着し、それが小舟を持ち合はしたのに打ち乗り、方角も辨ぜず、運命を天に任せて漸く八丈島に漕ぎ附けたのが、救命を得た所以で、この漂流譚は最も出色のものである。

三二 貧民窟

貧民窟は別天地でその研究家から話を聞くのも一興である。社會局の草間八十雄氏はこの方面の探検家で、今ではこの人がこの世の第一人者であらう。全體貧民状態の研究は近頃の事で、一番早く研究らしいものを發表したのは、横山元次郎氏が『日本の下層社會』といふ書を刊行したのがおそらく初めてで、それは明治卅年であるが、草間氏はこの研究に二十年位を費し随分苦勞してゐる。只氣まゝに面白半分に貧民の實相を調べてゐるのでなく、哀れなこの方面の人間を救ふたり、窮境より明るみへ出すために百里の途をも遠しと

せず、種々の斡旋をやつてゐる。古賀精里に贈位の御沙汰があつた時などは、遺族の所在が知れず、この人がその搜索に没頭しやつと茶溪の孫に當るものを捜し當てたが、それは紙屑屋をしてゐて古賀涓といふものであつた。涓には兄があつてそれが早く失踪して、どこにゐるかもわからなかつたのを偶然の事から乞食の内に古賀深といふのを捜し出し、それが涓の兄である事が知れ、それを涓の家に納めたが不幸にして涓が間もなく死んだので、又々一家離散の窮境に陥り、深は再び乞食の群に復したといふ話もある。草間氏の話を断片的に書きつけると、東京の貧民窟新網、萬年町、鮫ヶ橋などは皆な島といはれてゐる。貧民の住居はさまざまで、定居もあり、集團住居もあり、點居もあるがその區々であるにかゝらず、これ等は定居といふてよいのであるが、不定居となると、すこぶる窮境で乞食仲間の言葉でおよそ四種ある。即ちドヤ、ヘヤはキチン宿風のもので、ヘヤは部屋の仕事で一室十人を容れる。外にサブルといふは乞食小屋で、ヲカンといふが野宿である。

細民の居住する別天地に缺くべからざるものとして營業をなしてゐるものは損料貸、多くのものが文字を知らないから代書人、簡易浴場（普通の浴場は襪襦を纏ふものを厭ふからこの特別のものがなければならぬ）それからしな、しや、これは高利貸である。そしてと

もすると寺子屋式の読み書きを教へるところもある。いくら細民でも多少の享樂がなければ生きてはをれぬ。僅かばかりの錢を獲ても、ともすると途中で酒を飲むと、もはや米が買へない。そこで家に歸ると夫婦喧嘩が起る。婦人の手内職などは終日働いても十五錢位を獲るのが關の山で、婦人にも大福餅を買つて食ふやうな享樂が要る。この享樂は利那享樂といふてゐる。かれ等に貯蓄思想のないのも實は無理はない。利那享樂を犠牲にして僅かばかり貯へても蓄へ甲斐がなく、利那享樂を控へるのは生き甲斐がない事になるからだ。併し妙な事には至適生存の原則が働いて生きてゐるほどの細民は、割合に健康である。貧乏に堪へないものはドシ／＼死ぬからであらう。ミジメなものは病者である。近年濟生會などが起つて醫藥は供給されるけれども、食物は與へてくれないから藥があつても餓死はまぬかれない、と聞いては濟生會も貧民救助には役立たないと知つた。

三三 玩具小品

弊廬の名物だなど、云はれた寸珍本は賣却して一掃され、今は小品では印のみ存してゐ

る。寸珍本の代りに、この兩三年蒐集してゐる玩具小品が漸く千數百點に達した。これ等玩具とそれに近い小品を蒐め乍ら常に感ずる事は、玩具と非玩具の甚だ劃し兼る事である。玩具は普通小兒の娛樂翫弄に供するものをいふので、大小精粗さまざまあるが、それが名工の手に成つたり、時代を経て稀有のものとなると、それが取り上げられて骨董として珍重されるものもいくらかもある。高貴の階級のために特に製作したものと、金銀珠玉のものもあり、技巧を凝したのもあつて時代の有無にかゝはらず頑是なき小兒の翫弄に供するは惜しく、いろ／＼に見立て、大人の用となるものもある。

根付などいふものは紐通しの穴が、必ず穿つてあつて、巾着印籠などに附屬する實用のものでその形貌が玩具に似てゐても、それは玩具にあらずとハッキリ區別もつくが根付に似て紐通しがなく、或は書鎮のため或は机上の小置物といはれてゐるものもいくらかもあるが、それ等は玩具とどこに相違があるか。貴族階級に弄ばるゝ精巧の玩具のうちにはこのやうのものが甚だ多いのである。私が曾て實用的ファンクションのあるものは形狀が玩具そつくりでもそれは玩具でないといふた事がある。例へばラデオ機、飛行機に形どつた鉛筆削りや、犬や猫の顔の墨汁壺や發火器などはそれ／＼實用的ファンクションがあるから

玩具でないといふたがこれも甚だ覺束ない區別である。小兒のために作つた玩具でも實用を離れたものゝみではない。例へば雛壇用の圖書の如き謡曲でも源氏などでも立派に文字が刻されてゐて、實用に足る事になつてゐるし、鋏、鎗、小刀などは物を斷る事の出来るやうに刃がつけてあるし、花生^{はなせいけ}などは一輪生^{いっりんせい}に役立つといふやうに實用能力のあるものが少くないから、一概に、玩具は實用のものでないといへぬ。尙ほまた或る用のために製作されたものでも玩具に甚だ近いものがある。聞香の道具のうち競馬香の馬や、旗や、花などは玩具ソツクリであるし香の容器なども玩具と相接近するものが少なからずある。

尙ほ實用に遠ざかつてゐるが、さりとて玩具とも言ひ兼ねるものがある。豆本すなはちビジョウ・ブツクの類や、豆大の器に千字文を細刻したもの、蘭亭の圖を刻したりしたやうなもの、作者がその手腕を誇るために作つたもので斯く實用には縁遠いものもいくらかもある。これ等は普通骨董の部に入れるが全體骨董は空漠な語で、玩具と區別したものである。正しく玩具であるものが前にいふたやうに名作のため、稀覯のため、時代などのために骨董として扱はれてゐるものがある。尙骨董の範圍でいろ／＼に見立て、役目をつけてゐるものがある。例へば指大の花瓶を小佛像の用に供したり、幅二寸にも足りない机を

經机としたり、豆大の卷子を入れる容器を經器に應用したり、或は小品を尊ぶ煎茶に實用になりがたい茶碗や、急須などを取り上げて翫用するなどさまざまの例があるが、これは應用で活かすのであつて、その本體は玩具と見るべきものが少くない。否な本來は玩具のために作られたものであるのかも知れないのである。かう考へると小品必ずしも玩具とはいへないが、そのうちには少からず玩具が交つてゐるといふ事が出來よう。實は小兒用のものゝみと心得るのが間違ひで、大人用のものもあるのである。人間は幼少の時早く玩具の趣味に養はれ、長じてもそれを喜ぶ因襲があるので、工藝家が種々のものを製作して實用に供するにも、多くの場合玩具趣味がつき纏つてゐる事は争はれない。印の紐でも香爐のツمامミでも、文房具のさまざまの意匠でも、崇敬を拂ふ神佛の像でも皆玩具趣味を有し、それが愛玩の中樞となつてゐるのは、玩具に愛すべき素質があるからの事で、截然たる區別を玩具と非小玩具の間に立てる事は困難である。

三四 裸體美人の像

初めて支那通の後藤朝太郎氏の『支那長生秘術』を読んで知る事であるが、支那の骨董店に往々象牙細工の裸體美人の像がある。四寸乃至六寸位の大きさで多くは足を延ばして横臥し恥部を團扇などで掩ひ、手も延ばしてゐる。随分精巧のものもあり、時代や手澤を経て琥珀と見まがふほど玲瓏なものもある。それは何の用に作つてあるものか速断するものは、直ちに性慾に關係のあるものとなせど、全く別な用をなすものである。支那の富豪の女流は病んで醫師を招いても決して身體に手を觸れさせない。そこでこの裸體の像が必要となるのであつて、醫師にその像を示し、患部はこの邊であると人形の四肢や各部について示すのだ。されば富豪には必ずこれが備はつてゐてなかく贅澤なものであるさうだ。

三五 大量趣味

自分は曾て既刊の隨筆に「大量趣味」についていさゝか云ひ及んだが、重複を避けてこゝに再説したいと思ふ。

大量趣味といへば新しい言葉のやうに聞えるかも知れんが、事實大量を趣味とするもの

はいくらかもある。學者でいへば哲學者がある。かれ等は宇宙萬有を翻弄し、無限を説き無窮を論ずる。大量趣味家の巨擘はこれであらう。同じく大數を説くものは印度の佛典である。佛典には大數に就てそれ／＼特殊の名があつて、他國には億兆以上は何千何萬と冠するものが常であるが、それとは異つて一々特殊の名がある。日本は久しくこの哲學の感化を受けながら僧侶といへども敢て大量に興味を有たない。經文にある大數をさながら釋尊の出鱈目であるかの如く、徒らにこれを誦するに過ぎないのは惜むべきではあるまいか。

日本は環海の島國で久しい間國を鎖してゐたから、いくら印度哲學の感化を受けても氣字が狭い。分量についても圖ぬけて大きいものは少い。例へば生産などでは何物もハンドワークだから、美術品は世界に誇るものが出來たにしても、其の分量は甚だ小なるものであつた。耕耘すら機械に多く頼らず手で稻を植ゑ、手で苅るといふ始末だから大量生産など起るはずはない。戰爭をするにしても梅干一個を副食物として握り飯を食ふのだから事は簡單である。工業は多く個々に營まれ、大工場といふものはなかつた。但し長い間日本に大量の趣味の發現は絶對になかつたとはいへないが、餘り多くあるともいへない。佛敎の影響から壯大の寺院が多く造られたり奈良の大佛の如き印度にもないほどのブロンズの

大きな塊りが出來たなどは大量のうち數へてもよからう。封建制度の關係から多くの城が造られた中に大規模のものもあるがそれも少數である。人物についても日本を狭しとして海外に踏み出したものはある。豊太閤は朝鮮征伐を企て明まで征服せんとした。また戰國時代に日本の國境を越えて隣邦を侵したいはゆる倭寇もある。これ等は、ともかく大量趣味を有つたといへるであらう。大量的戰爭は支那や露國のやうな大國を相手にして戰つた事で、維新後の著しい大量戰爭である。その結果として朝鮮が日本に併され、臺灣が日本の領土となり滿洲が日本の租借地となつた。國土の大量擴張はこゝに始めて見る事を得た。併し大量について大なる教訓を與へたのは世界大戰である。この大戰の現はれは獨のカイゼルの野心……世界侵略の大量趣味から源を發し、有史以來始めての大戰が起り、參加の國々は國力を盡して數年の間鬪つた。兵數でも、軍器の數でも、死傷の數でも、物資の消費額でも、國費國債の額でも、實に莫大なもので、その量の大なる事は邦人の如き小なる頭腦にはグラスプの出來兼ねるほどのもので、しみ／＼大量についての教訓を得た。世界大戰の擧句^{おげく}國際聯盟が出來、軍器の制限が起り、平和を將來に企圖する計畫はさまざまあるけれども、事實は遠からぬ未來に戰禍を豫期するところから兵數軍器は大量となるば

かりだが、日本で世界に誇り得るものは實に軍備の大量なる點にある。世界の列強に伍して二三位に躍進が出来たのも軍備が優勢であるからの事であつた。かゝる人殺しの機關の大量であるのはめでたい事ではないが、今の物騒なる世界に立つてはこれもまた已むを得ない。世界戦争の擧句、一時景氣の好かつた事もあつて大量の金の動きを見たが、國債も幾十億の大量に進んだ。大衆の動きが社會的に現れ、終ひに普選が實行された。皆大量を意味するものであるけれども、大量であつてよいものとわるいものとがある。

大正年度の地震は半世紀の文化を全滅にしたほどの大規模のものであつたが、そんな災厄の再來は誰も望むまい。輸入が年々甚だしく超過したり、失業者が盛んに殖えたり、國債が追々嵩むなどは、大量になればなるほど困るものであるけれども、實は大量趣味は興國の根本でこの趣味がなければ國は進展しない。個人としてもこの趣味を欠いては規模が大きくなり得ない。今日の日本は最早何につけても小量で満足すべきでない。然るに自分の最も不満を感じるのは生産の上に大量のない事である。窮竟大量生産を誇るやうにならねば國は進まないのである。自分は何人も小量をもつて満足せず大量を趣味とするやうありたいと思ふ。さらに進んで大量趣味を國民共有の風尙にしたいと思ふのである。

三六 水と日本の國民性

日本人が水に恵まれてゐるとはよくいふ事だが、日本の國民性は水とは離れ難い關係がある。どちらが原因であるかは知らないが、日本人の潔癖は國民性の一つで、神事に穢れを厭ふから導かれたといはれてゐるが、全身浴はどんな貧乏人にも日常の習慣で、世界のどこを尋ねても日本の如く風呂好きはない。必竟水に恵まれてゐるから出来る事であらう。西洋の都市などでは一掬の水も水道錢を拂はねばならぬので自然儉約して多く使はない。そこに行く日本人ほどフンダに水を使ふ國民はない。自然の習で日本人は五日入浴を廢しては氣分がわるくてたまらないが、西洋人は一ヶ月入浴を廢してゐても平氣であつて強ひて入浴を勧めると忌まれる程である。この風呂好きである習慣が人の身體にどんな影響を及ぼすかといふにさまざま、衛生的効果があるであらう。日本に長く駐在した醫術の大家ベルツの如きは、日本にリウマチ患者の少ないのは全身浴の賜であるといふたと聞いてゐる。リウマチスの病因の一つは黴菌が皮膚を侵すにあるので、皮膚を汚穢に委する事が

確にこの病をひき起す因となるに相違ない。西洋ではリウマチスの疾病が非常に盛んで邦人の想像外だと或る醫者は語つた。日本には全身浴の慣習のある外に温泉に富んでゐる事がまた世界第一で、これがまたリウマチスを治すに効果あることは申すまでもない。すべて皮膚病などは身體の不潔から生ずるものが多い。腋窩に生ずる臭氣、いはゆるワキガなどはその一例であつて、西洋人に殊に多いのも、全身浴を欠き、衣服で腋窩を壓するからおこるものであるが、日本人に比較的ワキガの少ないのもまた身體を洗ひ清めて、汗を留めないためである。支那人などは汚穢を一向氣にかけないが、邦人は異臭を氣にかけるほど神経が過敏である。これも必竟日々五體を洗ひ清めてゐるから、異臭をひどく感ずるものと見ざるを得ぬ。神経質にのみ歸するわけには行かぬ。

三七 世界早廻り

昨日文明協會の茶話會に荒木東一郎氏を招いて、世界早廻り競争に世界のレコードを破つた経過を三時間ばかり聴聞して多少の興味を感じた。昨年時事新報がこの擧を企てた時

に荒木氏が東方、松井某が西方よりとして入選したが、月桂冠は荒木氏に歸して世界的の記録を破り三十三日と十四五時間で一周を果した。従來の記録ではアメリカのミヤンスといふが三十五日廿一時間で一周したのが最も早いのである。荒木氏は能率顧問技師で三十七八位な瘠さ形の若ものである。おそらく技師で理學的素養があり身體が軽く、外國語に通じてゐるなどで成功したのであらう。

かゝる競争に最も大切な準備は旅程を研究する事で、捷路を選ぶはもち論だが同時に安全の道を選ばねばならず、船や鐵道飛行機などの連絡を精査して些かも無駄の時間のないやうにせねばならぬ、この調査が充分にとゞいてをれば途中變故のない限りは豫定通りに行く筈である。もち論各國の日本の大使公使領事などへ豫め依頼を發し置くなどの準備もある。荒木氏は出發前一ヶ月の準備時間があつて僅に諸般の調査を遂げたといふてゐる。もち論忙しい旅で旅宿に泊つた事は只一回あるのみだといふた。各國の同胞やスポーツ流行の今日どの國でも歓迎する有様であるけれども、歓迎を受けてゐる時間がほとんどなく、飛行機から降りるとすぐに汽車に乗るといふわけでおよそ豫定通りに進行したが、汽車の時間に變更があつたりしてまごつきを生じ、臨機に速進の法を講じた事もあり、それ

等の事で旅程のうちに加はつてゐないところを鐵道で通過せねばならない事が起つたが、旅券にその國名がないので面倒が生じた事もある。それはポーランドでやつと公使に縋つてそこを切りぬけたといふてゐる。妙な時間に或る大市に着しその市長を訪問するにも面倒があつた。すなはち拂曉着して寝てゐる市長に無理に面會を求めたり、或はわが公使に深夜睡眠中面談を求めたりする事も起つた。時間に猶豫がないのだから公使でも市長でも快よく接見したのはスポーツのお蔭といはねばならぬ。時には乗り物の都合で小半日待合はせる事もあつて、多少の見物も出来たといふてゐる。

飛行機の便利のあるところは皆これに頼り、一路三千哩も飛んだ。その間は野菜のサンドウキツチ四枚を食したに過ぎぬ。もつともポケットに角砂糖を携へそれを時々口に入れたといふてゐる。松井氏と出會したのはマドリッドで飛行機で行き遇つたさうだ。豫定が狂つて絶對絶命で坐禪をやつて冥想した事もあるなどいふた。日本の九州に着した時に時事新報社から日本の飛行機に乗るは危険と特に電信があつたが、祖國の飛行機に乗らぬとあつては、徹底を欠くと考へて強ひて乗つて神戸まで來たと語つた。すべて這般の競争に必要であるのは第一は健康で、酒を嗜むものゝ如きは動もすれば機を失したり健康を

損ふ。暴虎馮河的の勇あるものや、空想に驅られる學者風の人間は持重を欠く事がある。荒木氏などは最も適當の人であるらしい。洋服や靴や携帯品はある一二のものを除きわざと國産のものばかりを用ひたといふが諸外國ですこぶる評判がよかつたといふた。服部製の安時計などは三十三日間に僅に五分の差を生ずるに過ぎなかつたといふてゐる。

(昭和四年四月二十五日)

三八 人間と牛

人 間 と 牛

或る宴會席上に諸橋文學博士と會した。この人は支那に遊んだ頃のいろ／＼の話をした中に、廬山を中心として方々出歩いた。ある日少しばかりの荷物を携へてぼく／＼歩いてゐると、野放しの牛が二三頭、同じ方向に歩いて行くので荷物をそつと牛の角にひつかけ自分が樂をしてそれで満足すればよいのであるのに、どうせの事に自分の身體をも托さうといふ氣になつてその背上に乗つたが牛は平氣でその／＼歩いて行く。それで満足してをればよかつたのに、今度はのろくさく感じて樹の枝の垂れ下つてゐるのを、牛の背上か

ら手を伸ばして折取り、それを鞭として一ト當てると牛は驚いて駈け出したがとめどもなく走るので、冷汗を流して頗る危険を感じたといふ話が出た。自分はこれを聞いていふには、人間の圖々しさ加減がこの一話で赤裸々に現はれてゐる。誰の牛ともわからぬ裸牛に挨拶もなしに荷物を托するはまだしも、己が五體までも托してよい氣になつて終に一鞭を加ふるに至つては、人間の惡徳をさらけ出したものといはねばならぬ。牛が駈け出して怪我のなかつたのはもつかけの仕合せ、背から振り落されて死したとしても、誰を恨みやうもあるまいと自分は笑つた。そして自分はさらにいふには廬山の途中にのそく野放しの牛が歩いてゐるのも、それに行人が背を拜借するのも支那ならでは見られない光景だなどといつて打ち興じた。(昭和五年一月某日)

三九 悠久山の犬塚

前年越後長岡市に赴いた折偶ま歸國中の長岡舊藩主子爵牧野忠篤氏に招かれて半日悠久山に閑遊を試みたことがある。この悠久山は子爵の家廟のある所で長岡の町から一里ばかり

り離れて居る。其間の道路は近年大いに改修されて、優に二輛の自動車を駈べて走り得る程であるが、廟所は老杉鬱として天を摩し、市の公園として誠に恰好の土地である。私共は一亭に入り茶を喫しながら憩ふた。子爵は先代の事蹟や忠節の人の碑等に就て語り出された擧句、前面の小丘にある小碑を指差、あれは名高い犬塚であると云つてその碑の建られた由來を話されたが、愛犬癖のある私には深く興味を感じた。其談話は大略左の如くであつた。

延寶の頃であらう、余の先代はこの悠久山附近に在る善兵衛村の或る百姓から白犬を一頭求めて愛育して居つたことがある、然るに先代は閣老である爲め一と年長岡城を發して江戸へ祇役する事となり、犬も頻にお供をしたい様子であつたが、百里もある旅程に犬を伴ふ事は氣の毒でもあり不便でもあるといふ事から犬を城内に留めて出發した。すると先代發足の後この犬は所在不明になつて、いくら近隣の諸所を搜索しても判らなかつた。一方江戸に赴いた先代は、着後幾日も過ぎぬ或る日、國元に居ると思つて居た愛犬が屋敷へやつて來て、自分の目の前に尾を振つて跪くのを見ていたく驚いた、よくも長途を辿つて來たと主君を思ふ情の厚いのにそぞる憐みを催し親ら食物を與へて懇ろに勞

つた。それから江戸の邸内に居つたが或る夜他の猛犬とたゞかふて敵を噛み殺した。家臣が死んだ犬を検べた處、隣家なる尾州侯の飼育する唐犬である事が知れ大騒ぎとなつた。高が犬の喧嘩であるから何でもないやうであるが、當時はこんな事が動機となつて大名同士の葛藤を生ずる事も間々あつたので、この椿事を閑却する事が出来ず當家でも心配して、尾州侯に對し所謂運動を試みたが幸に功を奏し事無きを得た、先代も一時はひどく心を勞し、平生愛撫してゐる犬を庭面に召してこの時は儼然として其不心得を叱責した。犬も首を垂れ涙を流して罪を悔ゆるものゝ如く見受けられたがその夜また何處へとも知れず姿を消した。

數日の後、犬は長岡へ歸つて來て城門に入らうとしたが、偶まこの犬を見知つて居る家臣に拒まれて入る事が出来なかつた。家臣の考へたのは犬の戻つて來るからには、君侯の不興を受けた事があつたかも知れぬ。無暗に邸内へ入れ、後で殿のお氣に障つてもならぬと思つたからであつた。追拂はれた犬は、やむなく疲れた足をひきづり乍ら主家を去り悠久山に入り、もと産れた善兵衛村へやつと辿り着いたが、數日の過勞と食物の欠乏で氣力が續かず、終に生家の近く迄行つて斃れて死んだ。

今、犬塚のある所が即ち斃れた場所であると言ふが、犬とはいへ見上げたものだ、先づ義犬と言ふべきであらう。

と子爵は語を結ばれた。私はこの談話を聞き終つて、その哀れな最期を氣の毒に思ひ、子爵と共にその塚を弔つた。隨從者中の或る人が、この犬はまだ君侯の勘當を許されては居らぬと語つたので、私は益々不愜に感じ、子爵に勘當を許されるよう請ふた。子爵の言はるゝには、敢て勘當した譯でもないから今迄別にそれを解かうとも思はなかつたと答へられた。私はそれに對し、御尤もであるけれども犬の情を推せば、勘當を受けたと心得て地下に入つたと思はるゝ、どうか私に免じ、改めてこの墓前で勘當を許して戴きたいと求めたところ、洒脱の子爵は許しますともくゝと繰返されたので、私は喜んで犬の靈に向つて、今お詫が叶つてお前の勘當は許されたから喜べよと告げて合掌した。

この日子爵は一冊の隨筆（風車）を自邸より取り寄せて、犬の事はこれに委しく書いてあるから一讀せよと言はれた。取敢ず讀んだが大要、子爵の談話の如くであつた。

四〇 酒

住江金之氏の著した酒の一書は『通叢書』の一たる『酒通』に較べれば優る事一等である。近時の好酒家の逸事などを書き交ぜたのも悪くはないが、何故國務と酒、若しくは政治と酒といふ如き好題目に觸れなかつたのだらうか。これほど酒のために氣を吐くものはなく、これほど酒を説明するものはないと思ふに、政治は公務であるに相違なく、待合に酒を飲んで政治を談じたり、政治の妥協をやつたりするはよろしくないと、そんな理窟から、酒と政治や、酒と國務は本來關聯を許さない題であるなどいふのは、野暮の骨頂だ。

維新前後の國を負ふての志士などは、けふあつて明日あるかなきやの危険の境遇に立つて奔走したのだが、酒なくして如何でその鬱懷を遣り得やうぞ。事を行ふに先だち同志と飲み替す杯は、眞に訣別の酒であつたらう。事成つて祝する酒がたとひ青樓や、華街において酌みかはしたとしてもそれはすこぶる意義ある酒であつたに相違ない。酒を介して肝膽相照した事もあらう。酒あるが故に乖離を埋めた場合もあらう。酒あるが故に同志

を糾合した事もあらう。大きくいへば、強藩の合従連衡も酒を藉りて出来たともいひ得るであらう。幕末維新の歴史は酒臭い歴史であつて傳ふべき逸事が決して少くない。血生臭い歴史だと思ふのは一面のみを見る偏見である。品川彌次郎氏が作つたといはるゝあの「錦の御旗を知らないか、トコトンヤレ節」は幕軍の討滅に力のあつた行進曲だが、あれなども京都の妓樓で酒の餘りに出来たものと思へば、酒臭い歌である。前島男爵が徳川氏のために明治政府の役人に取入らんと苦心して、その役人が花魁を擁して寝てゐたところへ自ら杯盤を持ちこんで、弱味につけこみ到頭目的を達したなども酒の功といはざるを得ぬ。木戸や、西郷やその他京都に流連した遺蹟も情話も今尙鮮やかに存在してゐる。當時の慷慨家などいふものは、みな酒を藉りて慷慨の氣を吐いたものである。酒がなければ唯の人であつたともいへる。杉浦天臺君が東宮の師傳たりし時、御前で酔へば必ず雲井龍雄の「緑に濕ひ紅に沈み情として力なし」の詩や、「天門の窄きは甕よりも窄し」の詩を得意に歌つたといふ事も、維新頃の志士の型をそつくりそのまゝにあらはしたに過ぎない。酒と詩は何時も付きもので、酒には必ず吟詩が伴ふ。藤田東湖の「瓢兮瓢兮」の長篇や、正氣歌が如何に當時の志士の酒席に歌はれ、それが如何に志士を鼓舞したか。

山陽の日本外史は討幕勤王に大なる援助を與へたが、山陽の酒飲みであつた事が志士の氣に入つた事も忘れてはならぬ。山陽の酒詩が志士や慷慨家を鼓舞した事もまた甚だ大なるものがあつたに相違ない。當時の書生は今の書生と違つて酒量があつた。かれ等の血は酒によつて湧き、激越國難に當るの勇を鼓した。革命と酒とは離れ難い因縁がある。土佐などは尤も酒を飲む國で維新の舞臺に飛躍した面々の傳でも書かんとすれば、酒を離れては書く事が出来ぬ。酒の土佐、といふものを書いてみたいと思つてゐるやうな次第だ。酒の弊は國を亡ぼす事もあるがまた國を興す事もある。維新の革命を成就するには酒がどの位手傳つてゐるだらうか。畏れ多い事であるが維新の鴻業を大成せられた不世出の英主明治大帝、もまた酒を嗜ませらるゝ方であつた事を最後に書いて置く。酒といふ著書に最も光輝ある維新の酒を逸するなどは龍を畫いて眼睛を點じないと同じではあるまいか。

四一 酒と個性

我國の習慣で人を饗應する時の案内に粗酒を呈すといふて、粗饌を呈すとはいはぬ。飲

を解しない下戸がこの案内を敢て辭さないのは、酒を藉りて饗應の案内をするが、その實食饌の饗應が主であるからのことだ。今こそ酒が大いに改良され、酒税のため酒價も昔とは違つて高くなつてゐる。かくてこそ人を招くに酒を主體となすことが出来る。恰も西洋の饗應に酒を主とするごとくに。今は漸く粗酒呈上といふ辭令が眞實となつて來たので自分のやうな酒徒は之を喜ぶものである。酒が主であるからには食饌は二の次であつてよろしい。しかし實際において招きに應ずるものは上戸のみに限らない。上戸でもしきりに箸を動かすものがあるから、食饌に意を拂はねばならんが、自分などは酒から勳章を貰つてもよい位、酒には忠節であつて、酒の前には何物をも拒絶する。若い時分美人と酒を並べて何れを取るといはれた時には、いつも美人を割愛した。兩方併せ得ればそれに越したことはないが、何れか一方とあれば躊躇なく酒に左袒した。美人の割愛を意としない位だから料理の割愛は何んでもない。酒前には如何なる場合でも些しの執著がない。料理の幫助を藉りて酒を飲むのでは純なる酒客でない。自分は人の饗應に與つて折角主人の心盡しの食饌を全く閑却して主人の厚意に對し濟まないと思ふことが毎々ある。自分の箸を着けるものは僅に鹽辛若しくはそれに準ずるものと、吸物を一トロ二マロ吸ふ位に過ぎぬ。だから

自分の膳部には何から何まで蓋を掩ふたまゝ手づかずに残る。全く箸は不用に近いが、その代り杯の運動が頻繁である。何故に自分は食饌を閑却するかといふと、理由は簡單である。下物よりも酒に重きを措くからである。酒を容るべき腹部に他のものゝ侵すを欲しないからである。酒に別腸ありなどいふけれど入り處が異なる譯ではない。だから自分は間食を絶對にしない。飲後の喫飯も絶對に回避する。皆酒味を害するからであつて酒をうまく飲みたいために何物も犠牲に供して些しも遺憾を覺えない。しかし自分は或る上戸の如く極端に趨せ、目前にある食物を邪魔がつて取り除くやうなことをしない。寧ろ自分は食饌を目前に置くことを喜ぶ。畢竟食ふことのみが樂みでなく見るのもまた樂みであるからだ。この意味において自分は家庭の晩酌に、いろ／＼の物を陳列する癖がある。膳部の寂しいのは厭なものである。わびしい草庵に生活するものに倣ひ、焼味噌ばかりで酒を飲むなどは風流じみてゐるが、自分はそんな簡素生活を續け得るものでないから、まだ眞の上戸の範圍には這入り得ないのである。

酒についてなほ一事のいふべきことがある。それは酌人についてである。多くの場合酒の饗應には酌人が酒を注ぎ廻る、それがその家の婢僕であつたり藝妓であつたりする。動

もするとその家の主婦や娘などが斡旋することもある。行届いた饗應には無くてならぬことであるが、多少議すべきことがある。餘りに酒を欲しない客人は酌人の勧めによつて始めて飲む、かかる客人に對しては酌人は必要である。この種の客は酌人がなければ全然飲まずに仕舞ふことがあるからだ、然し酒を欲する客には勧誘の必要がなく、往々にして酌人の斡旋が煩はしく感ぜらるゝ。一客に一人の酌人が附いてゐる場合などはしきりに促して酌をするから取りわけ五月繩いものである。大勢の席で酌人が立廻る場合には往々杯を空うして酌人の來るを待たねばならぬことがあつて手持無沙汰を感ずるので興を殺ぐ、自分などは獨酌主義であつて酌人を回避する。そしてこれが最も名法だと思つてゐる。酒客が杯をかへる緩急は、宛然音樂にリズムがあるやうに本人でなければその調子が分らぬ。酌人などはその調子を解するものでなく、往々強ひてその調子を亂す、これが酒客には不快を感じさす。獻酬などの動もすると感興を破るのもこの故である。快よい酒は自分が氣儘に酌む酒である。酒客にはいろ／＼流儀があつて、一氣に杯を嚙下する人がある。かゝる性急の人と歩調を合すことは困りもので、興の酣にならない前に酔ひ先づ到つて不快を感ずる。兎角酒は自酌に限る。自分はいつも酌人の斡旋を辭し、瓶子を膳部の脇に置き任

意に酌むことが常だ。普通多くの人は美人の酌だから酒がうまいといふて藝妓を禮讚するが、それは好色問題で酒の問題ではない。香園粉陣の中に獻酬することも酒の本筋からいふと邪道であるが、亂酔の場合にこれが喜ばれるのは酒を味はふことゝは全く別問題である。道徳家は酒の亂に至らないやうにと警告するが、本筋の酒客も同じことを忌む、但し道徳家のいふのと聊か方面が異なる。尙又酒客には爛がやかましい、杯の大小にも好みがある。これも酌と同じやうに、個性に相應する流儀に適はねば、酒の味が幾パーセントか減する。儀式じみた酒の多くの場合興味の無いのも、畢竟酒客の個性を牽制するからである。牛鍋、烏鍋その他の鍋類が酒客に委されて勝手に鹽梅され勝手に喰はるゝことがこの上なく歓迎されるのも畢竟酒と同じく己れに適するやうなし得るからである。ことしは水鳥の歳だと故事つけて酒の漫談を録してせめを塞ぐ。(昭和八年一月)

四二 山と酒

山と酒は因縁がないでもない。遊山酒といふ言葉さへある。昔は山遊びに酒を携へた。

遊山は酒を楽しむのが一つの目的であつた。勿論酒を楽しむ遊山は高山に攀ぢるのではない。人里を僅に離れた高くもない山での事である。命を賭するほどの峻峰を僅にビツケルを頼つて攀ぢる時に酒などは問題でない。しかしながら酒客は決して酒を忘れるものでない。能ふ限りは必ず酒を携帯する。それはウキスキーなどの少量で酔を發するものをいふのではない。ウキスキーはポケット、カレッジといふ名すらある如く、登山には恰好のもので、誰も登山具のうちに加へるがこれは或る場合には大切な藥料ともなるもので、携帯の趣意も酒客の縦飲に充つるためではない。酒客が登山の時にもたらずのは普通の酒である。信州あたりでは普通の樽は擔くに不便であるところから圓扁の樽、東京の田舎で不淨物をとる形式のを用ゐてゐる。いく日も山路を踏まねばならぬところでは、キャンプの中でこれを飲んで快をとる機會がないでもないが、かゝる酒客の書いた登山記を讀んでみると折角大切に残した酒が、何時の間にか失せて仕舞つて失望を來たす事が少くない。難儀な登攀區では全く酒を忘れてゐるがイザ安心となると初めて酒を思ふ。そのときには酒が残つてあるはずでも案内者は何時しか飲み盡して、樽を揺がしてみても一滴もないのが常である。實は山には酒は非常に貴重のもので高山などに小屋があつても、それに備はつてある筋の

ものではない。それどころか山を下つても僻地の村などでは酒を求めて得られない事が多い。酒客が攀山に成功してその歸路祝杯をとしきりに酒を求めても、山間の人家に得難いのに疝癩を起すやうな記事は登山者の日記によくある事だ。

自分は壯年の頃登山の趣味があつたがその頃は、まだ日本アルプスなどを誰も征服を志さずものがなかつた。自分は僅に富士や、淺間や、御嶽その他五六の山を跋涉したに過ぎないが、自分は酒客であるが酒を携へる事はしなかつた。その頃はまだウキスキーのやうな簡便のものもなかつたし、一日で登つて一日で下り得るやうな山に強ひて酒を携へるにも及ばなかつた。寧ろ終日勞して下山の後酒に親しみたいとそれを樂みにしたのである。然るに富士登山の際意外の烈風に遭ふて絶頂まで達する事が出来ず、七合目の巖窟に一夜を送らねばならぬ事になつたので、ここに端なく酒に親しむ事になつた。同じ所に泊り合はせた薩摩人の海軍士官が、合力に命じて食料と共に二升の焼酎を晝食場から取り寄せたので、士官のなすにまかせて焼酎を爛して熱酒を五合ばかりも飲んだ。その頃の富士は今のやうに便利はなかつたが、併し晝食場には焼酎にせよ、酒はあつたのである。自分は元來焼酎を好まず、かつ焼酎を爛にして飲む事が初てであるので、内心酔ひを恐れて初は恐

るく飲んだが、山中の氣温は非常に低いので、いくら飲んでも一向に酔ひを發しないのには更に驚いた。酒は酔を買ふためであるのかくは興味がないと思ふた。もしこれが寒地でなかつたらどんなに酔ふた事かとその時既に思ひ遣つた。

實際ひどい寒地では激酒を飲んでも平氣なものである。寒中乗合馬車で信州の追分邊を通る時ブランデーを一本ラツパ飲みで頻りに煽つて、僅の間に平けたが、この時も毫も酔ひを發しなかつた。これ等の経験からすると高山に酒を携へるなどは無駄ともいへるであらう。ともすると山中に飲んだ酒は山を下りると遽に酔ひを發し、往々歩行も出来ない事もあるから危険がないでもない。自分の或る経験をいふと越後の黒姫斷崖の飛瀑に對し、石に踞して傾けた酒がその境においては少しも酔ひを發せず、僅にそこを離るゝと忽ち一時に發して困つた事がある。しかし山を征するの成功は兵では凱旋と同じである。こゝ酒客の酒を思ふは當然過ぎるほど當然で、同情を禁じ得ない。

四三 酒席の悪客

昭和八年は酉歳であるので自分は喜んでゐる。ナゼ喜ぶかと云へば、自分の趣味とするものに因みがあるからだ。水鳥は酒のことであつて、自分は白状するが、酒を嗜むものである。

本年の如く國難を持ち越した年は、張膽明目を要するは勿論だが先づ歳端に祝酒を酌んで正を賀し、元氣をつけて何人も困難に當らねばならん。自分は昨年の年頭には微恙に罹り、元日から十日計り水鳥に親しむことが出来なかつたが、本年は幸ひに無事であることに喜ぶ。いつも新年には亡友紅葉山人を憶ひ出す、山人の歿後其の日記の出版されたのを見ると自分を新年の悪客と呼んでゐる。山人は酒を解さない男であつたのに、自分が年賀に出かけて興に乗じて長坐をしたので、斯く罵つたのであるが、この故に山人を憶ひ出すのである。

兎角新年は酒に親しむ機会が多いので、酒客は陋態をあらはしやすい。自分は紅葉のこ

とを追憶すると共に自然酒席の悪客に憶ひ到ることを禁じ得ない。そこで聊か酒席の悪客を數へ立て、見る氣になつた。曾て支那人が悪客を擧げたのを見て感じたことは、人情は同じことで日本で厭な奴は支那でも矢張り厭ふべき客とされてゐる。今それに自分の悪客とするものを加へて列擧して見ると二十數則の多きに及ぶ。

通例酒席に厭はるゝ人は長坐の人、酒量自慢の人、自己の地位を鼻にかけて威張る人、漫りに過去を語る人、饒舌にして他に話の機會を興へない人、一人よがりの話をして傍若無人の人、人を痛罵して席上に訴ふる人などであるが、更に細かく云ふと、自己が興盡くれば直ちに席を去る人、心を目指す一人にのみ寄せて四座を顧みない人、心主人に倣するに在つて饌部を褒めそやす人、坐中懇意ならざる客もあるのに諧謔でませ返す人、人に唱歌を強ひながら歌ひ出すと聴かない人、音律を辨ぜぬ癖に妄りに褒貶を加ふる人、人から聴いた事をさながら自分で見たかの如く話す人、心營利に在つて儲け話で持ち切る人、座中口を耳に附けて私語する人、しきりに立つて猷酬し座を亂す人、心杯を貪るに在つて殊更罰則を犯す人、飲を解せざる者に酒を強ひる人、他人に招かれた席に紙幣びらを切つて妓に纏頭を興へる人、人の席に酒の善惡料理の可否を論ずる人、主人の供するものに嫌らず

自から下物を携へ来る人、すべて酒癖のある人を厭ふは言ふまでもない。

以上の如き酒席の悪客を考へたら尙ほ他にもあるであらうが、咄嗟に考へても以上の如く多きに堪へない程である。全體酒席は人格の赤裸に露はるゝ所で、平素朴訥を装ふてゐる人も酒を被むると、全然異つた人になつて一座を驚かすことがある。酒ほど無遠慮の人に潜む性癖を赤裸に露はすものはないから、酒を好む人は望むらくは用心して酒席の悪客となる莫れ。(昭和八年一月五日)

四四 酒豪樽次の事

世界の酒頭傳に收めてもヒケを取らない我邦の酒豪は水鳥記の地黄坊樽次其他の酒徒であらうが、樽次の事蹟などは嘗て調べたこともなかつた。後世樽次の酒戦に倣つたものもあり、随つて水鳥記に擬したのものもあるが、往々架空のことを誠しやかに書いて好事家に一杯喰はしたこともある。徳川期のノンキ時代には戯れの宣傳が行はれて、蜀山の如き通人ですら、眞に受けてその隨筆「一話一言」に收めてゐる位だから、地黄坊樽次の酒戦など

も、ウツカリ信じられないと思つたこともあつたが、樽次は實在の人で、酒戦も事實であることが知れた。

森銳三氏は、雑誌「集古」に、享保十一年三休子といふ人の「梅花軒隨筆」を引き、委しくこの人の事蹟を書いてゐるが、その大要を挙げると、次の如くである。

大塚の地黄坊樽次は、茨木春策といふ儒醫で、酒井雅樂頭忠清に仕へ三百石を領した。儒は林道春、醫は吉田策庵に學んだので、師の名を一字づゝ取つて春策と名づけたといふ。武州大塚の屋敷で左傳を講じた時、江戸中の多くの學者も聽講したといふほどの大儒であつたが非常の豪酒家であつた。元來酒井家の主人が代々下戸で、酒を呑む家來を喜ばなかつたが、春策ばかりは例外として扱はれた。ある時主人より春策に經書に就てお尋ねのあつた時、春策は不快の面持であつたのを、主人公早く見て取り、例の持病が起つたのであらう、早く酒を飲ませよと左右に命あり、一升鍋に酒を沸かして與へたのを、御前にて一氣に飲みほし、それより御質問に對し、水の流るゝ如く辯舌爽かに、お答へに及んだ。病用の時も、病家に就て先づ酒を望み飯椀に五六杯傾けてから脈を案ずるのが例であつた。

春策が豫て武州川崎大師河原稻荷新田の庄屋池上太郎左衛門底深といふものが大酒家である聞き、十三人の酒友を伴ふて、川崎に赴き、二三日逗留して長夜の宴を張つたのが、乃ち水鳥記の著のある所以で、その席に列した八王寺の百姓喜太郎こそ水鳥記にある醒安の事だ。この者水野隼人正忠直の厩へ、常に馬草を運びくるものであつた。主人この百姓の酒豪であることを耳にして、ある時呼寄せて家中の上戸に相手をさせ、喜太郎に強飲をやらせたが、喜太郎は酔後席を起つて居らなくなつたから、搜索したら既にうづくまつてゐたので、どうしたと尋ねると、折角の御馳走醒ましてはならぬとコンナ静かな處にジツトとしてゐたが、もはや酒は醒安だと洒落をいふたとある。

以上は梅花軒隨筆の記事を摘録したのだが、森氏の考證に據ると樽次の性は茨木ではなく、伊原城が本當で春策は春朔であらねばならぬといふてゐる。その享年は不分明だが死年は寛文十一年四月七日で遺骸は谷中三崎の妙林寺に葬られた。水鳥記はさる大名に請はれて書いたもので、寛文七年五月京都で出版され、又江戸にも出版されたが、菱川師宣の繪のあるものもある。樽次には三人の子があり、妾腹の子が豪酒であつたので、蜂龍の大盃はその子に譲つたと梅花軒隨筆にいふてゐる。爰に附記を要することのあるのは小石川戸

崎町の祥雲寺に「南無三寶あまたの樽を飲みほして身は明樽にかへる古里」と刻した墓がある。多くの書物にはこれが樽次の墓とされてゐるがこれは誤りで、矢張水鳥記の酒徒の一人である、三浦新之丞樽明の墓であるのが混じたのである。この人は小笠原信濃守に仕へたもので、墓には死年を「延寶八庚申正月八日」と刻してゐるから、樽次でないことが直に知れるのである。

四五 麥酒漫談

暑熱とビール、渴とビール、浴後とビール、宿酔とビール、ビールは強ち酔ふ爲めの飲料と思つてはいけぬ。あの位多量に飲めるものはなく、あの位どこにでもあるものではなく、あの位階級無差別のものはない。栓を抜くと泡がこぼれる、あれほど新鮮のものはない。我邦の昔のプロレタリアは、酒店で樽酒をひつかけたが、自分はビールを一氣に引かけるとき、いつも樽酒の快に想到する。大衆向きの酒はあれで無ければならぬ。多衆會合の折などに、小杯でチビリ／＼日本酒を飲むよりも、大杯でビールをガブリと煽る方が、折に

も適ひ亦痛快味もある。低酌は四疊半内の事で、野外などではビールがよい。汽車旅行にも低酌はふさはしくない。矢張りビールがよい。船中も亦然りである。すべて匆卒の場合長時間を忌む場合はビールに限る。今はビールが盛んに行はれ、どんな片田舎に行つても事を缺かぬが、明治の初年に溯つて見ると、ビールは容易に口に入り難いものであつた。其頃「紀效新書」と云ふ書物があつたが、いろ／＼のものゝ製法が録してある中にビールの製法もあつた。自分の少年の頃は、その書の示すごとくに作つて見たことがある。結局似ても似つかぬものが出来た。勿論泡などはまるで立たなかつた。その頃日本で漸やく製して賣り出したビールが櫻ビールであつた。これが今から考へるまでもなく、頗る不出来なまづいものであつたが、製法がわるいとは思はず、口に慣れない西洋酒はこんなものであらうと、都でも田舎でも飲んで飲んだものだ。其後ストツクビールと云ふが出来て、これが遙かによかつた。それからエビスビールが出て、一時ストツクと並び行はれた。自分のエビスの飲み初めは、讀賣新聞社にゐたころと思ふが、ある時鶯溪の小亭に飲んだ時、これを出した。自分は一杯グツト飲んで、これはよろしい、必ず此ビールが他を壓倒して、その生命は必ず永く続くであらうと豫言したが、果して其通りであつた。丁度その頃讀賣

の株主で芝で「うるしや」を營業とする岩見鑑造といふ人を訪ふた時に、外國製の手附の大きなビール香を出して示された。それは伊達政宗の舊藏とかで香臺に政宗の花押があり、頗る珍奇のものであつたが、ビールは斯る大きなもので、ガブ／＼飲むべきものだと感じた。追々キリンビールが出てエビスと競争することになつたが、初めはキリンに苦味が多いので好なかつたが、漸やく其質の佳良を覺えた。大阪に行く毎には好んで同地に産する朝日ビールを飲む。これが淡泊で甚だよるしい、併し大阪の外では飲むことが出来ない、外で飲んだら恐らくまづからう。全體ビールも一種の酒であるが、アルコール分の少いのを可とする。處で日本では苟くも酒と云へば、酔ふことを要求するから、どうしてもアルコール分が多くなければ一般に受けないので、軽いビールが成り立たぬ。アメリカビールは如何にも軽く、甚だ心地のよいものだが、日本の大衆に受けないのは餘り酔ひを發しないからである。自分が毎日の食事にアメリカビールを飲んだのは北京の旅館にゐた時である。たまには口に慣れた日本のビールを戀しく思ふたが、奉天から汽車に乗ると、もう食堂に日本ビールも日本煙草も無い、日本の國産は斯くも國權を伴ふものと痛感した。ビールもその國の國旗と共に動くものである。

自分がビールの醸造所を見たのは北海道へ赴いた時で、サツポロビールの醸造所に案内された。場内を闊覽して一切の工程を見、何よりも感心したのは何もかも清潔で氣持のよかつたことだ。日本酒の醸造場などは随分きたないもので胸がわるくなるが、ビールに於ては飽まで汚穢を忌むので、斯くあつてこそ飲料製造所であると思ふた。簇むらがるカラ瓶の内から石油の容器となつたのを引出す爲めに、多くの婦人が一本／＼のカラ瓶を取つて嗅ぐことはどこでもやることだが、札幌では一人の婦人の嗅官の優れたものがあつて、百本位集めた所を行き一々檢するまでもなく、石油臭いのをこれあれとぬきとるが、それが百發百中であるので此女にお鼻の名が付いてをると云ふことも其際に聞いたことである。酒を飲む形容語に満を引くと云ふが、此言葉の最も當るのはビールを飲む場合である。ビールは大なるコップでガブのみに限る。ケチクサイ薄手の小コップで飲む等は、ビールの味を幾パーセントかを無くする。ビールを解しない家で出すコップは例として小さいので、熱海の坪内逍遙の別荘に寓した際などは、市中で一番大きな重いコップをいくつか買つて、それを坪内の臺所に供給したこともある。ビールを飲むことは腸胃の強いものゝ特權とも云ふべきで、暑熱の候などに寝ながらビールをガブガブ飲むと、腸胃の弱い友人は見て、

戰慄するものもあり、或は羨むものもある。

暑熱の候に旅に疲れて飲むビールは何とも云へない痛快味がある。今でも忘れないのは往年の盛暑に佐渡の金山に行つたとき、事務所が氣を利かして冷却したビールを出して饗したが其味は今でも時に思ひ出す、それから二三年前同人と三浦半島にドライブを試みた時、久里濱の彼理ペルリの記念碑を訪ひ、しきりに饑渴を覚えて立ちながら一本のビールをガブ飲した時も、ビールに何たる異同はないが其味は長く記憶を離れない。尙一二の追憶を云ふと、支那の萬壽山を見物して漸やく疲れ、湖畔の石舟に辿りつき四圍の風景を賞しながら傾けたビール、旅順陥落の祝宴に禁酒を破つて傾けた一杯のビール、奥多摩の幽溪に臨み香魚を下物に飲んだビール、皆共に忘れ難い。

ビールは大體低酌のものでないが、狼印のスタウト文は低酌に適する、あの濃度の苦味は何んとも云へないよい味である。普通のビールでもホツプがよく人を眠らせるが、スタウトは一層よく人を酔はせる、自分は嘗つて眠り薬を用ひた事がない。ビールを飲むお蔭である。之れに依つて眠を得るのみでなく亦便秘を治する。自分は往々便秘に困しむので烈寒の時でもビールを飲む、いつも日本酒と麥酒とを兼用する。西洋の學生は宿醉の時に

ビールを飲んで下物として鯛の酢漬を用ひ、それをビスマーク、ヘリングと云ふてゐるが、自分は宿醉の時には、壽司屋に出かけて、コハダの酢漬を喰ふ。これが自分のビスマーク、ヘリングである。

ビールと日本酒を同時に並用するにつき思ひ出す一事は、嘗て日本の酒の飲み方につき小原鐵心の言ふたことである。日本の習慣として客は酒が出ると心にもない遠慮をして、或は酒を解せないと云ふて後には馬脚を露はしたり、然らざるも初めの内はチビ／＼呑んで、酌をされても満酌を辭したりして、打解けるまでに可なりの時間を徒消するが、追々酒が廻はると遠慮もなく、漸やく解けて後には献酬がはげしくなり、酣醉しては大杯を擧げるに至る、これが日本の慣習であるが、實は始めの内モジ／＼して時間を費すより、須らく初めに先づ大杯を擧げ陶然と酔ふて、始めから打解け、それから徐ろに低酌するに若かずと云ふてゐるが、確かに一説である。自分などは先づビールを最初に、ガブリ飲み、それから日本酒を低酌することが頻々とある。これが恰かも鐵心の言ふ所に一致するのである。

四六 天 麩 羅

修善寺温泉に遊んだ折、つれづれを慰めんと土地の書物屋を漁つて、通叢書の内の「テンブラ通」を購ふて讀んだ。この書の著者が偶然牛込神樂坂の西洋料理店明進軒の後身である天麩羅屋の主人であることが知れた。明進軒は吾々が一時毎日、種々の會合に出かけた頗る因縁の深い所であつた。その二代目が天麩羅屋と成り澄まして、テンブラの揚げ方を説いてゐるのを讀むと、何となく熟懇の人から話を聞くやうな氣がして面白く感じた。いろ／＼通を説いてゐるが、秘訣の一として云ふのには、魚類を、鯉鈍粉に包むのを「衣」といふてゐるが、よくも考へたものだ。衣は薄物に限られてゐる。衣に綿入は無。天プラの衣も薄く無ければならぬ。唯だ魚の持味を失はない爲めに衣を着せるのだから、薄い程よい。それを兎もすると綿入の衣を着せるものがあるが、沙汰の限りだと笑つてゐる。自分はこれ等の説を讀んで、成るほどその道の者の云ふことが面白いと思つた。その後數ヶ月を経て或る食通の一友人に會した時、云ふには、君の繩張内に坐敷テンブラをやる家がある。それへ伴ひたいと云ふから、ブラ／＼出かけると神樂坂の岩戸町と云ふ所に狭い

路次があつて、それを入ると如何にも隘小で餘り綺麗でもない家が一軒ある。友人はこゝだと云ふて戸を開けると、そこに例の坐敷テンプラ臺が据ゑられてあつて狭い臺所と接してゐる。知らない三四の客と膝を並べて坐ると、何んだかむさくるしいので心持がよくなかつたが、出した酒を飲んで見ると案外わるくない。料理番が長い箸で揚げたテンプラを銘々の前に配つたのを喰つて見ると、如何にもうまい。第一揚げ方がよい、第二料理がよく選んである、第三材料の種類が豊富であつて申分が無いので、家のむさくるしいことは早く忘れて、酒も食も共に食つて、坐まろに明進軒の後身のことを思ひ出し、友人に「衣」の話を、「テンプラ通」で讀んだことや、明進軒の二代目の主人がその著者であることなどを語つて酒興を助けた。斯くて飲食が濟むとその家の主婦が、二階で茶を飲めと云ふて導くので上つて見ると、尾崎紅葉の書簡が額になつてゐたり、明進軒時代を語るやうなものもチラホラするので、ハテナこれが明進軒の後身であるかも知れぬと、試みに主婦に問ふて見ると果してそれであつた。自分は妙に懐し味を感じて、主婦に旦那はどうしたと尋ねて見ると、近年歿したと聞いて黯然たらざるを得なかつた。この家は「勇幸」の屋號で、食界に相當評判のある家だ。

四七 上方料理

銀座の資生堂の裏横町に繩簾式の小料理店がある。大阪を本店とする支店で屋號を濱作と云ふてゐる、食通の坪内逍遙翁が數々この家に飲食して、即吟數首に店の光景を戯れに畫して寄せ、行つて見よと勧められたその詠歌は左の如くである。

これやこの浪華趣味かも客なべて語らひもあへずひたにのみくふ

自動車をも待せて濱作に飲み食ふ客のけふもあふれをり

けふもまた女人は見へず濱作に並ゐるは皆阿羅漢あたま

濱作の榮ゆるみれば世の海に不景氣の風の吹としもおもへず

ちろり酒湯葉このわた味もよく濱作にけふも寄りにけるかも

権板の大きテールちろり酒おこせはも鮫味のよろしも

勧めにより自分も心動き、家族を率ゐて到り見るに、調味もよろしく家も清潔でいたく氣に入り、しばしこの家を訪ふやうになつた、家の結構は翁の歌で盡きて居るがなほ聊

か附加へれば、會心なのは樺板のテーブルで、その板は四寸餘りもあらんと思ふ分厚のもので清潔なるが上に落つきのよいのは何よりである。酒も強ちあしからず、殊に爛に意を用ひてチロリに盛つたまゝを出すのもよろしい。立働く女給も男給も皆浪華人で氣が利いて活氣のあるのも嬉しい。料理は最も材料を精選するらしく鯛の刺し身などは上方筋より特に取寄せるとかで、この家の名物である。汁類野菜の煮物に至るまで皆舌を鼓するに足る。始め繩簾と聞き、蕪穢の雑客と伍をなすを氣にしたが、こゝは所謂食道樂の檀場らしく低級の客は一切來らず、必竟繩簾とは云へ價の低からざる故であらう。兎角食味がよいと繩簾に居るやうな氣がしない。この家には料理場を見透す所に、尺の短い繩簾がかゝつてゐてその下にビアスタンドの如き臺が作りつけになつて、客はそこに飲食することが出来る。夜分こゝに陣取つてプロ式に勝手に物を誂へて飲んだら、繩簾氣分となるだらうと思ひながらも、未だ夜分出かける機會がない。

こんなことを談ずると濱作のために廣告するやうであるが、實は近來都下で上方料理がひどく跋扈し、江戸前の料理は追々その征服に遇つて亡びんとする状況を見るにつけ、それは何故であらうかとかねてより疑つてゐたが、唯今漸く一種の解を得たやうな氣がする

のでそれを云はんとて濱作の一例を擧げて見たのである。實に上方料理必ずしも濱作の如く、人を惹きつけるやうに出來てゐるものばかりではない。亦江戸料理必ずしも、上方料理の下風に立つものでもない。然るに上方割烹の威力が滔々として食味界を支配するの勢ひあるは何ぞと云ふに種々の原因もあらうが經濟がその主なる原因であらうと思はれる。

東京の風俗は兎角豪放で食物の分量なども、ふんだんに皿に盛らねば、ケチと卑めて、頭から排斥する。その實、ふんだんに盛つても(勞働者は別だが)それを皆食ひ切る譯でもない。唯だ豪放の氣前がさうするのである。東京の料理人も同じ氣前で、原料の買入にも細心を關き、調理の場合も無駄を澤山に出して顧みない。京大阪になると、氣前が全然異つてすべてつましい。食物の分量に就ても、敢て多きを食らなない。寧ろ價の方がやかましいから、適度に物を出す。それだから、皿でも鉢でも大なるものを用ひないで、小さく盛つて種類をいくらか多く出す。爰に經濟の根本があるので、分量が少いから安くもあがるのである。上方の料理は、どこまでも茶式である。少くとも茶式であると云ふて節約に理窟づける。彼等は曰く、茶式の法として食ひ兼ねる分量を出すべきでない、と。成程茶席では箸をつけた以上は全部喰はねば禮を失するとなつてゐるから、分量に加減を要する。

茶式では普通食はない部分を取り除く、例へば魚の頭尾などは取去つて出すことになつてゐる。現に濱作に於ても、小魚ですら頭尾を取去つて出す。實は、茶人の法も經濟から割り出されたものだから、上方に此式の行はるゝのは偶然でない。東京では飯を一人前と云へば、一人前の飯器を出す濱作では椀に盛つて出す。これも實は經濟の法で、小食のものは一人前の飯器を盡すことが出來ず、残飯は棄りとなるから、其無駄を活かすのである。魚の頭尾を取り除くごときも、決してその取り除いたものを棄る譯ではなく、或は出しにつかつたり、或は惣菜に用ひたり、さまざまに利用するのであつて、食ひ散らした後の頭尾のやうに棄る外のないやうにするのを慮つて、初めから取り除くのである。支那の料理が一切棄りを出さないと云ふのも、これに似たことで、つましい經濟は斯かる邊にも存するのだ。尙些細なことを云へば、鯉節の代りに昆布を以て出しを作つたり、當世風に味の素をつかつたり、刺身に添へる山葵の量を節したりすることにも、上方料理は注意が拂はれ、それだけ料理代が安くなつて、人受けがよい所から、上方料理は如何なる料理屋にも侵入して、今は上方式に據らない所は幾んど無いとも云ひ得るやうな仕末である。假令全部が上方風でなくとも、幾許かその風に據らないものは無いやうな有様である。随つ

て料理番も上方から傭ひ來ることとなり、それが江戸の料理番に較べれば、おとなしくて御し易く萬事につましいから珍重されるのだ。數年不景氣が打ちつづき、あらゆる營業はみじめである。それを打開して營業をつゞけて行くには、第一價を低めて客足の頻到を圖らねばならず、無駄を節してそれから利益を圖らねばならぬ今日に於て、上方風の割烹の行はるゝのは決して偶然でない。私共は一概に上方風の料理に左袒するものではない。寧ろ江戸固有の料理の亡びゆくのを歎ずるものであるけれども、經濟的方式には左袒せざるを得ない。若し合理化と云ふことが料理に就て言ひ得るならば、上方式は合理化に近いと云ひ得るであらう。

東京も大震災後、料理店も大衆向となつて、堂々たる著名の料理屋でも、抵ね小支店を各所に張つて、繩簾式に簡易に出入の出來るやうな工風を爲さねば、營業がやり兼ねることとなつた。實はこの方が客の爲めに便利である。元のやうに料理屋に行けば、欲しくもない料理を澤山にあてがはれ、酒の相手には非藝者を呼ばねばならぬやうに、億劫があつては、料理屋は全く鬼門である。今日の便は自分の欲するものを選び食ひの出來る丈でも結構である。咄嗟に入つて咄嗟に辨ずるのも嬉しい。斯うで無ければ今の世の中には適應

しないのである。西京へ行く毎に瓢亭に飲食するのが例だが、草鞋屋には昨年久方振りで行つて見た。この料理は昔に較べると寧ろよくなつたやうに感じた。相變らず主婦一人で何も蚊もやつてゐる。女中をつかつてゐる瓢亭とは甚だ趣が異なつてゐる。此やり口は客人が茶席の法に随ひ、自辨主義で主婦の戸口に持ち來るものを受けて、自から賄ふでなければならぬのだが、女中をつかはない所に此家の經濟法があると思ふた。西京にはこの式の家が少くない。少なくとも人件費を省いてそれだけ料理の精選に注げば、店の繁昌するのも道理である。人件費の節略も亦上方に學ぶべきだ。猶上方の旅館に近年客人に供する食饌を自から作らず、料理屋に委する所がある。これも無駄節略から考へたことで、旅客が外出して歸るか否か圖りかねるのに食饌を作つて置くのは棄りとなる。旅店で料理をするとなれば、料理人を置かねばならず、買出しもせねばならず、營業の繁閑に依つて伸縮が容易でない。それよりも寧ろ料理屋に委すれば、必要だけを誂へるから經費も減じ無駄もなくなると云ふ經濟法で、此等も亦學ぶべきことかも知れぬ。別項に無駄征伐(四二〇頁参照)を説いたが、料理に就ても亦同じことを主張する。

四八 郷土料理

郷土料理は、或る意味に於て田舎料理である。田舎料理は原始的の料理で、洗鍊を経ない本格のものでないと一概に云ふ莫れ、郷土料理こそあらゆる料理の母體である。ローカルなそれ〳〵異なる特色のある材料を有つてゐる所は少く無い。魚類でも野菜でも、あるものはローカルの名物である、味に於て新鮮に於て他に匹敵が無い。郷土料理は如何にその材料の持味を失はずにうまく喰はせるかにある。鹽田のある所の鯛の濱焼、鮭を漁する所の納屋煮などは、好適例で、どんな凄腕を有する料理人でもあの味は出せぬ。ある水産家の食通は越後のゑご(黒くわひ)を生で食ふことを此上のないうまいものと激賞した。自分も同感だが、都下の人に食はして見ても一向に感心されない、必竟何もかも煮ることに習慣づけられてゐるからの事だが、生で食ふて最も美味なものは生が最もよい料理であると云はねばならぬ。山に産するものには百合や自然薯などがある。野菜の内でもこれほど高級のうまいものはない。此等は人造でなく天然のものである。彼等山の住人は此等の

ものをよく料理する法を知つてゐる。彼等は多く焼いて食ふ、都會地には焼く料理が廢つて行くのに、こゝには焼く法が行はれてゐる。其の材料の持味を失はない爲めに焼くことが最もよい料理である。すべてネギでも、茗荷でも、人參でも、茄子でも、焼いて食ふのが味がよい。それは田舎には行はれてゐるが、都會地では何もかも煮る、煮ることが一番面倒でないからではあるが、材料その物の持味を保つ深切の法でない。滔々たる都會地の料理の法は時勢の動きと共に亂脈となつて、胡麻化しの單純化が風をなし、今は心あるものが、郷土料理を思ふやうになつて來た。地方には地方それ／＼の料理があり、豪家などでは古來其家庭に工風された特殊な料理があつて、郷土料理と云ふても決して單純なものでは無い。都會地では新鮮味を闕いた材料をも扱ふから、勢ひ無理に調理もせねばならぬ、その不合理な料理をよいくと思つてゐるのは、食味が墮落したからの事だ。今は田舎に就て寧ろ料理の母體を顧みるべき時であるまいか。日本の海や土地は天恵に依つて世界に比類のないよい魚介野菜がある。それが複雑の料理を要せぬなど、其物の持味がよいのである。鮎でも蟹でも貝類でも筍などでも、その産地には極めて單純な料理法があるが、その單純な料理法こそ最も適した料理法であることを理解せねばならぬ。複雑な手数をかけ

種々の調味を混じ合はさねば原始的料理だなどいふのは、乾物のやうなものゝ外無い支那あたりのことで、日本では新鮮の魚類は、何よりも刺身で食ふ方がうまいから、手をかけないのである。複雑の料理を要する國は天恵の薄い所であることを思はねばならぬ。

四九 燕 巢

支那料理の珍品となつてゐる燕巢は、日本人にさまざま賞翫を博しないものだが、支那ではこれを菜冠といふて第一に置かれてある。その名が燕の巢といふところからこれほど、日本で誤解してゐるものはない。

日本の燕は誰も知る如く檐頭に巢を作るが、其材料は燕の啣んで來る泥土で、それに糞を交へるからまことに汚穢のもので、どうしてあんなものが食料になるかと不審に思はれやうが、食料にする燕巢は全く異なるものである。第一燕が全く違ふ。巢を作る場所も違ひ巢の材料も全然異なる。燕巢の燕は南洋諸島に住んでゐる鳥で、普通海燕と呼ばれ、體驅も里の燕よりは大きく、鳥に似たやうのものである。それがどこに巢を作るかといふに

燕

人家近くではなく、海邊の懸崖絶壁で、人の近づき得ない洞穴を相穿てそこに巢を営むのである。その材料は海藻や、魚類を噛み碎いて、それを組み合はせたものだといはれてゐる。一旦燕がこれを入れて唾沫を和して吐き出すといふが、そこに化学作用でも起るものか、日本人のやうな潔癖のものが聞くと厭な感じが起るけれども、燕としては大切な食料で、或季節の糧に備へやうとしての巢である。里の燕の巢の如く子を産んだり、それを育てたりする巢とは全然違ふもので、鳥の糧食を人間が奪つて喰ふのだ。

この巢、赤、黒、白の三種あつて赤色のものが最も珍とされ随つて價も甚だ高い。何分にも人の近づき難い絶壁にあるのだから採集が甚だ困難である。日本の盆栽家が矮小にして自然の大木の相をなしてゐる榛柏を、非常の危険を冒して採取するのとよく似てゐる。もとは繩梯を掛けたり、いろ／＼の面倒な工風をして採つたものであるが、だん／＼狡猾な工風をなし、猿を使つて採らせるとも聞いた。この採集用の猿は多少の訓練があつて、船に五六匹を載せ、絶壁の下に船を繋いでこれを放つのであるが、放つ前に囊に猿の食糧を入れたものを頸に懸けてやる。猿は看／＼断崖をよぢ上つて捜し廻はるのだが、二日乃至三日も船に歸らない事もあつて、食糧袋に満々と燕巢を入れて歸るのもあり、中には懶

惰で食料だけを平げて空しく歸るものもある。丁度、長良川の鵜で香魚を捕らせると同様で、一匹一日で一斤位は取つて來るといふが、極上等のは一斤で二百兩の價があるさうな。

五〇 梅干 禮 讚

梅 干 禮 讚

日露戦役に日本が勝つて世界の驚歎を博した。その原因について西洋人はいろ／＼と案じたが、或るものは、原因を握り飯に歸した。握り飯の中には赤い梅干が入つてゐる。これが日本の國旗を象徴したもので、日本の兵士は常に國旗を胃の腑に送つてゐる。これが勝因であらうなどいふたのは滑稽である。しかし梅干を入れた握り飯は古來陣中の兵糧で、これほど携帯に便利なものはない。外國兵士の行軍には兵站が非常に嵩ばり、それが伴はないと戦争は出來ないが、日本の兵士は兵站を待たず握り飯で戦争をする慣習があるから、往々外國人の意表に出る事がある。佐藤正といふ將軍は鬼將軍といはれたが、この人は日清の戦役に朝鮮のある地點から無理の道を行つたので、外人は驚いたが實は握り飯を頼りとして古風な戦争をしたのであつた。西洋あたりの軍の法としては許されない事で

ある。兵站の班の伴はない行軍であるからの事だ。かやうな事もあるから戦勝を握り飯に歸するのもし理ないでもない。併し梅干を國旗の旭日と見立てたのは、日本人も考へない事で一寸面白い附會である。梅干は只一小粒で相當大きな團飯を夷らげ得るほど酸味があり、鹽分があり水の代りもする。またこのものを飯に挿むと飯の腐敗をも防ぐ。これほど少量でいろ／＼に役立つ副食物はないのである。大隈侯は菅神を祖先とするのを誇り、梅干は菅神の愛する梅の實で、梅は菅公崇拜からますます／＼繁殖し、そのお蔭で梅干で戦争に勝つといはれた事がある。これも握飯兵糧論から出發してゐる。實に梅干は全國によく行渡つた食物である。貧富共に喜び、病者はこれでなければ粥が啜れず、宿醉はこれでなければ溜飲が下らぬ。高山の山小屋に何を缺いてもこれだけはある。小田原邊の梅干は紅が薄く酸味も少い。紀州あたりのはいよ／＼酸味が薄い。多くの人はそれを喜ぶが自分などの例年つける梅は、酸味の強い紅色が濃く露が滴るのを可とする。二年越し三年越しとなると肉が軟かになつて露がますます／＼多くなる。われ等の愛するのはそれであつて、他は甚だ好まない。

五一 岳麓の五湖に泛ぶ

昨年十一月二三の兩日が日曜と祭日に當つたので、五湖巡りを思ひ立ち、同業四社の幹部四人づゝ計十六人一團となり二日の午後一時四十分東京驛を發し、御殿場に下車して、先づ山中湖を訪ふて湖畔の旅亭に一夜宿り、翌日各湖を見る豫定で、御殿場より自動車に同乗した。この日は朝來雨しきりに到つたが發程の刻に速んで一天拭ふが如く晴れ渡つたので、一行は仕合せよしと悦んだ。御殿場より山中湖まで約六里、自動車で一時間を費す。途次須走驛を過ぎ、少壯時代富士登山のときはこの口より登り、風雨に出遇つて山中艱難を嘗たことなどを追憶し、思ひを五十年前の舊に馳せた。山中湖までは段々上りで籠坂峠の嶮がある。これが甲駿の分水嶺で、海拔三千六百九十尺の高地である。五湖は皆三千尺の高地にあるけれども、この峠は最も高く、山中湖も隨つて五湖中最も高地にあるのだ。流石に斯る高地には霧深く閉ぢ罩めて、前程を辨じ兼ねたが、車道がよく開け居るので、敢て危険を感じることは無かつた。絶嶺の國境に達した頃は、霧も晴れて、銀盤の如き湖水

を脚下に見た。即ち山中湖である。山上より湖水を下瞰する風趣は、なか／＼のもので一同、快哉を叫んだ。自動車は瞬間に馳せ下つて、湖畔の旅館に投じた。この旅館には日本館、洋館共に備はり、意外の好旅館であつた。一行は日本館を選んで、落付いた。時既に五時を過ぎ、暮色蒼然たるものがあつたが、試みに居室の戸を推して展望すると富嶽は殆ど咫尺の間に屹立し、さながら庭中のもとなつてゐるので吾等をして勿體ないやうな感を起さしめた。流石に此處は最高地だけあつて、樹木も凡ならず、皆霜枯れて黄葉し、荒涼たる景色に一段の寂寞味を添へ、四邊園として一禽啼かざるの風趣には、吾等をして別天地に在るの思ひあらしめた。食饌に酒を呼び縦談時を移して、なほあきたらず二三子を拉して階下の社交室に移り、暖爐に白樺を焚き、パチ／＼の聲を下物に、且つ談じ且つ飲んで、十二時に到り漸く寝に就た。翌日の旅程は先づ吉田に出で、河口湖西湖を素通りして精進湖に泛び、歸途西湖河口湖に泛んで、吉田に戻り大月驛より歸京の途に就かんと豫定し、早朝自動車を促して旅亭を發した。車は山中湖に沿ふて馳せ、坐して湖景を賞し得るので特に船に乗るの煩を省いた。湖は周圍二里十二町、水深五十三尺と云はれてゐる。車は無遠慮に疾走して早く淺間神社に達した。こゝが富士登山の吉田口である。一同社前

に下車し、一拜すべしと幽邃境に行く。境内老杉天を摩し、白晝薄暗く、陰鬱の氣人を襲ふて凄慘の感に堪へざらしめた。社殿は建久の昔營まれたと傳へられ、大華表大水盤皆見るに足る。特に社側の老杉は千二百年を経ると傳へられ目を驚かさす程の巨木である。境内風氣清古にして思ひを千歳の舊に馳するものは獨り自分のみで無かつた。吉田口より登山するものは必ず先づこの社に參詣するが例で、境内に登山の第一歩を進める道がある。富士山麓に最も多く大樹の存するは蓋し此處であらう。復車を驅り船津に到る。これは河口湖畔の小繁華地である。船を艤してこの湖に泛ぶは午後再來の時に譲り、更に車を馳すれば廣き平原に出づ。矮松簇生里餘に亘り滿目皆緑の奇觀を呈し、高處に立つて見ればさながら緑海を望むが如く、「樹海」の名のあるのは偶然でない。確にこゝは岳麓の一勝區である。亦この附近に風穴と稱する所あり、それを探らんとて一行下車し、道傍より折れて、熔巖亂離の小徑を辿り二丁計りで道の盡る所に板舎があつて、梯子を懸け、岩穴の洞門に下るやうになつてゐるが、銘々皆燭を携へて入る。一行中余は和服を着してゐたので入るには不便である爲め洞口に立つて内部を窺ふに止めたが、皆々は若干の距離に進み探検して歸つて云ふには、窟中寒氣甚だしく且つ露滴り落ちて永く居るには堪へずと。復車を馳

せて赤池に到る。時に十時三十分。

赤池は精進湖畔の一村落であるが、直ちにモーター・ボートに乗つて湖に泛ぶ。この湖は往年或る外人が旅館を設けた關係から、最も早く知られ、五湖と云へば先づ指をこの湖に屈するのが常となつてゐるが、實は湖の規模が小さく、且つ近年渴水して洲が露はれてゐるので風致よからず、一見評判ほどでないのに失望した。豫てこゝに晝餐を喫することに豫定されてゐたから、これに船を寄せて崖路を攀ぢホテルに入つた。此ホテルこそ外人の創設した所である。これより展望すると湖を隔て、高い丘陵が見へる。これは精進湖面を抜くこと千三百五十尺で羊腸たる阪路二十町を行き絶頂に達し得るので、その頂點から周囲の風景を望めば、この邊の勝景がパノラマの如く眼界に入ると云ふので、パノラマ臺の名がある。騎馬の設備もあるけれども一行は割愛してそれには行かず、洋食で晝餐を果して復ボートに乗り赤池に戻つて直に自動車を驅り根場(ネンバ)と云ふに着く。こゝは西湖々畔の一村落で、こゝより舸を卸して復湖上の人となる。この湖は規模小なれども、精進湖に比すれば風致あり、水の深さは三百尺と云ふてゐる。もとこの湖は精進本栖二湖と共に大なる一湖であつたのが、太室山噴火の爲めに熔巖流れて湖を堰留め、三湖となるに

至つたと云はれてゐる。この日遺憾を感じたのは富士は目前に在りながら、白雲に包まれて僅にその腰部を見するに過ぎざりしことである。舸は間もなく、前岸に達し、それより八丁徒歩にて長濱に到る。途中に近年穿ちたる隧道あり大正洞と稱してゐる。それを通り抜けて阪路を下れば、河口湖眼前に展開し來る。長濱は乃ちその湖畔の小村落である。復舸を卸して湖上の人となる。この湖は五湖中最も大なるもので、風景も亦第一である。湖の形沓に似て、湖中に鶉の島と云ふ一島あり全島紅葉を以て飾られ、美觀言語に絶す。石器時代早く爰に民族の住した痕跡があると云ふを聞いた。舸は疾走して前岸船津の人家を見る頃に、白紗に蔽はれた富嶽は始めて全身を露はし湖面にその倒影を落した光景は此名區に絶大の光彩を添へ、満船の人をして覺へず快哉を叫ばしめた。吾等が湖上に富嶽を見たのは是が始めてゞ亦終りであつた。湖の一邊船津に近い處に宮家の別邸があつて景勝を占めてゐる。又この湖より遠からぬ處に、近く早稲田大學の經營に係るグラウンドがあるが、それを訪ふの時間がなく二時四十分飽かぬ眺めの湖に別れを告げて船津の茶店に小憩し、復自動車を驅つて前日經た吉田驛に達し之で五湖巡りを終つた。吉田より大月に道する甲州街道に谷村町と云ふがあつて、甲斐絹の集散はこゝを中樞としてゐる。凡て此街道

大 月 大
は桂川に沿ふてゐるので、水の奔流して村を過ぐるもの隨所であり、殊に桂川の崖上より落下する一勝區は特に旅客の目を怡ばしむるものがあつて、偶々橋上にこの景を見て、空しく去る能はず、車を駐めて玩賞したが、猿橋に比すれば絶壁の高さは譲るが各體の飛瀑が相競ふて落下する壯快さは復かに猿橋の上にあるやうに思ふた。五時四十分大月驛に着し直に歸京の途に就いたが、この旅行は極めて繁忙で自動車とボートの乗り詰であつたが、よく連絡が取れてゐたので一刻の無駄もなくそれからそれへと澁滞なく連絡したのは忙中の一快であつた。殊に鐵道省が近頃發行を創めた遊覽切符は至極便利のもので、幾んど現金を仕拂ふ必要なく、徹頭徹尾切符で旅費を辨じ得たことも爰に附記せねばならぬ。

五二 大 月 驛

甲州街道の鐵道沿線に大月といふステーションがある。富士の五湖巡りをやつての歸り、初めてこの驛で汽車に乗り新宿に歸着した。この驛は溪流美で名高い猿橋のステーションと隣つてゐる。大月で注意を惹いたのは停車場の構造の甚だ異風である點にあつた。

大 月 大
日本の停車場の構造は大小精粗の相違こそあれ全國略同じ様式に出來てゐるのに此驛だけは全く破格で停車場は丸太材をもつて結構されてゐる。高山のキャンプやスキー場の小屋などにもすると見る如き結構で、野趣満々たるものだがそこに何ともいへない味があつた。かゝる様式は露西亞の田舎にありと聞くが自分の知る處では大阪の久原房之助氏の別荘内に、之と同じ様式の建物が六甲山に面して立つてゐる。之は二階建て頗る大規模のものであるが全部丸太で結構され内部も皆同形式で、置かれてある椅子、テーブルの類まで些しも彫琢を加へず、どこまでも野趣が湛へられてゐた。この大月の停車場は規模に於ては比較にならないが、趣はよく似てゐる。壁でも屋根でも丸太づくめでよく調和が取れてゐた。歩廊の構造には別段異なるところもなかつたが注意して見ると、屋蓋を支へてゐる柱には廢物となつた鐵のレールが應用されてゐた。改札口も流石に一種の工風があつて、普通は木柵を設けてあるのが例であるのにこゝには人を遮斷する處に小石をコンクリートで固めた、低い障壁が三箇所設けられ、障壁と障壁と間に通路が二箇所あつて、そこを改札口に充てゝゐた。これも多分どこか外國の型に則つたのであらう。全體日本の停車場の構造は萬遍一律で鐵道省の統一主義は趣味などを毛頭考慮に置いてをらないのに、こゝが統

一を破つて一種の工風のあるのは何故であらうか。こゝに丈或る技師が勝手氣儘の意匠を施すことを許された如き觀のあるのは、何故であらうか。自分はいろ／＼考へこんで低徊去る事が出来なかつたが、ツク／＼考へた事は統一主義の甚だ謂はれない事で、ある場合には不經濟でもあり、旅客には何ら新奇の感を與へない失もある。この大月驛の如く地方地方にローカル、カラーの存する停車場を設けたなら旅客が如何に慰めらるゝ事であらうか。石材に富んでゐるところに石を用ひることが經濟であり、竹に富んでゐるところに竹を用ひるがよく、休憩室の結構などでも便利でさへあれば、どんなに變化があつても差支のないはずである。要は統一に拘泥せず、地方の風土事情によつて宜しきを制すべきだと思ふた。これに就て思ひ起すのは、前年獨逸の經營に成つた青島のいろ／＼の建築を見た際の事である。青島は石材の豊富な所であるだけに、どんな家でも皆石造であつたがその意匠は實に様々で、公署でも驛舎でも十數の建築の内一つ一つの意匠を繰返したところとは全然なかつたのに、流石は獨逸の技師の頭腦は偉いものだと思ふが、日本の停車場の結構も一概に統一に拘泥しないとすれば技師の頭も働くであらう。そして地方々々でさまざまの地方色を現はして旅客の趣味をそゝるものが出来るであらう。自分はこれを望んで已まないものである。

を望んで已まないものである。

五三 一日のドライブ

近頃の一快は、都外にドライブを試みることである。近年到る處道路が改善されたので、自動車を驅るに聊さかも差支ない。氣の合つた友人五六乃至七八一團となつて、車中勝手なナンセンスを戦はすのも一興であり、會つて往訪しない勝地を探るのも愉快である。ついでこの頃も好晴に乘じ、終日ドライブを試みた。道程は東京を發して横濱、武州金澤、横須賀、浦賀を経、九里濱、三浦三崎、油壺を訪ひ逗子、葉山を過ぎて歸京の豫定であつた。この往路の内の九里濱、三浦三崎、油壺の三所はこれまで曾て踏破しない所であるので、最も自分の興味をそゝつた。

武州金澤には伊藤公が帝國憲法を編纂した憲法島の別荘に隣つて自分の宗家の別荘があるので、熟知の所だ。併し前年はまだ道路が開けなかつたが、今は全く面目を一新した。こゝには大橋新太郎氏の別荘がある。立寄つて小憩、座敷に掲げてある畫幅を見た。渡邊

華山が元信の畫した鍾馗を朱筆で模した大幅も目を惹いたが、それよりも司馬江漢が寫した極彩色の観音像は珍物と見受けた。尙ほ他に耶蘇教旺盛時代を語る、日本の貴婦人が侍女を具して禮拜してゐる洋畫は、無款なれども山田右衛門作の筆でもあらうかと思はれた。稱名寺に新たに築かれた書庫は昨年来た時にはまだ何も置かれてゐなかつたが、今は寶器圖書などが陳列されてゐた。金澤氏四代（實時、顯時、貞顯、貞將）の肖像を見ることを得たのは殊に仕合せであつた。

横須賀は二十年前見た時に比すると、その殷賑幾十倍するものがあり、流石に海軍鎮守府の所在地だけに、街衢の過る所目に觸るゝもの海軍くさからざるものなく、東郷元帥の名を冠した菓子や、海軍の名のある種々の物が目についた。こゝには海軍工廠もあり、砲術學校もあり、紀念艦三笠もこゝにその威容を存してゐる。浦賀は往年病後の保養に二三泊したことがあつたが、今はドック會社の爲めに繁華の地となつて舊日の比でない。

金澤に手間取れた爲め午後一時漸く九里濱に着した。こゝは今尙ほ一小漁村に過ぎないが、我文化の發祥地で、亞米利加の水師提督ペルリはこの地に上陸し修交の談判を遂げた。近年紀念の碑が建ち、碑面に伊藤公の揮毫十六字が刻され碑陰に洋字の記がある。一行は

碑を圍繞して當時を偲び、低回する能はざる情があつた。自分は頻に渴を覺えたので碑前の茶店に麥酒を求めて、立ちながら數杯を傾け快然麥酒にペルリ・ビールと名を命じた。匆卒また車中の人となり、海獺島の燈臺を望みながら、和田萬吉博士を顧みて、ペルリの來た頃はまだ燈臺も無かつた、海霧の深き暗礁の多いこの地に帆前船でよくも無難に到着したものだと語り、談柄は自然ペルリを離れなかつた。

午後二時漸く三崎に着した。こゝは三浦半島の一端で港内大小の漁船群がり、埠頭に海産の堆積するを見た。この地の海産は年額二百萬圓に上ると聞いた。城ヶ島を前に望む岬陽館といふに入つて午餐にありつく。食後舟を放つて海景を探る。浪が高いので外海に出ることが出來ず、舟を燈臺所在地に停めて徒歩で登攀し、燈臺下に立つて危礁亂立の海景を賞した。この燈臺は明治三年の建設に係り、暗夜の洋上十五哩へ四萬燭光を放ち、航海者の唯一指針である。大震災に倒潰したが、今は復舊してゐる。三崎には椿、櫻、桃を名とした御所と呼ぶものが三ヶ所あり何れも皆鎌倉時代の史蹟だが時間がないので訪問を割愛し匆皇歸路に就いた。埠頭に着くと多衆の人が集まつて「助かるか、どうか」など云ふて立騒ぐのを何かと聞けば余等と同時に發した男女の一行の游船は、外海に出たので顛覆

の厄に遇つたと云ふことが知れた。幸ひに皆が救はれたと聞いて吾等は又車中の人となり、三十分ばかりして油壺に着した。この地は三浦半島の勝區として古くから名がある。彎曲した一小區に過ぎないが一波揚がらず、澄みたる淵の如く油を注いだ海のごとくであるので、油壺の稱がある。こゝには三浦道寸の古城址があるので、翠緑の間からそれを望む景もよし、帝大附屬の臨海研究所に到るには、この油壺に沿ふて山路を行くのだが路傍に山脚躑躅咲き亂れて風趣に富み、樹の間より灣を下瞰すると得も云はれない趣きがあるので、讚州の屋島邊を過ぐるの感があつた。試験所に立寄つて魚族を一覽した。今は試験所の規模は小だが、既に外廓の出来上つたコンクリート建築もあり、遠からず竣成したら、規模は更に擴大するであらう。觀賞終つて車を促し、前島男爵の別荘のある葦名を経、葉山、逗子を疾走し、一路歸京を急いで、七時半に中央停車場に着し、一行に別れを告げた。

五四 箱根の舊道に雲介歌を聴く

時は大正四年八月の末、娘を伴ふて箱根の塔の澤にゐた。娘が籃輿で舊街道を經、蘆の

湖に行きたいといひ出したので、久方振りに舊街道を經るも一興、籃輿に乗つて昇夫から唄を聴くのも面白からうと娘の請ふに任かせて昇夫を僦ふたが、今は昔の唄を心得てゐるものは老人のみで、それも僅かに二人存するに過ぎないといふので、辛ふじて六十からまりの昇夫を得た。それに若い昇夫が加はつて朝の七時半旅舎を發した。駕籠に乗るは湯本迄下るを便とし、度々訪ふた事のある玉簾瀧のある地區に沿ふて發電所附近に出で、それより道形もなしをらざる拳石、足を噛むの地を踏み羊腸たる細逕をたどつて行くに、漸くにして一條の窄路あり、これは電氣會社の専用道路にて、水を引く鐵管は今歩みつゝある道の下に蜿蜒として設けられてあるのを見た。左方は懸崖で眼下に川あり谷底に十數軒の部落をなすものあり、この川が須雲川で部落は同名の宿驛である。舊道を経るときは必由の宿驛だと昇夫語る。漸く行けば、樹木の殊に鬱然たる所に至る。細逕をたどりて行くに、一茶店あり、一飛瀑あり、俗に勝五郎初花に因みありとする初花瀧がこれである。境狭けれど幽邃の趣あり、秋季紅葉殊によしといふ。さもあるべし。湯本より舊街道を經ず、特に電氣會社の道をたどりたるはこの瀧を見せんとてなり。この瀧より十丁餘り行きたりと思しき所に、新に作りたる家屋の軒をならべたる一部落あり、所謂畑宿にて昔諸侯

参観交代の際には、人馬輻輳して繁榮箱根町に次ぐ所なりしといふ。近年火災のために神社の外悉く焼失して今漸く復興したれど、僅に戸數十軒を數ふるに過ぎず。一亭に憩ふに、床の間に明治天皇東幸の御休憩の處、と署したる標札が置いてあつた。これに見ても當時この宿驛の街道有數の處であつた事が知らる。これより舊街道に出づ。道はすべて石をもつて敷きつめられてあるのに氣が附いた。これは文久年間、公武合體の政策により將軍家、皇妹和宮の降嫁を請へし折、大修理を加へたといふがこの道がすなはちそれで、敷石は三島にまで及んでゐるといふからなかくの大土工であつた。今は交通が稀疎で、敷石の間隙に草生ひ延び頽廢の感はあれども、豪雨を経るも谿谷に變せずいづまでも道形を保つてゐるのは敷石のお蔭、といはねばならぬ。明治十七年の頃この邊を通過した折は、道の兩側に大樹があつて、樹枝天を遮り陰鬱の氣は行人をして悽愴の感に勝へざらしめたが、今は樹木伐られて路傍に腐朽の根を存するのみである。昇夫の語る處によれば、今杉並木の存するは、僅に湯本三枚橋附近と元箱根町の或る部分とのみにて、三枚橋より畑宿間の並木は明治四十年頃、四萬五千圓許りの金に換へられた。そして三枚橋附近にいさゝか存してゐるのは、岩崎家が惜んで風致のため自から買ひうけたのだといふ。畑宿から道いよ

いよ嶮にして、さいかち坂、入曲坂（雲介はこの坂をヨコナメ坂といふ）、檜の木坂などがある。昇夫の語るを聞くに、昔大名通過の際、雲介長持を擔ふてこの邊で破損を生じたとしても、道の嶮阻に免じてお咎めなしに濟んだといふ。またよこなめ坂は寒中滑つて雲介の困じた事甚しかつたので、長持の底の四隅に馬鞋を取りつけ、地上を引きづつたものなど昇夫語る。輿中の娘はこれ等の話を聞いて輿に入り、雲介歌をも所望するに任かせ、昇丁中の老人おかしき調子に歌ひ、若きもの和して且つ走る。その歌一つ二つ。

「こゝは名代の檜の木坂よ、下に見へるは畑の茶屋

「山の荷持は花なら蕾、立場立場でさけ〜と

昇丁の談によれば、雲介歌は元來長持を昇く時の歌で駕籠歌でない。この歌なれば、足拍子が揃はず肩をかへる時合圖を缺き、甚だ不便なりと。さもあるべし。檜の木茶屋に憩ふてまた發す。この邊に狼谷、笈が原などいふ所あり、十二丁行き甘酒屋あり、また憩ふ。昔は兩側に數軒の茶屋ありしが今は僅に一軒を存するのみ。これより二十丁行き元箱根町に達す。この日朝來雨を催したが、こゝに來つて小雨駕籠の上に落ち來り、見渡せば連山雲を吞吐して雲煙の景おもしろく、馳眺に忙はしき間に昇丁の足はいよ〜進んで、

箱根神社の表門のありし處へ着き、これより石を疊みたる坂を下つて蘆ノ湖々畔の一亭に着す。時に午前十一時。亭に入りて間もなく豪雨到る。歸路は新道に依りたるが故に記載を略す。今時雲介歌を聴きながら箱根を籃輿で過ぎ、昔を偲ぶのもまた一興であつた。

五五 大名の荷物

昔諸大名が參勤交代で驛路を旅した際に、どんな荷物を携帯したかと云ふと、甲冑武器は勿論、食器から寝具、諸般の調度類、國への土産物等、一ト世帯の道具を運んだのだから幾十の長持が行列に殿して續いた譯だが、好事の大名になると、大切な茶器や書畫なども携帯し、慶長頃のさる大名はその平生珍重する石燈籠を携帯した例もある。大名ではないが、伊勢のさる大名の家臣で可なり身分のあつた或る侍は、鰻が好きで旅中到處に鰻を求めて自から調理した。そこで荷物の中には調理に必要な一切のものを收めた。釘や庖丁などは勿論だが、俎や行爐や醬油樽まで持参したと云ふから、當時は厄介な荷物が多かつたのである。

大名が馬鹿々々しいものを持つて歩いた最も著名のものは雲介仲間で「長門のカネ棒」と呼ぶものであつた。乃ち長州藩の荷物の中に鐵棒を入れた長持が三棹あつたからこの名があるのだが、その實石地藏が入れてあつたと云ふことだ。ナゼそんなものを持廻つたかと云ふと、何か過意があつて藩を困らせる爲幕府が命じたのだと云ふ説もある。この重い荷物は通例四人でかついだが、箱根へ差しかゝると、二人で擔がなければならぬことになつてゐた。平地を四人でかつがせながら、街道一の難所を二人でかつがせることは無理な話だが、妙なことに難しいことをやつてのけようとの功名心に驅られて、強い雲介が自ら望んでかついでから常例となつたと云はれてゐる。

雲介仲間で厄介視した荷物は、郡山の「八の字」と云ふのである。郡山侯の紋は鳩が向ひ合つてゐるので、この名がある。この定紋のある長持には何が入つてあるか分らないが頗る重量のあるものであつた。隨つてこれを擔ぐものが強力を賞讃さるゝので、名譽の爲めに好んでこれを擔ぐものが在つた。その一人は、小田原在の百姓で唄半と呼ばれたもので、これが上手に擔いだ。この男は長持唄が上手で、それを唄ふと長持が軽く上つた。この男の唄つた唄は「郡山とは、だが名をつけた、山じゃないもの、里だもの」と云ふので

あつたが、それが君侯の耳に入つて、面白いことを云ふとほめられて終に宰領役に引上げられ後には立身して士族の列に加はつた。

雲介仲間で「紀州のお中拔」と云ふのがある。これは臺所道具を納めた長持で、格別重くはないが、駈け足で迅速に運ばねばならぬ。なぜ迅速を要するかと云ふと、殿様が朝飯を召し上つてお立になるとサツサと臺所道具を片づけて、それを擔いで殿様が晝食場へお着きになる前に、そこまで駈け付けねば、晝食の支度に間に合はないからである。外の大名家は二通り臺所道具を携帯したから、あらかじめ先に持たせる便利があつたが、紀州では一通りに限つたから、斯る面倒があつた。大急ぎであるから人足の草鞋がぬけても穿き直すことも出来ず、殿様でも供勢でもズンズン抜いて駈け出すのが公然として許され、殿様もこの長持が来ると脇へ避けて通されたと云ふことだ、お中拔の名あるはこの故である。その当時諸藩から禁庭や幕府へ種々の献上物があつた。宇治の茶などは随分鄭重に運ばれたものでそれを擔ぐものはひどく威張つたものだ。生魚などの運搬になると迅速でなければならぬ。無論晝夜兼行であつた。生ま物献上の一例は、越前から幕府へ寒鱈を献上におよんだことなどである。この鱈を擔ぐ人足も一種の唄を唄つた「ヨイタラ、オタラジャ」

「ヨイタラ、オタラジャ」と連呼して、献上品をほめながら運ぶことが例となつてゐたが、ふざけた人足共は「ヨイタラ、オタラジャ、ナンタラコトチャ」と云ふたので、宰領方に大目玉を喰つたなどの笑話もある。

以上は亡友宮崎三昧が或る雲介から聞いて語つた一端である。

五六 最後の箱根關

自分は箱根に遊ぶ毎に、關所の址を訪ふのが例となつてゐる。關所の址と云ふても、何も存してゐないが、流石に此處は大なる史蹟で、昔を追懐する種々の感想が湧く。近頃は元陣屋所藏のさまざまの文書を展覽に供してゐるから一層興味を感じる。昨年游んだ時、一ツの事實を知ることが得た。それはこの關所の最後の出來事とも云ふべきものである。即ち慶應三年に幕府の官吏向山隼人正が、この難關で切腹まで覺悟した椿事があつた。慶應三年と云へば明治になる前の年で、幕府が事實倒れてゐた年である。向山は黄村と號し相當學問もあつて、可なりの地位にゐた幕吏であつたが、京都の所司代へ使しての歸路、

軍艦が破損して止むなく下田へ上陸した。江戸表へ急の御用状を携帯してゐるので、急ぎ箱根へ着して關所を通らんとすると、勿論關所手形を所持して居なかつた。關所では例の如く大法を守つて通過を許さない。段々事情を云ふても關吏は頑として聴かないので、向山も詮方なく江戸まで急飛脚を立て、手形を取り寄せんとしたが、更に思ふのに、手形を取り寄せる往復で徒らに日子を費さんよりも、寧ろ大切の所司代の書状を持たせやるに若かずと思案し、雲助の内から物馴れたものを選び、これを飛脚に差立てたが、この男雲助の常として湯本の三枚橋で酒を飲み泥酔の揚句、携へた書状を紛失したので、是非なくその事を向山に復命に及ぶと、向山は驚くまいことか、上へ對して申譯立たずと旅舎の一室を借り受け切腹の用意までした。諫むるものがあつて、先づ紛失の書状を搜索することに成り、大勢のものを備ふて普く捜した。その間が十二日かゝつたが、どうしても出て來ないので、向山は愈々切腹と決心した時に、幸ひにその書状が出て來て辛ふじて死を免れたと云ふが、この事實は箱根關所の最後を語るもので、關所の大法が如何に嚴格に守られたか徳川氏のあらゆる法令が弛廢した折に、なほ關所のみが斯く嚴格に大法を墨守したことを思ふと、徳川氏が三百年の安泰を得るに、この關所が如何に重大であつたか思ひ半ばに

過るものがある。

五七 野州鹽原の紀功碑

野州の鹽原は温泉と山水の奇勝を備へて、避暑地としてはもつとも名高いが、實はその開けたのは極めて近い事である。最初この地を訪ふて、その風景の絶奇を喜び、別荘を織機の地に營み、紀勝四卷を著したのは、東都深川の巨商で奥藍田といふ人であつた。この人文學あつてよく神祕を發き幽奥を聞いてこの名區を天下に紹介した。踵で紅葉山人金色夜叉を著すに迫んで、この地の勝景を細叙してさらに廣くこの地の名聲を高からしめた。鹽原の地の今日あるを致したのは、二氏文筆の力與つて力ありといはざるを得ぬ。私は坪内逍遙氏といつぞや話次亡友紅葉山人のため、鹽原に適當の地を卜し、一碑を建て、はどるかかと談合した事がある。その際は他に鹽原に建碑の企てのある事を知らず、われ等自ら若干の資を投じ、自然石の小碑を建て、切めて紅葉山人がこの地の宣傳者として功ある事を傳へんと目論だのであつたが、その後鹽原に遊んだ時、旅舎にて聞けば妙雲寺の住職瑞

巖和尚に建碑の計畫があり、奥藍田の事と併せて碑文の立稿をわが早大教授松平康國氏に依頼し、文も既に成つたといふを聞いて喜び切に建碑の成功を祈つたが、人事魔多く、その後この僧は寂したとか、他寺に移つたとかで建碑の事蹉跌したと聞き貧弱ながらわれ等の志の如く一碑を建てたらば、なきに優りたらんと悔いた事もあつた。自分は近年この地に行かないから今は誰かの手で、建てゝゐるや否やを知らないが、松平氏の碑記の草稿は前年同氏から示されたのを所持してゐる。氏は奥、尾崎兩氏に交はりがあり、文章も結構に出来てゐるから左にその全文を掲げて二氏の功を天下に紹介する。

奥藍田尾崎紅葉碑記

海内温泉兼山水之勝者、莫鹽原溪若焉、唯其地險絕幽隱、雖有溫泉、少往浴者、自新道通、輿疾到者稍少、而山水之勝猶未顯、其顯者、實奧蘭田尾崎紅葉二子之力也、蘭田居士、以都門豪賈、擁鉅萬之富、顧好風光韻事、暇則縱情邱壑、尤愛鹽溪山水、構莊於織機、名曰靜寄軒、所著紀勝四卷、舒洩神祕、闡發幽奧、自山理水脈、風土民俗、至一草一木之微、無景不叙、無物不寫、士林傳誦詫異、居士之名與鹽溪並顯、余之始遊此、問津紀勝、奇勝亂獻、飛瀑激湍、魁偉絕特之觀、果不我欺、遂訪居士於靜寄軒、詩酒相歡、酒酣、

居士爲余指莊北一字曰、是爲清琴樓、紅葉山人所寓、山人小說以金色夜叉爲最、而書中記鹽溪處、資此樓多矣、心手靈敏、世推爲黃絹幼婦、婦女子亦因以知鹽溪之爲勝、子未覽之乎、余乃取而讀之、巧緻麗縹、如居士之言、蓋居士之紀用漢文山人之紀用國文、一則以氣力勝、猶鹽溪之峰巒峻拔、石怒瀑吼、一則以才情勝、猶鹽溪之楓錦爛斑、雲霞五色、二子文章相待而鹽溪之勝始備矣。

今也離宅別館、翬飛林表、酒樓湯戶、向背相望、避暑澡、磨泉者至離查、年以千數、文章之關山水如斯也夫、居士歿後、家道頓衰、靜寄軒亦易其主、余去年復至、唯見焦土已、清琴樓則修治方畢、宏壯倍舊、而山人之墓木已拱矣、余徘徊荒烟冷雨間、不勝盛衰存亡之感、宜哉、浮屠氏之所無常也、妙雲寺住持瑞巖上人好文墨能書畫、悲二子有德於鹽溪而人殆護之也、欲建牌以記其事、請余文、嗚呼、鹽溪因二子而顯、二子亦因上人得大無量壽、豈非所謂因果應報者乎、余識二子、又與上人有方外交、因緣亦復不淺矣、不辭而叙、亦回向之意也。

五八 會津道中

大正五年の夏、野州の鹽原に避暑中、吉田東伍博士がやつて来て同宿の上、遂に連れ立つて越後に歸省した。その際の紀行が今存してゐる。

會津道中は自分に珍らしくないが史學者が道伴れであるから、多少の興味を感じた。鹽原を發して西那須野驛に達すると、停車場の標示に那須國造碑四里十町と記されてあるのを見た。吉田氏に問へば碑の所在地は湯津上村で、いつの頃からかこの碑を神體として祀つてをるといふた。この碑は白鳳時代の遺物で、日本の金石中最も貴重のもので、群馬の多胡の碑と共に、朝鮮の歸化人の建てたものであるが、自分はまだ訪ねて見る機會を得ない。西那須を發して黒磯、さらに進んで黒田原といふ驛がある。この邊は茫々たる大曠原である。地名に黒字を冠らせてゐるのは土質が、黒色を帯びてゐるからであらうか。この曠原を横斷しては、勢ひ殺生石の神祕傳説を聯想せざるを得ない。昔この邊一帯は狩場なりしが故に、狐も多く栖んだであらう。金毛九尾の狐がゐたといふもいはれなきにあらずだ。

全體金毛九尾などいふ思想は、支那傳説の感化であらうが、この怪獸が追ひ詰られて一片の殺生石となつたといふもおもしろい。石には、もち論生類を殺す力のあるものがある。砒石などはすなはちそれだ。この殺生も多分この類のものであらう。さなくともこの邊は到處硫氣が漲つてゐる。草昧時代は別して猛烈であつたらうから鳥獸が斃死したといふも事實に相違なからう。そしてこの怪力が法力をもつて碎かれたといふ、その法力の持主は玄翁和尚で、その人は越前の出身とも越後出身ともいふが自分は我田引水で、越後の人としてゐる。かゝる面白い舞臺の立役者を他郷の人としたくないからだ。おかしい事には後世、鐵槌の大なるものを呼ぶにこの高僧の名をもつてしてゐる事だ。

黒の字を冠る宿驛を過ぎ去ると今度は白の字を冠る宿驛が来る。曰く白阪、曰く白河だ。白河を過ぎ漸く進めば若松に達す。若松も舊名黒川で亦黒の字を冠した所だ。この邊の温泉の色、黒ずみ土色も黒いためであらうが、この舊名を改めて今の名にしたのは蒲生氏郷から始まると吉田氏語る。おそらく亡滅せる蘆名の城名を忌み、若松といふ佳名を附したのであらう。それはともあれ、この邊に黒白の名の參差入り交つてゐるのは興味ある事で、宛がら碁盤の上の烏鷺を思はしめる。汽車は走つて猪苗代湖邊を過ぐ。上戸驛前の

標示を見るに、海拔千六百九十九尺とあり、往年のこの湖の外に一小湖あり田子沼といふた。車窓より見れば既に變じて桑田となつてゐる。必竟この沼の水を猪苗代湖に注ぐの工事を起したからである。猪苗代湖はこの沿線の勝區であるのに、鐵路は湖の周邊を避け、あたふ景色を没却する無風流は沙汰の限りである。

漸くにして盤梯山を望む。去明治廿二年噴火の時自分は新潟新聞社にゐた。吉田氏は思ひ立つて別を告げ噴餘の山を探討した事がある。それを思ひ起して、吉田氏に當時の事を問ふと氏は、車窓より指點していふには、慘狀の甚だしかつたのは山の背後である。日高村の如きは小村ながら全く湖底に沈み、今においても湖面に松の梢頭の露出を見ると語り、後は箱根蘆の湖の事に言及し、鎌倉時代にはまだ六十六本の松樹がその梢頭を水上にあらはしてゐた。と古書に見へてゐると語り、六十六本はすなはち六十六州を代表するなどいふたが、それは論ずるに足らないが多少の樹の湖中に存せしはこの猪苗代湖のそれを見ても信ぜざるを得ないと語る。談話中山はいよゝ近づき来る。吉田氏山麓を指して曰く、昔伊達政宗が蘆名と戦ひ、一戦に會津を陥れたのはこの邊である。元來會津は古來難攻不落と聞こえたが、これを攻め落したのは前にしては政宗、後にしては維新の戦争あるのみ

だ。三代將軍がその弟を此處に封じたのも故あるかなで、當時封土は皆分裂して一所に廣く纏まつた所は甚だ少なかつた。會津の如きは他の封土を交へない一團有力の地である。もつて一王國を樹つるを得べし。松平家を封じた所以もこゝにあるのであらう。併し城はもと百萬石を領した先輩の築いたのであるから、百萬石規模である。後世會津の城主はその領するところ隻に先輩に及ばずして、城の規模は同じかつた。城主の困難は想ふべきである、吉田氏史談に時を移す間に汽車は走つて越後地に入る。自分は吉田氏と久しい交りだが旅行を與にしたのは、後にも先きにもこの行だけである。偶々亡友を思ふてこの紀行を此隨筆に加へる事とした。

五九 景色と吝嗇

誰やらの句に「絶景に金つかふべき所なし」とあるが、よく穿つた句である。絶景は多く人里離れた不便の地にある。神祕鬼工が人の蹙音を絶つ、幽邃の地區に隠れて、宛がら人の見ることを欲しないやうな趣きがあつて、容易にそれを見ることが出来ない。樵夫野

客のやうな風流氣のないものにのみ見ること許さるゝ處で、その附近に茶を喫する家もなく酒を賣る店もない。崎嶇たる嶮道を踏まねば到り難いから、富貴に居るものなどは到りかねる。勿論一錢の金でも遣ふべき所がない。絶佳の風景と金錢とは全然縁が無いかに見える。漸く交通が開けると、そこに茶屋がかゝり飲食店が出来、旅館が起る。こゝに始めて金を遣ふべき所となるが、風景はそれだけ俗化して自然の風景が損はれる。實は山靈水神は斯る俗化を欲しないかも知れない。今の成金達は山水秀麗の地を選んで壯大な別荘を營み盛んに贅澤をやるが、兎もすると一夜の間に、その全部を流されて仕舞ふやうな災禍が起る。必竟風景の美なる所には、山があり、巖があり、激湍があり、飛瀑などがあつて、もと／＼危険區であるのに、その最も危険の甚だしい處に最も風致があるから、そこを選んで亭榭を構へたりするので、斯る災禍に遇ふのである。

ブルジョアを嫉むプロレタリア連は、これを見て贅澤をやる天罰だ、自然を樂むことを知らない成金の癖に徒らに豪華をやるから、山靈水神の怒りに觸れたのはよい誠めだと云ふが、自分は必ずしもそれに與するものではないが、山靈や水神に對しての付け届け、乃ち税を拂ふのだと解したらよくはあるまいか。

好風景と金錢とは甚だ縁が薄いやうな觀がある。どうも好風景の地に居るものは、生活が質素でつましく兎もすると吝嗇の譏りを受くるやうな資質がある。實は儉素と吝嗇は隣家で、儉素が甚だしくなると吝嗇にもなるのだが、何故に風景と吝嗇に斯る因縁があるのであらうか、自分は久しい間その解を得たいと思ふた。日本の國民性は執れかと云ふと金づかひの荒い國だが、それは一般的に言ふことであつて、細かに地方に就て見るに、風景を以てを誇りとする京洛だの近江だのと云ふと、住民が儉素でつましいので誰の目にもつく。京洛が帝都たる資格を失つても、尙ほ且つその體面を維持してゐるのはその儉素の慣習に據るのである。江州と云へば一風格を有する商人の故郷で、その蓄財に於てその儉約に於てその勤勉に於て他州人を畏怖せしむるほどのものである。兎もすると兩地の人は吝嗇の譏りを受けるなど儉素の資質を有つてゐる。この頃新渡戸博士の『東西相觸れて』を讀んで見ると、博士が各國の國民性を論じて吝嗇の風があると特記した處は、スコットランドと瑞西であるが、それが共に風景の絶佳を以て世界に名高い處であつて、スコットランドの住民は吝嗇よりも一步を進めて、物を買つても胡魔化して價を拂はないのを寧ろ誇りとするの觀があるとさへ云はれてゐる。斯く東西共に風景のよい地の人が、しまり屋と

なる譯は何故であらうか。私は敢て眞解を得たとは云はないが、風景絶佳の處は概して云へば山嶽が多く河海湖沼が多く、その自然美が多いだけ、人間の生活に必要な土地が狭く、食料を得る事が困難であるために、勢ひ儉素とならざるを得ないのであるまいか。外國では日本と異つた個人主義が盛んであるが、風景地は山に隔てられ河に遮られたりして自然各人の交通などを妨げるから、益々個人主義を鼓舞し、自給自足の氣質を養ふのはあるまいか。我邦の京都も舊帝都ではあるが山國であり、近江には大なる山もあるが大なる湖水もあつて、共に風景に富むだけ耕地が狭いので、彼が如き儉素の風を習つたのであるまいか。絶景に配するに吝嗇を以てするは甚だ不倫の感があるけれども、その間には自然の因縁があるかに思はれる。

六〇 山岳形態論

伊東忠太氏の旅行隨筆に、わが叡山にどこからどこまでもよく似てゐる山を見たといふ記事がある。その山は雲南省城東二日程の易隆附近、國道の西に當つてゐる小高い山がそ

れだと記し、かつ次ぎの如き論評を試みてゐる。

吾輩の信ずる所に由れば凡そ山岳の外形には、其基礎となるべき種類は案外に少い。只これを改竄し、變形し、接合し、混合して終に無數の形を造るので、造化の萬能を以てし、猶且つ意匠に限りあり。一たび比叡山に用ゐた型を窃かに復雲南の嶽靈山に用ゆるは、窮したりと謂ふべき歟。

と、これは吾輩も同感である。いくら造化といふても全く異なる意匠を、幾千萬の山嶽に施す事は出来ぬ、只ある限りあるいくつかの意匠をいろ／＼取合はせて一寸形の變化を見せるに過ぎぬ。全く同形の山を遠慮もなく作り出すのは、獨り叡山と嶽靈山とのみに限らぬ。これを考へると山水畫家の意匠の甚だ貧である事も一概に咎められぬ。但し一寸組合せをかへて全く異なるやうに見せる業は決して凡腕では出来ぬ。例へば五百羅漢の面貌を悉く異にして書く事などは、耳口鼻や頭部、双眼、双肩、腮などの書きやうにあるので、之等の要部の大小や位置や形が少し違つても、面相の全部が變ずるから、五百の異相を書く事がそれほど困難とも思へないが、實際それを試みたものゝ經驗によると、二百位までは異にすることが出来るが、それからはドウ工夫しても二百のどれかに同じやうになつて

全く自分だけの工夫ではダメと筆を投じたといふ。流石に造化はその異なる面の如しといふ位に、いく億の人間を全く同じやうに作らぬところに、豊富な意匠がある。しかしこれも實は同じ基礎に造化の案排を異にしたまでの事で、ともすると辨別の出来かねるほど酷似のものもある。

六一 自然を愛する日本人の趣味

外國人は無暗矢鱈に自然々と云ふが、その實日本人ほど自然に親しみ自然を敬し自然を愛するに忠實でない。外國人の家屋は穴居其ものゝ如く、密閉した構造である。日本の家屋は紙を張つた障子がどの室にもあつて、空氣は自在に疏通する。夏時は明放して涼を納れる。雲煙が遠慮會釋なく室内に去來するのを日本人は喜んでゐる。日本人は非常な貧乏人でない限り、家に附屬した庭を有つてゐる。其庭は自然の風景に形どつたもので、西洋のそれの如く草花を植ゑるだけの簡單のものでない。庭には自然の石が置かれ、それが珍重されてゐる。自然石に幾百圓幾千圓の價があるのは西洋人の知らないことである。夏

目漱石が何かに書いたのを讀んだことがあるが、あの人が洋行中ある人の邸内に立派な自然石のあるのを見て、しきりに賞玩して褒めた所が、其家の主人はそんな邪魔なものほどこかへ運び出して棄る筈だと云ふたとある。日本人は詩人でなくとも月を賞したり雨を賞したり雪を賞したりする。これも外國人の理解し兼ねることで、漱石もこの事に言ひ及び日本人はなぜそんなものを賞玩するぞと不審を打たれたと書いてをる。日本の民衆は寺宮參詣を兼ねて風景探討の爲めに遠方に足を運ぶを辭せざる慣習がある。之も亦西洋人の意外とする所であらう。要するに日本人ほど自然を愛するものはないのである。日本人は自然を愛するから自然の風景を庭に摸作するだけでは満足が出来ず、室内にも自然のものを取り入れてそれと親しむことを欲し、插花、盆栽、盆景のやうなものが、それぞれ藝術となつてゐる。今試みにこれ等に就て少しく語つて見よう。外人は日本の婦女に花を活けることを家庭の必要教科として習はしめるのを見て妙な顔をして驚く。如何にも西洋のやうに庭から草花を摘んできて、無雜作に花瓶に挿込んで、それを喜んでゐるその習慣から考へたらば妙に感ずるかも知れん。別して花を瓶に挿込むごとき簡単な作用を藝術呼ばりをするのをおかしいと思ふかも知れんが、實はさう簡單ではない。元來華道は茶道に從屬し

て長く研究され工風され、終にいろ／＼の流派を生ずるまでに至つたもので、頗る歴史がある。華道の或る派には擬工に失して不自然に墜ち、俗に流れて嫌や味を感じるものもあるけれども、本来華道は自然を範とするもので、樹や枝や葉や花をその地上に生じてゐる自然のまゝで且つ最も趣致ある姿態を選ぶのがその本旨で、折り曲げたり断つたり添へたりして形を作るのではない。足利頃の華道の書物を讀んで見ると、小枝一本でも切ることを許さないと書かれてゐる。瓶に挿したその姿態は、小さくこそあれ自然そのまゝであらねばならぬ。斯く云へば、何れよりか花木を抜き取つて来て、そつくりその儘、瓶にさせば、それが自然で雑作もないことのやうであるが、挿して姿態のよく見えるのを選ぶことが決して無雑作に出来るものでない。流派に依つては多少缺を入れることが許されてゐて、贅枝を去つたり、込み過ぎた葉を除いたりもする。僅に一ト缺、二ト缺入れるばかりで見違ふやうに姿態が美化する。そこに華道の藝術がある。勿論他に花木を添加して一層美化せしむることもある。細い枝を多く寄せて巧に姿勢を取ること、花や葉の均勢を保ち、粗ならず密ならず、調和を保つことは、畫のやうなものだが、畫よりも自由が利かないから一段むづかしい。なほ花や葉の萎れを防ぐにも相當の苦心が要る。全體華道も茶道のこと

も精神的のもので、精神の籠らない挿花は死華だと其道の人は云ふてゐる。されば數寄屋に置かれた花には、客も尊敬を拂つて茶室に入るものは、先づ跪いて花を見、然る後、主人に挨拶をする。必竟花に主人の精神が籠つてゐるからそれを敬するのである。茶人の法として花と調和を缺くものは幅でも香爐でも皆取除くことになつてゐるが、これもまた花を尊敬するからで、花を引立てるやうな幅を特に選ぶのに茶人は常に思ひを焦すものである。茶人石州は水盤に水草を活けて湖沼の景を思はせ、壁には鴨の空を飛ぶ幅をかけた。紹巴は海邊の野花と漁家の形をした香爐に配するに、海邊の淋し味を唄つた和歌の幅を以てした。斯の如き工風は皆花を引立ると同時に掛物をも生かすもので、そこに精神があり藝術があるのだが、茶が藝術であることすら理解し得ない外人は、恐らく華道の藝術たることを理解し兼ねるであらう。

盆栽も挿花と似た様なものだが、之は根があつて永久性のものであるから、趣味は挿花よりも一段上で、うまく作ることが決して容易でない。此場合に於ても自然を範とするので、出来得べくんば全然自然其儘のものを取り來り、それを鉢に移して坐玩に供するのが最上である。槲柏なども矮少ながらその姿態が大木の相を備へてゐるものを盆栽家は搜し出し

てそれを珍とするが、斯るものは高山の絶壁などに僅に見出し得るもので、捜す事も容易でなく採集にも危険があるから、實際姿態のよく整つた自然そのまゝのものを得ることは困難である。随つて盆栽家は較々趣致のある樹を取り來り、それを畑に培ふて二年も三年も苦心して育てあげる。勿論花を發する蘭その他のものもあつて、種々雑多であるがこれを培養するには其植物に相應する土質も考へねばならず、肥料も選ばねばならぬ。盆栽の約束は小さくなければならぬから、培養もその心して大きくならぬやう肥料や、水の加減を要する。樹木に對しては色々の注文があつて、老樹の趣きを愛するもあり、樹に多く瘡のあるのを喜ぶものもあり、或は落雷で木の劈けた趣きなどを愛するもあつて、それに應ずるには挿木や接木の方法に依らねばならぬ。そして接木にも種々の術があり根分にもいろ／＼の方法があつて、苦心の結果人を驚かすやうなものが生れる。盆栽家の得意がるのは此處にあつて確にそこに藝術がある。

何人も旅行などの場合に氣のつくことであるが、どうかすると田舎道に勿體ないやうな枝振りのよい姿勢の整つた樹に出遇ふことがある。或は深い溪間などに氣の利いた面白い松などを見ることがある。あれを自分の庭に移し植ゑたら、どんなに風致を添へるだらう

と誰も彼も思ふけれども、それを如何ともする事が出来ない。勝手に持つて行けと云はれども辭退の外はない。これは何人も遺憾に感ずることだが、盆栽家は丁度そんなものをミニアチュアして人間に供給せんとするもので、運搬も出来ないやうなあこがれの樹を咫尺の坐間に置いて樂み且つ玩ばしむる、それが藝術でなくて何んであらうか。或は斯様な培養をなすことを自然を損ふものとして排斥するものもあるが、どうせ人間の用に供するに於ては、樹木の生理に従つて人間に役立つやうにせねばならぬ。大和の杉を樽材にするにも赤色を滯びた酒の行はれた時は、赤色の材を育てたものだ。併し赤色の酒が流行せぬとなれば、その赤味を樹から去る工風が培養上起らねばならぬ。そして現にそれが行はれて杉材は白色を帯びてゐる、唯だ自然にのみ任しておけば、矮少の植物等は優勝劣敗の數に漏れず多くの優勢植物に壓せられて枯死するかも知れぬ、それを取立て救ひ上げそれを保護して姿勢を直したり、動もすれば枯木に花を發させたりして人間の趣味に投せんとすることが、何故に自然を害すると云ひ得ようか。多くの藝術は大自然を弄ぶものであることを思ふと、盆栽藝術も下に置けない高尚のものである。彼等は往々にして大自然の欠陥を補ふて一層美化することすらある。そしてこれも外人の理解し兼ねる趣味であり藝術である。

盆景も古くから作られいろ／＼流派があつて藝術となつてゐる。これは盤や盆の上に山川湖海さまざまの風景を作り出すもので、作庭と較々工風が似てゐるが、或る流派は石と白砂の外は絶対に他のものを用ひないからそこに作庭と異なる所がある。庭は坐中に移す事が出来ないが、これは坐間に置くものである。本年の歌の御題社頭の雪などは盆景家が最も得意として作る譯は、白砂が雪に擬するには最も適當の材料であるからである。この藝術にも自然が貴ばれ、巖石なども泥土で作つたものよりも自然石が重んぜられてゐる。流派に依つては寫實を避けて大體の趣きを現はすことにしてゐるが、また或る流派は寫實を旨とし、家屋や橋や水車や舟など小模型をあしらふのもある。砂も白色に限らず他の色を採用するものもある。或は泥土を以て庭のごとく樹を植ゑたりするものもある。近年外國の式とかで、重なる山や連なる山の形貌を泥土で作りに適當に彩色を施したものがあるが、寫實は寫實だが盆景家はこれを俗として排斥してゐる。どうも高雅の趣きは餘りに寫實がない方に存するやうだ。丁度南畫家が寫實を避けて大體の風格を描き出すと似てゐる所に妙がある。根本は石の選び方にあるので、盆石家の好む石は、大體玩石家の喜ぶ石で、紀州の古谷石、甲州昇仙峽の油石、鴨川石、鞍馬石などが珍重せられ、春夏秋冬、季節に

より石の色に相違のあることを法としてゐる。即ち春の景には緑石、夏景には黒石、秋は赤石、冬は白石となつてゐるが、實は景色によく適ひ姿態がよければ必ずしも色に拘泥するに及ばないと思はれる。盆景家磯野友道と云ふ人の書いたものから教へられたのだが、吾越後の鍋ヶ浦の石が盆景の用に立つと指摘されてゐる。この場所は自分はまだ知らないが、こゝに龜甲石牡丹石などがあり、それは斷崖から海に入つて久しく激浪にもまれ、海岸に打寄せられたもので、その形は珍重捨て難いものがあると云ふてゐるが、他日尋ねて見たいと思ふてゐる。兎角石を選ぶことが專一で、その組合せでいろ／＼の風景が出来る。自分のやうな無性者は込み入つた盆景には手入が要るのでとてもやり切れない。去年の夏人から寄せられた大きな盆景は樹の植ゑてある寫實のもので、暑候に床に置くには適當のものであつたが、手入がわるかつたので、樹は皆枯死してしまつた。實は盆景も適當の場合に應用すれば、人を喜ばせるものである。一例を挙げれば、例へば客を招く時、その客人の郷國の誇りとする景色紀州の熊野とか木曾川のライン等を盆景に作つて接待の裝飾にするなどは氣のきいた趣向である。要するにこれも大自然を模し小形にして玩弄するもので、日本人にこんな工風のあるのも必竟自然を喜ぶからの事だ。都會地に追々庭園も無く

なり、自然に無交渉となり行く將來を思ふと、乾燥を潤ほす具として歓迎すべきであらう。これも夏目漱石が、曾て英に遊んだ時の記録であるが、讀んでみて如何に外人らに自然美の乏しいといふ事が知られた。

嘗て彼地（イギリス）にありし頃、雪見に人を誘ひて笑ひを招きしことあり。月は憐れ深きものと説いて驚かれたる折もあり。或時は知人に何故庭中に石を据えざるやと問ふて、「据えてくるゝ人があるとも、直ちに庭外に運び棄る覺悟なり」との返答を承はつたる事もあり。或る時は路傍の松樹を指して、同行者に時價若干と尋ねたるに、その男五磅位と答へたりし故、日本にては王侯の邸宅を飾るに足るを、安きものかなと感じたり。あとにて聞けば、五磅とは庭樹としての價ならず、材木としての價なりし由。數回に招待を受けて逗留せるは宏壯なる屋敷なり。ある日主人と果園を散歩して樹間の徑路悉く苔蒸せるを見て、よき具合に時代がつきて結構なりと賞めたるに、主人は近きうち園丁に申しつけて、此苔を掻き拂ふ積りなりと答へたるを記憶す。

六二 作庭藝術

園冶作庭の藝術に何よりも大切とするものは、自然石の佳品を布置よく据ゑる事で、昔から作庭家はこれに力を籠めてゐる。樹木は石の位置に問ふて植ゑればそれほど面倒はない。遠州などは「主石賓木」といふてゐるがこれが園冶の秘訣であらねばならぬ。夢窓國師が作つた有名な庭、それに倣つて足利氏の金閣銀閣の庭、小堀遠州の桂離宮の庭、今存してゐる樹木は一も當時植ゑたものではなく、幾變遷かを経てゐる。三百年、五百年の壽を保つ樹木がないから、當時の作庭家の植ゑたまゝの樹を見ようといふのは無理な沙汰であるが、庭石だけはそのままであつて、作庭家の置いた位置も變つてゐない。名園を訪ふて大に注意を拂ふべきは石である。石の品質や産地を考へる事もだが、その布置や配合などに作庭家の思惑のあるところを玩味せねばならぬ。石にこそ夢窓や遠州の魂が存してゐるのである。西京の古刹には石ばかり置かれてある庭がいくらかもある。これ等は年經て樹木を失つたのではなく、林間にある寺には樹は寧ろ多きに過ぎるから殊更樹を避けたのであつ

て、かやうな庭になると、庭全體が作家の作つたまゝでそれが幾百年も手つかずに儼然存してゐるのだから、最も珍とせざるを得ぬ。石壽は長いが、樹壽は短かく、庭の所有者の壽命は尙ほさら短く、榮枯盛衰の變遷が人間には避けがたくして、庭園が荒廢に歸する事もあるが、また復興を企てるものもある。その復興の時に枯樹を拂ひ雜草を刈つて、何を標的に庭の舊面目を出さんとするかといふと、石が即ちその標的になるのである。遠州が主石賓木といつた四字のうちには、復興の時の用意までも清められてゐるといふべきだ。されば此四字は作庭家の要訣であるのみならず、深い意味がある事を思はざるを得ない。

六三 外人の日本畫觀

横山大觀が他の畫家と共に、世界美術の最も古い國、多く不朽の名作家を出したあの伊太利の羅馬へ押し出して、日本畫の展觀をやつたのは日本開闢以來の痛快事である。大觀歸朝の後、かの國諸新聞紙が、日本畫に對して評論したのを譯して、報告書に添へて出したので、かの國人が如何に日本畫を感じたかの一端が知れ吾等の興をそゝるものがある。

近年外國でも日本畫を特に研究してゐる者があつて、中には案外日本畫を理解し、ともすると邦人の及ばぬ觀察をしてゐるものもあるが、それは勿論極めて少數で大體まだ日本畫を理解するまでに到つてをらぬ。無理もない事である。かれ等伊太利人の目には日本畫は原始的のものとされ、あどけないものとされ、極めて單純で物足りないものとされてゐる。かれ等はあらかじめ西洋流の寫實の畫と異なる事を思つて、展覽場の入口で全然コンベンションを去つて見ねばならぬ、と特に身構をしたものもあるといはれてゐるがそこまで用心して這入つても果して理解が出来たか。甚だ覺束ない。かれ等のあるものは富士山や瀧などの畫を見て、相當繪のかけるものなら、誰でもこの位の事は出来ようと評したとあるが、繪は單純ながらかれ等の考へるやうに容易でない。形は似せもし得るであらうが、形以外の風韻などはとても外人の能くし得ないところであつて形似のみで評した彼等は、決して日本畫が解つてゐない事を自白するものである。しかし伊太利人もいろいろの理窟をつけて、理解をつとめてゐる事が種々の評論によつて窺はれる。ある人は云く、日本美術は精神的藝術であり、魂の藝術である。魂が象徴を藉りて外に發するのだなどいふてゐる。これなどはいさゝか日本畫の神髓に觸れたかにも見えるが、魂の籠らん藝術が

どこにあらうか。この評者も到頭人種的に異つた畫だからその本質において、われ等は完全に理解が出来ないものだといふを脱いでゐる。どの評者にも畫の餘白に意が注がれ、それに就ての評論がいろいろある。或る人は云く、日本美術の趣きは餘白に在る。すなはち物質的に表現せずして暗示を與へんとするに在るといふてゐるは臆氣ながら、日本畫に幾何の理解があるかに見へる。割合に理解に庶幾い評論は左の如くである。

日本美術は常に精神的雰囲気の中に高まり、不知不識のうちに、夢の國に遊ぶものである。色の渦卷や線の變妙によつて、人を感壓する藝術ではない。屢々文人畫伯ではあるが正確な暗號を持つ藝術であり、わけて自分の職分を知り、魂に達する寫道を心得てゐる藝術である。何んとなれば藝術家が物體なり、風景なり、動物なりの前に立つて、その外形を細心に描き出す事よりも、その魂を如何に描き出さんかと苦心するのである。かるが故に實在の色彩は全く餘分のものとなり、黒白濃淡の配合一つで春の爽快な空なり、盛夏の輝く空の印象を與へるのに十分なのである。

先づこんな評が理解に近いともいひ得ようが、暗號藝術だの、魂に達する寫道を心得てゐる藝術だなどいふてゐるのは、面白い觀察である。水墨の遣ひ方の巧みなる點に就ても、

かれ等は意を留めて妙を稱してゐるが、かれ等は單調に見えると自白し、墨繪が國民的藝術である日本人にとりては、決して單調とは思へないだらうなどいふてゐるところを見ると、到底日本畫の長所などが理解されてゐるとは思はれない。しかしそれにしても、お世辭にも魂の畫だといひ、餘白に含蓄が寓するといひ、墨一色で揮毫するの妙をいふに至つては、かれ等も可なり解りかゝつて來たといふ事が出來よう。とにもかくにも、わが藝術を提げて遠く、かれ等の目前に展開して見せる事は、世界に日本畫を紹介するの最もよい手段として、自分は大觀氏等の擧を壯とし、其進出の徒爾ならざりしを信ずるものである。

六四 模倣藝術

模倣も藝術の一科で、物を模倣する事は何れの國にでも行はれてゐる。天下一品といはるゝ傑作は、事實唯一無二で、それが賣り物にならない限りは、いくら欲しがつても手に入るはずはない。どうあつてもその要求を充たしたいとあれば、その物を模して切めての

心遣りに、それをもつて満足するばかりではない。そこで模倣が必要となる。その模倣に種々の名がある。普通は寫しといふてゐる副本、模本、影本、臨模などいふ唐めかしい詞が多く書いた物に用ひられてゐる。近ごろは複製といふ言葉が用ひられて西洋のコピーといふ字に充てゝあるが、副本の方がむしろ譯語としてふさはしいかも知れぬ。模倣の物柄は書畫、マニユスクリプト(古文書)、典籍、器物にもおよび、更に建築、その附屬品にも涉つてゐるから範圍は甚だ廣い。茶の流行時代に古器物が重んぜられて唐物うつしの技巧は、ほとんど極致に達した。建築の模倣も茶室などに多く、附屬物の内には石燈籠の類が最も多く模倣されてゐる。今日でも保護建造物は追々腐朽に赴くから、模倣が現に行はれてゐる。また古代建築に附屬する壁畫などが、剝落すると、それを修補し原畫通りに書き直ほす事や、古い佛像などを修補する事も今は行はれてゐる。

あらゆる物の模倣についていふ事は餘りに廣汎だから、主として書畫や圖書の類についていさゝか陳べてみたい。副本を作る事は昔から行はれてゐて、その目的は原物を保護するにあつたやうに思ふ。

天下の寶器を頻繁に出す事は汚損の虞れがあるから、副本で見せたりした。また火災な

どを恐れ模本を作る事もあつた。これ等は多くは書類に屬し、大切な記録や系譜などには副本が作られたものである。もち論或る趣味慾を満足せしめるため、稀覯の文書を模倣して愛玩した例も少なからずある。また畫家や工藝家が研究資料にと名畫の粉本を作つたりした事も珍しくない。それが案外後世に役立つ例もある。すなはち原物が亡びて、その模本が天地間に僅に一つ止まる場合などは、何人もその模本の貴さを認めるのである。

法隆寺の壁畫は今に嚴重に保護されてゐるけれども、歳を逐ふて自然に剝落をまぬかれぬ。自分はいつぞや、徳川末期に全圖を模寫したのを見た事がある。それに較べると今の壁畫は餘程剝落してゐる。百年も経たない間にかゝる缺損がある事を思ふと、副本の大切さが知れるのである。保護建造物の裝飾畫なども風雨に露出してゐるところは、剝落が甚だしい。それを復舊するためにも豫じめ模本を作り置く必要がある。

右の如き必要から模倣が行はれたが、その模倣藝術はどんな程度のものであつたか、委しく知る事が出来ない。茶器などの模倣は如何にも進んだもので、原物の眞を亂るものもあり、原物を凌駕するほどのものもあつたが、他の方面の模倣藝術はそれほどは思はれない。但し昔から贋作家は少からずあつて古筆を模したり、古畫などを模して所謂仕込物

を作つたけれども、今日の模倣藝術に比すれば到底比較にならぬほどの粗笨さである。先づ近年の模倣家で傑出したものは西村兼文を逸してはならぬ。かれは多くの古文書を模倣した。かれの模倣のもので今なほ支那で一杯喰されてゐるものがある。かれの作つた良辨の心經は今なほある高級の家に、正品として珍藏されてゐる。かれの如き巧妙の域に達したものはおそらく昔はなかつたらうが、今は強ち少くないのである。

模倣本を作る事が往々邪道に入り、人を欺く具に供さるゝのは是非もない事である。同じく模倣本であつても、それが人を欺く具に供さるゝと、こゝに贋作の名がつく。贋作は偽物で、不純のものとなるので、人に厭氣を感じしめる。もし我國に古くから西洋のやうに、コピイを重んずる風があつたならば贋物は餘り威力を揮はなかつたであらうが、鑑識のないものが矢鱈名品を欲しがるので、贋物が盛んに行はれて、贋物が美術界に溢れてゐる。模倣本や仕込物が正物と同じ價で賣れるとあつては、贋物を作る技術も進むはずで、我國の既往に模倣藝術が相當の發達を見たすれば、それはお耻かしい話だが、人を欺くための發達といはざるを得ぬ。

書物の覆刻も古くから行はれてゐる。足利時代に五山の寺では、支那の宋元版を覆刻し

て多く流布した。佛書ばかりでなく儒書、詩文集、字書なども夥しく覆刻された。徳川期に入つても覆刻は盛んであつたが、自分などが今いふ複製とはおのづから異つた趣きがある。或は内容を多少取捨したり、或は書名や刊年を替へたりして刻も原刻通りでなく、紙なども原書と變つても頓著しないといふ風で、多くは新版を標榜し、古版の模刻を寧ろ蔽はんとした傾きもあつた。乃ち當時の覆刻は、流布本を作るの簡便法に過ぎなかつた。當時古版本を貴ぶ風は或る識者、好事家の間にこそあつたが一般にはその好尚はなく、副本を副本として珍重する事もなかつた。それに書畫類とは異つて、貴重價が附されるでもなかつたから、割合に圖書の複製術は進まなかつたやうである。しかして、この方面には餘り贋物は無い。

既往の覆刻は上陳の如くであるが全體コピイといへば、徹頭徹尾原物の如くなくてはならぬ。古書においては古書たる面目が躍如たるほどに、複製されねばならぬ。すなはち内容をぬきさしする事などは一字たりとも許されぬ。原作にもし誤りがあつてもそれすら直してはならぬ。蠹食で字が減してゐる場合は可成副本でそれを補ふべきではあるが、副本がない場合は蠹食その儘に刻さねばならぬ。刻法も時代により多少の相違がある。それ

は素人に知れ兼ねるがその職の人にはわかる事だから、原作通りの刻法に従はねばならぬ。題字でも表紙でも、原作通りになさねばならぬ。刊年発行元等も増損變改してはならぬ。出来得べくんば時代のサビもあつてほしい。挿繪の繪の具が褪色してをれば、褪色その儘を模さねばならぬ。どこまでも原書そつくりでなければ精なるコピーといふ事が出来ぬ。今日複製の條件とするこれ等の點は昔の覆刻には、嚴格に行はれなかつたもので、嚴正に複製といへばかくなければならぬはずである。

以上は、版本についていふたのだが寫本についても同様である。毛筆で書いた味をそつくりその儘あらはす事は、コロタイプや、オフセットなどはまだ十分にゆかぬ憾がある。しかし寫本も今は眞を亂るまでに進んで來た。

田中親美氏の幾多歲月を費しての複製三十六人集の如き大作は眞に驚異といふべきで、あれほど各紙に異なる意匠や文様のあるものを纖毫も違はず複製し、文字も原本と毫髪も味を異にしないまでに模寫したものは、複製の極致に達したといふも誣言ではあるまい。近年寫眞が版刻や臨摹にも應用せらるゝ事になつて、技術は一層進み、今日の模本は舊時ものものと、とても比較にならぬ。光筆本と唱へるものなども巧みに作つたものになると、

どうしても原本と鑑別が出来ない。先頃もある所に貫之の歌切が、原本と模本と並べてあつたが、なんとしても鑑別がつかず、已むなく兩方を鼻で嗅いで見たが、古い方はカビ臭かつたので、漸くそれが原本である事が知れたやうな仕末である。副本もこゝに到るとほとんど原本と選ぶところが無い。假令ひ金錢上の價に差があらうとも、藝術上の距離はほとんどなくなつてゐる。故に精なる副本は原本に次で貴ばねばならぬ。但し複製はどこまでも複製であるから、明らさまにそれをいふて贋物や偽作と區別せねばならぬ。實は、原作と争ふて敢て譲らないところにコピーの誇りがあるのである。そのコピーを作つた腕が藝術の誇りとなるのである。

兎角日本では贋作の多いのに今も尙ほ苦しみつゝあつて、コピーを貴ぶ風が起らない。コピーだ副本だといふと直ちに輕んじ蔑すむの風があるが、實は間違つた話である。副本と雖も原物の眞を亂るまでに作製されてゐるとすれば、それは原物を喜ぶ心をもつてこれを喜ぶべきであるまいか。なか／＼コピーの精品を得る事は容易でないのである。西洋でミケロ・アンジェロの傑作を模するには畫界の第一人者が、大努力をしなければならぬ。日本の人はコピーといふと二束三文のものと思ふが、それは間違ひで精製のコピーは随分

價の高かるべきはずのもので、西洋人などは價を論ぜず、立派なコピイを得る事に汲々としてゐる。かれ等は副本としてこれを樂み、副本の精を誇つてゐる。實は藝術鑑賞の本義からいふと、西洋の習俗は合理的である。強ひて得べからざるものを得んとして無理な冀望を抱くから、贋物で欺かれて己が無識を明るみへさらけ出すのである。日本の鑑賞は實は藝術の鑑賞でなく稀觀物の欲求である。來歴や落款に重きを置くは一概に排すべきでもないが、餘りにこれに重きを置き過ぎるから、コピイを貴ぶ如き合理的の習慣が行はれないのである。

六五 蚊帳を背景とする美人繪

先頃上野の美術館に浮世繪綜合展覽會があつたので、一寸のぞいた。報知社でわれ等が委員となつて、前年開いたものに較べると見劣りがした。格別の感想も浮ばなかつたが、美人に蚊帳を配した繪が可なり多く出てゐたので、多少考察して見た。先づ圖柄を擧げて見ると、帳外に美人蚊を焼く圖、帳外に半身を露はして美人喫烟の圖、同じく團扇を弄し

また文をよむ圖、帳の内外で遊女同士應答の圖、帳内男女横臥の圖、美人添乳の圖など、いろ／＼あつたが最も出色と感じたのは哥麿の三枚續きで、美人同宿の圖といふがあつて、帳の内外に多數の美人が描かれてゐた。大體蚊帳に美人を配する事は有り觸れた浮世繪師の常套手段である。而して浮世繪師が何故この意匠を珍重するかと考へて見ると、いささか理由があるかに思はれる。全體蚊帳は夏のものでありまた夜のものであるから、蚊帳を描けば面倒なく夏の趣も、夜の趣もあらはれる便利がある。蚊帳そのものは暑苦しいものだが、書いたものには涼し味がある。蚊帳を書けば必ず寢具が伴ふ。寢具は卑褻のものであるが、蚊帳を透して見ればこそ、厭味が薄らぎ、さほどに卑褻を感じない。すなはち蚊帳が卑褻の具をボカスのである。どうせエロの範圍の畫であるが、所謂隔簾の花影でエロが朧ろげだから、餘りに美を傷けないのだ。なほ蚊帳に附帶する人物は、帳内にあるものはもち論これに入らんとするものも、身體を露はすものも、皆な寢卷姿であるから衣裳は調はず帯などは纏つてゐない。衣裳が調はないから、却てそこに姿態に自然の趣がある。女の寛ろいだ姿態といふたら、蚊帳を背景にしたものに優るものはあるまい。しかしこのしどけない姿態を如實に描き現はす事は、盛装の美人を描くよりもはるかに困難で、名手

でなければよくしない。浴後婦人が半身を露はした所謂あぶな繪に屬するものなどは、餘りに露骨で厭味があるがこれには含蓄があり餘韻がある。男女が幃中に臥してゐる圖などは春畫に近いものである。もし蚊幃がなかつたら春畫そのものであらうが、蚊幃が隔てゝゐるだけに嫌味が薄い。蚊幃は卑褻味を和らげる作用を持つとでもいひ得ようか。前に掲げた哥麿の三枚續きの蚊幃の圖は始めて見る意匠だが、それには四五の女が種々の姿態で床に入つてゐるけれども皆な横臥に先だつ光景で、しどけない有様がよく描かれてゐる。幃外に立つて衣類を整へつゝある者や、まさに幃内に入らんとするものやがあるが、これ等も甚だ趣致があつて、一切男子を避けてその片影だも見せず、旅宿などに婦人同士が宿る有様を綺麗さつぱりと描いたところに、趣があつて流石に名手の工風だと思つた。かく浮世繪はエロ専門だといへ露骨で含蓄のないのはぶちこはしである。蚊幃はおのづから含蓄を助ける作用がある。好んで浮世繪師がこれを背景に藉りるのは、偶然でないと感じた。

六六 葛飾 北齋

畫師の傳の中で、最も卓拔なるものは蓋し北齋傳であらう。北齋ほど種々の流派を學んだものはない。かれは春章の門にも入りまた狩野融川の門にも入つた。菱川師宣の畫風をも慕ひ、住吉廣行に就て土佐風を學び、また支那畫を習ひ司馬江漢に西洋畫をも學んだ。かれが縦横の筆を揮ひ得たのは偶然でない。かれは最初木版彫刻を學びそれを業とした事もある。かれが版下を書くに一種他の畫家の到り難い呼吸を心得てゐたのは、この故であらう。かれは早くから西洋と交渉があつた。和蘭陀のカピテンが日本に來たときかれに請ふて、日本の風俗を描かせ、それを本國へ持ち歸つた。かれが歿後、西洋で北齋熱を生じた端は既に生前に發してゐるともいひ得よう。かれは時に非常の大畫を作つて人を驚かした。名古屋で描いた大畫は轆轤仕掛けで、やつと某寺の山門に吊るして大衆の覽に供した。有名な話がある。さうかと思ふと烟草入の前金具の圖案を細寫してその長を認められた。九十の高齡を重ね、一生九十三回居所を替へたなども外の畫師にはない。またかれほど多くの別號をもつてゐるものもない。數へ來れば二十近くもある。かれの筆に成つた繪本(黄表紙、合巻、讀本、狂歌等)實に二百巻を數へる。この長い生涯にかれの畫風もしばしば變じてゐる。しかし北齋の眞面目は名を北齋と署した寛政の末四十歳前後より、享和を経

て文化の末五十四五歳までに、現れてゐるといふが妥當であらう。爲一と改めてからは一種の癖を生じて來た。妙に筆を屈曲して勁刻の畫を作るやうになつたのは、爲一と署してから晩年益々甚だしくなつた。人は一目して北齋の畫をこの癖で判する事になつたが、實は悪癖である。或る批評家は北齋の描く禽鳥の多くは皆目過大、羽翼勁短、猛惡の相を専らにし、優美可憐の態を闕くといふたが、人物も概ねその通りで、兇奸犇猛のところにもその長所を見せてゐる。これは三國志や水滸傳などを書くために、かうなつたのかも知れぬが、晩年の諸作には力は見えるが優美は乏しいといひ得よう。かれは老いても氣魄は衰へず、百十歳に達したらば畫は始めて神に達せんといつたといふ位である。もしさらに天壽を保つたら、畫境はまだ變じたかも知れぬ。とにかく浮世繪師中この人の繪ほど異彩を放つてゐるものはない。

六七 書畫を見る餘徳

書畫を見るの娛しみは、筆者の藝術を味はふにある事は言ふ迄もないが、其他に儲け物

が往々にしてある。それは題識などで、意外のことが知れたり、さなくば分らないことが分つたりすることである。今茲に一例を擧げるが、先頃菊池容齋が畫した江川坦庵の肖像を持つて來て示した人がある。それは圓窓の中に肖像があつて、數行の識語が容齋に據つて録されてゐる。容齋は前賢故實の著者で、古今名流の肖像と服裝を調べて描いたので名のある畫家だ。坦庵は江川太郎左衛門といふ、伊豆韮山の幕末の豪傑であることは絮説を要すまいが、容齋が坦庵と親交があつて常に往來したことや、水戸の勤王家櫻任藏が容齋とも坦庵とも懇親であつたことなどは、吾等が此識語に因つて初めて知る所である。なほそれのみならず容齋は多く古今名流の肖像を描くに心血を灑いだゞけに、平生人に會すると、その人の相貌のスケッチを取つて置く習慣があつて、坦庵の相貌もスケッチが取つてあつたから、櫻任藏よりどうか描いてくれと頼まれると苦もなくその需めに應じ得たのである。書畫を見ての儲けものと云ふのはコンナ事の知れることを云ふのである。勿論これは一例に過ぎないが、書畫の識語は此意味に於て輕々に看過す可からざるものである。左に識語の全文を收む。

江川縣令去夏屢訪余弊廬、一日閑話之餘、寫其風神、而收于古今人物肖像中、何圖今春

天使迫促遽然仙去、吁可惜哉、櫻任藏君、與縣令爲意氣友、不勝追慕之感、使余圖焉、余其灑泣掃絹素、肝腸輪轉、遂書其概略像下以贈焉。

安政乙卯蒲月廿八

容齋逸士

容齋が此肖像を圖した安政二年乙卯には坦庵五十五歳、櫻は四十四歳、容齋は六十八歳で、三人の歿年は坦庵五十五歳、櫻は安政六年四十八歳、容齋は明治十一年九十一歳で歿したことを参考としてこゝに掲げおく。

六八 日本橋々上の二儒

日本橋の眞ん中に菅茶山と龜田鵬齋とが邂逅し互ひに識らない中だが、鵬齋の第六感が動いて、菅先生でないかと呼びかけたのが相識となつた始めである。この話は當時文苑の雅談として喧傳したものであるが、自分はこの逸話を一向に知らなかつたが、ある時文晁の畫した日本橋の圖を見た。橋上には二人の人物が話し合つてゐる。一方には富嶽が遠く天半に聳えてゐる。その人物は誰であるかと云ふことは、幅の上頭に書かれてある鵬齋の

詩を読んで茶山と鵬齋であることが直ちに領づかれた。その詩は

身是關東醉學士、公是西備茶山翁、日本橋上笑相見、

共指天外芙蓉峰、都下閑傳爲奇事、便入寫山畫圖中。

この詩に所謂關東醉學士は鵬齋自から云ふのであつて、末句寫山畫圖の中に入ると云ふのは文晁の畫に入ると云ふことである。自分は最初これを見た時に、東西の二儒が日本橋の上に出遇つた丈では敢て奇とするに足らない。必ず何か仔細があるであらうと思つてゐる内に「驛齋日記」といふ小冊子を得た。これは菅茶山が西備に歸る時江戸から隨伴した伊勢の河崎敬軒の著述で、旅中の事がいろ／＼書かれてある中に日本橋に二儒邂逅の事が委しく録されてゐる。其中には邂逅に就て二儒が互に感想を詠じた長篇の唱和もあれば、その詩には邂逅の情景を叙した引もある。その詩は自分の既刊の隨筆に收めてあるから、こゝには略するが、詩や引で教はつた事實を平たく書くと次ぎの如くである。

菅茶山は頼山陽の師で名高い中國の詩人だが、龜田鵬齋はまだ交はりが無かつた。茶山が公務で出京した際に、百川樓と云ふ所に鹿谷山人の壽筵があつて多くの文人は皆そこに會した。茶山も亦招かれたのである。鵬齋も勿論それに列して既に酔ふて、歸路に就き、

日本橋を通りかゝると群がる多衆の通行人のうちに風骨神仙のごとき人が通るので、これ必常茶山ならんと第六感が働き、卒然あなたは昔先生でないかと云ふと果してさうであったので、鵬齋も自ら名乗り、歩を轉じて茶山を伴ふて再び壽筵に戻り、會衆に茶山を紹介すると同時に日本橋上に邂逅の次第を語ると、會衆の歡呼は湧き文苑の佳話とされて一時喧傳した。そして誰よりも興を感じたのは河崎敬軒であつた。この雅談は宜しく詩にし、畫にして長く留むべしと文晁と相識るを以て圖を寫して貰ひ、茶山にも鵬齋にも請ふて唱和の長篇を作つて貰つた。乃ち自分の見た幅は敬軒の舊藏であることが分つた。敬軒の日誌に録する所に據ると、茶山の上京中塾に留守居をしたものは北條霞亭であつたとあるが、この面白い邂逅を霞亭に報じたいために、特に二儒の唱和を請ふたとある。鵬齋は霞亭と交はりがあるので、詩中霞亭に言及してゐる。敬軒は文晁に請ふて一幅の畫を得たのを喜び歸装の家苞の第一品だと云ふてゐる。即ち廿日の日誌には左の如く記してゐる。

谷文晁爲余、製茶山鵬齋日本橋解逅圖、二先生傀儀曠襟、髣髴於草畫濃淡中、寫意之妙可尙也、請鵬齋先生、題詩其上、以充歸裝中第一品、何唯淵材之富。

六九 翁 反 故

前年予が多く古簡を蒐集した折、書簡についての趣味その他をいろ／＼書いた事があつたが、その際氣の附かなかつたのは芭蕉に翁反故の書のあつた事で、これには翁の遺簡が三百通から收められてゐる。句も少なからずあれば翁の遺作を拾ふにも役立つたに相違ない。此書簡は翁の門人美濃の陽花庵梅石に寄せたもので、梅石は其散逸を惜んで書狀の到來毎に庵の天井に貼り付け、仰いで日夕之を賞玩したものだ。梅石は翁に先んじて歿したので、その末弟伽香師大魚の手に歸し、大魚は天井に貼りつけた反故を收めて浪花に持ち歸り、晩年芭蕉翁三世大蟻にそれを譲つた。すると大蟻は感ずる所あり、世に翁を慕ふ者多し、一人にてこれを私せんより多くの人に頒ち與ふるに若かず、とて己が手には一簡を残して他を悉く各方面の人々に與へた。但し與ふるに就ては、すべて書簡の文と附帶の句を収録してその各々につき行き先きをも注した。この一冊の書は、即ちそれを梓に上したもので天明三年、江戸の書肆から出されてゐる。尙ほ反故中破損して役立たないものを一

括して日暮里青雲寺の後山にうづめ碑を建て、その事由を刻し、その碑を芭蕉翁反故塚といふ事もこの書中に詳記されてある。

予は書簡保存の勧め、といふを隨筆に書いてゐるがこの遺事は好例として逸すべからざるものだ。俳諧に縁遠き予が終に心附かなかつたのは遺憾であつた。芭蕉翁の書簡の今に傳はるものは少くない、その寫を寄せ集めて上木したものもないではない。がその一人に寄せた書簡の三百通に及ぶものは、おそらくこの外にはあるまい。もつとも梅石に寄せたのは皆な短簡で二三行乃至四五行のものが多くすべて當用を辨するまで、今の端書の文の如きものだ。畢竟翁は梅石の庇護の下に朝夕を送り、梅石の家が近くにあつた、め口上代りに筆に托したものと知らる。さればその書簡は、世に傳はる長簡をもつて比すべきではないが、翁の日常生活は却てこれ等の書簡に於て赤裸々に現はれ翁の俳生活を見る好材料とする事が出来る。多くの書簡は梅石より寄せられた物に謝する禮狀などで、或は食物、或は衣服を贈られたを謝し、或は門松を作つてもらつたのを謝する等で、

紅のやうなる桑のみ一籠雪のやうなるしほ一升ばかりよこし被下かたじけなく存候以上といふが如きは俳味たつぷりだ。翁より求めた手紙には米麥味噌醬油さまざまある中に、

庵室雨漏にて困る大工をよこしてくれよ、鼠が出て困る猫をかしてくれ、硯を人にわられて困る適當のものを與へよ、剃刀一挺たのむ、ことしは庭の菊不出來也一枝もらひたし、庭の藤のこやしに新酒の粕一樽よこしくれよ、机のあしに致度大きな竹四尺五寸もらひたし、某の晝おもしろし一枚ほし、先日の蕎麥の味忘れがたし明日頼み入る、人に土産を遣すから栗二三升頼み入る、殊の外蠅出でうるさいモチ少々頼み入る、或は田樂をかたく焼いてと頼み、或は單物の洗濯を頼んだり、或は今朝寒氣を覺えるから紙子の羽織今日中頼むと申送り、或は豆腐汁が食ひたいから今晚頼むと申送り、或は染物の催促をしたり、或は藁草履三足の無心をいひ、ほうき折れたりといふて直ぐに代りを頼んだり、半切紙つかひきりたれば十四五枚おんつき被下と申送つたり、或はまんぢう七ツあぶらげ五ツを註文したり、井のつり桶くづれ困る早速頼むといひ送つたり、申入れは百端で一々擧ぐるも煩はしいが、翁は酒を好まざりしと覺しく酒を頼み入れた手紙は一通しかない。それは遠江守入來にて入用とある。

以上は芭蕉の日常生活の狀を髣髴せんがため、特に管々しく擧げてみたのだが餘の手紙には朝顔の盛なるを報じて來觀をもとめたり、其角の到着を報じたり、その他其角の消息

を通じたものが二三通ある。句の作り方を簡潔に教へたる手紙もあり、種々の質問に答へたのもあり、月見や牡丹見に誘ふた文もあり、手紙の端に句の録しあるも少なからず、只句のみを書き送つてゐるのも多い。看來ればこの反故集は芭蕉の日記の如き觀があつて通例の句集に比すれば、却て一段の趣味を感じる。

七〇 都會と俳句

無聊に苦んで案頭の一茶句集を翻して拾ひよみをする。一茶が江戸住ひをした頃の句が、當時の都のさまを寫しておもしろい。

炭までも鋸引や京住居

今もその通りである。

江戸住や錢出た水をやたら打つ

門や打水も錢なり江戸住居

今は水道の水に價を拂ふ。風呂も行水も皆な價がある。

世にあれば無理に解すや門の雪
都門には殊にこの感がある。

花見んと致せば下に〜哉

昔の江戸が大名の跋扈で如何にうるさかりしぞ。

何物の花見や脇によれ〜と

かしましや將軍様の雁じやとて

指さしのならぬ葵の咲にけり

何たる厄介の世なりしぞ。

露の世の露の中にて喧嘩かな

今の世も喧嘩氣分が漲る、露の世に何たる事ぞとわれもいひたくなる。

巾着の殻が流るゝ夕涼

兩國の烟火戯にのみこの感あるでなく、都門には何事にもこの感がある。

都門に住しての不愉快は、自由境遇にゐて初めて慰めらるゝ。一茶が東海道々中の作に、

大名を眺めながらに炬燵かな

旅店の店先きで炬燵に入りながら見るこの光景は、大名の權柄に對する復讐と見られないでもない。

都門において人に愛さるゝものは皆な折り曲られて、本然の質を失はねばならぬ。

大菊よ蠅目の辱を思はずや

である。野にある菊は如何に自然であるか。

山の菊曲るなんぞは知らぬなり

我菊やむきたい方へつんむいて

樂々と寝て咲にけり名なし菊

しかしこれでは都門には喜ばれない。

我柳しだるゝ藝はなかりけり

しだれねば都門の賞翫を受けざるを奈何せん。嗚呼厭ふべき都門や。

今の世や花見がてらの小盗人

大方の祿盗人や冬籠り

今の世相も亦同じ事である。

人里へ出れば清水で無かりけり

作らるゝ蘭から先へ枯にけり

都門はあらゆるものを不淨にし、あらゆるものを破壊に導く。

都人士は書畫骨董の道樂をやり、贋物をつかんで得々としてゐる。

村雨も露のにせ玉つくるなり

用心せねばならぬ。

都人士は田舎の百姓の勞苦を知らぬ。

あらまは汗の玉かよ稻の露

一粒の米も汗を流した結果と思はねばならぬ。

田の人の見るも恥し夏座敷

田の人を心で拜む晝寐哉

田の人よ御免候へ晝寐がや(嘯)

都人士にこの心あるもの果して幾何ぞや。

七一 美術品の海外流出

日本の美術品が外國人に取り去られて、日本は追ひ／＼空虚となるだらうといはれたことがある。一時西洋の文化に心酔した頃、その反動で、日本の舊物は二束三文となつたことのあるのは事實だ。一方外人は日本の品物を何くれとなく、もの珍らしく感じてしきりに買ひ集めて持ち去つたことも事實だ。自分の如く外國に遊んだことのないものは、實際のことがわからず、わが美術品の流出を慨した事もあつたが、近頃西洋の各國博物館を視察して歸つた人が、追々いふ事がほとんど同一で、外國に流出してゐるものは少くないけれども、實は逸品はほとんどないといふ事に一致してゐる。去年藤懸靜也君の歸朝したときにも聞いてみたが矢張り同様にいふてゐた。全體外人は日本の美術品には鑑識がないのと、日本の外人相手の商人が正直でなく外人の鑑識のないのに乗じて、贋物や仕込物をつかませるので、案外逸品は流出してゐない。それと西洋人の趣味は妙に偏よつてゐて、浮世繪、根付、印籠などに主に目を注ぐので浮世繪は多く持ち去られてゐる。併しそのう

ちの或る物は取り戻されもしたし、親しく外國を視察した日本の趣味家の視察によると、断片的のものが多いいふてゐる。根付や印籠は日本で用を失つたものだから、西洋人の欲するに任せて佳品も交つて出てゐるであろうが、書畫などは或る取除けはあるが、例へば平治合戦繪卷の國寶が、ポストーンにある等は残念だとしても、國寶級のものも殆んど、どこの博物館にも見當らず、寧ろ餘りに劣等なのが陳列されてゐるので恥しく思はるゝ程だといふてゐる。西洋へ出かける人は澤山あり、かの地の博物館を訪ふ邦人も少くない。されども實は審美眼のない人には仕込物と然らざるものとすらの區別も辨じかねるからさまままにいはれもし、考へられたのも無理はない。いつぞやも聞いた事だが、ポストーン博物館では人を日本へ遣して主として屏風を買ひ集める。何故といへば屏風のやうな大作には、贋物はない筈だといふ推測から何百雙も集めてゐるといふ。然るに今泉雄作君が事實の反する事を語つたので、恐慌を生じたといふ話もある位で、外人も多く金を投じて案外駄物をつかんでゐるらしい。かれ等とても今ではなか／＼鑑識が具つて來たので、これまで持ちこんだものを追々審判し、博物館の恥辱となる如き駄物は物置に片づけるといふ始末で、日本の美術品の陳列は、どこの博物館においても甚だ見劣りする位だといふ。わが

貴重品が案外多く流出しなかつたのは祝すべきだが、しかし誇るべきものゝ西洋にないのも、日本美術を理解せしむるには困つた事である。ある人は西洋博物館と交渉して互に寄託を交換すべしといふ。しかし國寶級のものゝ海外へ一時たりとも寄託する事は、危険がないとはいへない。矢張り日本へ外人を引いて見せるに若くはない。偶ま名寶展を見てかく所感を録する。(昭和五年五月九日)

七二 詩畫その本領を異にする

詩を有聲の畫、畫を無聲の詩と誰でも云ふてゐるが、今より二百年前この説がレツシングに破られてから、今は學者は此説を取らない。レツシングの説に據れば、畫と詩とは其本領が全く異なるもので、兩者が重なり合つて同じ事を描くべきでない。詩は畫の能はざる所を描くを本領とし、畫は詩の言ひ及ぶ能はざる所を描くのを本領とすべきだと云ふてゐるが之が幾ど定説となつてゐる。今説明の爲め一例を擧げると、船が靜かに繋がれてある有様を描くのは畫家の本領で、詩人は之を描くを要しない。然るに船が動き出して波の

上にゆら／＼する有様は畫家の筆にし難い處で、詩人の描寫を待つ所である。されば畫に詩を題する場合に於ても、畫に重複することは避けねばならぬ。畫筆の及ばない所を詩で補足し若しくは詩で發揮してこそ初めて題詩に意義があるのだが、實際は贅詩が多く、支那でも明清あたりから、漸く畫によくはまる詩や識語を録することが行はれ出し、日本でも山陽などが僅にその呼吸を呑みこんで、相當の題詩や題語を録した。

小説の中の人物を描くに、その服装まで細かく書かねばならぬことのやうに久しく信ぜられ、それが長く實行された。今日でもそれが小説家の大切の務めであるかの如く思はれてゐるやうだ。婦人の服装などに就ては、縞柄から色合半襟、帯地に至るまで、呉服屋の番頭でも顧問に頼まねば書けないほどの微細な所に及んでゐるが、前述の詩論からすると寧ろ餘計なことゝ云はねばならぬ。つまり服装を描くことは畫家の本領に屬するもので、詩人の本領ではない。殊に日本の小説のやうに口繪を挿むものにはその繪に譲つてよろしいのである。外國の小説は抵ね挿繪が無いから、幾許服装の説明をする必要がないでもないが、それにしても畫家の爲すごとくに細述するを要しない。文豪サカレの如きは這般のデテールを省筆する事を主義としてゐるが、これも前の詩論に基いて居るのであらう。

嘗て坪内逍遙博士とこの事を語り合つた事もあるが、博士も矢張りサカレに左袒する方で、斯るデテールに苦心するのは、詩人の本色でないのみならず、幾んど無益の業であると思ふ。その譯は、今日のやうに頻繁に流行の變化する時に、折角時の風俗を細かに描いても、その小説の出るか出ないかに、早や變るといふ有様であるから、幾んど描き甲斐がないと博士も言ふてゐた。

七三 藝の秘訣

月に叢雲と云ふは邪魔を譬へた言葉であるが、叢雲も時に依つては、却つて觀月の客に休憩を與へる道具となつて珍重がらるゝ場合がある。「雲折々人をなやます月見哉」の俳句は則ち此間の消息を描いたものである。

いつぞや坪内逍遙博士と談話の折、博士は云く、凡て藝術は鍊磨其極に達すれば不離不即の處に妙のあるもので、見てゐても宛がら夢心地になる。觀客に斯様な氣分ならせるのでなければ、妙とは云へぬ。落語や講釋等でも上手なのは鍛鍊を経てゐるから、抑揚が

あり調子がよく、如何なる武張つた話をやつても、聽者は決して肩の張ることが無いが、之に反して調子が萬遍一律であるか、若くは抑揚が拙であると、聽者の肩は凝つて堪へられない。演劇にしても、名人のする藝には必ず餘地がある。例へば人を後からねらつて鎗で突く場合などは、下手の役者がやると、少しも工風もなく實地のやうに遣るから觀客は實感を起して苦痛を感じる。壯士役者の藝は皆此流で少しも餘地がない。處で名優は鎗をつけながら、直ちに突き入らず、言ふに言はれない餘地をその間に置く。これが芝居の芝居たるところであるが、斯かる餘地が存するから、觀客に苦痛を感じしめず、何となく夢心地にならせて無量の快樂を覚えしむる。此の呼吸は上手にならねば、とても手に入らない。團十郎などはチト餘地があり過ぎた位であつた。菊五郎は適宜に此の餘地を加減したかに思はれる。どうも藝の未熟のものに限つてヲヴァー、ストレンドのやり方をする。それが爲めに自分自身も精が盡き觀客も堪らなくなる。觀客をして夢心地の間に藝を賞翫せしむるには、雲折々、月を遮ぎり觀客に休憩を與へねばならぬ。これが藝の秘訣である。

(明治三十七年一月)

七四 繪具の研究

津端道彦氏は越後出身で、土佐派の畫家である。多年刻苦研究の結果繪の具を工風したといふので、前年訪ねて來られてから懇意となつた。氏の發明についての大略をいふと、要點は不變色の繪の具を得るにあつて、洋畫にも用ゐられ、又毛筆で日本畫をも畫し得るものと、百方工夫した揚句に得たものは油繪の具であつた。種々の標本を畫したもので示されたが、最も自分の注意を惹いたのは純白の繪の具であつた。此繪の具は最も苦心を要したとかで、胡粉ではない。胡粉は年を経ると變化するといはれてゐる。氏の工夫にかゝるものは決して變化せず、顔料に用ゐても斷じて鉛毒の患がないといはれてゐる。全體純白の繪の具は、他の色繪の具の素となるもので最も大切であるから、これに最も苦心したといふのも無理はない。原料などについては秘密の事もあらうから委しく語る事を避けるが、紅くると名づくる白土がその原料だと聞いた。これはチヨークに似たものであるが、チヨークは變色すれどもこの白土は決して變色しないさうだ。この土が偶然津端氏の郷國

越後地で見出されたのも仕合せといつてよい。氏の話に西洋人の繪の具の研究のうちに、レッド、サンド(紅砂)の名が見えてゐる。これも、かれも紅の字を戴いてゐるのは偶然か、否か興味がないでもないといはれた。氏はなほ油繪の具を早く乾かす事にも大分苦心し、漢方の醫書まで涉獵して、漸く干子草といふものが油を乾かすに特効ある事を知つたが、さて此草、果して何れにあるや搜索に由なく、だん／＼詮索の結果、越後にカシ草といふものを得て、これを試むるに油を乾かすに効驗のある事が知れた。此カシ草は干子草と同物か、否やはまだわからないが、その音の近い趣のあるのは妙な吻合であると語られた。自分は繪の具については全くの門外漢であるが卒直に、自分の所懐を左の如く語つた。

古土佐の用ゐた繪の具は今日の繪の具と異なるところがあるやうに思ふ。敦煌石室より發掘された繪本の繪の具を見たが、千年を経た唐時代のものであるのに毫も變色して居らぬ。全然降雨のない砂漠に埋まり毫も空氣に觸れねば、かくも完全に保たるゝかも知れぬが、繪の具にも變色しない工風があるのではあるまいか。唐代の支那の文化はペルシアあたりの西洋感化を受けてゐるから、繪の具の如きもその感化がないとはいへぬ。日本でも早く上代に密陀と唱へる油繪の具があつた。油繪の具は強ち西洋のみに限らない、もし果

活 して古土佐に油繪の具を用いた事がありとすれば、津端氏の研究は繪の具を古土佐に復したのもといひ得よう。とかく日本は濕氣深い國土で、書畫を保存する事が最も困難である。變色を防ぐ繪の具の發見は誠に大切であると、津端氏を勵ましたのは、大正十年六月中であつたが、爾來氏は孜孜として研究を續けてゐるから、その後の進歩は著しいものがあるであらう。

七五 活 人 畫

今は故人となつた薄命畫家梶田半古氏宅の新年宴會に招かれて、活人畫と云ふを見せられたことがある。これは茶番のやうなもので、幕を張つて、その下方の切れ間から、男女さまざまの人の脚部の行装を見せる趣向で、跣足もあれば下駄穿きも靴ばきも、草履穿きも、さまざまある外に、脚部にも脚絆があるかと思へば、腰卷の垂れ下つたのもあり、洋装のスカートもあり袴のすそも見えたり、優雅な緋の袴の引ずりも見えりと云ふやうな鹽梅で、引きも切らず走馬燈のごとく足の幕下に運ばれるのを見ると、如何に

大勢が参加してゐるかと思はせるがその實さまで多くもない人數が咄嗟に脚下の行装を變じて幾たびも歩するのであるが、その足を見て武骨男であらうと想像したり、美人であらうと想像したり、顔が見えないからジレツたい感じがする。併し斯くいろ／＼想像を馳せるところに多少の興がないでもないが、なんとなく智慧の無い戯れのやうにも思はれた。この半身行列は古くから日本に行はれてゐるもので、坪内逍遙博士も幼少の折郷土で見たと語られたが、曾て紅葉山人は讀賣新聞紙上に腰以下の畫のみを掲げたことがある。あれも恐らく此の半身行列から思ひついた意匠であつたらうと思ふ。今日このやうな優長な戯れを思ふと隔世の感があるやうだが、「第一は足」と云ふ映畫の題もある位婦人はスカートが高く吊り上げて足の美を誇示する世の中であることを思ふと、婦人だけの足美の競進會を活人畫式にやつて見るのも一興であるまいか。

活 全體活人畫と云ふのはフランスの演劇で、タブロー、ウエウアンと云ふのがそれである。日本の演劇にも天地の見えと云ふて、一人の男が立ちあがつて刀を振り翳すを、女が立膝で、鼓か何かでこれを遮つてゐる態度がタブロー、ウエウアンに當るので、斯る態度はなか／＼美觀であるために、観客は其の態度の直ちに變ずることを惜く思ふ。そこで役者も

且く其の態度を持續して、觀客の賞玩を満足せしめる。乃ち無言の間に此の態度が二分か三分持續するのを活人畫と云ふてゐるが、實は智慧のない働きと云はれても仕方のない譯は、斯かる役目は往々にして顔ばかりよく、藝の無いものがやるからである。

七六 大隈侯遺事

(一)

會て大隈侯に隨伴して横濱市の原富太郎氏邸に招かれた折、侯は東宮殿下に拜謁したる時の事を仔細に語られたが大要は左の如くであつた。

自分は東宮御所に拜謁を賜る時は、一場の講演ジミタお話を申上る事が殆ど慣例となつて居て、殿下に於かれても御期待あつた様だ。先頃の御成年式には自身身體不自由のため參列せざりしに依り拜賀旁々參殿した處、此度は特に御居間に於て拜謁を賜り、例のごとく何か話せとの御誼あり、自分は依つて謹んでお受をして三十分許り愚説を申上げ

た。その要領は今度の講和會議に於てドイツに對する英米佛の態度の各々異なる事を説き維新の際、幕府を處分するに薩長各々の態度に寬嚴の相違のあつたことに引較べて、ドイツを幕府に比し、佛を長州、米を薩摩に比した。薩は幕府と婚姻した血族上の關係があるから倒幕後徳川家の處分に關しては自づから寬ならざるを得ない。即ち徳川家に對し、當初は百萬石乃至百二十萬石を與ふべしと主張した程である。これは米國が種々の事情よりドイツに對し寬なると同様の事である。然るに長州は徳川家の處分に對しては頗る峻嚴にしてなか／＼薩州の寬大論に同意すべくもなかつた。其主因は所謂長州征伐と云ふ幕府の處置に長州のひどく苦められ、その怨み骨髓に徹する心理状態は薩州と同じからざるものであつた、これを今度の交戦國にその比喻を求むれば恰も佛國と同様の位置にて講和會議に於ける峻嚴の論は最も佛國より出たのも無理ならぬことなりと云ふ様な比較論を試みた。

と語られた、斯る談話を申上る時には濱尾氏その他古老の侍傳は必ず傍聽するが例となつて居ると侯は語られた。

侯又語るゝには

陛下に拜謁しても往々三十分若しくは一時間に涉り愚説を申上ることがあるが、陛下はいつも左右のものを拂はれてひとりお聴になるが例となつて、大抵元老や大臣は五分か十分用だけを簡単に申上げて引下るが常であるのに自分のみ人拂ひで長談義をする所から、大隈は何を言上に及ぶのかと氣を揉むものもあるさうだが、實は氣を揉むほどのことを内奏するのではない。併し氣を揉ませるのも亦一興たらずとせずと笑はれた。

侯又曰く、

往々兩陛下に謁見中内閣總理大臣の拜謁を願ひ出ることもある。自分は國務の阻滯を懸念し斯る場合には必ず退出せんとするを兩陛下はいつも御引留になり、急ぐに及ばぬ待たせて置けとお命じになり十分も二十分も首相の拜謁を妨ぐることがある。斯る場合は氣の毒に思ふなど、語られた。(大正八年五月二十九日)

(二)

大正六年五月に早稻田なる大隈侯邸に天杯拜受祝賀の宴があつて、早稻田學苑の同人二千四五百名程招かれた。侯の席上の挨拶は例に依り興味もあり寓意もあり、會衆をして終

始傾聴せしめた。

侯は開口一番先づ自分の壽を祝するを欲せざることを言ひ、是迄曾て斯ることを自身もせず、人の請ひにも應ぜぬ、然るに今度天杯を拜受したる聖恩を感謝する會を開きたる所以は敢て過去八十年を經過したるを祝するに非ず、將來の冀望と理想を行ふ前祝として開きたるなりと陳べ、漸く本論に入り自家の經歷を語られた。

自分の生れたるは天保九年にあり、當時は饑饉年にて四民饑渴に困しみ死する者百萬を算すると云はれ、自分もまことにわるい歳に生れたものであると笑はせ、さて時の主權は大御所にあつた將軍家齊は隱退せしもなほ政治をみづからした。國中饑渴に困しみ怨嗟の聲、野に滿つるも耳を傾くることなく、大御所は晏如として自から贅澤を極めたと暗に大正の政界にも山縣ありとてこれを言外に諷し、斯る時に不平は起らざるを得ぬ。

大阪に於て大鹽の亂は不平の勃發なり、自分は不幸か恰もこの時に生れた。自分は國內不平の氣横溢の時に生れて不平の空氣に養成せられた。自分は随つて幼少より不平の徒であつた。不平と云ふとわるい様だが實は不平は進歩の母である。不平なくんば進歩無きなり、自分ばかりか天下心あるもの皆不平に堪へざりし結果は大鹽の亂後

三十年にして終に徳川幕府を顛覆しこゝに維新の大革命を見るに至つたのである。自分が國家に微功ありとせばこの不平の爲め多少働きたるに依る譯である。併し自分は失敗者なり、功罪相償ふや否や覺束なし、然れども絶えず國家の文明に對し満足する能はず、即ちいつ迄も不平である。早稻田大學を起したる如きも又國運に慊らずこれを助けん爲めの不平より出でたこと言ふ迄もない。然るに今は在學一萬、卒業一萬數千を算するに至る。之等は皆國運を助くるの動力にしてその力は甚だ大である。隣邦支那の學生の早稻田に業を受けたるもの無慮千五百人これ等も亦余と同じく不平無き能はず、その業を卒り國に歸るやその鬱結せる不平の氣は終に革命として勃發したと、暗に支那の國運を左右する原動力は早稻田にあることをほのめかす處、流石に侯の氣魄は雄大である。

(三)

大正十年二月廿七日に大隈老侯の主義にかゝる文明協會の茶話會を大隈侯邸に開いた。開會前に侯に書齋に面謁した。座中人なく、侯は先頃皇太子殿下に拜謁せられたる時の事

を大要左の如く語られた。

侯の拜謁は殿下が近く外遊あるにつき御祝辭を申上るためなりしと知られた。當日は濱尾氏を始め、供奉員も席にありしと承る。侯は例の如く一時間近く殿下の御外遊に就き御心得とも成るべきことを言上されたがその要旨は、

王者に敵なき事を縷述して昨今兎角御外遊を懸念するものあることが或は殿下の御氣を弱め奉らんことを慮り、勢ひつける爲に主としてこれを説かれた。日本の皇室は世界に冠たる御家柄のことを西洋諸國の皇室と比較して、宜しく自負あるべき事を陳べ、外國の君主に對して一步も譲らざる態度をお取あるべし、それに於ては外國語の如き、少し位言ひあやまることありても訂正や言直しなど御無用なり、飽まで豪放にあらまほしと、例の侯一流の御注意を披瀝し、終に日本武尊の故事を引き、尊は十八歳の時強賊熊襲を殺し給へり、尊は女子と見誤る様の秀麗の青年と熊襲は侮り酒を助けしむるために招きたるに却て其殺す所となつた。斯る勇氣は王者の勇なりとて飽まで殿下に勇を鼓舞あらせられんことを御外遊の御贖けとしたと承る。

侯の贖は眞に師傅たる人の贖也、外國の宮殿の美に眩し、氣怯れし給ふな、脇目も觸れず

潤歩あれなどの注意もあつたとか、慈親の言とも見るべきである。

(四)

大隈老侯の晩年に、われ等侯に昵近のものは、日を定めて月に一回侯の談論を聴聞する事を例とし、その會を月一會と名づけた。毎々面白い話が出たが、大正十年六月には侯の舊藩主鍋島直大侯の薨去があつたので、談は大隈侯の事に涉つた。席に久米邦武翁もあつたので、翁の口添へもあつた。

老侯曰く、直大侯は眞に殿様らしい人であつた。大かた最後の殿様であらう。あの人は祖宗以來の直系で、鍋島家では常に子が多かつた爲め、必ず男子が相続し、養子を迎へた事は一回もない。親類は實に澤山で八十名を算する。今度も重なる親類だけを死亡廣告に列せんとしたが、それが新聞紙の一欄を要するほどあるので見合はせた。親類の主たるものは徳川家である。直大侯の母(義母)は家齊將軍の女であるから、徳川家は最も大切な親類で、告別式時には田安家徳川達孝と柳澤は共に門前に佇立し、徳川家達公は玄關前に二時間も立つてをられた(久米翁曰く、大隈侯も玄關に立たれたので告別式に臨んだ幾千

の弔客は、先づ入口でこの二大家に最敬禮を施すのに忙しかつたと)。なんでも毎夜棺前に侍する親族と近親が二百名もあつた。これ等は皆な宿泊した爲めにその取扱だけでもなかなか大混雑であつた、など、語られ、さらに臨終の際の事に及び、老侯曰く、直大侯は危篤の場合に臨んで、特に宮内省の雅樂を聽かん事を望まれ、その望に應じ、樂人は三回まで枕邊に琵琶を弾じたが、とかく音樂に興味ある人は、他の官能が働きを絶ちた後も、音樂はその波動作用で快感を興へるらしく、直大侯はこれを聽いてひどく喜ばれた。恐らく明治大帝がその昔、特に直大侯を召して琵琶を弾せしめられた事などを思ひ出され、常に此事を一生の光榮として忘れなかつた直大侯には、琵琶を聽いて他人の想像し得ない快感があるらしいなどと語る。

老侯は舊君の臨終頃より毎日訪問され、參集の舊諸大名を見るにつけ、五六十年前の既往に思を馳せ封建の當時を、何から何まで記憶より呼び起し感懐禁じ難く、終に封建制度の如き西洋文化と根柢を異にするものが、格別の扞格もなくよくも推移したものと、自問自答し、冥想の間に多少得るところもあつたと語るゝところを聞くに、元來オートクラーシーとデモクラシーは柄鑿相容れないものであるのに、それが大なる扞格もなく案外圓

滑に推移代謝したのは、何故かと考へるに、多くの理由もあるであらうが、封建治下の武士制度には、人民を主に立てた倫理的の教習が頗る多いといふて約一時間に涉つて説かれた。そのうちの二三點を挙げれば、武士は百姓町人の上に立つて座食したかの如くに見えるが、實は武士ほど儉素に身を持したものはなく、なか／＼普通人の堪へ難い事を堪へたものである。時に民を虐げたり無法の重斂をやつたものがあればそれを重科としてどんな大名でも罰する事が常であつた。例へば百姓一揆の如き民衆運動が起つた藩には、曲は大名にありとされ、相當の所罰があつた例は少なからずある。朱子學や禪學や家庭の質素生活やその言行一致や種々の原因はあつたに相違ないが、とにかく人民を奴隸視した事は斷じてない。寧ろ人民本位を政治の大綱とした趣がある。百姓に對し切り捨て御免などいふ事も、久しく誤傳されたが、決してそんな事が許されたものではない。只僅に許された場合は、武士の名譽を傷けた時などであつて、往々濫用された事はあつても、決してそれが封建の本旨ではなかつた。なんといふても封建制度は人格を貴び且つ高い人格を養成した。この點は西洋に例を求めると、恰も清教徒によく似てゐる。さてその人格がやがて西洋の文明を受け入れて、よく咀嚼しよく調和し、移り變りに扞格なきを得た主たる原因である

といはねばならぬ。と鍋島論語の四大綱領なども引用し詳説されたが、侯が東西文明の調和研究に常に心を用ひ、少しも油斷のなかつた事がこの日の會合において最も明白に知られたので、われ等は皆な一種の感に打たれた。

(五)

一日大隈老侯を訪ふた折、種々なる談話が出たがその中の二三を語らう。

侯は飛行機に就て語るゝに、英國も世界戦争の當初には流石に飛行機に冷淡であつた。獨乙の飛行機が龍動ロンドンを襲ふに及んで初めて目を覺ました。當時ロンドンに發行のポンチ繪は覺醒に効力があつたが、その繪は獨機が英國の海岸の柳にひつ掛かつて墜落する圖を描き、そこで海岸全部に柳を急に植ゑる政令を發したと云ふ様な言葉を書いて大いに諷刺した。これが痛罵骨に徹するの妙味があつて、英國も後れ馳せながら今では飛行機の數に於ても製作術に於ても列強に後れを取らぬに至つた。

侯はその頃米國から渡來の曲藝をやる飛行家の訪問を受けた時の事を語り出されて、飛行機の製作もその國々の國民性を加味せねばならぬ。例へば敏捷なる國民の操縦するも

のは機械をその様に作らねばならず、沈著の國民性に應ずる機械は同じくそれに應ずる特色を要する。故に飛行機は自國で製作するのが最もよい。而して自國製を上乘とする程に製作術の進歩するを要するのだ。

侯は世界今後の趨勢を論じて警語續出されたる中に、今や西洋は物質文明の殆ど極度に達し、その結果としてあの様な大反動があつた。所謂盈れば缺くるの例で、彼に於ては別に異むに足らぬ。日本は未だ彼の如き物質文明を領有するに至らぬから、同じ反動の餘波を受けてたまふものかどうか今後の世界の歸結を見るのが一興である。自分は老たりと雖も、其歸結を見るために壽を保たんことを期して居る。地下の先輩に報告する必要があるからだ。

侯は漢字制限論に移られて面倒の字を撰んで名とするの愚を云々せられた。自分が重信の名は名乗であるかと問ふたところ侯の答へらるゝに、實は八太郎の方が俺は好きなのだ。それが慶應二年に菅原朝臣など、春風に書くことになつたので、八太郎とも書かれず、遂に名乗りを名とすることになつた。俺の八太郎はまだしもだ、山縣の狂介などは一寸困る名だて……(大正一〇、四、七)

(六)

大正八年二月三十日に早稻田の邸に大隈老侯を訪問したるに偶々來客なく侯と一時間半に涉り談笑した。中に侯は講和會議の結末に就て左の如く語られた。

歐米の強國も案外ケチだ。敵國人の財産の聯合與國に存するものは皆沒收せらるゝ筈にて日本に於ける獨人も亦この厄に遇ふものである。これ取りも直さず一種の「闕所」である。斯る沒收を以て戰爭に失ふ損害を幾許とも償はんとするにあらは勿論なれども、今頃封建時代の闕所を罪もなき敵國の個人に行はんとするは古臭い限りなり、日本の如き講和會議に於て斯ることをこそ堂々反對し、口に國際の公道とか權利正義とか云ふて居る本家本元の列強に鼻を明かすべきに、例の如く委員の黙過したるは遺憾である。又獨帝の罪を追究して奈翁に對するごとき懲罰を行はんとするも亦古風なり、昔は個人的豪傑は萬能なりし趣きあり、隨つてその人の存するを不可とせるも、今は個人の性格如何に豪なりともこれを目の上にあぐべき時代にあらず、敗後の獨乙に前帝を置きたりとてどれほどのことかあらんと、語られた。

(七)

熱海に遊んだ機會に往年大隈侯がこゝに來られた際の事を旅館たりし富士屋に聞かんと
思ひ立ち、一たびは富士屋を訪問した。その結果富士屋主人石渡喜一氏二度まで余を訪ね
來りわかるだけ聞き取つた。終に宿帳の寫しをも得た。侯の熱海に遊びしは前後兩度で一
回は明治十年八月第二回は明治十四年一月であつた。この二度目が政治的意味を有すと傳
へられてある、先づ宿帳の寫しを左に録す。

明治十年八月廿四日着

九月廿一日御立

大隈様 奥方二十六歳

從者

久松莊一郎(30)

神山 聞(40)

吉田 登(18)

三宅 頼三(20)

入江 俊次郎(19)

小川 多吉(25)

下婢

きく(15) とく(15)

美登(25) きん(17)

外に

相良 知安(43)

大石 良乙(25)

明治十四年一月十三日午後着二月九日御立

大隈様(44) 奥方(34)

從者

内田 頼輔(32)

木佐 美重節(35)

入江俊次郎(20)
 渡 魁(27)
 日高祐輔(24)
 横山藏之丞(25)
 永井正冬(21)
 杉野由藏(37)
 こと(43) か 禰(19)
 外に
 八尾政文(30)
 矢野文雄(30)
 矢野貞雄(19)

二回共に多人數にて且つ滞在の長きこと見るべきである。従者中知らざる人が多い。富士屋は明治十三年三月火災に罹りたる由なれば大隈侯二回目のは新築の家に宿されたるならん。十四年には大隈侯の來遊と共に伊藤、井上、山縣諸公も來り皆富士屋に宿されたる由

富士屋の主人は語つた。尤も此時三條公は相模屋に宿られたる由に聞く。この時熱海會議のありし様にも傳はるが蓋し事實に相違なからんか。但し富士屋の主人は何等政治的消息を知り居らず。成島柳北氏の幾回かの熱海紀行を編纂したる一書「熱海文藪」を借り受け見るに十四年の紀行に伊藤、大隈兩公の去來を略叙しあれどもこれにも政治上の消息を載せてない。大隈家に傳はる伊藤公の書狀に據れば井上侯の宿は相模屋に定めたりとあれど、然らざるは何かの都合にて變更したるものか、富士屋主人の語る所に依れば井上侯は露西亞の軍艦に搭乘して來られたと云ふて居る。熱海町民は此時サーチライトに一驚を喫したと語つた。井上侯は熱海に此時に來られたのが初めて、且つ最後だと語つた。

富士屋主人はこの時大隈侯以外の話もいろ／＼したが話の序に一二を附け加へる。

三菱の岩崎彌太郎氏は當時豪華の時代で相模屋が定宿で従者も多かつた爲め兎もすると面倒が生じた。青木中將が恰度岩崎氏と同時に宿泊した時などは、従者と従者の間に何か行違ひがあつて双方共に憤激して何れも相模屋から富士屋に移りたいと云ふことで交渉を受けたが、青木中將の方が従者が少く始末がよいので、これを引受けることになつてヤット片付いた。

黒田清隆伯の旅館も相模屋であつた。黒田伯はある薩州出身の顯官と同宿中喧嘩を始め何とも納まりがつかず、その時富士屋に得能良介氏が居つたので、氏が迎へられて仲裁に行きヤツト納めた事もあつた。

(八)

私の經歷中で最も感激したことは、大隈老侯の死後、私が主任となつて、その葬儀を營んだ事である。長い間薫陶を受けた老侯が世を去られたことが國家としては言ふまでもなく、私に取つてもこの上ない大事件で、私をしてどんなに緊張させたか知れない。老侯の葬儀は、誰云ふとなく、國民葬と一齊に呼ばれた空前のものであつた。葬儀長は物故された宮内大臣子爵波多野敬直氏であつたが、私が子爵よりも、大隈家よりも一切の葬務を任された。これが私の經歷中最も光榮とする所である。第一に葬儀の形式が問題で、私はひそかに故加藤高明伯に相談をして、英吉利のグラッドストーンの葬儀に倣ふことが、國葬よりもヨリ以上侯にはふさはしいと考へた。侯が國民を友とし始終國民景仰の的であつた點からも、英國のグ氏同様國民の面前にその柩を据ゑて、告別の式を行ふのが至當である

と感じた。この事が大隈家の快諾を得て成り立つたことが、私に取つてこの上の無い喜びであつた。併し短時日にあらゆる準備を整へてこの事を遂行するのは決して容易の事ではなかつた。日比谷公園にあれだけの式場を一晝夜に作り上げる事も容易でない。葬儀當日の朝先づ大隈邸で告別の式を行ひ、勅使を初め各官家の御臨場を辱ふしたその上に、柩を日比谷に移して數時間公衆に參拜せしめ、更に護國寺に柩を移して、形の如く埋葬を終ると云ふことを、一日に成し果さねばならぬ事であるからなか／＼の事で、一步を誤ると一日に完結を告げないやうな失態が起る、だから非常に苦心したが、それが豫定の時間の通り殆んど一分もあやまたず進行したのは、偏へに葬儀に與つた千餘の委員が何れも緊張して衆心一體であつた結果に外ならぬ。柩が老侯の邸を發する前に、早稻田大學並に附屬諸學校の學徒二萬の大衆は、豫じめ通路の兩側に堵列しその前頭は九段坂の上に及んでゐた。柩が儀仗兵に護られて自動葬儀車に運ばれ、九段下を通る時に堵列の學生は行列の後方に尾して日比谷まで駈け足で一分の休息もなく行進した。儀仗兵を督された堀内將軍があとで語らるゝのを聞くと、あれだけの距離をあれだけの大衆が一氣に駈けつけることは驚異と云ふてよも、軍隊には迎も出来ない事だと云はれたが、こゝにも大衆の緊張があつたか

ら出来たと云ふより外はない。日比谷の式場は前面に百六十貫の重量ある柩が置かれ、場内は花と旗とで飾られ、左右両側には参拜者の大なる通路があつて幾十萬の人が流るゝ如く入り込むのを棺前から左右に吐けるやうしたので、少しも混雑を見なかつた。寒い季節であつたが、場に入るものは皆嚴肅の態度で脱帽して敬意を表した。中には柩に向つて賽錢を投ずるものも無數にあつた。この光景を見ては私も實に感激に堪へなかつた。この場に臨んだ大衆の内には、内閣大臣を始め朝野の名流多數の官吏もあつたが、些しも階級的臭氣が無かつた所にこの國民葬の特色があつた。斯る大衆の運動には幾百の警察官の手を借るのが通例であるが、千餘の委員が斡旋して遺憾なく秩序を保つたのと、學生が警官の爲すべき任務を軟かな禮儀ある態度で行つたことは特記を要する。斯くして幾十萬の大衆の告別が終ると、柩は護國寺に移され、爰に埋棺の終つたのは夜の九時頃であつたが、全く豫定通り些しの故障もなく結了したのは、私が生涯忘れ難い銘心の大事件である。斯く筋丈けを書くと、何でもないが、葬儀が無事に終るまでにはいろ／＼困難があつた。併しそれが刀を迎へて解けるやうに、どん／＼運んだのは、偏に老侯の遺徳と多くの委員を始め早稻田大學並に關係諸會社、政黨、市廳等が全力を擧げて援助せられた結果である。

七七 坪内逍遙翁數則

(一)

名家の遺蹟其家屋土地等を有形の儘保つ事は大切であつて、日本でも心付かれて、保護建造物等に編入され、國家で保護してゐるものもある。西洋あたりでは別して意を用ひてゐる。併し日本に於て文豪の遺蹟等は中々保護されにくい。必竟日本では文豪を西洋のやうに價づけないからでもある。乃木將軍の家などは保護されて永久に保たるゝかも知れないが、將軍の如く神と崇めらるゝからこれは例外と見なければならぬが文豪などになるゝと、その所在の土地とか親戚縁者、或は門人などにその志がなければ保護され難い。建物などは年を経るに隨ひ朽ちもするから、保護するには相當資金もいるので、動もすると厄介扱ひを受ける事が珍しくない。京都の伊藤仁齋の居でもその子孫が連綿と續いてゐるからその家も存在してゐるのだが、さもないければあれとて早く亡びたに相違ない。坪内

逍遙の熱海の居などは文學者の家としては相當に大きく、土地もかなり廣く、塔式の文庫等もあつて一種の風致を添へてゐる。逍遙の作は抵ねこの家で出来たものであるから、逍遙没後は文豪の遺蹟として保護したいものである。この家には温泉も引いてあり二三貸屋もあり、書物も多く藏してあるから、相當誰が住むにしても便利がある。窮措大の廢屋とは全く趣きを異にしてゐる。西洋の沙翁の舊居の如くその土地で名物として飽くまで保護すべきだが、熱海の如き浮薄の土地にはそれは望み難い。早稻田大學こそは適當の保護者であるけれど、教員の遊樂の場所として維持するには相當金もかかり、隔たりたるところにあるだけ管理も面倒で、大隈老侯の舊邸維持にかなり苦勞してゐる學校當局に難色がないでもない。逍遙自身も學校を煩はす事を本意としないので、結局一財團を形づくり、それに全部を寄附する事になつた。その財團の目的は逍遙の意志である國劇向上に資するといふにあつて、その財團で永世保護する事になつた。逍遙夫婦がまだ健在で現に住居として必要であるのに、寄附するのも早計であるけれども例の性急の翁、思ひ立つては一日も猶豫が出来ず、折角の志であるから、いふに任せて財團の申達を公署になすまでに運んだ。逍遙は子もなく相続人もないから私産は死後不要であるやうなもの、皎潔恬淡の

質でなければ出来ない業だ。一心只藝術のためにする外、何もものないからさきには古稀の記念にと演劇博物館を設けた時に、進んで私財を投じ東京の邸宅をも寄附し今またこの學がある。かゝる麗はしい身後の仕末をなすものが吾が友人中にあるには、われ等をして感激に堪へざらしむる。行く／＼は數多き著書の版權をもこの財團に寄せんとして遺言書にも記してあるといふが、その所得は邸宅を維持し得るであらう。併し舊址の保存のみがこの財團の目的でなく、名を國劇向上會と命じてある通り、向上に力めるには多くの義捐を仰ぐ必要もあるので、局に當るものはよほど力を致さねばならぬ事はいふまでもない。

(昭和五、七、四)

(II)

坪内逍遙翁をその書齋に訪ふたとき、談は翁が譯筆を揮ひつゝある「マクベス」の事に及んだ。翁は原書をひらき、巻頭手負の武士が戦捷の注進をなすところを共に讀んだ。翁云く、西洋の沙翁研究者こゝに就て一説をなしてゐる。全體戦勝の注進に手負のものをゆるは不吉である。且つ手負のものをしてかゝる長セリフをいはしむるは不自然である。

おそらくこの邊は後人の竄入であらうと。この説一應尤もに聞こゆれど、實は劇を解しないものゝ説である。脚本は新登場の役者のために書く場合が少くない。新登場者に花を持たせるため、わざと長セリフをいはしむることは日本においても多く例がある。沙翁の作にも同じ臨機の工風がないとはいへぬ。この邊が芝居を心得ねば理解し難いところだ。學究は芝居の心得がないからその譯にかゝるものに、往々誤りがある。必竟劇と舞臺に通じないからだ。自分は深くこれに服した。

(三)

坪内逍遙翁折に觸れて和歌を詠じ、俳句を物されるも決して人に示されない。翁は文藻において往くとして可ならざるなき天分を有さるゝから、和歌でも俳句でも、いさゝかつとむれば妙境に至るのは必然だが、翁は決して勉むることをせぬ。また他人に直しを求めぬ。平生云ふ、他人に直してもらへばよくなるにしても自分の心が失せて仕舞ふ。如何に拙でも自分の心をそのまま存して置きたいとの主張が動かない。自分の如き長い交はりには、時々口ずさみを手紙の端などに書いて示さるゝ事が數々ある。大震災の折などには

翌日自分の家に見舞に來られて、二三首の和歌を示された。それは今も保存してあるが、その他にもいろゝある。こゝに前年熱海に於て翁が肺炎に罹り癒えて後、口ずさまれた俳句が五六首ある。この疾患は翁の六十七歳の時で、なかゝ重患であつたので、自分も氣遣つて二三日左右に待して看護した事がある。翁も一時悲觀した様子が見え、憂慮に堪へなかつたが、幸に回復されたのはこの上もない事である。大正十四年四月の中頃、すなはち回復期に向つた頃の書簡に、

(前略)漸快につれて随分無聊を覺え候ひしが、歌をよんで見る氣にもなれず、氣まぐれにも生れてはじめての俳句すさびをいたし、例の秋艸子へ朱を乞ひにさし出し候處、廿餘句の内四五句は物になつてゐると申、朱を加へたり、評をしたりしてくれ候、其中をお笑ひ草に少々左にわざともとのまゝ御覽に入れ候

病來心機不思議に一轉して死を忌み怖るゝの念頓に空しく寧ろ速かに世を辭せん
ことをこひねがへり

歸らうぞ花も見あいた日も暮れた

奥が見えて花見の踵返しけり

四十にして死なむこそたやすけれども見返しにけり末二年とも見えたるにわれは
ことし六十七歳

十七度見返し春を病む身かな

春風やいざ散る花ともろともに

願くば朧月夜の落ち椿

導尿といふ治療にくるしめられて

生きながら身して逆剥ぎの蚯蚓かや

晝夜寸時も止息せざる幻像の往來代謝に悩まされて

まぼろしの海に漂ふや二週日

これやこの目に物見する苛責かな

死機を逸す

あたら春を死にそこなうてしまひけり

つれづれを苦にせぬほどに病み訓れぬ

四月三日はじめて庭におり立つ

わが物とおもへぬ脚の重みかな
たれが腰に絶るぞとばかり三足かな
春寒や脛ほどに股の細りける
助かりて見ればこの後とても何かせねばなるまじ
さりとても存らへば生きてゐるからは
これ等は翁の俳句の處女作と見るべきものである。句の巧拙はともかくとして、翁の天真流露の風味は棄て難いところがある。

(四)

逍遙翁曰く、日本の小説類は多く劇や脚本に近いものである。源氏物語と西鶴物は全然劇の範疇外であるが、他はおほむねその形式文體の如何に拘らず劇の脚色である。自分の處女作書生氣質なども、當時小説の積りで書いたのだが、今思へば、あれも矢張劇である。又曰く、人生觀を根本として小説を書く事は自然主義の功德といつてよい。今の小説は不完全ながら人生觀を主としてゐる。ともかくも進歩である。劇作者脈の小説を打破した

のも、芝居がりの小説を一掃したのも自然主義の賜である。

日本のみでなく西洋でも長い間脚色が小説の骨子であつた。その脚色に初、中、終の形式が必要と日本の小説家が考へたばかりでなく西洋でも、スコットやリットンなどは皆さうであつた。然るにこの形式も全く自然主義に打破された。

又曰く、小説は自然主義の感化を受けたが、演劇は中々保守で西洋においても割合に自然主義の感化を受けぬ。これには種々の理由があるがとにかく事實然る事は争はれぬ。

又曰く、今の小説を書くものは人生觀を根本としてゐるが、自から欺かざる告白をなし得るものは果して幾許あらうか。或は自ら衒ひ或は世に媚び、或は爲にするところのものが甚だ多い。併しとにかく人生觀を根本にするやうになつたのは、一進歩に相違ない。又眞劍といふについて語る。眞劍といふは努力といふばかりではない。馬琴の如きは努力はあれども文學者としての眞劍はない。眞劍は自から欺かざる告白にあるのだ。そしてその告白は、人生のためにするものでなければならぬ。スペンヤリストの態度威嚴もこゝにあるのだ。

余は文學者の不品行について翁に問ふ。曰く文學者の不品行は日本のみでない。西洋で

も随分多い。只西洋の文學者は大作を出して世に貢献し、いくばくその罪を償ふが、日本の文學者は作をもつて償ふ事が出来ない。これが彼我の相違である。

日本の文學者に大作が少い。しかし多作である。恰も席上畫を作るが如く。匆卒であるから駄作が多い。

又曰く、維新前まで兩性の美は必ず俳優を藉りて形容した。曰く田之助、曰く宗十郎の如しと俳優を標準とした。西洋では兩性の美をギリシヤの男神や女神に比する。流石に標準が高い。自分の書生氣質に田の字とあるのも實は田之助を藉りたのだ。當時自分とても因襲に支配されてゐた。

談は狭斜より發した藝術のことに及んだ。翁曰く、日本の小説や演劇は低級の社會に起り、それが非常の發達を遂げた。當時階級制度の壓迫に堪へなかつた低級者流は、僅に狭斜の一天地を己が自由を恣にする城地として、こゝに遊戯三昧に癖を散じた。所謂平民文學、平民藝術なるものは皆こゝより生れ出た。狭斜文學の不まじめなるも怪むに足らぬ。只驚くべきは狭斜文學藝術が三百年連續の太平に培養されたとはいへ、如何にも幅廣く丈高く、ほとんど一世を風靡するに至りし事は奇蹟ともいふべく、世界において絶對に類例

を見ない面白い現象である。

徳川氏が三百年の太平を持続し得た政策は、人民を遊戯三昧に導くにあつたといふても強ち不可はなからう。蒼生は全く愚了されたのである。もし少しくまじめに文學藝術の研究に志し、もしくは指導するものがあつたならば、かれが如き絢爛の花を發した文藝は堅實なる實を結んだであらうに、そのすべてが遊戯的であつたために、宴樂の餘興とはなれど、眞面目の藝術たる事を得ずして已んだのは惜むべきである。

藝術の悟脱といふに就て翁曰く、あらゆる藝術は悟脱の境に達すると洒落輕妙、いふべからざるの趣きがある。書においても畫においても將た音樂においても然りであるが、只演劇のみが除外であるかの如きは奇といはざるを得ぬ。自分はしばしばその理由を案じてみたがまだ確たる解を得ない。沙翁の如く割合に若い年齢で逝いた人は、夫子みづから煩悶中であつて悟脱の域に入らなかつた。しかしその作は却て妙に人心に投じた。ゲーテのファウストの如き、若い頃書いた前編はおもしろ味があるとして受取られてゐるが、八十歳近くの晩年悟脱の域に達してから執筆の後編は却ておもしろ味がないと評されてゐる。元來劇は煩悶をもつて支配されてゐる多衆の見世物であるから、悟脱せぬのが却て成功を

博するのことも思はれる。他の藝術と趣きを異にする處のあるのは注意すべきである。

(五)

或る時翁は背景に就て語られた。

翁云く、背景は演劇にバック、グラウンド、繪畫にバックと云ふてゐる。本來有形のものに就て云ふことの如くなりしが、近來は追々擴張されて無形のものにまで言ふことゝなつた。例へば言語にも背景があるとしばく聞くが、それは伐木丁々など云ふ言葉である。翁は劇に苦心したゞけ、背景に最も意を用ひ、且つ背景を解するにも他人の氣付かぬ所に及んでゐる。そして背景を最も廣義に解して居る。

翁曰く、芝居の背景は餘り寫實に過ぎ且つ繊細に渉る時は、却つて背景を淺くし奥行無からしめ、隨つて趣味を減殺する。何となれば觀客の目が背景に局限せらるゝからである。能樂などの背景は極めて平淡で、幾んど背景がないと(有形の)云ふてもよい。その代り、文句に背景を補ふ種々の説明があり、其文を味ふ上より生ずる想像や聯想で一種無形の背景を作り出すから、なまなかの道具や幕などを以つて有形の背景を作るよりも一段そ

の奥行を深からしめる。

人形芝居なども同様で、今は寫實的の背景を道具で作るけれども、昔は幕の外には背後に何もなく、淨瑠璃の文句で背景を（無形）つけ聽者觀者の想像に任した。此點は能と略ぼ同じである。

翁云く、過日東儀鐵笛等の演じた豊太閤と淀君の劇に自分は特に注意して、金屏風を立て廻はして背景とした。實はこれがよい意匠であると思ふ。何となれば、太閤と淀君の關係は何人も知るの史實で、如何なる人もこれを見て種々の聯想を起さないものは無い。此の聯想こそ此上のない好背景で、如何なる道具立をしても之れに及ぶものはないから、まなかの背景を作れば却つて觀客の想像を狭くするの虞れがある。

西洋でも現時背景にひどく苦心する。パーカーやレーンハートなどは色々苦心した揚句、恰かも自分と同意匠を用ゐてゐる。乃ち沙翁劇の背景に雪の霏々たる景を墨繪で書いてゐるが、これは東洋式の意匠であつて、甥の士行が在英中寒山拾得の背景をパーカーに示した所、成るほど云ふて、それに倣つたのだと云ふことである。

翁は机上の茶會記を出して曰く、お互ひがこれを讀むとおもしろく感ずるのは、東山時

代の事や、茶事の變遷や、其他史實を知るが故にそれが背景となつておもしろく感ずるのである。若し之れを素養なき人々に讀ませしめたら、恐らく乾燥無味で何等興を覺えない。何んなれば渠等は背景を作り得ざればなりと。如何にも其の通りである。背景が人智の深淺に關することは言ふを待たない。

背景が右のごとく人の智見に關する以上は劇のごとく廣汎の區域に互り、人の娛樂に供せらるゝものは、何人にも感興を起し、且つ聯想を生じ得るポピュラーのものを劇の主題とせねばならぬ譯だ。翁はこの事を更に説明して云く、現代の小説は何故におもしろいか……何人にも廣く何故におもしろいか、現代のあらゆること（日常目睹耳聽の事）が其の背景となつてゐるからであると。

僕問ふて曰く、背景の深淺は人の智力の厚薄に關すると云ふからには、最も大なる知識學問を有するもの、例へば天文に通じ宇宙を窮めてゐるものなどの頭中に作り出す背景は最も雄大であるべきだが如何。

翁云く、智識に就て多少の注釋を要する。唯だ智識（インテレクチュアル）だけにては背景とはならぬ。背景を作るには情感を要する。乃ちエモーショナル、インテレクトを要

する、と。

(六)

坪内逍遙翁といつぞや雑談を交へた折、君の祖先は誰かと尋ねたところ、翁の答へに、古い事はわからんが織田信長に仕へて、曾て命に據り三種の料理をすゝめた時、信長はそのうちの最も粗末のものを可としたので、織田家の繁榮を祝したと傳へらるゝ。その料理人こそわが祖先で、その人は坪内某としてあつて名がハッキリしないが、美濃の太田には坪内定益といふが城を構へた事もあつて、その地には自分の家も關係があるから或はこの定益なる人は料理をすゝめた人と、血統が通じてゐるのかも知れないと語つた。自分はこの話を聞いて翁にいふた。君の家祖は矢張り藝術家だね。君の如き藝術家の出られるのも不思議はない。只君の祖先は食味を料理し君は心靈を調理するの差があると。

(七)

自分は毎々熱海に逍遙翁を訪ふけれども、高田半峰翁と逍遙方に落合つて三人揃ふこと

寫眞を送り越された時手紙の端に左の和歌が添へてあつた。

しかすがに翁さびけり君もわれも心は昔しなからなれとも
語らはむありし昔しをそのこそ友いくたりか今残りたる
おひ羽根をかるたを里のおとめらと遊びし人の面影が是れ

甲子歲端 せう えう

などは滅多になかつた。大正十三年の一月、初めて三人、逍遙の雙柿舎に珍らしく會したので、主人逍遙は特に寫眞師を呼んで、吾等三人が双柿の樹下で立ち竝んでゐる所を撮影し、數首の和歌を口吟したのが、如何にも友情淋漓としてゐるので、それを寫眞の裏に書いて貰つて、今も珍藏してゐる。その歌は、

外にいて、影うつさせむ四十あまり八とせ添へぬる三つの影をも

まゐらせむいへつともなし老柿の影をだにこそとりていね友

冬さりて人目かれぬる山里も君を迎へて春めきにけり

あるしまうけなき宿ゆゑにあたたかき冬日のみこそ君をもてなせ

わいへんは山の庵なればなによけむかよけむちふもかひ(貝)なかりけり

逍遙翁の書簡に云く

此たびはいつもよりもお匆々にて何だか物足らぬ心地いたし候が、併兩兄お揃ひありしため、一かどの記念の會合となり候。

その記念寫眞は、光線の具合あしくて、不出來ながら取揃へ呈し候。例の「翁さびけり」の腰折寫眞の端に書けといふ注文なりしが、兩兄とも大分若くうつりしゆゑ、歌とそはず、さればとて搔遣りすつるもさすがなる心地いたし候故、あり合ふ半切へ他の駄句と共に書きならべ候御一笑。「わいへんは云々」は申すまでもなく、催馬樂の

我家は戸ばり帳も懸けたれば大君來ませ聲にせん、御肴には何よけん、あわび榮螺サゲナガかせよけん

に因みて「貝」なかりけりと洒落れた積りに候

とあり、若がる吾等を思ひやり「翁さびけり」の歌をわざと寫眞に書かなかつた心づかひも友情の發露であり、貝の洒落も亦面白い。

七八 佐久間象山の遺事

象山は達識の人で、早く開國論を主張し、それがために守舊の徒に忌まれて横死した。吉田松陰が國禁を犯して外國船に投じた事件の背後にも象山がゐて、松陰に外國見學を奨勵もし賛成もした。その證據となる書簡は今も京都の尊攘堂に藏してある。象山は松陰の脱出に連坐して獄に繋がれたが、獄中にも空しく日を送らなかつた。當時は頗る外交困難の際で當局はひどく困つたが象山は「春秋命準」と云ふ一書を編した。その書に據ると「春秋」は一部外交の書である。どんな場合に處するにもこの書にチャント手段方法が備はつてゐる。外交家は宜しくこれを準繩として事を處すべきであると多くの例を分類して、この場合はこれあの場合があれば一目瞭然搜索に便するの書を作つた。象山の逸事を語るものは曾てこの事に言及しないが、自分はその寫本を有してゐる。國際公法など云はずに春秋を外交の規範とした所に象山の見識がある。象山は立派な漢學者だが、多くの漢學者はその學問を殺してゐるのに象山は常に活用してゐる。曾て礮卦といふ書を著はして、易

を以て砲術を論じたことがある。この書は象山自筆で自分の交はりある醫家宮本仲氏が所持してゐたが、惜いかな大震災で亡びた。象山は漢學者であると共に外國の學にも通じてゐた。あの人の書齋には多くの原書が架上に並べてあつた。ある懇意の人に象山が世話になつたので、何か禮をしたいが、何か欲しいものがあらば、遠慮なく云ふてくれといふた。その人は沈思の末先生は澤山に望遠鏡を御所持だが、一ツ御割愛をと申出ると、象山は斷りをいふて、望遠鏡は澤山に所持して居らぬといふと、その人は象山の背後の架上の物を指し、あれほど澤山あるではありませんかといふたのには象山も一笑を催し、これは望遠鏡ではない西洋の書籍であるといふた逸話がある。當時の洋書は、今よりも背が金でゴテゴテ飾られてあつたので、これを望遠鏡と見誤つたのも無理も無かつた。象山のハイカラであつたことは書齋の模様でも一端が窺はれるが、京都で暗殺された時は騎馬であつたといふが、ハイカラの先生西洋馬具などを用ひてゐたので守舊家に睨まれたのかも知れない。象山の殺された折、懷ろにしてゐた紙入は内容と共に今も尊攘堂に保存されてゐるので、曾て一覽したこともあるが、二三の書類の中に一通女の履歴を書いた、なまめかしいものがある。それは妾を迎へるに就ての調書であると批判されてゐるが、この點も先生なかなか

かモダンである。象山は曾て越後へ來たこともあつて、橋山堂といふ新潟の醫者の家に招かれ、石川侃齋の畫幅の壁に掲げてあるのを見て新潟にこれほどの名畫家があるかと驚歎し、遂に割愛を得て旅宿に歸り、直に筆を把つて長篇を作り橋山堂へ寄せたその詩は侃齋をして九鼎大呂より重からしめたものであるが、その詩書は曾て自分の所藏であつて、阪口五峰の北越詩話に收めてある。象山は新潟へ來た折に、自分の家にも來た。そして家祖岱海堂の遺著「擡言仲氏易」十冊を示したが、象山は家祖の易學に造詣の深いことを激賞して、序跋二篇を書いてくれた。それは今も家に珍藏してをる。當時は象山の書など餘り珍重しなかつたらしく、他に二三枚書いたものなどは臺所の襖に張つてあつたことを思ひ起す。

七九 中島力造博士と語る

伊豆の南條の停車場で中島力造博士に邂逅したのは大正四年一月中である。博士は肥滿の體格で、健康らしく外觀は見えたが、どこかに病患があるらしく長岡の温泉へ浴する事

が頻繁で、この時も長岡から歸京の途上であつた。汽車に故障が生じて着車が遅れた爲め、佇立しながらいろ／＼の談を交へた。その中に博士が前年國民道徳取調の爲め歐米へ出張した折の談が出た。先づ獨逸について語つていふには、獨逸の小學校を參觀したいと思ふて頼んだところ、意外に面倒でやつとの事で參觀が出来た。日本の如く明け放しである小學校に思ひ較べると何か秘密があるのではないかと思はれた。どうも多少の秘密があるらしい、日本は餘り明け放しに過ぎるやうに初めて氣が付いたと云はれた。自分は曰く、獨逸は世界に探偵を放つてゐるといふから、外國人とさへいふと、皆探偵をもつて目するやうな氣味はないか、と質すと博士曰く、その氣味は充分あるやうだ。自分も警察署へ召喚を受け、いろ／＼取調を受けた末に寫眞をとられた。實にいやな處だと語られた。獨逸の小學校の參觀の折の模様について曰く、丁度教師が何か問題を出して生徒の起立を促してゐた。その光景は如何にも殺伐であつた。總體に近い生徒が教師の聲に應じて起立する元氣は、實に盛んなもので黒板に何か書かせたり、或は地圖に就て或る地名を指させる等の場合には、十人も十五人も競つて教師の立つてゐる所へ肉薄して我れ勝ちに争ふ有様は物凄いほどで、如何にも喧囂を極めるが、かくして獨逸の國民性が養はるゝのだと語られた。

佛國の小學校はどうかといふと、全く獨逸とは異つて生徒は極めておとなしく、教師が問を發する時は、どうぞ(マルシイ)お答下さいと教師より願ふやうな具合である。妙に感じた事は佛國では、教育家と坊主がひどく中がわるく、教育家は寺院を有害視してゐる。曾て教科書の中にノートルダムノートルダムの繪を入れた事がある。教育家は夫を嫌つて遂に其本を用ゐなかつた。なほ他に案外に感ずる事は、佛人にナポレオンの事を語ると、あんなものといふ調子で如何にも冷淡で、一向崇拜してゐないのも奇であるといふた。

亞米利加については、雜種の民族が交つてゐるので、ある小學校を參觀した時伊太利人を父母として生れた兒童が講堂にゐた。教師は低聲にあれは伊國人だと説明するとそれを聞きつけたその兒童は憤然として余は米國人なりと威丈高にいひ放ち、教師をにらんだ。コンな小供でも他日大統領になる意氣をもつてゐる。随つて米國人たる權利を幼少から主張してゐるのだ。そこになると、日本の父母の間に生れた兒童は全然異つてゐる。かれ等は飽まで日本を本國と思つてゐるのだ。

八〇 薩摩琵琶の名人西幸吉

故人となつた西幸吉は薩摩琵琶の名人として誰も承知の人である。薩摩に生れて、もとは西郷隆盛の麾下に屬し、西南の役には西郷の陣中にゐたのだが、妙に助かつて、西郷歿後、程經てその悲惨の最後を思ひやり、西郷に因みのある勝海舟に特に頼んで、城山の最後の作歌を求めた。海舟も西郷の死を悲しむ情においては、西と同様であつたので、その請ふに任せて作つた歌が、かの「夫れ達人は大觀す」と冒頭にある琵琶歌である。西が譜をつけて唄ひ出したのが始まりでそれがひどく人心に投じて、薩摩琵琶とさへいへば、先づこれを彈するやうになり今日では人口に膾炙してゐるが、その實これが海舟の作歌である事を知るものが少ない。またそれが西の請に依つて出來たものといふ經過を知るものもない。しかし西が悲しみの餘り海舟に作らせたところに、歌に涙もあり魂もあるのだから、作歌の經緯を忘れてはならないのである。海舟はあの歌を作つてから或る人に斧正を請ふたところ、如何にもよく出來てゐるとあつて僅に二三字加筆したに過ぎなかつたといふか

ら全然海舟の作のまゝだともいひ得るのである。あの歌の作者はどうあつても、海舟であらねばならず彈者は西その人でなければならぬほど、兩人は西郷に深い縁故がある。然るに海舟は早く歿して西も遠逝したが、城山の琵琶歌は廣く民衆に傳はつてゐる。おそらく永久に傳はるであらう。これを思ふと民衆歌を作る人は法典を作る人よりも偉い。法典は時に變改廢止があつて傳はらない事もあるが、一旦民衆に傳はつた歌は、いつまでも生命がある。海舟の詩や文は幾許あるにしても、それは一つも傳はらないであらうに、民衆的である故に、この城山の琵琶歌は永く傳はり、その傳はる限りは海舟の名も亡びまい。またこの歌の譜の傳はる限りは西の名も亡びないであらう。

八一 碁の名人岩崎健造

岩崎健造は武州多摩郡田無村に生れた。この人幼少の頃近傍の東福寺にあづけられたが、住職はなか／＼の碁打であつた。

當時健造八歳の子供であつたが、住職に助言して勝たせた事がある。それから住職も、

これは物になると碁を教へたが忽ちのうちに住職を凌ぐやうになつた。幕府の碁所としては本因坊村瀬及安井、井上、林の四家であるが、安井の高弟に太田雄藏といふ人があつて藏前にをつたその人の所へ、和尚は健造を弟子入させた。あるとき太田に連れられて本因坊の所へ行き、本因坊と手合せをした。その時井目を置いて打つたが健造は一目勝つた。これが九歳の時である。

その頃和尚は重病に罹つたが薬餌代に窮したので、和尚のため賭碁を打つて歩き、七兩二歩勝つて薬を買つて吞ました事もある。十八歳の頃には三段に進み、當時本因坊秀策は七段であつたが、これと對局したときに、健造は二目置いて四目勝ち、その後も四目勝つた。廿五歳の時、始めて碁打の看板を掛けた。その頃から大久保公へ出入りするやうになり、大久保、木戸、岩倉の三公が長州、薩州へ勅使に立たれた時の話がある。こは健造自身の話である。

大阪に著いた時に、大久保公は以前大阪に長くをられた事があるから、碁打友達が多勢宿へ詰掛けて来て、頻りに碁を打たうといつたが、大久保公がいはれるには「私は公用で忙しいから私の家來とお打ちなさい」と、私が引合ひに出された。私は名を隠して手

合せを求めた。多勢の碁打の中におくといふ女があつて、これは二段を打ちました。この女は頗る碁自慢で、自ら進んで白を取りました。私のいふにそれはいけない。碁の作法といふものは最初は握るものである。「とにかく握りまじやう」といふた。どうやらかうやら私が白を取りあてた。私は殊更に定石をくづして滅茶々に打ちましたが、到頭おくにはまけました。それから入り代り立ち代り大阪の碁打仲間と私は、打ちましたが悉く向うが負けになつた。その時重野安繹さんも、隨行してをられました。傍にあつて大久保公に向つていふには、「閣下の家來は非常に碁才がある、少し定石を習はしたらば立派な碁打になるでありませんやう、名は何といはれますか」と問はれた。大久保公は「三左衛門といふのじや」とお答へなさいました。それで大阪組は皆私に負けて只一人残つてをりました。これは五段の打手で吉原文之助といふ人で、安井から免狀を貰つた男で、私は遇つた事はなかつたが先方のいふには「お名乗なさい、名乗らなければ名指まじやうか」といふので私も躊躇したが、大久保公が名乗れと仰つしやるから名乗りました。ところが吉原のいふにはどうしても五段以上の人と見た。五段以上の人で大阪へ來ないのは岩崎健造氏一人だから、私はあなただと思ひました。云々

また岩崎が大久保公と碁を打つた時の話が面白い。(これも岩崎の話)

私が大久保公と碁を打つて私が講釋をしたところが、公も大層感心されて「お前の碁は参議」だと仰せられた。私は「ハイ私の碁は漸く参議位でござりまするか」と申し上げた。ところが公は顔色を變じて「参議位とはどういふわけか」と御不審あらせられた。私は申すに「私位の碁になれば一旦打つた碁はやり直すといふ事は、いたしませぬ、然るに今日の参議様方のやり方は、一旦出した號令も、詮議の次第あつて取消すなどいふ事が、おありなさる、また参議は八人も九人もあつて、その中の一人が病氣でもあれば他の方が、直ぐに代る事がある、しかし碁打は七年や八年で出来るものではありませぬから、私が碁打を止めれば、私の代りになる人は容易にありませぬ、かやうなわけで私の碁は、漸く参議位でござりまするか」と申し上げた次第であります、と申した事がある。かつて岩倉公に四目置かせて塵殺にした事がある。岩倉公は甚だ不機嫌で、その後お相手を願つたが「貴様のやうなものは大嫌ひだ」と仰せられたといふのも岩崎の話である。

八二 プロレタリア歌人磯丸

民衆藝術だのプロレタリア文藝だのといふ今の時、漁夫で歌人となつた磯丸を憶ひ起すのも無理はあるまい。私が磯丸の筆蹟に觸れたのは十五六年前、本居派の短冊百枚ばかりを手に入れた事があつた。その中に、磯丸の短冊もあつたので、匆卒磯丸の何人なるかを調べて見ると、その名の示す通り漁夫である事が知れたので、おもしろいと思つた。

その後偶然磯丸の肖像一幅を得た。それは子孫が持ち傳へたものらしく、巻留に磯丸様と書かれてあつた。この幅で初めてこの人を見たのだが、風采は粗野で如何にも漁夫らしい相貌で、それに題した和歌も筆蹟も素朴のものであつた。その後この人の経歴を調べて見る機會もなかつた。磯丸全集の出版された事も聞いたが、それも購はなかつた。然るに昭和二年の夏、早稲田文學に名倉聞一といふ人が書いたこの人の経歴を讀んで、初めて大略を知る事を得た。この人は丁度、越後の良寛禪師と同時代で、三河國渥美郡伊良湖の漁村に生れ、姓は糟谷名を新之丞といふた。無筆のこの漁夫が歌に志した動機は、或る風流

の旅客が和歌を口吟んだのを聞いてわれもと倣つたのがそも／＼の始めである。その處女作といふのは「明神の石の斜段で眺むれば、沖で漁師が船をこぎます」であつて、ある人は「こぎます」はいけない、「こぐなり」とか「こぐかな」とせよと教へたとある。無筆であるから歌が出来てもみづから書く事が出来ず、人に代筆を頼んだ時代もあつたが、追々假名位は書けるやうになつた。ある時、人に草刈に傭はれて行つた時の歌に

朝草にかりこめられしきりくすわれもなくかやおれもなくなり

とやつたのは確に藝術品といふ事が出来る。このウブな時代の歌は皆傳はらないで、相當に上達した時代のものだけが今残つてゐるが、眞率の味は寧ろウブ時代の作にあつたに相違ないのに、惜い事である。

磯丸は後に本居宣長の門人井本彦馬常蔭といふ侍に就て、和歌を學びまた文字を書く事も學んだ。磯丸といふ名はすなはち常蔭の命じたものである。漁夫で和歌に志すとは殊勝だといふて、芝山権大納言に知られてその門下となり、追々その名が聞こえて、歌人が面白半分冷かし半分にその家を訪ひ来るやうになつた。磯丸の村ではこの男の出世を村の名譽として、名主に推さんとしたがどうしても承知しないので、然らばと客の來た時に應接

する室を作つてやつた。或る時有栖川宮の御三男と稱して訪ねて來たものがあつた。磯丸は眞實と早合點して數日間、及ぶ限りの接待をした。そして別るゝ時に芝山権大納言より拜領の定紋付の小袖を捧げた。ところがこの客は盜賊であつたので、その所持の衣服は磯丸より貰ひうけたといふ口供から、磯丸に嫌疑が懸り磯丸は終に逮捕されたが、その時なども磯丸は平氣なものであつたといはれてゐる。もち論磯丸は赦されたが、こんな事から一層名が高くなつた。

しかしかれは家庭では不幸であつた。かれの妻がある僧と通じたので、近隣がその不貞を憎み終に離縁する事になつた。その時などは去つた妻の所持品を自から擔つて従僕の如くに、つき随つたので村のものは皆失笑したが、かれは一向平氣であつたともいはれてゐる。この人の物に拘らない性格がいろ／＼の場合にあらはれてゐる。村人はかれを崇めて伊良湖の神の化身であらうといふたとあるが、どこかに超越したところがある。かれは八十五歳の高齢で歿した。無筆の漁夫も志さへあれば、終にはかれが如くなり得る事を思ふと、志といふものは大切である。

八三 山東京山は越後をどう見たか

昨夜來都下稀有の降雪で交通幾んど杜絶、外出も出來兼ねるから、爐を擁して書架より北越雪譜を抽いて翻讀した。此書前後二篇あり。前篇は天保六年に出版され後篇は天保十一年に出版されてゐる。此書の事は今更説くまでもなく、越後鹽澤の鈴木牧之が材料を供給して、山東京山に書かせたものである。初め曲亭馬琴に書かせようとしたが、それが出來かねて、京山が擔當することになつたので、この間の経緯は自分の既刊隨筆に委しく録してあるから爰には省くが、久方振りで此書を繕き、多少の興を覺えたのは、著者京山が終に越後にやつて來て、始めて雪國の風物に觸れた。さて目のあたり越後を見て何んと感じたであらうか、夫を少しく觀察して見るのも一興である。幸ひに雪譜の後篇には京山の所感がちらほら録されてゐる。即ち百樹曰くとあるのが實歴談である。京山は江戸を發する時、新潟や寺泊等にも一游を期したのであるが、鹽澤の牧之方に四十日滞在、牧之の親族小千谷の岩居方に十數日滞在して江戸へ歸つた譯で、越後の僻地を見たに過ぎなかつた。

京山の自白によると、鹽澤滞在四十日間は鮮魚を口にすることが出來ず、小千谷に到つて始めて有り附いたとある。さて京山が越後地に見て奇を感じたのは、雪中に備ふる家前の雁木であつたと云ふがさもあらう。カンジキを穿き歩行を試みたが不慣の爲め辟易したとある。小千谷滞在中一日郊外に散策してゐると物を擔へる三人の婦人に會つた。その婦人達に煙草の火を請はれたのを機に、其の面貌を覗いて見ると、意外の美人であつたのに驚き岩居方へ歸へりこの事を語り、流石に越後は美人の多い處だと云ふと、岩居はそれこそ此邊の穢多の妻と娘で比隣の齒はひしないものだと言はれたとある。亦岩居に伴はれて地獄谷を訪ふた時小千谷の藝妓が接待の爲め一行に加はつた。京山が越後の妓を見たのは之れが始めて別に批評もしてゐないが、異様に感じたことは、歸路藝妓が草鞋を穿き一行と共に達者に徒歩する状態であつた。江戸より越後へ下る途中に就ては、三國嶺の茶店に憩ふた時、砂糖の代はりに「キナコ」を點けた氷塊をすゝめられて驚いたことなどもある。兎角百聞一見に若かずで、江戸で想像を馳せて書いたり圖したりしたことの中には、誤つたものもあつて百樹曰くの中にそれ等を訂正した所もある。雪譜は幼少から愛讀の書だが京山の實歴談を特に注意して見たのは今度が始めである。何分交通不便であつたあの頃、

折角江戸から来た文人を新潟をも見せずには返したのは氣の毒である。繁昌地域に遊ばせたらもつと面白い所感もあつたらうに。(昭和六年二月十四日朝)

八四 瀧澤馬琴翁を偲びて

(昭和七年十一月四日
於上野松坂屋)

まへおき

馬琴翁の八十五年忌に際して私共に何か話をするやうにといふことでありますが、私は格別翁についての話を持つて居らぬのであります。尤も一時或る必要から翁に就てのお話をしたことがあるのでありまして、どうも一たびお話をしたことを更に繰返すことが面白くないのであります。且つ今日は段々馬琴翁の事蹟に就てお調べになつて居る方々のお話もあるのでありますから、翁の經歷等に關することは全然その方々にお願ひを致しまして、私は只單に翁に多少交渉のあつたこと位をお話してみようかと思つて出て参つたやうなわけであります。

明治の書生氣質

馬琴翁が今年(昭和七年)で歿後八十五年になるといふことを考へますと、丁度私の生れましたより翁は十二年前に没して居る事になります。さういふ事を申しますと間接に自分が餘り若くない事を自白するやうなものです。何に致せ私の幼少の時分にはまだ馬琴はヒドク古い人でなかつたのであります。その當時私共が翁に對して間接に色々な教化を受けました事は、今日に於きましても忘るゝことが出来ないであります。私が東京に遊學に出ました時が明治八年であります。その時分まだ高等學校は無く、大學の豫備門が高等學校に相當したもので、それから追々帝國大學に進んだわけであります。その頃の書生はどんなものであつたかと此の場合一寸回顧して見ますと、其頃は馬琴の著書を読むことが書生間に非常に流行しました。馬琴の八犬傳位を一寸心得て居らないといふと、同窓間に恥となるやうなわけであつたのでありまして、誰も彼もあれだけの大部の物を勉強して讀んだものであります。私は番町の親戚の家に居ましたが、毎日錢湯に參る歸りには麴町に一軒可成り大きな貸本屋がありまして、その貸本屋に就て三冊五冊の八犬傳を借りて來

て、暇に委せて讀んだものであります。友人中には三べんも四へんもあれだけの大部のものを讀んだものがありました。八犬傳を讀み終ると弓張月、巡島記、美少年録と段々讀んだものであります。此等の小説全部を積みますと等身程の嵩になるものであります。兎に角それ位のものを読んで居らねば書生間の交際が出来なかつた始末でありました。そして是等小説中の名文句を暗誦したものです。謂はば義太夫などで云ふさわり文句を一枚若しくは二三枚位暗誦して居たもので、同窓で誰かうなり出すと皆それに和したものです。暗誦した所はどんな所かと申すと、若い連中のことですから極めてエロテックな所を選んだものです。八犬傳で言へば、信乃が芳流閣の戦ひに出かけて行くその前夜濱路に別れる段乃ち濱路が信乃の寢床に訪れて別れを惜しむ一段が、さわり文句で如何にも涙のある場面であります。つい十年ばかり前までは凡そ二十行位は暗誦して居たものですが、今は忘れてこゝに暗誦してお聴きに達する譯に参りません。馬琴熱は右の如く盛んであります。馬琴の師匠である山東京傳の作などはその時分の書生は全く閑却して、只偏へに馬琴々々といふやうなわけで非常に歓迎を受けたものです。私共は別に小説家になる積りも無かつたので、只徒らに讀んで居つたわけではありますが、多少小説家にもならうといふ

やうな志のあつた人々は馬琴の外に種彦、春水、三馬その他色々なものを讀んだわけですが、矢張りそれにしましても馬琴が一番尊敬されて、あの七五調の文章に倣ふ事が盛んに流行した。坪内逍遙翁などは郷里名古屋に大物と云ふ有名な貸本屋があつたので、大概の徳川時代の小説類を涉獵してゐたが、吾々と大學で机を並べてゐた頃は馬琴に倣つていろ／＼書いたものです。それは完成に至らないものが多かつたが、皆馬琴そつくりの文章であつて吾々はそれを讀んで大いに感服したものであつた。

馬琴の草稿

馬琴趣味であつた坪内逍遙翁に深い縁故のある吾が早大の圖書館に多く馬琴の遺書の藏してゐるのはふさはしい因縁と云ふことが出来よう。實は饗庭篁村翁も矢張り若かりし頃は馬琴宗であつて、馬琴の遺族から一括して多くの遺書を得たのです。逍遙翁も自分も篁村には懇意であつたので、敢て吾等から求めたのではないが、先方から譲られたのであつて實に寶を得たといふてよからうと思ひます。全體馬琴の草稿は方々に散ばつて居るものであります。あちこちの圖書館にもありますし個人の手にもあるのであります。併し

何と申しましても早稻田にあるのが第一番と言はれて居ります。其事を委しく云ふ前に、馬琴の遺書がどうして饗庭氏の手へ歸したかに就て聊か言ふて置きたい。馬琴の總領に琴嶺と號した宗伯といふ人がありまして若死をしたのでありますが、その總領の家に主なる遺書が纏まつてあつたのです。宗伯の曾孫に當るものが零落して、今で言ふルンペンのやうになり、北海道へでも行つて何とかしなければならぬといふ時に、饗庭氏の所にその書類を持ちこんでさうして金に換へた。是が瀧澤家から饗庭家に移つた経緯で、饗庭家の此の藏書は書物界では有名のものでありました。八犬傳の草稿については是も諸方に散亂して居るのでありますが、一番目抜きである所の中にあるのであります。一番目抜きの所はどんな所であるかと申しますと、馬琴は失明したのでありますが失明しても利かぬ氣で頻りに筆を走せたのであります。罫紙を用ひて書いて居りますが、字が罫紙を外れて散々亂れた處があります。それが失明後の執筆で、馬琴も到頭やり切れず、遂に自分の總領の嫁——お路と言ふのでありますが、それに書かせることを始めた。始めたのであります。何しろこの婦人はさして文字のあるものでないのだから、馬琴は字を教へながら口授を筆記せしめたのですから、如何に骨が折れたか實に想像に餘ります。馬琴が八犬

傳の終りに書いたものに依りますと、殆ど嫁は泣かんばかりであつたといふことであります。幾度も斯う云ふ無慈悲なことを止さねばならぬ——と思ひながら、あゝ云ふ克己の人であるから到頭教育しながらやり通した。斯う云ふ所が早稻田にあるのであります。で、是は到底涙なくしては一頁と雖も讀むことが出来ない。力の息子——お路の良人宗伯が存命であつたら、馬琴の盲目後もさまで困難はなかつたであらうにと吾等も思ふ位であるから、馬琴は尙更であつたらうと思ひます。尙八犬傳の草稿の外に隨筆その他の珍しいものが幾十冊とありまして皆世に出ないものですから、私が國書刊行會をやつて居りました時一冊に纏めて出しました。

こゝに宗伯の事を一寸附け加へておきますが、馬琴の不幸は早く一子を失ふたことである。馬琴は宗伯の病に容易ならぬ苦勞をした。ある時家に池を堀つたことがある、その土の棄て所がよくない。それが宗伯の身體に障ると家相家が云ふたので、馬琴も氣になつて土の棄て場所を變へたりして、遂に方位の研究を始め、例の凝り性ですから、相當の家相家となつた事がその遺書に依つて窺はれる。宗伯は渡邊華山と師を同ふして畫を學んだので友人であるため馬琴とも交りがあつた。宗伯の歿した時華山は手紙を馬琴に寄せて宗

伯の死を悼み、且つ宗伯の像をも書くと申送つた手紙が饗庭篁村氏に依つて藏せられ、それが後々自分の手に歸したことがあります。

目明き盲に物を訊き

馬琴の遺書が饗庭家から早稲田へ移つて幾年か経た後、早稲田のものを中心として馬琴の著作の展覧會を催したことがあります。馬琴の菩提所である深光寺から、遺印や芳流の板額などを借りて陳列したのも其時でありました。此展覧會で自分の感じたことを申しますと、此會へ一番眞ツ先きに入つて來た人はどういふ人であるかといふと盲啞學校の校長小西信八君であつた。これは私の郷國の人で、一生涯を盲啞の教育に捧げた名高い人です。その人が第一番にやつて來た。私は小西君に向つて「馬琴が盲目になつて尙ほ文藝に努めたといふことに恐らく貴下は同情があつて斯う早く見えたものであらう」と挨拶した所が「イヤさうばかりでもないんだ」と言つてゐましたが、その因縁を持ちまして、私は間もなく盲啞學校の講演を頼まれたことがありました。そこには百人ばかりの盲生が居りましたが、何しろ盲人は眼の力を失ひますと外の力が非常に發達して來るわけであり

ますから、私は盲生を勵まして失明馬琴の事は勿論、塙保己一檢校の事なども語つて、例の『番町で目明き盲らに物を訊き』といふ川柳を引き、日本外史を書いて名高い頼山陽も参考書を塙檢校に問ふた。その書目は現に外史の首部に載つてゐる。全く目明が盲人に教へられてゐるのだと説き、失明後の馬琴の力作に就ては大要前に陳べたごとくに説き、眞に八犬傳の末の方は一字千金に値する、一字を千金と打算すれば優に國債を償還し得るなど云ふたことを憶ひ出すが、私の講演が終ると小西校長が一盲生に命じて演壇に立たせた。それは何をするのであるかと思つてゐると、私に對する禮にと云ふて八犬傳を點字で讀んでくれた。凡そ五枚ばかりサラ／＼と些も淀みなく讀んだのは私も一驚を喫した。第一八犬傳が點字で出來て居るのに感心した。校長の話に某法學士の失明の不幸を細君が慰める爲めに八犬傳全部を點字に作ることを思ひ立ち、殆んど八分通り成功してゐると聞いて更に亦驚いた。

此の家主・此の店子

馬琴の陳列會に就てもう一ツ餘談がある。早稲田にどんな陳列をやつても曾つて來て見

られたことが無かつたのに此の陳列に大隈老侯夫人が來觀された。そして歸邸の後私を招かれたから行くと、二冊の寫本を出して、云はるゝには自分の幼少の頃、叔父からよく馬琴のことを聞かされた。馬琴は感心な學者だから、俺の長屋を貸して住まわせたことがあると、そんなことを思ひ出して今日は陳列を一覽したと云ふて、記念に此の寫本を圖書館へ寄附すると云はるゝので開いて見ると、薄葉横とじの數百枚のもので、三代集であつたか八代集であつたか、今ハッキリ覺えないが細字で如何にも丁寧に美事に寫されたもので、私は大いに感服して成るほど此位氣根の強い人が馬琴に同情されたのは無理はない。此家主あつてあの店子がある。實に一軒家の雙壁だと喜んで寄贈を受けたことがある。馬琴は長屋にゐて、家主とどれほどの交りがあつたか詳かでないが、大隈老侯夫人の叔父と云はるゝ人は小栗上野介の親戚で番町に屋敷があつたのである。

京山と馬琴

馬琴が遠く百里を隔てた私の郷國越後に縁故があることが、やがて間接ながら私にも交渉を生じます。私の郷國に越後の最も雪の多い地に鈴木牧之と云ふ人がありました。此の

人が長い間馬琴と親類交際をして、馬琴に依つて越後の雪話を世に傳へたいと企てたのであります。横道に入るやうですが、始めは山東京傳に書いて貰ふ筈であつたのが京傳が早く死んだので、つい果さなかつた。それで今度は馬琴に依頼することになつた。所が馬琴も自分の著作に忙しい人であるから、段々延び／＼になつて十幾年といふ間、延びてしまつた。牧之も堪りかねて段々さういふ風に延びては自分が死んでしまふからといふので、馬琴の手からはづして京傳の實弟山東京山に書かせることになり、到頭その手で出版になつたのが北越雪譜であります。所が馬琴の話になると往々疑問になつてくるのであります。どうも馬琴は京山と仲が悪かつたやうです。どういふ譯か一體京山は馬琴の師の弟であるから、仲の悪い筈がないやうに思はれますが、馬琴といふ人も一癖ある人でなか／＼狷介で、人と一寸合はぬ所があつたのであるから、京山と間柄がよく無つたのも事實である。然るにその仲の悪い京山に牧之が頼むといふやうなことになつたのですから、馬琴の方では餘り心持ちが好くなかつたのは無理もないが、馬琴も引受けながらいつまでも果さなかつた失があり、京山は一番最初に頼んだ京傳の弟でもあるから、それに依頼するのが順序であるので、流石の馬琴も強い抗議もし兼ねて遂に京山の手で成つたが、北越雪譜

と云ふ書名は曾つて馬琴が撰んだのを取つたのは妥協的の意味もあつたのであらう。それから、此の鈴木家には馬琴の書いた手紙が澤山あるが、京山の手紙も亦負けず劣らずに澤山あります。此の二人の手紙は馬琴研究には大切なものであります。何しろ、親類交際であるから、他人に洩せないやうなことでも何でも書いてある。殊に馬琴の筆まめであることは實に大變なもので、殆ど對座して半日位語らう位のことを全部書いてあるのである。従つて馬琴の生活状態なども仔細にわかる。或る時には貸本屋をやつて失敗したことだの、鳥を飼つてやり損つたことだのを語るかと思ふと、自慢話なども盛んに出てくると云ふ有様である。京山にしても同じことであつて、京山の書状の中には往々馬琴の事に言ひ及んでゐるので、兩方を併せて讀んで見ると馬琴の事が愈々よく知れる。馬琴の事を語るには此上ない材料であるけれども、今日はそれに及ぶ時間がないから他日を期するより外はないが、僅かに一事をこゝに語つて見る。

幫間になるのが初志

京山の手紙の中に馬琴が初めて戯作者を志した時京傳を訪れたことが書かれてゐる。記

憶から呼び起して云ふのだから多少の誤りがあるかも知れないが大體次の如くである。馬琴が最初兄（京傳）を尋ねて來た時、兄は馬琴の志願を尋ねて聞いた所、幫間（太鼓持）になりたいと云ふたので、兄はそれは心得違ひだと云ふて戒めた所、然らば講釋師になりたいと云ふので、君は講談が出来るかと兄が問ふと、未熟ではあるが出来る積りと云ふので、即座に何か語らせて見たがうまく無かつた。馬琴が去つて後兄が私（京山）に向つて、あんな講釋ではお前よりも下手だと一笑した。

とある。斯様なことが書かれてゐる。晩年稗史界の大學者を以つて任じた馬琴も其の青年時代は幫間を志願したと聞いては驚くの外はないが、このことにつき、いづぞや坪内逍遙翁に説を求めたら、逍遙翁の言ふには、あの頃戯作者とならうとするには太鼓持にでもならなければ、吉原其他の花柳界の事情が探り得なかつたので、斯る志望を抱いたと云ふても強ち不思議はないと言はれたが、成る程あの頃の稗史小説は花柳界に立脚したものが多かつたから無理もないと思はれるが、それにしても晩年の見識と餘りに隔たりのあるのに驚かされる。

今云つたやうなことは馬琴を侮辱するやうに聞こえ、今度の如き場合には遠慮するのが

本當かも知れませんが、人間の初の志が小で大家になつたものもあり、志ばかり大で一向終りのよくない人もある。馬琴の如き人は初めの志が小で終りが偉くなつた標本であつて、私の語つた事實は馬琴の成功を稱するのであつて決して馬琴を傷つけるために言ふたのではない。仲の悪い京山が斯様なことを告げ口をしたのは無根であるかどうか知れないが、馬琴の微時には斯ることもあつたと見る方が、馬琴の晩年の偉大を顯すものと思はれる。

さわりの多い美少年録

馬琴も無論初めは洒落本を書いたに相違ない。しかし何んと云ふても京傳以上に出づることが出来なかつた。そこで馬琴は軟かい筆を捨て、堅い方の筆を把つたが、恐らく是が馬琴の仕合せであつたかも知れない。馬琴は卑褻の事を書くのを潔しとせず、到頭啓蒙的に物を教へて行くといふ立派な作者にならなければいかぬと志したのが、即ち八犬傳を書き、弓張月を書くに到つた所以である。併し八犬傳にせよ弓張月にせよ、やわらかに書いた史的小説であるが、實は大衆向きではなかつた。多少學問のあるもので無ければ読み兼ねたので、書物屋なども餘り始めは感心しなかつた。

そこで、書物屋が馬琴に向つて「先生の書かれるものは少し六かしすぎる、種彦、春水などの方が一般に受けが良い」と言つたのはエロテックなものでなければ世間の受けが良くないといふ意を寓したのだが、あの負け嫌ひの氣象であるから「何に俺だつてエロテックのことが書けないこともない」といふて、書いたのが美少年録で、あれにはエロテックのさはり文句が澤山にある。昔の書生はあちらこちら誦誦したものである。此作は馬琴として大なる奮發で、傑作でもあるが、大體馬琴は堅い方に成功したのである。

馬琴と山陽

馬琴と同時代に頼山陽が日本外史を書いた。是がその當時非常に名高かつたが、まだ出版前であつたから、馬琴 寫本を作つてそれを讀んだ。其本は今もどこかに保存されてゐるが、その卷末に馬琴が跋を書いてゐる。それは漢文であるが、ザツト左のやうなことが書かれてゐる。頼山陽も實は吾黨である。彼と自分とは同じ事をやつてゐるのである。唯だ異なる所は、彼は漢文で書き吾は國文で軟かに書くと言ふ點が違ふだけだと云ふこと。なか／＼人に許さない馬琴が案外山陽を褒めてゐる。外史全部を寫させた所から見ても、

山陽に傾倒したことが窺はれるのである。これに依つて見ても馬琴が啓蒙史家を以つて任じてゐたことがわかる。そして山陽の外史が勤王心を鼓舞し維新の勳業に相當寄與する所があつたと同じやうに、馬琴の歴史小説も大なる教化を社會に與へたことは疑ひが無いのである。

批評の應酬

最後に馬琴に就て洩らす可からざる一事は、馬琴が八犬傳や巡島記のあの大部のものを一輯づゝ出版するのを待受けて、丁寧な批評して馬琴に寄せたものゝあつたことだ。今日では新聞や雑誌に作の批評を出す事が常となつてゐるが、あの頃は批評がまだ行はれなかつた。恐らく小説に對しての批評は馬琴の場合が始めてゝあつたのでなからうか、馬琴はその批評に對して一々答へた。そして其の應酬が馬琴の隨喜者の感興を惹いて讀まれた。隨つてそれが版刻となつた。犬夷評判記と云ふのがそれである。小説の批評が版となり、それが第三者に讀まれたのも恐らくこれが始めてゝあるまいか。批評家は甲乙丙丁とあつたが、主なる人は讃岐の松平家の家老木村黙志、伊勢の富豪殿村篠齋などであつた。此等

の人々は相當學識もあつて馬琴は交りもあり馬琴の著書の精讀者であつて批評家としての能力を有したが、實を云へば友誼的批評で、褒める方が多く、難する方は少なかつた。勿論今日の批評とは其の方式を異にした。大體は感服録とも云ふべきもので、難することがあつても疑義として著者の教を乞ふと云ふやうなものであつた。中には頗る尤もであると思はれる點もあつたが、あの傲岸の著者だから、ナカ／＼それに承服することは無かつたやうに思ふが、しかし馬琴は門人に説くかのやうに、自家の腹案をさらけ出して、その思構のなる所、脚色の隱微の間に伏してゐる所を細かに説いた。此の一段は後段の伏線だとか、此一段は前の段と照應するのだと云ふ鹽梅に、答辯を機として蘊奥を洩してゐるが、その得意が答辯の内にあり／＼と見へてゐる。斯かる批評が馬琴の他山の石となつたかどうか分らんが、馬琴の浩漣の作を成就せしむる張合となつたことは疑ひを容れない。馬琴研究には此等批評の應酬が最も大切な材料であるやうに思ふ。

八五 文藝家の御幣擔ぎ

俗間の御幣擔ぎは文藝にも及び、不祥不吉のものと御幣擔ぎの判するものには案外のものがある。尙文藝家にも同じく御幣を擔ぐものがあるといふのは妙なものだ。左にかゝぐる川端龍子の「與太から出る眞」などは笑覽に供する屈竟のものであらう。

ある展覽會の挿話。

そこには某大家の「義經と靜」の双幅が出陳されてゐたが、遂に賣約にならずに仕舞つた。ところがそれには理由がある。その理由たるや製作の價値はむしろ第二義に於いて兩人とも落ち行く先がわからない

つまり下落一方のこの不況時代の落ち行く先が不明では、に引掛る御幣擔ぎであるさうだ。まことに作家側としては啞然たる理由である。だが併し製作が賣品となる場合に於いては、買手にしては金を出しての實際問題である。貰ふのでない以上そこにかうしたべら棒な縁喜を擔がれるにしても、如何んせん。これは先方の自由といふものである。

従つて豫期しないケチを付けたにしても、苦情の持つて行きやうもない事だ。

それにしてもこの縁喜といふ奴は、今に始まつた事でない。と同時に或は將來も、といふよりも人類の生存と終始する厄介な地口であらう事だ。もち論日本畫の圖柄の上にも随分と結ばれてゐる縁喜ではあるが、一二の例として、厭がられる方の側では、

生えてゐる筈は子孫繁昌で瑞祥とされてゐるが、掘つた筈を靜物にでも描くと、反對にこれは子孫の根絶で禁物だといふ。龜は萬年の壽、目出度い方は誰も知つてゐるがそれが投機仲間の側からは、手が合はないと嫌はれてゐるさうだ。藤も勿論下がるでダメ。

鳥にしては四十雀のしづう空財布。日の出も金泥描では金が日に出る。まるで某内閣の鬼門みたやうな擔ぎ方もあるさうだ。

さて一層そこまで來ると、航空船でも描いて、景氣上りつ放しなどはきつと喜ばれる事請合である。

嘗て關西に藻刈一鳳とかいふ作家が、儲かる、一方で大にモテたと話のやうな話があるが、世間といふものは存外に他愛もないものだ。といふよりも藝術の鑑賞がまだく第一義では通らないといふ事なのだ。

ところで擔ぐのは愛好者側ばかりでもない事だ。作家にはまた作家らしい擔ぎ方もある。名は洩らしたが帝展の出品者、何も帝展の作家に限つた事ではない、どこへ出品する作家にしても、出品者としては落選の赤標は大禁物である。従つて鑑別發表の間際となると、とかく赤いものが氣になるので、妻君の丸髻の赤いてがらをやめさせる。街を行くにも赤煉瓦のなまじうな通りを、といった調子で某なる作家も發表日の晝室には落ちつけずに、結局は吸寄せられて上野公園に足が向いたのだが、そこでパツタリ眼に入つたのが、兩大師の朱塗の高札。もち論落選であつた。それ以來二度と再び兩大師の前は通るまいと決心したさうに聞いたが、さてその後はどうなつた事か。

八六 世界文學變徴の一考察

近く五七十年來の文學界の一大不思議とも云ふべきは、文明の程度に於ては寧ろ第二流に位し、政體は何れかと云へば專制政治の邦國に於て世界を驚倒する文豪の續出したこと

である。露西亞に於て革命前ではあるが、續々有名な大家が輩出したことは著名の事實で特に一々名を擧るまでもなからう。スカンデナヴィヤではイブセンの如き名家を出し、ポーランドではプロツクの如き、將たブランドスの如きまたセンキウイツチの如きを出し、ハンガリーではヨーカイヤ、ノルダウの如きを出し、小説家でも批評家でも寧ろ第二流國に立派なものが出で、英、佛、米などに却て偉人を出さないのは、近來の變徴と云ふべきだ。何故に斯る變徴が起るのであるか。それにはいろいろの原因もあるだらうが、露西亞の如きは確に專制政治が産んだ結果と云ふもよろしからう。露國には言論の自由が無い。故に言論を弄せんとするには文章を藉るより外に手段が無い、恐らく彼が如く文豪の續々輩出したのはこれが爲めであらう。イブセンなどにしてもスカンデナヴィヤより追放せられて伊太利に亡命し、其亡命中に書いたものが最も傑作として歡迎されてゐる。これも必竟政治上の不満が鬱積して激發文章となり、それで成功したのであらう。ハンガリーやポーランドなどでは、恐らく第一流の人物が力の施し所がなく、假令政治的の大手腕があつてもそれを揮ふに由なく、寧ろ世界的文豪となる方が比較的容易であるために、自ら其方向に趨るのであるまいか。只自國の現状に慚たらず文を藉りて憤を洩らす等も原因であらう。

何れにしても基づく所は政治的原因にあると思へば、何れの國土に於ても不平不満が大文章を産むの主因となる。別して言論が不自由であれば却て巧妙の文章が生れる。吾が徳川期などでも露骨に言論が許されなかつた頃に巧妙で皮肉の諷刺文學が起つたではないか。文學亡國を主張する論者は、以上の如き變象を目して國土が益々衰運に赴く徴候となすかも知らんが、これは寧ろ國の漸やく勃興せんとする先驅だと解する方が妥當であらう。ナゼなれば、詩人は豫言者で、いつも時勢に先立ち將さに來らんとするを言ふものであるから。

もう一ツ十九世紀に於ける文學界の一大變徴は小説など客觀的のものが變じて主觀的となつた事である。これは何故かと云ふと、個人主義の發展が其の主なる原因である。個人主義の發展の爲め、作者の位置が俄然高まつて來た。今まで幫間のやうに目された小説家の位置が、己が説、己が主張を聞かせるまでに高まつた。そして斯の如き變化は、今の日本のやうにまだ乳臭を脱しない書生をして一知半觀の主觀小説を書かせるやうになつたから、讀者の迷惑は此上もない。

十九世紀の世界に脚本の傑作の出ないのも、主として作者が主觀的となつた結果に外な

らぬ。何となれば人各々主張がある。他人の主張を柔順に聞いて盲從してゐるものは、恐らく中流以上に少いであらう。されば主觀的脚本の舞臺に上るものは抵ね不評判で失敗に了るのが常である。そこで已むなく前世紀の客觀的脚本例へば、シェークスピア物を繰返すか、然らざれば當世の作の内、客觀的のもので餘り見識張らないものを選ぶ、と云ふ實際になつてゐる。十九世紀以來劇壇の實況は右の如くで、主觀的文學の盛んな時は乃ち文界に群雄割據の時で銘々勝手に己が欲する所を言ふて歸著する所を知らない。併し文藝が極致に達すれば各種の粹を集めて之れを一に歸することが出来る。此の場合に於て群雄割據の状態を變じて一將統率の形となり、隨つて主觀的は變じて客觀的となり、各人は之れを歓迎するやうになる。即ち外國に於てはシェークスピアの如き我邦に於ては近松の諸作の如き、皆な文藝極致の時に出來たもので、それが客觀的である所以である。

八七 舞臺裝置の新傾向

坪内君(逍遙)エリザベス朝の舞臺について語る。シェークスピアが初め演劇にあてた場

所は旅館の階上の廊下で、この廊下は左右兩翼をなした廊下と相通じ、正面の廊下の下に街路があつて一般人は此街路から、旅館のものは左右の兩翼から樂劇を見物した。それがそも／＼の初めてゞそれから舞臺の建築も、略これに倣ふこととなり、追々潤飾を施したとはいへ大體は旅館の廊下を根據としたのであつた。

何れにしても當時の舞臺装置は單純なもので、それが追々進展して各國とも寫實本位となり、非常な經費を投ずるのでなくては劇場は作り得ざる事となつたが、實は工風も行づまり、そして一面には民衆藝術はますます必要を叫ばれ、民衆の望みに副はんには貴族的の舞臺を數多く作る事も不可能に屬し、こゝに簡易な舞臺を工風せざるを得ざる事となつた。すなはちこの傾向は早く大戰當時において既にあらはれ、戦後はますますその傾向を實地にあらはすに至つた。亞米利加人が逸早く研究もし、また實行もしつゝあるところ依ると、ほとんど演劇の原始時代に戻りたるかの如く見ゆるほど、簡單のものとなつてゐる。例へば舞臺のために一大建築をなす等の事はなく、寺院なり、公會堂なり、サルカスの如き建物をしきりに應用して、そこにいさゝか芝居に要する設備を施し、それをもつて演劇場となすやうになつてゐるのがそれだ。すなはち廣大な建物を屏風をもつて仕切り、

その屏風を背景にあてる如き、牢獄内の人を出す場合に、わが能に土蜘蛛などを入るゝ籠の如きを用ゐてそれを牢獄に代用する如きが一斑で、わが原始的の芝居の舞臺、すなはち能舞臺やその裝飾はいつしか米國や大陸諸國の演劇に應用されつゝある状態だ。但し西洋人は日本の意匠や工風を探るに直ちに模倣せず、これをセファイイズし、またアシミレートするから、模倣の痕跡は一寸わからない。が、日本の能舞臺をモデファイし、それを現時の舞臺装置となしをる事は疑ひを容れない。

英國の如き保守の國は今尙舊態を持續しつゝあるも、他の諸國は追々この傾向に變化しつゝある。

坪内君より示されたる二三の圖書挿畫は、明かにこれを説明してゐる。米人ケンネス・マクゴワンの近著コンネンタル・ステージ・クラフトの如きは参考すべしだ。但し露國だけは東洋中殊に支那に範をとりつゝあるやうだ。何れにしても舞臺の寫實的意匠は今はずたれて、東洋式の原始的舞臺に意匠をとりつゝあるは、掩ふべからざる傾向だ。日本では未だそれに氣がつかず、むしろ世界の學びつゝある自國のものを、ますます放棄して外國に倣はんとするのは、迂潤の甚だしきものだ。寫實的舞臺のあかれたのは藝術の理論にもよ

る事にて、一概に民衆文化の反動とはいふべからずとしても、民衆のため出る處簡易の演劇場を要する事となつた如きも、この變革を生じた原因であらう。方今野外劇が盛んに行はるゝ傾向ある如きも、またこの間の消息を語るものといふべきだ。

八八 豊公と淀君の短篇劇

大正三年十月の或る時、坪内逍遙翁と會食中、その頃帝劇で、開演中の東儀鐵笛の「豊公と淀君」の劇を見たかと問はれたので、多忙に紛れて未だ見ないと答へたところ、翁はいつもと變つて熱心に今度のだけはどうぞ、見てやつてくれと頼むが如くいはるゝので、段々様子を聞いてみると東儀の豊公は如何にも上出来だといふ（淀君は菊枝といふ女優が演じた）。翁の談によると、この作はベアリングが英王ヘンリー八世とカザリンを主人公として、作つた脚本を豊公と淀君に充て、翻案したもので、松井松翁の作だがよく出来てゐる。時代や豪傑やその他あらゆる假面を脱ぎ去り、豊公を凡人として女にのゝいところ、さりとしてどこかに大人物たるところをよく見せ、淀君のヒステリックのところ、豊公の詠

歌を罵倒して己の才を示し、己の門地や容色を鼻にかけるところ、それに對して豊公がデレつきながら終に豪傑風に淀君を籠蓋し去る鹽梅、東儀の藝は妙を極めてゐると語られ、背景は只金屏風を立て廻したのみで他に何もなし、これは自分(翁)の案で服装は米齋の案だなどといはれた。なるほど聞くだけでも感興を覺へるのでその後打措かず出掛けて一覽したが、如何にも翁の賞賛も無理ならぬと感じた。豊公と淀君は劇によくある筋だがこの味を今まで出したものはない。松翁の翻案まことに手際である。自分は東儀の豊公を見て心竊に思ふた。やつこさん暗に大隈老侯を型にとつてゐるな。その洒落な態度碎けながら冒すべからざる豪邁の氣魄のあるところ、何ぞ大隈侯に能く似たと。他日東儀に面した時この事をいふと東儀は悟られたと破顔一笑した。ある時大隈侯の晩餐に招かれたが東儀も席にゐた。芝居に餘り趣味のない大隈侯は東儀が席にゐたので、愛嬌を振りまき、君の芝居を見たいものなどいはるゝのを、自分は傍らから御覽になるなら豊公と淀君を御覽なさいといふと、豊公最負の侯はそれは定めし面白からうといはるゝから、實に面白いです、豊公は全然閣下そつくりですといふて、一座を哄然たらしめた事がある。

八九 ジャ〜馬馴し

沙翁の「ゼー、テーミング、オブ、ゼー、シリユー」は坪内逍遙翁が「ジャ〜馬馴らし」と譯名を附した喜劇であるが、大體の筋は雷女と評判された富豪の娘をば、ジャ〜馬に擬し、それを求婚者が懐柔するに暴壓手段を用ひ、剛よく暴を制するといふを脚色したものである。沙翁の作中通例傑作でないと評され、且つ原作は沙翁以前にあつて、沙翁が焼き直したものと云はれてゐる。

一種の喜劇ではあるが、暴を以て暴を制する脚色であるから、粗暴の場面が多い。御し難い悍馬を御するのだから、求婚者も生やさしい態度では對し難く、勢ひ豪勇ならざるを得ない。女は疍癩持でヒステリックで倨傲の質で、常に鞭を携へてどんな男でも無遠慮に打ちのめし、硝子戸を破り器物を投げ出すといふ亂暴ものであるから舞臺面は立廻りが多く、殺氣立つて喜劇と思はれぬ程のものだ。勿論求婚者の本意は懐柔にあるのだから、人情味は潜んでゐる譯だが、悍婦には聊かも甘い顔を見せられないので、わざと従僕にあた

り散らして殘虐の事をやるのを、悍婦が見兼ねて押し止めるのを待つといふ荒仕掛の懐柔法である。こんな劇が沙翁の時代に何故喜ばれたのだらうか。今なれば亞米利加邊にこんな型の女は敢て珍しくないが、封建時代に斯る女がありしと思はれぬ。女が壓迫を受け従順のみを強ひられた時分だから女子の爲めに氣を吐いたのだらうか。それを懐柔するに荒療治をやる男子は、亞米利加邊にはゐないが、その荒療治は寧ろ男子の本色で、女子を壓迫する遺風の發露が男子に快感を與へ觀客の歡心を買つたものであらうか。日本ではこの劇を舞臺に上演させたことは餘り無いやうだが、この劇が映畫となつて東京に來たことがある。主役のダグラス・フエヤバンクスが求婚者ペトルシヲを、妻のメリー・ピツクフォーが雷女カサリンを演ずるので、フエヤバンク스에日頃最負の自分は、態々見物に出かけて見て面白く感じた。フエヤバンクスはペトルシヲには全く嵌り役である。あれの英雄肌の態度と、豪快の動作と、何處となく愛嬌があつて高笑ひの癖のあることなどが、最もこの役に適してゐる。全體この役は下手にやると滑稽に陥りやすく、さうかと云ふて粗豪に流るゝと人情味が全く無くなる。そこに役者の技能が要るのである。結婚の式場にペトルシヲが靴形の帽を戴き平氣で果物を齧むなどは滑稽に陥りやすい光景だが、それがさうも

見えない處に役者の苦心がある。カサリンはさも疇癖のある顔に扮してゐる。しきりに狂暴を事としても求婚者の男的強氣に敵しがたく、壓せられて接吻を強ひられ、漸く男的豪勇の志を感じて結婚を諾しても、容易に性癖が改まらず、それを看て取つた新郎は、食堂の式が終ると矢庭に新婦を拉して一ツ馬に同乗して雨中自邸まで疾驅する所のフェヤバンクス得意の場面であるが、邸前に着すると、新婦は馬に跳ね飛ばされて地上に墜る。それを新郎が振り向きもしない所に趣がある。逍遙翁は自譯の緒言の内にコンナことを云ふてゐる。

二役ともに、殊にペトルシヲに在りては粗暴なる活動を特色とせるが故に、夥しき筋肉的勞力に堪へざる可らず、或る俳優の如きは強ひてカサリンを引立て去る場合のペトルシヲに扮して力任せにカサリンに扮せる女優を投出すを例とせしかば、該女優は舞臺にて該俳優を怖るゝこと劇のカサリンが劇のペトルシヲ怖るゝさながらなりといふ奇談もあり。

この劇には絶えずペトルシヲが高聲に叱咤するのだが、トーキー映畫は流石にこんな所にはお誂ひである。

九〇 紅葉山人を憶ふ

(昭和四年十一月
於日本橋三越)

尾崎紅葉君の二十七回忌に當りまして、何か申上げよと云ふ事であります。實は紅葉君を最もよく知つて居られるのは、只今お話になりました江見君、續いてお話に成ります巖谷君、此兩君以上にないのであります。私などは實は斯様な席へ出て、お話ししてよいか悪いか自ら知らんくらゐであります。ところが、三越からの御案内では、硯友社以外の人が一人位加はつて欲しいと云ふ勧誘でありますので、實は罷り出たが、私の存じて居りますことは、これまで色々な折に話をしたり書いたりしましたので、別に新しい話はありません。

唯今江見君のお話に佐渡の事が出ました。其の佐渡のお話中に、私の誤りをお正し下さつた點もありましたので、それらの事に就いてお話し致しませう。一體、紅葉君が亡くなられたからと申して、此のお席には御親族もゐらつしやるかも知れないのに、餘り故人のローマンスなどを語つては、どうかと思ひますが、よく考へて見ますと紅葉君はローマン

チックの人です。否なローマンズの製造家ですから、故人を偲ぶ爲に聊か之れに觸れた所で敢て故人を汚すことにはなるまいと思ひます。又御遺族の方々もお叱りになる事もあるまいと思ひます。即ち先刻江見君が云はれた如く、佐渡一件も濃厚な戀など、云ふ眞面目な戀があつた譯でもないのですから、聊か江見君のお話を補ふて見たいと思ひます。

私は越後の者で、越後は佐渡を向ふに見て居る所でありますから、自然佐渡の事に就いては、時折私の耳に觸れることがあります。先刻江見君が話された「いと」といふ女に就いても、一番早く私の耳に觸れたやうに思はれます。紅葉君が此女に何か書いた物を與へたと云ふ話も當時聞きました。いつぞや紅葉祭を紅葉館にやりました時に、私が其席で佐渡一件を話しました。是が江見君から云はれますと、私が、間違つた種を一番最初に蒔いたと云ふ事に成る譯であります。兎に角佐渡へ紅葉君が行かれた折の事を披露したのは、私が一番最初であつたと思ひます。其節は詳しく調べる暇もなく、聞くがまゝを申したから、粗漏な事もあつたに違ひない。後に調べて見ますと、「いと」に與へたものは火事で焼けて了つたと云ふことです。それは原稿と云ふ様なこみ入つたものでなかつたことも分りました。私は今日敢て江見君からお正しを受ける迄もなく、原稿を與へたとは思つ

て居りません。若し私の隨筆にさう書いてありますならば、それは全く私の心得違ひであります。それは兎も角もとして佐渡の話に移ります。

一體佐渡は、紅葉君の爲に大分名高くなりました。わざと紅葉君の遺蹟を尋ねに佐渡へ行く人がある位です。江見君も即ち其一人で、探檢の結果は江見君の近年出された隨筆に載つてゐます。小木には湯女の遺風が存してゐまして、藝者が客の入浴中素手で身體を洗つてやります。それ等のことも江見君の隨筆で拜見致しました。私の郷里にも、ポツ／＼江見君と同じ様に佐渡に出かけて、「いと」から昔話を聞いて書いた人もあります。今年の四月頃でありました。私の郷里の江口秋情といふ人が、佐渡訪問記を書いて私に寄せて参りました。それを何かの折りに表はしたいと思つてゐましたが、今日圖らず其の機會を得ました。その訪問記は此の一束の草稿であります。よく書いてありますから、時間があれば、こゝに讀みたいのですが、そんな時間ありませんから、要點を摘んで申し上げます。此江口といふ人は江見君が佐渡に行かれた後に出かけたのでありますから、江見君の御存じのないこともあるかと思ひます。

一體、紅葉君が佐渡へ行く事を志して越後の新潟へ見えましたのは、明治三十二年の七

月、恰度紅葉君が三十三歳の時であります。新潟には紅葉君の親戚が一人相當な地位の役人をつとめてゐました。紅葉君は先づ其の親戚の方へ身を寄せたのですが、紅葉君は可なり激しい神経衰弱に罹つてゐて、具合が宜しくなかつた。二三日も親族の家に居りましたが、終に佐渡へ向つて出發したのです。佐渡に遊んだ間が半ヶ月位でもありましたか、小木に居つた間は十五日間と聞いて居ます。其結果が烟霞療養といふ題で當時の讀賣新聞に連載されましたが、完結に至らなかつたやうです。紅葉君は先づ夷港に着してそれから小木へ移つた譯であります。小木には紅葉君を崇拜する人が二人あつて、紅葉君を深切に世話した。其一人は小學校の校長で風間儀太郎と云ふ人、も一人は土地の有力者で藥劑士の伊藤文吉と云ふ人、これは後に縣會議員になつた人であります。此兩人が紅葉君の東道となつて、ある時、權座屋といふ料理屋へ案内をした（今は料理屋をやめて旅館になつて居る）。その時の紅葉君の様子はどうかと云ふと、目は爛々として底光りがしてゐる。鬚は生へるに任せてゐる。髪も梳らないといふ風にしてゐたので、料理屋の嬢などは大いに恐れたといふ話でありますから、如何に神経衰弱でむしやくしやしてゐたか窺はれます。風間などは權座屋の主人に向つて盛んに紅葉君の吹聴をやり、方今有名な小説家と云

へば此人で、こんな人がこゝらへ遊びに来て、こんな詰らない料理屋へ来るなどは實に不思議な事だなど、吹聴をした所が、側らに聞いてゐた糸が小耳に挿み、そんな偉い人なら、一寸お茶でも差上げてお顔を拜見したいものだ、茶を持つて出た。これが抑々赤繩の結ばれる發端で、紅葉は此女が氣に叶つて、糸を假りの女房として、此家に居座はることになり、イラ／＼した紅葉君の神経衰弱も、いくらか和らぎ、追々安眠を得るやうにもなつた。こゝに一寸云つて置きたいのは、小木邊の妓は客が定まると、終日終夜其の側らにゐて、世話女房の如く針仕事などをやるのである。紅葉君も浴衣一枚此の女に縫つて貰つた筈である。紅葉君が二週間も飽かず、小木に止まつたのは此の伴侶を得たからであらう。紅葉君が小木で宿を定めたのは角屋（今は廢業した）であつたが、權座屋へ移つてから、宿は不用となりいざ勘定となると、角屋はどうしても勘定を取らない。紅葉君の評判が高かつたので、角屋はかりそめにもそんな偉い人を宿したのは光榮だといふて、何んと云ふても受取らなかつたさうだ。

紅葉君の小木滞在中に紅葉君を中心として、土地の若い連中が美人面識會といふを催した。小木中の妓は皆な會したが、皮肉の事には糸一人だけは其席に招かれなかつた。糸は

非常に憤慨して寝ても起きても居られなかつたといふは、糸自身の述懐であるらしいが、成程同じく小木の妓籍にあるものが唯一人残されるといふことが、如何に不面目であつたか、それは想像に難くないのである。それがたまらないで、糸は紅葉君の所へ手紙を持たせてやり、どうか是非早く切り上げなさいと云つてやつた。紅葉君も糸の情を思ひやつて、宜しいきつと戻るから待つて居れと、あの流儀の男性的に返辭をして、歸つた其夜筆を走らして三味線の皮に書いたのが、先刻江見君の述べられた「來いちゃく」の唄である。來い、ち、や、く、と云ふはこゝに一寸注解をしておきますが、佐渡の方言で「入らつしやい」といふことを來い、ち、や、と云ふ。紅葉君は、それを濃茶に轉用して談諷を弄したのである。紅葉君は非常な茶好きで殊に濃い茶を好んだ人であつた。

紅葉君が小木を去つた其折、糸と別れの段などは、江見君が委しく本にも書いて居られるし、先刻お話にもなつてゐますから省きますが、餘計なことながら、其後のお糸はどうなつたかと云ふに、阿佛坊妙宣寺と云ふ名高い寺が佐渡にあります。これは後醍醐天皇の時分から、段々歴史的因縁のある寺であります。その坊さんに望まれて糸は其の妻になり、十二年の間、僧房生活をしたのでありまして、さすがに僧院にあつては、人が問ひま

しても紅葉君の舊は語らなかつたと聞いて居ります。遂に住職と死に別れて、今より八年前、八木從造と云ふ質屋のおかみさんになつた。八木は七十歳と云ふ老人で、萬事を此妻に任してゐたと聞きますが、その良人はまだ存命か否か存じませんが、お糸は今婦人會の幹事をやつて、なか／＼ちやき／＼で、演壇に立つと、無暗に硯友社諸君を友人であるかの如く、江見君はどうの小波君はどうのとやらかすと云ふことであります。さてこの女の容貌はどうかといふと、如何に辯護しても十人並外れの醜婦で、出ツ齒が殊に目につくと申します。紅葉君はお茶人であるが、よくもこんな婦人に思を寄せたものだと言ふ人もありますけれども、全體あの人は義侠の人で、人の餘り喜ばん、又人に捨てられる様なものを愛する肌は確かにあつたかに思はれます。他に紅葉君の愛した婦人にも餘り美人は無かつたやうです。

最初に申さうと思つた話が番狂はせになりました。私が紅葉君と最初に知り會ひましたのは、讀賣新聞に私が主筆をして居た時です。紅葉君は毎日でもありませんでしたが、小説を書いて居られたので、時々社に見えて、それから交が初まつたのであります。一寸年を數へますと、今より四十年の昔であります。當時紅葉君は既に名聲の高い人でありまし

た。初対面の感じを申しますと、色の浅黒い背の高い鬚のない、眼の鋭い、物の言ひ振りはきびくとしてどう見ても生粹の江戸兒でした。先刻江見君が云はれたが、紅葉君は男に惚られる男で無ければならぬとの自負もあつたやうだ。江見君も紅葉に惚れたと云はれたが、私も亦惚れた一人であつた。あの人は若い癖に親分肌の人であつた。全體あの人は帝大の法科に學んだ人でありますが、法律の臭氣などは一點も無く、筆を揮へば彼れが如き婉麗の文を爲すのであります。どこまでも男性的で、運動會で競走でもあれば一番早く走り出すのがあの人でした。

紅葉君の有名な小説は皆な讀賣新聞在社時代に書いたのであります。「隣の女」と云ふ小説などは随分際どい所まで筆が進みました。さうすると、前島男爵から私へ手紙が舞ひ込んで來た。それにはもう危い。隣りの疝氣となす莫れと、注意をしてきた。當時は發行停止、或は發行禁止などいふやかましい災難のあるときでしたから、私もヒヤ／＼しましたが、流石に紅葉君はうまく筆をそらしたので、無事でしたが、先刻も江見君の云はれました通り、紅葉君は非常な凝り性で、あの靈筆を持ちながら決してさら／＼と書かない。如何にも遲筆で、一字一句を噛み出すやうにして筆を下すので、新聞一日分の小説を書くに

非常に多くの時間を費し、往々深夜筆を把つて天明に及ぶこともあつた。硯友社同人諸君のうちでは、極めて健筆な人達はどん／＼水の流れるやうに書いて、朝のうちにさつ／＼と原稿を書いて了ふのを見ると、紅葉君は苦い顔をして、そんな事をすべきものでない、など／＼云つて居る様な流儀違ひの人でありました。陳列場に私は一枚の紅葉の草稿を出して置きましたが、如何にも鄭重に書いてあります。假名一字でも忽かせにしてません。直すとなれば必ず紙を張る。二重にも三重にも四重にも、氣に喰ふまでは紙を張るといふ様な譯で、兎もすると連載の小説が停頓を生ずることもあつた。或時停頓を生じた。それは尺八の事を書かなければならぬが、尺八には實驗がないと云ふので當時向島に居た友人佐藤某を訪ふて尺八の研究に出かけたので、二日ばかりとう／＼掲載が中絶した。其頃の讀賣の社長は本野亨と云ふ人で、本野外務大臣のお父さんです。編輯室へやつて來て私に頻りに苦情を鳴らすから、私は紅葉君を辯護して、さう言つた所でなか／＼貴方の考へる様に、さうすらく／＼書けるものじやない。と云ふと、どうしてさうだ、あの位流麗な筆を持ちながら、さつさと書けん譯はないと言はれる。いやさうでない、いくら流麗な筆を持とうとも、あの小説は長い詩です。あなたも漢詩を作らるゝが、長篇をさうすらく／＼作り得

ますかと云ふと、さうか成程さう聞いて見ればと云つた様な譯であつた。それから原稿を取寄せて示し、どうです、こゝに張紙がしてある。この張紙が同じ場所に五枚も張つてある、と云ふて段々に剝がして示したが、一番最初に書いたのでも拙くはない。それが氣に喰はんで一枚張る。又氣に喰はるので二枚、三枚張るといふ譯で、五枚に迫んで始めて満足してゐる。と云つて書き直した跡を比較して其の努力を説くと、社長も成程さういふ譯か、どうも感心なものだといふ譯で、漸く紅葉君も救はれ、私に禮を云ふて來た事がありますが、如何にも凝り性でありました。紅葉君は一向酒を呑まん人で、酒の代りに濃い茶を好みました。私などが書齋を訪ふて長座をすると、二度も出しかへる位であつた。夜中執筆の時も絶えず濃厚の茶を飲んだのである。あの人の癌の原因は恐らく茶にあつたやうに思ひます。

私はよく紅葉君と連立つて諸方を歩いた事があります。あの人は非常な食通で、いろいろの料理屋を訪ふた。困つたことには三杯も飲むと直ぐ倒れて座中に寝て仕舞ふので、自分はいつも獨酌の形であつた。或時山谷の八百善へ行つた。まだ八百善の繁昌時代で料理もよかつた。君は大層喜んで献立を一々手帳に記し、複雑な調味を分析して、それを一々

手帳に記したものです。それから君は寫眞機を持つて歩く事もあつたのですが、どう考へたか有名な料理屋の臺所を寫眞に寫したいとあつて、寫したこともありましたが、何分料理屋ではさういふことを喜ばんのみならず、臺所は御承知の通り暗いものですから、餘り成功しなかつた。料理屋で君の最も喜んで臨終の時まで取り寄せた料理は、日本橋の中華亭でありました。是に就いて可笑しい話と申すのは、或時私の友人で山田一郎と云ふ人がありました。是がよく中華亭に参りましたが、最初はまだ紅葉君とは相識らなかつた。なかなか惡戯をやる男で、或時静岡邊の若い醫者を連れて中華亭へ出かけ、中華亭の娘お福に今日は紅葉君を連れて來たと云ふて欺いたのであります。此娘は紅葉の崇拜者で、山人の作は何んでも讀むでゐる女ですから、紅葉入來と聞いてひどく喜び、一つ短冊を書いて下さいと云ふて、頻りに書かせた。贗紅葉も兎に角歌位書ける人であつたものと見えまして、どん／＼書いてやつた。さて其次の日、私が行くと娘は喜んで、紅葉さんが來てくれたと云ふ。私は誰が一緒に來たかと云ふと、山田さんが連れて來たと云ふ。そんな事は無からう、山田は紅葉を知らん筈だ。どんな人だと云つた所が、色の白い、鬚の生えた背の低い人であつたと云ふ。私は噴き出してそれは擔がれたのだ。私は今度本物を連れて來る

からと云ふて、二三日たつて紅葉君を誘ふて行つたのが、抑々紅葉君が中華亭に觸れた始めである。でそれから長い間中華亭を最負にして先刻申したやうに、病中はこゝから料理を取寄せたと聞いてゐます。紅葉君の酒嫌ひに就ては次ぎのごとき話があります。或新年に、私が年賀に参つた所先生まだ寝て居る。そこで外を廻つて再び行きました所が、席に尺八の事で前に陳べた佐藤某と他に一人賀客がゐました。新年だから祝酒が出たが、佐藤といふ人がなか／＼飲むので、酒が盡きると主人に會釋なく、手を叩いてどし／＼酒を取り寄せるといふ騒ぎで、自分がかう見えても遠慮深いのだが、一方の相手がひどい遣口なものだから、ついそれに追隨したやうな事でさん／＼紅葉君を苦しめた。紅葉君が死んでから日誌を刊行する事に成り、それを見ると新年の事でありますから、第一頁に佐藤と私とを新年の悪客と罵つてゐるのに驚いた。紅葉君は氣に喰はぬことは、用捨なく筆誅を加へる人であつた。妙な事だが四十年たつて、先達、梨本宮様に召されて参りました時に、宮家に奉仕する宮内官で三雲敬一郎といふ人が、やあ久し振りです、私も紅葉から新年の悪客と呼ばれた組ですと名乗りを揚げられたので互ひに一笑了。後に日誌を見ると、成程其人の名はあるけれども此人は悪客の罵倒を免がれてゐる。宮家などに使はれる様な

身分の人は、どこか穩かな所があつて紅葉君の罵倒も受けなくて済んだのでありません。紅葉君が讀賣新聞にゐました時分に、自から丁寧に寫字をやるので何だと云つて尋ねた所が、西鶴の著で『色里三所世帯』と云ふ珍本といふ。其の用箋が面白いので、そんな紙は何處に賣つて居るかと問ふた所、いや賣つてはゐない、是は中村花瘦が持つて居た紙であると云ふた。其頃紅葉館にお花と云ふ女がゐりまして、大層肥つた若い女でした。それを紅葉君が好きで、花瘦といふ號をつけたことがある。その號を後に門人の中村に與へたが、中村は若死をしたので、紅葉は故人を偲ぶ爲めにその用箋を遣つてゐるのだと知れた。此の『色里三所世帯』と云ふものが、三冊ばかりの本で、紅葉君の流麗な字で書いてありますから、私は是を借りて紅葉君の筆意に似せて寫した。紅葉君に本を返却する時、君の所に君の書いたものがあつたからと云ふてどれ程の事もあるまい。俺のはまづいけれども、君の書いたものと交換したいと云ふて紅葉の寫本を珍重したことがある。紅葉君が死んでから、或者があなたは紅葉さんに因縁があるから、かういふものを持つて來たが、お買ひになりませんかと云ふて、示したのを見ると、私の寫した『色里三所世帯』であつた。それを紅葉の筆でないとも言ひかねて其儘戻したが、どこかにそれが紅葉寫本として

珍重されてゐるかも知れぬ。

段々長くなりましたからもういゝ加減にしますが、一體紅葉君といふ人は趣味の人でありました。いろ／＼の小説に婦人の服装を細かに書いてゐるのでもわかります。挿繪などにしてもそれ／＼おもしろい意匠がありました。此三越呉服店と紅葉君との関係なども思ひ起すのでありますが、當時の重役日比翁助君と関係がありましたやうな事から、紅葉の案で『ひも鏡』といふ商品目録を發行したことがありますが、あれなども紅葉君の意匠が籠つてゐます。何につけても、意匠があつて面白い気分がありました。殊に江戸趣味はあの人が天分に持つて居たので、意匠は頗る氣の利いたものでした。若しあの人が長く存命で手元が豊かであつたら、どんなに發展したであらうか、不幸にして早く亡くなつたために、あまり自分の趣味性を發揮する事が出来なかつたのは、甚だ遺憾であります。現にあの人が病を得て、不治の病氣に罹つた事を自ら知りつゝ、どんな事を案じたかと云ふと、自分の患部を繪葉書としやうとして圖案を作つて見たり、葬式の事なども、棺を運臺に載せて高く差上る事は氣持がわるいと云ふて駕籠に載せよと遺言したり、知人に配る蒸し物にも意匠を凝らし、重箱の蓋裏に源氏の紅葉の賀の香の巢の模様をつけたのも、皆紅葉君

の案に依るのであります。紅葉君は、印にも趣味があつてしきりに印を彫刻したものです。が、不治の病を得て起たざることを知ると、記念の爲めに『化及我』の三字を刻させたなど、どんな場合でも趣味に離れなかつたやうです。自分なども趣味に就ては紅葉君の薫陶を餘程受けてをります。殊に江戸趣味に就ては、甚だ詰らんことを長く申上げましたが、これで御免を蒙ります。

九一 「硯友社と紅葉」を読む

昭和二年の暑中に、銷夏の読み物として江見水蔭氏が「硯友社と紅葉」の小冊子を出版したので、當時読んで見た。紅葉山人とは別懇であつたから、自分も可なり山人の事蹟を知つてゐるので、この書を読んで、相當に興味を感じた。この書には自分がその頃早稲田文學に、山人の思ひ出を書いたことがあるが、この書にチラホラ自分の書いたものが引合に出ている。自分が牛込の割烹亭吉熊に（この家今なし）坪内逍遙氏を誘ふて硯友社一派の面々がぞろり坐つてゐる席に入つて、坪内氏に茶番的滑稽の挨拶をさせ、一座を笑倒

せしめて、その頃兎角逍遙紅葉兩派の末輩がおかしな關係で、動もすれば互に軋轢するやうなことがあつたが、この茶番の一場の挨拶が確執を解いたことは自分が早稲田文學に書いた事實だが、それに就て水蔭氏の書いたのを見ると、その際の硯友社の會合は、水蔭氏が没落して神戸新聞へ聘されてゆく送別會で、小波氏の肝煎りで時は明治三十一年一月廿九日であると云ふてゐる、そして出席者は紅葉、小波、雪後、桂舟（畫家）、乙羽、年峰、鏡花、風葉、大橋新太郎の十人であつたとある。自分はその席に入りながら出席者の誰彼は此書で始めて教へられたのである。もう一ツ左の記事がある。盆燈籠といふ小説を紅葉山人が讀賣新聞に書いたけれども、ひどく受けなかつた。主筆の市島先生から、紅葉に宛て、樂屋内の事を書かれては困ると小言の手紙が飛んだ程だ。とあるが、自分には記憶が無い、樂屋落と云ふことも思ひ出せない。この外に自分が引合になつてゐるのは紅葉の食物の部に木原店の中華亭、市島翁など、能く行つたとある。それは全く事實で自分が最初山人を誘ふたのだ。これに就て可笑しい話は、亡友山田一郎が偽紅葉を連れて行き、中華亭の娘を欺いたことが分つて、自分は眞の紅葉を連れて行つたのだが、紅葉はこの家の割烹が氣に入り臨終頃の病床にも、特にこの家の料理を取寄せた位である。

熱海には金色夜叉の歌碑が建つてゐるが、紅葉が事實熱海に行つたか否や、は動もすると疑問とされ、自分も確とは知らなかつたが、水蔭氏の記に據ると確に行つたとある。しかし當時紅葉も振はなかつた時で、最初樋口旅館へ落付いたが、宿格が高等に過ぎると見て晝飯を喰つて小林旅館と云ふ二三流の宿に引下つたが、食物がわるいので、アジの干ものを私かに買つて、食事の時下女をしりぞけて火鉢で焼いて喰つて、バレて失敗したことなどが丸岡九華に依つて語られてゐるから、確に相違ないが、冷遇を受けたことも亦確である。と云ふ記事も興味がある。亦「紅葉と代作」の項にも自分が引合に出されてゐる。紅葉が不治の病に罹り、他人の作に筆を入れ自分の名で讀賣に掲げたことにつき、水蔭氏は左の如く云ふてゐる。

何分神經衰弱に苦しんでゐる一方「讀賣」の方からは、文士に無理解な本野社長に攻められるので中間に立つてゐる市島翁などが心配して「君の名前さへ出てゐれば、好いから、誰かの作を買つて、それに檢閲の名儀でも付けて發表しても好い。」然ういふ諒解の下に鏡花の「義血俠血」瀧の白糸」も出たのだ、花袋の「笛吹き川」も出たのだ、これも紅葉が筆を入れたのは勿論だ。

既に忘れて居ることを斯く教へられると、茫々夢を辿るやうな心持がする。

九二 日光廟史談

前年日光誌の編纂を擔當した赤堀又次郎氏から、傳ふべきいろ／＼の史談を聞いたことがある。氏は材料の蒐集に手を下し、端なく春日局の祝詞を發見したことを語つた。この祝詞は瑠璃版に附されたのを示されたが、なるほど局の老筆と見え如何にも正しいものであつた。赤堀氏の話によると、この祝詞は三代將軍の病氣の時、身代りとならんと局が神佛に祈つた事がある。然るに局は六十一の壽命を保ち得たお禮參りに、日光廟を始め二三社を參拜した事がある。この祝詞はその折日光廟に讀んだものであることが明かであるのに、これまで曾て發見されなかつたわけは、三代將軍のお守箱の内に秘めてあつたためである。おそらく局はこの祝詞を神前に讀んだ後三代將軍に獻じたので、將軍は他のお守と共に一函に收め置かれたのが、後に廟に納められたのであらう。

赤堀氏と話次、日光廟の建築年代についても發見談があつた。あの廟は寛永の建築とい

はれてをり、現代の建築學者もこの年度に據つて考證してをれども、それは事實でなく、元祿の改築にかゝる事の掩ふべからざる證據がある。すなはち内殿の疊をはがして、それに沿へある塗り椽の裏面を見るに、明かに、元祿十三年某月御造と當時の木工が書いたのが、鮮かに存してゐて帳簿にも元祿改造とあるそうだ。全體この廟は寛永に建築されただけども、四代將軍の時に大地震があつて、造營物はすべて崩壊し、それがため基礎から震災に堪へ得るやう新たに設計して凡そ三年ばかりの歳月を費し、修繕といふよりも、全然改造ともいふべき大普請をしたのである。されば現在の日光廟は寛永を距る約五十年後に出來たもので、その前の建物はどんなものであつたか、今は一切の記録が焼失して存しないので知る由もないが、現在のものに較べたら、質素のものであつたらうと想像される。奥の院にある墳墓が銅製の厨子であるのも、元祿の改造に係り、もとは石造であつたといふ。自分はこれ等の談を聴き宿疑を解く事を得た。自分は久しい間、寛永の建築としては餘りに纖巧華麗に過ぐると思つてゐたのである。

赤堀氏はさらに一事を語つた。家康公の廟には詮索しても何も文書らしいものが存してゐぬ。只三代將軍の廟庫には種々のものが存してゐる中に、最も珍とすべきは家康公の夢

の像と稱せらるゝものが七八幅存してゐる。當時三代將軍はしばしば家康公を夢に見たと傳へられ、その都度探幽を召して夢に見たまゝを寫させられたといふ。もとは十六七幅もあつたといふがいくばくか散佚したと見える。現在存してゐる幅について見るに只一幅だけが、衣冠束帯の圖で、他はみな羽織袴の略服で立膝の態度であるさうだ。

九三 琴の因縁ばなし

越後の舊家に名高い琴が二つある。その舊家は二軒共に自分の親戚であるから、この名器をよく知つてゐる。一器は新發田諏訪前の造酒家で同姓の家にある、この家にあるのは昔池大雅が愛藏したものと傳へられてゐて、如何にも古雅のものである。匣面には大雅の筆で銘が書かれてあつて、その書がなんともいへぬ妙を極めたものだ。大雅が琴を愛する心から楽しんで書いたものに相違ない。もう一つの器は、中條近在の丹吳家に藏してある。これには面白い來歴や因縁話があるから、大略を語る事にしよう。この家の數代前に、京都に遊んで當時名高かつた畫家中林竹洞に就て畫を學んだ人があつた。その人は西城と號

した、ある時愛藏の琴の囊を製して、竹洞、梅逸その他懇意の畫家を招き合作を試みてゐるところへ、頼山陽がやつて來た。玄關に聲が聞えるから、西城老人は折角出來た合作にあの人へ何か書かれては大變と、あはて、囊を隠さんとしたが既に遅かつた。山陽は早や席に入り來つて、イヤ出來たな。餘白に俺も何か書かうとあつて、いきなり筆を揮つた贊は表面の餘白を埋めて背面にも及んでゐる。その贊は拙著「隨筆頼山陽」に録してあるから、こゝには略するが、世に無絃の琴があるから、梅にも蔓のない花があるといふて、偶偶梅逸が近眼のため梅花に蔓を書き漏らしたのを、山陽の慧眼早くこれを見出して、揶揄的にその事を贊に入れたのだが當意即妙、文も書も流石によく出來てゐる。西城老人は顔をしかめてまたやられたとひどく迷惑がしたが、後になつてみるとこの囊は、山陽の題贊によつて名高くなつてゐるのである。

丹吳家では今でもこれを大切にしていゐるが、妙な事に囊と匣だけが存在してゐて、肝腎の琴がない、確にもとあつたものが、いつ何處へ行つたか誰も知るものがなく長い間經過した。然るに今の丹吳氏の代に至つて、不思議な因縁でそれが舊主に戻つた。その経緯については多少の興味がある。それはかうである。丹吳家の懇意の豪家に羽ヶ榎の國井氏が

あつて、始終往來してゐる。ある時國井の主人が丹吳へ訪ひ來つて、近く某日に拙宅へお招きをしたい。その節何か進上するが、あらかじめお約束したい事は私から進呈のものに對して、御辭退なき事と絶対に御返禮のない事であると。かく約して國井氏は辭し去り、丹吳氏は何を貰ふのであるか、一向想像もつかず折角招かれたから、その日たづねてみると、請ぜられた座敷の床の間に一面の琴が飾つてあるのに氣が付いたが、それが丹吳家の囊の主であるなどは、夢にも思はずにゐると、國井の主人は先日御約束した品はこれです、これこそ貴家に存すべきものであるのに、永い間流浪して此村にあつた。今ぞ貴家へ戻るのは自分においても仕合せであるといふので、丹吳氏はこれを聞いて驚き且つ喜び、だん／＼由來を尋ねると、本末數軒ある國井一家が其頃家財を賣却した中に、この琴があつた。そこでこれ丈は丹吳家のものにあらずやと、とにかく買ひ取り、内々手を廻して丹吳家にある琴匣と夫を合せてみると、キツンリ合ふので、確にこれだと判断して差上げる事になつたのだとの挨拶を聞き、丹吳氏は國井家の厚い志に感動した。察するところこの器を賣却した國井家には、もと琴を弾する人がゐた。そんな事から今より四代前の丹吳家の主人は、貸與へたか贈つたかしたものに違ひない。もと／＼親しく往來してゐる家だから、かやうな事はあるはずである。今は丹吳家に名高い囊に納めてこの器が珍藏されてゐる。匣は支那風のものであるが、先年東京で桐製の上箱を作つてやつた事がある。上匣に由來を記せ、と頼まれてゐるがそれは未だに果さな。

九四 太田道灌と紅皿

太田道灌が狩獵に出かけた途中、雨に遇つて貧家につき簞を借らんとした。その家の娘が簞の代りに山吹を折つて薦め、古歌の「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだに無きぞ哀しき」と云ふ意を寓したので、武骨一片の道灌もそれに感じて和歌に志し、後に相當の歌人となつたと傳へられて居る。これも興味のあるロマンスだが、更にそれよりも面白いロマンスのあることが閑却されて居る。それは外でもない。道灌はこの少女に見惚れて遂に納れて妾としたのである。詩人の所謂「少女不言花不語、英雄心緒亂如糸」とはこの間の消息を漏らしたものであらう。この少女の家は、ある武辨の詫び住居で、二人の少女があつたが、繼母の爲めに、生さぬ仲の長女を虐げ、己が子の二女を偏愛し秀麗の長女

の名たるべき紅皿を逆に二女に命じ、二女の名の缺血を長女の名としたと云ふのは「うつぼ物語り」から取つた趣向でもあらうが、事實そんなことがあつたか否かは分らないが、馬琴の書いた「皿々郷談」などもこの趣向を取つて、繼子いじめを叙したるに過ぎない。花を捧げた長女が道灌の妾になつたことは聊かも觸れてゐないのは何故であらうか。か程の艶なるロマンスが一向に注意されず、芝居などでも専ら馬琴の「皿々郷談」を翻案し、かつてこの艶氣あるロマンスを劇材としなかつたことは寧ろ奇とすべきである。傳説に據ると、紅皿は道灌の歿後尼となつて、その死後葬られた所が、牛込の余丁町附近にある西向天神で、そこに立つてゐる碑が即ち紅皿を記念するものと云はれ、その祠に傳はる縁起にも紅皿が道灌の妾となつたことが云はれてゐる。自分もいつぞやこの天神境内に入つて見たが、堂宇その他皆頽廢してゐるが、紅皿の碑のあたりには紅皿を劇に演じた記念にと俳優が建てた相當の碑があつて、それに俳優の名も刻してあつたが、この俳優達も道灌の妾となつたことまでは知らなかつたのではあるまいか。この興味あるロマンスを取上げてはじめて劇材としたのは坪内逍遙翁で、児童劇の脚本が書かれてゐる。道灌が花を受けた山吹の里も早稲田の附近にあり、西向天神も逍遙翁の余丁町の居とは二丁も隔たぬ所にあるので、翁がこのロマンスに氣づき、早稲田に演ずる劇の材料にしたのは、流石に翁である。

九五 あこがれの詩の國讃岐

讃岐は自分が「詩の國」、「繪の國」として憧憬してゐるところである。曾て松平頼壽伯の客となつて往つたことがあり、大隈老侯に随伴して往つた事があり、屋島、壇の浦、金比羅神社等は皆お馴染みである。大正三年に遊んだのは第三回目であるが、前年訪問の時に比すれば面目の改まりたるものが、一にして足らなかつた。

乃ち築港の成りたる、水道の出来たる、玉藻城門内に松平伯の邸宅の築かれたる、栗林公園の擴張されたる、市中にある松平邸が變じて讃岐館（クラブ）となりたる、前回宿した可祝旅館が場所を變じて新築されたる、皆な自分には目新らしく覺えた。自分は香川縣の風景は大概見てをるが、津田の松だけを見落してゐる。幸ひ松平伯は近年この勝區に別荘を設けられそこへ招待を受けたので宿志を満了すを得た。津田は海岸一帯の地で、この

松原を一名琴林といふてゐる。津田町東端から鶴羽村の西端に接し、松平家の別荘のある所は鶴羽村で、殊に好風景を占めてゐる。近頃國鐵高德線が開通して、徳島縣へ通じてゐる。津田へ行く途中志度を過ぎ、平賀源内の舊里である事を思ひ出した。その家もまだ存してゐるさうだが、訪ねる時間がなかつた。また茶人のやかましくいふ蘆屋釜の産地も、志度浦眞川だといふ説もあるので、一行の讃人に質したら、それは筑前遠賀郡の蘆屋で讃州のは同名異地だとわかつた。

いろ／＼風景談も出たが神懸(或は神駈)を唐めかしく、寒霞溪と稱へてゐるけれども自分は、寧ろ神駈の方がよいといふのに對し土地の人も溪といふのは當らない。あそこは危峰絶壁の地ではあるが大溪流などはないから、といふ説も出た。栗林公園はどう擴張されたかと尋ねて見ると、近く經營したのは北門すなはち正門に入り、南へ奥深く見えるやう作つたのだと聞いた。俗説にこの園は東海道五十三次に倣つたなどいふが、それは全然違つてゐるさうだ。近頃開けた勝區で自分のまだ知らない所はないかと聞いてみたら、三霞洞は讃中自然の風景に富む所だがこれまで地が僻遠で世に知れなかつた。今は高松から電鐵自動車で二時間で達し得ると聞いた。この地は綾歌郡美合村にあるさうな。高松はいつ

行つてもいろ／＼趣味を感じる所だが、この行には恰も大典を記念する産業博物館が開けてゐた。この州自慢の三白、砂糖と米と鹽を始め豊富の物産が陳列されてゐた。また公園内には美術展覽會もあつて、平生見る事の出来ない象谷や古理平の名作、平賀源内の陶器などをふんだんに味ふ事の出来たのは、この上ない仕合せであつた。附け加へて置くがこの地に文墨の人漆谷竹谷などといふ名家があつたために、支那から書畫が輸入されると先づ讃岐へ持ち込み、讃岐の品賸を得て初めて京都や江戸へ出したといはれてゐる位、讃岐は鑑賞家の淵藪であつたから讃岐には、名畫が多く存してゐる。

讃岐は實に風流國だ。この地から多くの名流が輩出してゐるが、傑僧空海もこの産だし、栗山や西郷と薩海に投じた月性忍向もこの人だし、篆刻家の林谷、任俠家の日柳燕石もこの産で、一々僕指の違がない。これも亦自分がこの地にあこがれる所以である。

九六 川柳の語る尼寺

昔鎌倉時代には佛教が盛んで、人を濟度する趣意で女人を保護する尼寺があつた。それ

は鎌倉の松岡東慶寺である。今一つは足利の満徳寺である。兩寺とも今日は頽廢に歸したが、その盛んな頃は全然行政權の及ばない所で、幕府もそれを度外に置き、苟くもその寺に駆け込む女人があれば、良人でも親族でも奈何ともする事が出来なかつた。その寺が二つとも秀頼の妻子に因縁のあることや追々弊を生じて幕府が干渉したことなどは、自分が放送局に頼まれて處女放送に吹き込んだことがある。その筆記は自分の既刊隨筆に收めてあるから、一切それを繰返さないが、爰には種々の川柳を引いて、脱走婦人の寺住居の状態を聊か云ふに止める。

駈込み婦人はどんなものであつたかと云ふに、有夫の婦人が多く、それが夫婦喧嘩の揚句、或は家庭の不和から、離縁を欲してもそれも許されず、已むなく最後の手段として駈込みをやつたものである。川柳に「すは鎌倉の大事ぞと仲人來る」とあるのも「道中記何にするのか嫁は買ひ」とあるのも「奥の手は鎌倉道を知つてゐる」と云ふのも、皆逃げ仕度をするものである。最初の寺法は三年寺住居をするに離縁狀を貰つたと同じで自然に縁が切れるので、三年目には大手を振つて、出て來るのである。川柳に「三年の戀がさめると離縁なり」とあるのも「娑婆中にこわいものなき三年目」とあるのも「松風を有髪の尼で三

とせき」とあるのも「去り狀を有髪の尼になつて取り」とあるのも「二度目には娘で通る渡し舟」とあるのも「狀一本とるに嫁三年かゝり」とあるのも、皆在寺三年を語るものであるが、期限にも沿革があつて三年を縮めて足かけ三年としたのは住職の粹な取計らひであつた。初めは有髪のまゝ、在寺を許したが、後には幕府の干渉で剃髮せしめることにもなつた。讀經も強ひられ鐘も叩かされた。「かんさんに花咲く聲や松ヶ岡」とある川柳や「撥の手に撞木は惜い松ヶ岡」とあるのも「ふんどしも絹なら取れと松ヶ岡」とあるのも「魚物をばたち物にして縁を切り」とあるのも「精進けつさいして去り狀をとり」とあるのも皆比丘尼生活を語るものである。勿論唯形式だけ尼の眞似をしたのみで、心に何の感化を受けた譯では無かつた。何んにしても男の全くない所で住持も勿論一生男を持たぬ尼公である。川柳の所謂「松茸のありさうでない松ヶ岡」である。住持尼公の心事はと云ふと「つまま持たぬ身がましかやと尼公いひ」尼公もナゼ良人を持たぬがまだぞ、と不審がつてゐる。「住持さまばかりは男えらみせず」と川柳のいふごとくであるが、住持の尼公は絶対にそれを許されない。そして還俗をする弟子のみを持つてゐる。川柳の所謂「還俗をする弟子を持つ松ヶ岡」である。なんにしてもこの寺は川柳に「尼寺は男の意地をつぶす所」で

あり「松風の音で寄手を吹戻す」所である。

駈込女人は幾許あつたか分らないが、盛んな頃には可なり澤山にゐたやうに思はれる。皆食料持参だから、合宿所のやうなものである。それ等が夜分枕を並べて寝た光景はどんなであつたらうか。彼等は互に何を語つたであらうか。川柳子は如才なくいろ／＼云ふてゐる。「松ヶ岡寝そびれた夜のぐち競べ」と云ふのも「松ヶ岡相身互の癩を押し」といふのも「松ヶ岡似たことばかり話しあひ」と云ふのも「松ヶ岡にこ／＼出ればそ／＼來」と云ふのも「心ない枕の多い松ヶ岡」と云ふのも「鎌倉にねばる枕のあらばこそ」と云ふのも、彼等の寢臥の状を語るもので、嫉妬、憤怒、罵詈、それが互に交換された寝物語りであつたことは想像に難くない。

鎌倉は東京に近いから川柳の存してゐるのは多く松岡東慶寺を語るもので、満徳寺に就ては川柳がないが蓋し似たものであつたらう。鎌倉にはその頃二三の茶屋があつて、駈込女人の爲めに物を供給したり、親族からの通信を取扱つたり、代書人となつたり請人ともなつたのだ。初めは一家の風波のため據ろない女人を保護するに始まつたものだが、追々悪弊を生じ、亂行の揚句身をよせるやうなものが出来、淫奔のものが寺法を亂したので、幕

府も風紀上黙過しがたく、種々干渉して遂には有名無實の避難所に成り果てた。

九七 自殺禁止の困難

日本の事が日本の文献になく、却て外人の書いたもので教へらるゝことが往々にしてある。和田克徳といふ人が著した「切腹哲學」を讀んでみると、アストンの『ブルユー・ブツク』に出てゐるといふてそれを譯出してゐる。すなはちこの事も外人の文献に依つて教へらるゝ一例である。その譯文は左の如くである。

時は明治二年（西紀一八六九）維新後の日本を如何なる方面に推進せしむべきか、に就ての國是會議が廟堂に開かれた事があつた。その時一委員小野清五郎に依つて、切腹の廢止の建議案は提出され、その運動は捲起されたのであつた。斯くて議場に於ては贊否兩様の意見が兎も角も討論された事は疑ひない。この時に於ける國是會議委員の總數は二百〇九名であつたのであるが、採決の結果は實に百九十七票の差を以て脆くも、否決されてしまつたのである。而して贊成者は僅に三名、他の六名は贊否何れの意思をも

表明しないで投票を棄権してしまつたのである。叙上の問題に關しての討論に於て、次のやうな事が高唱されてゐる。「苟も切腹なるものは、我國民精神の殿堂であり、道義實行の表現である」、「我帝國に於ける一大裝飾である」、「國家組織の支柱である」、「至純な名譽心の養成と國家の支柱とも目さるべき士分階級間に流露する、美はしき感情交流の源泉を培ふものである」、「宗教心の支柱であり、道德心の拍車である」と。

因襲といふものが如何に強く、且つ恐るべきであるかは世界に類例のない切腹に對し、明治維新になつてすら執著心が頗る盛んであつた事が、これによつて窺はれる。小野清五郎は切腹廢止論を唱へたためであつたか、その後間もなく刺客の毒刃に斃れたといはれてゐる。明治三年に新律綱領を定めた時でも、自刃を自裁と文字を改めたのみで士族の子弟には屠腹を許した。明治六年改定律令を制定するに迫んで初めて終身の禁錮をもつて自裁の刑に代へた。これから法律面より自殺刑が除かるゝ事になつた。

九八 浪 人

知識階級の失業が續出する今日、むかしの浪人のことを追懐してみるのも一興である。浪人は扶持に離れて流離の身となつても、武士である。いくら糊口のため已むを得ないとしても、武士の體面を損なつてはならなかつた。もち論種々の内職をやつたものもあり、博徒の護身棒となつたものもあり、虚無僧の群に投じたものもあり、劍術指南に各所を遊歴をしたものもあり、糊口の術はさまざまであつたらうが、いくら武士は食はねど高楊枝と氣取つても腹の蟲が承知しなかつたであらう。暗夜に人を刺し殺して物を奪つたり、富豪に強請をしたりする位な事は、必至の勢ひといはざるを得ぬ。浪人といへば紙子を著たり、つぎはぎのある著物をきて昂然市中を横行した。一種丐兒と見れば見れないでもないが、残飯をもらひ廻る如きは帯刀の手前出来もしなかつたであらう。何といふても佩刀の貧人であるから危険といへば、これほど危険なものはない。彼等は窮した揚句、團體を作つて横行した。甚だしきは幕府に對して陰謀を企てたものもある。由井正雪の運動の如き

浪 人は其一例と見ねばならぬ。赤穂の浪人は團體で主君の讐を復した。目的が復讐であつたから義舉ともいはれたが、これが不平のため闇老の暗殺など企てられたとしたら、如何に恐るべきであつたであらうか。幕府も幾んど仕末に困つた。いろ／＼の取締法も出たが徹底的に追放などした事はなく、纔かに消極的に浪人の氏名を届出させたり、妄りに宿泊せしむる事を禁じたりしたに過ぎぬ。吉原の遊廓が、彼等の潜伏所であると共に亦捕縛に便利なところで、遊女屋の開祖は浪人の悪黨を捕へる條件を具して、遊廓開業の許可を得たやうな仕末である。かれ等は常に亂を思ひ、戦争起れかしと望んだのも無理からぬ事だが、生憎元龜天正以來は世が治まつて、投すべき戦亂が餘りなかつたので、彼等はますます困つた。且つ幕府の政策として瑕瑾があれば大名をどし／＼潰ぶしたから、扶持離れの浪人が續々と出た。これ等に業を興へる事もなく、士分の桎梏で飽まで抑へたから彼等は活路がなかつたので、悪事を働くのを待つて刑するの他、手段がなかつたといふは餘りの無謀である。幕府もある時代に浪人の帯刀を禁じた事がある。かれ等浪人は自ら佩刀を質に入れて無腰になる事があつても、帯刀は武士の魂であるものを禁ぜられては、不平であるに相違ない。しかし幕府としては思ひ切つた處置であつたのだ。元祿十一年に幕府がこの處

置をとつた時の事が、近刊の「日本及日本人」に書かれてゐる。それは
元祿十一年十一月、建部内匠頭政吉が伏見に赴任した。前にも云つたやうに、伏見は浪人跋扈の甚だしい土地であつた。これを見た建部政吉は浪人共を一堂に集めて云つた。士として丸腰であるといふのはさぞ遺憾なことであらう、が、浪士帯刀は國禁であるから、如何ともなし難い。で、吾等が少々乍ら、飯米を合力しようと思ふ、すれば余の家臣として兩刀を帯びるに、何の憚りもないわけである。然し、余が召抱へるといふわけではないから、勿論五節句、朔望の禮には及ばない。
けれども火事、地震その他非常の場合は、早速詰めかけて働いて貰はねばならぬ。これは上への御奉公なのだ。
が、勿論無理には云へぬ。諸士の中にはもと大名であつた者もあらう。で吾等の合力をいさぎよしとしない者は、無理には云はぬ。早速退散されたい。そしてその人柄に依りて各三人扶持、五人扶持を興へた。
これは甚だ穩健な失業救済でもあつたし又一面、甚だ老狡なる浪人追放策でもあつた。これが爲めに、伏見の町は各人其の居に安んずることが出來て、治績大に上つたのであ

刺

る。

若干の扶持までやるにあらずんば佩刀を禁じ得なかつたことが、これで知れるのである。建部のとつた處置は眞綿で首をしめる的の巧妙の手段といはざるを得ぬ。そこに亦一種の興味がある。戰國時代にも浪人はあつたが寧日なく戦争があつたのと、その頃まだ二君に仕へない事を武士の道徳としなかつたので、思ふまゝに誰の麾下にも馳せ参する事が出来たから、浪人もそれほどには困らなかつたであらうが、徳川期に入ると、二君に仕へない事が武士の倫理となつた。その上に投すべき戦争も絶えたから、一旦扶持を離れては浮ぶ瀬がなく講釋師や、院本家に流離の苦境の材料を提供するに過ぎなかつたことを思ふと、浪人も實に哀れなものであつた。今の失業連はそれに較べればまだ樂であるともいひ得よう。(昭和五、六)

九九 刺 青

昔文身の流行した頃には刺青の名人もゐた。この道の名人は畫家や彫刻家と同じく、一

刺

青

種市井の藝術家として誇つたものだ。矢張これも古く支那に行はれたもので、水滸傳には文身の豪傑がある。何かの本に見たことがあるが、洛陽に杜甫の詩を背上に刻したものが横行したとあつた。日本でも歌仙の和歌を刺青した例などがいくらかある。全體この風俗は市井の強がりか飾としたものだから、刺青の繪は強味のあるものが多かつた。明治の初年、西郷隆盛の肖像に刺青して禁ぜられたことなども、強がりの意匠の一端を示すものであらう。なか／＼徳川期には市井に強がりん坊が多く、男ばかりか女にまでその氣風が及び、藝妓その他氣負ひの女が刺青して、それを露はして誇つたものだ。その頃の刺青家が最も歓迎したのは女の肌であつた。その豊富な白いほくろの一つない肌膚は、刺青家にとつてはこの上のない材料で、宛がら書家や畫家が最上の絹素に臨んで、毫を揮ふの愉快と同じやうに、かゝる肌膚に對して、一針／＼肉を鑿つて行く事がたまらない程の快感を感じたといふが、その道の藝術家にはさもあつたらうと思はれる。しかし當時の文身の圖柄は往々醜怪に失して風流を覺えるものは少なかつたが、たゞ稀には雅趣のものもあつたらしい。いつぞや石黒子爵の話に、文身の盛時の番付に、大關として擧げられた意匠はといふと、蜘蛛を一匹刻つたのみで、他は何も無く、たゞ滿身に細網を刻し、一點朱紫の色を

施さないのが、高點を占めたとあるが、これは古蘆屋の釜などにある意匠でもとつたものか。如何にも高い趣味である。

一〇〇 花屋の今昔

百花咲き亂れた春の頃に、フト花の今昔に就て案じて見たことがある。花の世相、西洋花の擡頭、花の需用の擴張などに就て。言ふまでもなく邦人が花を愛することは今始つた譯では無い、併し今日ほど花を多く需用する世相は既往に無かつたと思ふ。昔、毎日々を要した處は佛寺であつた。佛に花を獻ずるは毎日の事であり、墓にも折々花を捧げたから寺院には花の需要が多かつた、佛前の花の活け方に、相當の様式や流儀があつて、それが僧の一藝とされた。墓參の人の爲めに寺の門前には、必ず花を賣る家があつた。各戸の佛壇にも花を捧げたから、毎朝その爲めに花を賣り歩くものもあつた。葬式にも花を要したが、昔は生花をあまり用ひず造り花を用ひた。茶人や風流の家に相當花を要し、瓶花の挿し方を教へる師匠の家などにも花を要したが、矢鱈、花屋に賣つてゐるやうなものは役立

たず、或は自から家園に栽培した花を用ひたり、自から心して選んだ花を用ひたりしたので、普通花屋で賣る花は先づ佛事に限つた位で、都會地でも花屋は皆貧戸で、細長い塗り箱に花を容れて賣り歩いたものだが、今は其の用器も忘れられて居る。その頃の花屋は如何にもみすばらしいもので、狭い土間に少しばかりの花を置いたが、日本花のみであつて、今日の花屋にあるとき千紫萬紅人目を眩するやうなものは無かつたのである。然るに西洋の習慣が移つて來てから、花が贈答の用に供されたり、式場や宴會席を飾る必需品となつたりして花の用途が著しく擴張され、洋花が擡頭して日本固有の花は壓倒さるゝやうになつて來た、隨つて大規模のガーデン會社が起つて、其支店が諸方にあり、デパートの地下室には必ず相當の盆栽屋、花屋が割込んで居るやうな有様で、普通の花屋もいくらか面目を改めて舊時の比でなくなつた。

人の送迎に花を贈ることが親愛を表することになつて、花環が贈られ、中央停車場には送迎用の花屋が店を出すに至つた。葬儀に花環を寄せることが習慣となつて、名ある人物の葬儀には幾百千の花環が輻輳し、花屋の營業も隨つて繁劇を告ぐるに至つた。餘り多くの花を寄せらるゝことは、運搬に費用がかゝり、迷惑を感じる向もあつて、死亡廣告に供

花の辭退を豫告するものが生じ、それから人夫附の供花の習慣を生じた。葬儀の式場を飾るに獻花で場を埋めるほど壯觀はないので、豪奢を喜ぶ人の葬儀には暗に多くの獻花を憚るものもあり、廣く諸會社諸團體に關係ある人の葬儀には、獻花の多きを銜ふごとき觀もある。自分は大阪の藤田儀三郎氏の葬儀に臨んだが、式場に獻花を持ちこむ行列が一時半もかゝつて、實に壯觀であつた。大阪の獻花のやり方は東京と異つて、大袈裟の花籠や花車などが多く、それを運ぶにも可なり大勢の人足を要する。此等獻花の費用は少からぬものであらう。藤田氏の葬式は五代友厚氏以來の盛儀と云はれ、五代氏の時に花屋が身代を興したと云ふが、藤田氏の時も矢張り身代を興した花屋があつたらうと思はれた。大隈老侯の國民葬にも、日比谷の式場は獻花で填まつたが、式果てゝ花の始末に議論が起り、普通の習慣は花を其儘に委棄して葬儀社の爲すに委するのであるが、斯くすることは花を獻じた人の厚意を無にするから、墓所まで全部運ぶべしと云ふ議があつて、數十臺の自動車で幾回か運んだが、自動車代丈で二千圓を費した。

西洋の習慣が日本に移つてから、大宴會の折には、柱や窓プチなどを蔓艸や花などで纏ふなり、食卓のクロースに花を散らすことが往々大袈裟に行はれ出した。自分が大阪のあ

る大宴會に臨んで驚いたのは、テーブル・クロースが寸隙もないほど牡丹の花で埋めてあつたことだ。池田邊には牡丹を多く産するから、東京人の驚くほど贅澤のものでない様子だが、一寸膽をつぶされた。尙ほその際に、今一つ驚かされたことがある。それは比叡山あたりに産すると聞く、日蔭かづらで、會場内のあらゆる柱や窓ぶちを纏ふたことであつた。東京では正月の儀式に此の蔓草を柱にかける位で、あまり廉價のものでないのに、産地が近いからと云ふて、そのフندگانの遣ひ方にも驚いた。東京に於ても、いづぞや日本銀行の紀念會に、廣い式場と宴會席を、櫻の立樹を根から斷つて、それを幾十本も室内の裝飾にしたと聞いたが、これもなか／＼の贅澤である。自分が往年松平頼壽伯に招かれ其の舊領地讃州高松に赴いた時、百疊敷の會館に大宴會が開かれたが、其の時は座敷の周圍に細長い土を盛つた箱が蜿蜒として置かれ、其中に根のある燕子花を植ゑて室を裝飾したので、其の意匠に感じたこともあるが、花の應用が如何に擴張されたかの一端が此等の事實で知らるゝであらう。

園藝が追々家庭の娛樂となつて富豪の家には大概温室が備はり、各地もその地味に依つて洋花を培養し、成功してゐる所もある、球根協會が起つたり共進會品評會等で園藝が競

争さるゝやうになつた。最早盆栽のみを樂しむ時でなく、切り花時代洋花時代が來た。病人の見舞にも今は切り花を寄せ、カフェーの案上にもレストランの卓上にも切り花を要するは勿論、旅館でも洗面所や廁の中にも花を置く様になつた。ツイ此頃工夫された一事は故人の紀念會などの式場を裝飾するために、獻花式と云ふことをやり出した、それは葬儀の花とは自から様式を異にし、餘り大きくない籠に花を盛つて、團體の代表者などが、故人の靈に捧げるのであつて、幾十幾百も壇に積み重ねるとなか／＼に美觀を呈する、先頃の目比谷に於ける大隈老侯十年紀念祭には自分も之れを試みたが、神官の供膳などに比すると、遙かに趣味があつてよい工夫と思ふた。

最後に造花の用途の擴張されたことも一言したい。近頃或る紀念に造花で電車を裝飾して市中を練り歩くことが行はれ、之を花電車と呼んでゐる、商店の開業に昔ビラを贈つた代りに今は花輪を寄せ、それを店前に飾ることが行はれ出した。花時に商店内に櫻の造花を飾つたり、大宴會の天井にいろ／＼の造花を吊したり、街頭に幕を張つて裝飾する時に造花をあしらつて趣味を添へたりすることも行はれ出した、此等は經濟上から造花を遣ふのであつて、花たることは即ち一つである。

私は嘗て考へた事がある、人に贈るに色々のものがあるが、花ほどよいものは無いと。と云ふのは、生花を粗略にしては忽ちに枯れたり萎んだりするから、直ちに花瓶に挿し込まねばならず、亦必ずそれが床の上に置かれるから、これほど人の尊敬を博する贈りものは無い。偶々花の今昔を案じて贈答に花を用ひることを勧めんとする。

一〇一 花

花

西洋の神話には花が多く材料となつてゐる。何某は花の化身だとか何某が死んで花に化したとか、人間の鮮血が花に注がれその色が赤くなつたとか、神女の乳房に矢が立つて、乳汁が逆つて白百合が生じたとか、この類の事が澤山ある。西洋ばかりではない。支那でも、わが國でも、上代のダイヤローグのうちには多く花が材料となつてゐるが、それは何故であらうか。先づ迷信が人心を支配した世の中である事を考へねばならぬ。また花といふものが美であること、その美なる事がやがて女性美に擬せられたこと、何人も花を愛した事より愛と花が連絡を生じたこと、花が戀の媒をなせしこと、花に事寄せて戀を語りし

事などを思ひ浮べざるを得ぬ。花は詩人に最も大切な材料であつたに相違ない、昔ばかりか今日でもさうである、神話の材料に花が多く取りこまれてゐるのは、不思議はない。迷信の深かりし時代には花に靈ありとさへ信ぜられた。支那には花精、花妖などいふ言葉があつて、花精の作つた詩まである。

全體花の形貌は多様であつて、活力があり朝夕その趣をかへ季節によつて盛衰代謝もある。本來活物であるから靈ありと考へたのも無理はない。靈ありとする以上は花が人間に化身したり、人間が花に化身したりすると考へらるゝのも、亦不思議はない。それがいつも或る戀愛の結果である所以は、花が美であつて愛すべきものであるからである。愛人の死は喜怒哀樂さまざまの段末であつて、その状態は一でないが、愛情の結晶は必ず花となつてゐるのが神話や、古いダイヤローグの一つの型となつてゐる。中には比喩的に花を材料に取つたものが事實とされたものもあらう。ロマンテツクの出來事より、花にその出來事や、その出來事の關係者の男女の名をつけたりする事もあつた。現在でも女に花の名をつける事が多いが、つまり美や愛を表するのであらう。詩人殊に女性詩人は好んで花を書名とし、或は篇名とする。源氏物語には藤壺もあれば末摘花もあり、葵もあれば夕顔もある。

これ等は篇名でもあるが、婦人の名でもある。また花をもつて人を形容する事もさまざまある。牡丹を富貴の人に擬し、菊を隠君子に擬し、蓮華を僧尼に擬するなどは東洋風で、西洋にはない。

立てば芍薬坐れば牡丹といふは美人の姿勢の形容である。海棠をもつて美人睡後の態に譬ひ、また美人微醺を帯ぶるの態に比するが、これも支那日本の感想である。花は女の形容に用ひらるゝのみならず、直ちに性慾を意味する事もある。すなはち「花心」といふ字は淫を思ふ心であり、花柳は淫を賣る所である。蓮華は女の生殖器を象徴するものだから、花と女の因縁が濃厚である。向日葵は日に向つて回るので、太陽に關する傳説がある。夜分に咲く月見草は月に關する傳説がある。梅の花は花瓣が散り落ちず、花の全體が落つるので封建武士に嫌はれた。蘭は幽谷に咲き、茶は小さく潔白でさびしく咲くので、前者は君子に喩へられ後者は隱逸に擬せらる。薊は刺の多いために惡婦に擬せられ垂柳は哀傷をあらはすものとせらる。姿態の連想からでも様々の傳説がおこるはずである。尙連想と花や樹の事を附け加へると、幽靈には柳がつきものとなつて畫家に慣用され、燕子花には在五中將が連想され、牡丹には睡猫、紅葉には鹿、菖蒲は五月の節句に太刀の形に作

るため男性を連想するなど、際限もなくあるが、日本には西洋のやうに花の擬人的ローマンスは豊富でない。尙西洋で花言葉といふものがあつて、男女文を取り換す代りにこの言葉を用ひるがこれは謎のやうなもので、日本にはない。

一〇二 チューリップ

人間は時々流行といふ一種のマニヤにかゝる。それが金銭に絡むとその熱が頗る猛烈である。曾てはわが國に兎が流行した事がある。またいろ／＼の小禽が流行した事もある。盆栽では萬年青や萬兩などが流行した。コウジといふ盆栽は曾て越後邊にも盛んに流行した事を今想ひ起す。すべてこれ等のものは本來格別趣味のあるものでないのに、流行は妙なもので、無比の寶であるかの如くに珍重がつて、コウジの葉に異つた斑點があるといふだけで、百圓は愚か千圓の價で賣買された。かやうな流行は實は趣味の問題でなく投機の問題である。即ち金錢慾からマニヤが熱狂的に沸騰するのだ。コウジ流行時代にこれがため産を作つたものもあるが、また産を破つたものもあつたであらう。一時の熱狂であるか

らそれが醒めると誰も顧みるものもなくなる。しかしかゝるマニヤはどここの國にもある事だ。最も名高いのは和蘭陀のチューリップである。和蘭陀は海面よりも土地の低い濕潤の砂地で、園藝には最も適した所といはれ、その國の園藝は歐羅巴諸國でも認めてゐる。然るに一六三七年に何かの動機からチューリップが流行し出して、都人士は恰も熱病に冒された如く夢中になり競馬に金錢を賭けるやうに一株の球根に、數千數萬の金を賭け、培養の結果果葉や花が発し、案外變つたものが出れば勝ち、平凡であれば負になるといふわけで、この賭博のために非常な悲喜劇が起つた事は經濟史上にも名高い話である。但し和蘭陀でもこの狂熱的マニヤは餘り長くは續かなかつたのだが、これがためにチューリップの培養術は著しく進み、その産額も非常に殖へて、今では世界に名高いものとなり、小説家でも詩人でも和蘭陀のことに及ぶと、必ずチューリップをいはねばならないほどになり、アレキサンダー・ジユウマの黒チューリップといふ小説は最も名高くなつてゐる。一時の狂熱からといへ、それが國家經濟を助くるまでに、この草花の發展を促したことは頗る異數といふべきだ。この點はわが國の二三盆栽が一時流行しても、マニヤが去ると誰も顧みず、國家經濟になんの役もなさず、一時の泡沫に過ぎなかつたと結果において甚だ相違がある。

一〇三 公孫樹

先頃日本の風景美を外國に紹介する必要が起つて、一文を草して英譯せしめた中に風景美の要素であつて、外國に無い樹木を指摘し、松、杉、竹等を擧げたが後に公孫樹を逸した事に氣が附いた。この樹は外國に絶対に無いわけではないが、稀にあるもので、もとは日本から、移されたものといはれてゐる位だから、これを逸してはならなかつた。公孫樹は威容ある靈木で姿勢が如何にも堂々としてゐて葉の形がおもしろく、秋になつて黄ばむとますます風致があり、それが地上に落ち敷くと風情があり、葉を脱した枝にも一種の風格がある。寺や宮の境内には必ずこの老樹があつて、風致を添へる點においては松や杉に譲るものではない。植物學者の説によると此樹は前世界の遺物だといふてゐる。如何にも太古を知つてゐるかの如き姿態で、崇高の感を起さしめる。友人新村出博士はこの樹が大好きで、その隨筆瑣記にいろいろの事が書かれてゐる。それによるとこれほどの威容を具する樹に、古くから詠歌がないとあつて、それから推して上代には無かつたのではあるま

いかとの疑ひを發してゐる。それはどうか分らないが、とに角この樹に注意を拂ふやうになつたのは近年の事であるかに思はれる。街樹として東京市中へ植ゑ初めたのも公園や學校の庭に植ゑるやうになつたのも、近年の事であるし、若い文士達が詩や歌に入れる事が頻繁となつたのも亦近頃の事といふてもよい。獨乙の文豪ゲーテが公孫樹を藉りて戀を寄せた詩は有名なものだが、或はこんな事が刺戟したのかも知れない。日本特有のものを外人から教へられてその美を禮讚するでもあるまいに、とかく邦人にかゝる事のあるを耻ねばならぬ。實は銀杏の實は久しくわが幼女のお馴染のものでかれ等はお弾きのスポーツにつかつてゐる。その葉に興味があるのみならずよく虫害を防ぐので、久しく讀書子に喜ばれ、落葉は拾ひ上げられて珍藏の圖書に挿入されたものだ。この事が因となつて書物の表紙に文様として銀杏の葉が描かれ、それが好意匠として賞翫された。流石にこの樹が日本特有のものであるだけに、世界の植物學者を驚倒するの發見が吾邦人によつてなされた。それは明治廿七年に平瀬作五郎氏がこの樹の生殖機能を研究して精蟲の存在を發見した事である。この樹が靈木である事が如實に立證されたのも國の誇である。右の次第であるから何も外國で珍重がるといふて、遽にこの樹を有難がるにも當らんだ。日本人は妙に柳

が好きで明治初年に銀座の柳を取拂つた時、風流人はひどく惜がつたが、實は街樹に適當のものは寧ろ公孫樹であつて、風致においても決して柳に譲るものでない。大震災後は特にこの樹が珍重され街路公園校庭などに植ゑられて、その數は實に夥しいものだが、これ等がだん／＼生長した曉は東京は多分公孫樹の都、銀杏の市といはるゝ事であらう。

一〇四 借老同穴

「借老同穴」といふ語は、睦ましい夫婦の間柄を形容するに用ひられ結婚の場合にもよく出る語だが、海中の生物に「借老同穴」を名としてゐるものがある。英語では「ヴェキナスの花籠」と名づけてゐるさうだが、内外とも佳名を附してゐる生物である。

その生物はどんなものかといふに、それはスポンジ(海綿)である。その形は筒状をなした籠のやうなもので、普通浴場等で用ひてゐる海綿はフワ／＼して軟かであるが、あれは軟かい部分をとつたもので海綿全體の形を具してゐるものではない。海綿にはいろ／＼種類があつて、硅質のものとなると骨格が硬く、針のやうに尖つてゐるから、觸れると刺さ

れて指や手を損ふ事がある。他に石灰質のものもあつて、これが日本の特産だといはれてゐる。すなはち相模灘がその産地で、それが澤山に採れるやうになつたのは二十年このかただと、専門家はいふてゐる。このものは二百尋、三百尋の深さに存在するので採集が容易でなかつたから、従前は頗る珍しがられた。歐羅巴にはもとなかつたが、八十年前ヒリツピンの海洋で採つたものが傳はつたのだと、これも専門家の説である。

これが水中にあると白色で甚だ綺麗に見へる。海水が自在にこの籠の目を通るので、いろ／＼の養分を吸収しそれで生息するのであるが、小海老なども水の流るゝまゝ自然この中に入り込む。さて入りこんでみると誠に安全地帯で、大きな魚類などに襲はれたり、食はれたりする事もないから、そこに寄生して海綿の食餌となる養分が入つてくると、先づそのうは前を刎ねて小海老が自家の養分としてだん／＼に生長する。終には四面を圍んでゐる針のやうな網目から脱出の出来ないほど、大きくなるので、到頭そこを永住の處とするのだが、不思議にも雌雄一對の海老が多くの場合一所になつてゐるところから「借老同穴」の名も生じてくるのであるが、それは寄生物をさしての名であるのに、遂に海綿をもかく呼ぶやうになつた。九州の福岡邊では古くからこれを目出たいものとして、婚禮の儀

式には装飾として欠くべからざるものとされてあると聞いた。

一〇五 植物界の奇観

自分は植物學者でもなく、植物通でもない。しかし専門家からいろいろの植物の研究を聞くことに趣味をもつて居る。植物界ほど造化の奇工を藏して居るものはなく、今は學術の威力で、従前解釋のつかないものを征服しつゝあるけれども、卒然見ると不思議を感じるやうなものが少なからずある。高山植物などは登山者が見慣て居るから不思議とは思はないが、一萬尺の高い山地、そして荒天荒地何物もない處に、花毛氈でも敷いてあるかのやうに、矮少の植物が綺麗に花を發してゐるなども一奇と云ふべきである。登山者はこれを花畑と稱して、目を怡ばしめる此上のないものとしてゐる。此花は一萬尺の處にはどの山にもあると限らぬ。現に富士などには無い。最も麗はしく咲いて居る處は白馬山だ。植物學者はこの花のある所を草本帯と唱へて居る。この地帯より高い所には、地衣(コケ)より外に植物は生へない。いくら寒氣の激甚である高山でも、それ相應の植物があると思

ふと、造化も抜け目が無い。これ等の植物は雪の下に早く芽ぐんで、夏が來ると直ちに花を發するから、如何にも強い植物である。山中の霧などが水分を供給するのでその生活を助けるのだが、融雪の爲めに水がくぼんだ地に流れ込んだり、前年の植物が枯れてそれが肥料となつて、その繁茂を助ける。これ等無數の植物に、それ／＼名のあるのも妙なものだ。物あれば名もある筈だが、昔人跡の到らない所に、よもや本草家がつけた名でもあるまい。恐らく登山熱が盛んになつた近頃の命名であらう。草木の内で哀調のあるものがある。柳などはそれだ。人情は何處までも同じで、邦人が哀調あると感ずるものは他邦人も亦同じく感じ、哀れな名が命ぜられて居る。日本では幽靈を描くに、柳を背景にする事が定例であるが、支那では離別の詩には必ず柳を詩材に取入れ、或は柳を折つて手を別つ時に贈る事もある。英語では垂れ柳をば、Weeping willow (泣く柳)と云ふて居るし、ドイツ語では Traver weide と云ふて居る。トラウエルは悲哀の義である。亡友横井時冬は古歌に「思ひ草」とあるのはどんなものかと、可なり面倒して調べてやつと捜し當て、畫家に描かせた事がある。これは花がうなだれて物思ふやうな姿であるから命名されたものだが、これも哀調を帯びるものゝ一つであらう。

大震災で評判のわるくなつたものは、オレゴンパイン、普通米松と云ふ材が、脆弱で柱などが折れたと云ふにある。これに反して耐火力があつて驚かれたのは、街樹のスズカケであつた。赤坂の溜池あたりで自分の目撃したのは、火の爲めに葉が皆焼け落ちて居たのに、それが季節になると皆青々と發芽して居た。桐なども火に強い樹である。それに和名キリと命じたのは生長を促進するため、根本より切つて放芽せしむるからだと云ふ説がある。印度の貝多羅葉は椰子の葉で、それが經文などを鐵筆で書く料となつて居る。この貝葉が何んの樹の葉とも知られなかつた頃に日本にたらえふ(多羅葉)と命じた樹葉があつたのも一奇だ。それは印度のと全く別種のものであるが、矢張經文に因縁がある。乃ちこの葉を火の上であぶると、梵字のやうな斑紋が現れる。これは植物學者は分類しても、ちの木の種類に入れ、貝葉とは全然違ふと云ふて居る。

不思議な思ひを爲すものは、植物が枯死してから巖石を崩す事のある一事だ。淺間山に「天狗の麥飯」と云ふものがあり、信州の小諸附近の味塚山に「長者味噌」と呼ぶものなどがこのクセ物である。全體植物には破壊作用がある。それは根が擴大してその力で石を壓したり割つたりする事もあるが、根から岩を溶かす酸液をば分泌するのでその力が馬鹿に

ならない。植物が枯死すれば、その根がなんの働きもなさないと思ふのは間違ひで、その根から腐蝕酸と云ふ酸液を生じ、それが岩石を崩すものである。「天狗の麥飯」、「長者味噌」等もこの酸分で、火山石を分解する。そして分解の結果ポロ／＼となる。乾いたのは麥粒の如くで、水氣を含めば麥飯のやうになる。それが天狗の麥飯である。長者味噌も浮石(カルイシ)が分解したものである。そして味噌塚は現に内務省から天然記念物として保護されて居る。

樹木の分泌する液には種々のものがあつて、中には酒の味のあるものがある。樹幹に切り目を入れると、それから流れ出る。學名は知らないが、普通酒樹と云ふてゐる。越後邊にもあると聞いた。既に酒の如きものを分泌する樹もありとすると、甘露を分泌する樹もありさうなことで、いつぞや金澤で甘露が降ると騒ぎ立つたことがある。段々調べると、ある樹から露が葉に傳つて、宛がら纖維のやうに滴つてゐる。嘗めて見ると、味が較々甘い。或は樹の隙から分泌する液ではないかとも疑はれたが、實は寄生蟲の仕業であることが分つた。即ち蚜蟲(アブラムシ)の分泌物であつた。南米の熱帶地方には雨樹と云ふものがある。旅行家の記する所に依ると、或る樹から水が葉を傳つて垂下する状は雨の如く

であると書いてゐる。一時植物学者は樹からの分泌液であらうと云ふたが、これも追々研究して見ると、矢張り蚜蟲の分泌液であることが知れた。この樹は荳科の高木でピテコロビウムと云ふものだと言ふ。

世界中で最も堅い木と云へば、チークであらう。この木材は日本でも早く宇治の黄蘗山の建築に用ひられてゐる。乾燥すればひどつたり、曲つたりする虞のない良材であるけれども、乾燥することがなかく困難で、伐採に先だち樹皮を剥ぎ去り、立木のまゝに枯らし一兩年乾燥してから初めて伐採すると云ふ。斯くせねば、川に流して運ぶに重量のため水中に沈むと云ふ。斯の如きは他の木材に無い取扱ひである。チークの堅いのに反して軟かい木は、琉球や小笠原島にある學名ピスラニス・エクスレサと云ふ喬木で、直径三尺以上もあるが所謂ウドの太木で、質が頗る軟かで、鎌などで容易に伐ることが出来る。軽い木は栓などに用ひるキルクであるが、これにもいろ／＼あつて、西印度産のキルクウッドは普通栓用のものに較べると比重が半分位だと云ふから、甚だ軽いものである。この材で舟などを作るが、冷蔵庫の材として最も適してゐる。この材で作つた箱に氷を貯へると一週間位氷は融解しないとのことだ。

果物の最も大なるものと云へば、ダブル・ココナツト(雙子椰子)の實で、樹の高さが百尺位と云ふが、その實の長さは一尺五寸許りで、形は扁平で、中央に凹線があり、二個の果實を抱合したやうになつてゐる。その重量は五貫目乃至七貫目もあると云ふから實に重い。この果實は往々印度洋に浮び、あちこちに漂着したことはあつたが、久しい間その母樹が知れなかつた。近頃漸く雙子椰子の實であることが判つた。熱帯地方にはいろ／＼へんで、こな果物がある中に猿壺、砲丸などいふものは椰子の實などに較べると、復かに珍なものである。いろ／＼の種類もあるが、多くは天然に器具の形を有し殻が甚だ堅牢で、瓶に似寄つてゐて、蓋まであるものがある。實が熟すると自然に蓋が開いて脱出するさうだ。猿壺と云ふのは玉蘗科に屬する果樹で、實の高さは七寸乃至八寸で、土人はこれを拾ひ取つて、砂糖などを容れる調度に充てゝゐる。猿が瓶中のものを盗み取らんと手をさしこむと、口が狭い爲め、物を攫んでは手が出ず、その機會に猿を捕獲するのでこの名がある。砲丸樹も同科に屬し、果實は砲彈の形をなしてゐる。皆頗る重量があるので、その落下の聲は轟然として遠くまで聞こえるさうだ。

植物の中には性慾に關係あるものも様々ある。支那の性慾家などが若返り劑として喜ぶ

「何首烏」と云ふものなどは、草の根であるが、本草の圖を見ると、宛がら翠丸のやうな形で、纖毛の如き細根が附著してゐる。必竟そんな形から滋強劑としたものであらう。何首烏といふ名は何氏がこれを服用したらば、頭髮が烏の如く黒くなつたと云ふ所から來てゐるのだ。印度には性慾をそゝる植物があつて、ある時釋迦が門人を戒めて、その草を手にしたら、警戒せねばならぬと云ふたことが佛典にもあると聞くが、紀州の南方熊楠氏は妙な事から倉庫の隅よりこの植物を發見し、ひどく苦心して研究した所、それが佛典にあるものであることが知れたと云ふが、これは日本にこれ迄無い植物で、印度から輸入された貿易品にその種子が附著して來て、藏の隅に發芽したのだと聞いてゐる。

一〇六 竹の漫談

昨夜は不思議に竹林に遊んでゐる夢を見た。蚊の多い此の眞夏に、竹林七賢の眞似をする筈もないにと、夢醒めてフト寢室の屏風を見ると、亡友坂口五峰の畫竹が貼つてあるのに心づき、夢はこれから來たなと思つた。五峰の題詩に云く、

一朶二朶雲、五竿六竿王、窓前有_二此君_一、我廬始不_レ俗、

簡にしてよく竹の趣きを盡してゐるが、之れに就て思ひ起すのは、岸駒が書いた疎竹の小品に山陽が詩を題した一幅である。山陽は岸駒をば平生俗畫師と罵倒してゐたと云ふのに、その俗畫師の畫に贊をしてゐるのは奇だと、其の詩を讀んで見ると、山陽の言ひ草が奇拔だ。此の竹は俺が書齋の窓の物だ、あの俗畫師の奴、いつ竊み見たか、そつくり其の様を描してゐる、と云ふ詩だ。此の畫竹は筆數が極めて少く、そして瀟洒の趣きがあるのだ、流石に山陽も内心感心したと見えて、竹を己がものにしてそれとなく褒めてゐる所に趣致がある。尙ほ憶ひ出すのは亡友寺崎廣業が根岸に住んでゐた頃は、まだ餘り振はなかつた時代で、壁間に掲げる相當の幅も無く、拓本を表装して間に合はせてゐた。彼の言ふには、自分の床には雪舟位の繪でなければ掛けかねるがそれを購ふ力がないと。然るに或る時床の間の壁の一隔から、竹が隙間を通して生え出して、それが段々と伸びて、生きた竹が畫幅の代りをするやうになつた。そこで自分はこれは天與の畫幅である、決して粗略にしてはならぬ、と勸告したことがある。廣業に某宮様の揮毫された騰龍軒の額のあるのも、亦別號を騰龍軒と云ふたのも此の謂である。竹は靈心直立の性があるので文人には特

に愛賞せられ、「此君」などの尊稱を受け、窓前此君あれば廬俗ならずとよがるのはひとり五峰のみではない。今試みに文人墨客が竹を喜んで自家の雅號としてゐるものがどれほどあるかを見るに、咄嗟に書きつけても三十餘の多きものがある。竹山、竹塙、竹外、竹石、竹泉、竹田、竹雨、竹沙、竹洞、小竹、竹隱、竹苞、竹亭、梧竹、竹窓、筠圃、筠軒、竹冷、竹清、古竹、友竹、竹眞、篁村、竹雲、竹仙、竹坡、竹堂、竹香、竹里、等等。竹に對する風流客のあこがれの一端を見るべきである。

日本に若し松が無かつたら、日本の風景美は半減するだらうと、我も人も云ふことであるが、日本に若し竹が無かつたら、矢張り日本の風景美は少なからず減するに相違あるまい。農村などを飾ることは松よりも寧ろ竹である。自分などはいつも農村を訪ふ毎に竹林に興を感じる。大抵の農家には竹林があつて、それが隣地との境界を劃したり、風除けとなつたり、塙根の代用をしたりしてゐる。中を覗いて見ると哀れな茅屋が貧窶を白狀してゐるが、それを圍む竹林は風趣があるので、確かに農家の大切な裝飾である。大きな屋敷になると、何反歩の大竹林があつて、遠方から見ると別して風致がある。又兎もすると村道の兩側に竹林があつて、梢頭の枝葉が重なり合ふので、白晝薄暗く、何となく人寰を離

れて、仙境にでも入つたかのごとく思はれ、低徊去り難い感がする。雪中になると雪が梢頭を壓して垂れ下るので、宛がらトンネルを現出するが、それを潜つて通るのも一興である。總じて雪に虐げられた竹の姿はよい眺めである。青い密葉の上に白い雪の降り注ぐ光景も亦一種の趣致があり、時に重さに堪へず、ガサ／＼と雪の墜る聲も、夜中枕頭に聴けば幽寂の風味を覺える。河邊の竹林も水に趣を添へるもので、數里の長堤に叢林が水に映する風景は何んとも云ひ難い趣がある。寺社の境内には例として相當の竹林があり、他の樹木と相助けて趣をなしてゐるが、竹林は全體陰鬱の風致を司るものであるから、寺院の境内には最も適してゐる。わび好みの草庵、茶室、別荘などにそれを好むのも同じ意味からである。畫家がよくやるやうに石に配するには竹を以てするが、竹が無ければ石の趣が半分以上も減殺するものだ。どこの家でもアラ隠しに竹を植えて置くが、それが一種の風致を添へるから竹は如何にも調法なものである。

自分が年若く農村にゐた頃、村内のあちらこちらの竹林を訪づれて興がつたことを思ひ出す。筍の出る時など、その發育を毎日々々驗するのは確かに一興であつた。あんなに下シ／＼勢よく伸びることは無い。忽ちの内に親竹を壓して青空に聳へる其勢力は實に盛ん

なものだ。或る時孟宗の大きな筍を掘つて臺所の濕氣のある所へ投り出して置き、翌朝見ると、それが可なり伸びてゐるのに一驚したこともある。村童と竹林に擬戦をやつたり、鬼ごつこをやつたりしたことも思ひ出の種だが、いくらか工藝家の眞似をやつて或は竹馬を作つたり、笛を製したり、茶杓を削つたりしたこともある。しかし少年の時最も痛快に覺えたのは賽の神を祀ることであつた。これは雪國の年中行事の一で、雪を積上げて臺を作り、其上に多くの竹を心にして、種々の焚材をからみ、外部を藁で掩うて焚くのであるが、竹の焚ける時は爆聲がすさまじく、如何にも壯快を覺えた。我邦に於ける爆竹は即ちこれである。

竹の用途の多般であることは言ふまでもないが、元來此物が堅牢の質を有する上に一種の風致があるので、建築材として最も喜ばれ、殊に茶席に愛用せらるゝ。委しく云へば、天井の棹縁、柱、窓格子、天窓板、羽目板、浴室などの壁板に用ひられて調法がられ、尙他に瓦にも代用されるし、簾にもなるし、筧にも、藩籬にも用ひられ、行くとして可ならざるなきは竹である。尙文房には最も良材とされ、書架、机案、筆筒、筆管、印材、花筒、茶器の色々、額ぶち、香筒、香合など如何にも多般である。之れを軍器に用ひれば弓矢、

鎗、旗竿、鞭等皆此材を用ひ、日用の調度には扇子、團扇、提灯、傘、箒、合利、籠、箸、烟草の羅宇、桶の籠、杖、釣竿等々列擧の追がない、そして籊まで諸般の工藝の材料に役立つ、笠や履や、セツタ、木履の鼻緒、板摺のバレンなど實に多般であつて、工藝的に考へると、竹の存する事は天恵と謂はざるを得ない、これを有する國は實に仕合せである。

一〇七 高山植物に就ての感想

スポーツの一部として近年高山登攀が行はれ出した爲か、高山植物があらゆる市に賣られてゐる。言ふまでもなく、高山植物は小品盆栽として最も趣きのあるものだ。自分も青年の頃登山を好み、高山植物に多少の交渉もあるが、今は老境に入り宿病もあるので、登山は絶対に出来ない。想ひ起せば自分が高山植物を初めて目睹したのは、帝大在學時代の修學旅行に、同伴の友人の懇意の醫師を信州松本に訪れた時で、其處に幾盆かに植ゑた可愛い小品植物があつた。丁度御嶽に登らんとする折であつたので、高山植物に就て多少の説明を聞いたが、如何にも登山して見ると、松本で見た植物が或る高さまで登ると

発見された。其後他の高山に登つて注意して見ると、大抵同じ高さに同じものがあることに気がついた。中には持ち歸りたいと思ふものもあつたが、何分膝栗毛で幾十日も歩く旅であつたので思ふに任かせなかつたが、今でも登山の趣味は忘れかね、そのシーズンになると、思ひ出すので、切めての氣慰めに、市中で高山植物を購ふことがある。昨今自分の所にあるのは、乙女桔梗、並木草、深山萬年、千島アサギリ草、トキハナツナ、玉錦、珊瑚苔等に過ぎないが、如何にも優しく愛らしいものである。珊瑚苔は殊に美麗なもので、緑りしく苔の上に點々丹色の珠が轉つてゐるかに見えるは、何共云へない優し味がある。全體高山植物は低溫の所の産物だから枝幹花葉ともに極めて矮小であるが、小さいながら植物の本相をすべて具足し、下界にあるものに比すれば百分の一位なミニアチュアである所に特色も趣味もある。尤も高山植物は必ずしも小品に限らないが、唯だ低溫の仙裳に朝夕霧を吸ふて生きてゐるものを、高溫の人間界に持ち來ると、どん／＼伸びて忽ち優し味を失ふには困る。前年日光の山奥に宿した時、石楠の高さ一寸許りで姿勢も格好もよく、それ相應の小さな花が咲いてゐるのが如何にも氣に喰つて、旅館に無心を云ふて持ち歸つたことがある。大切にして楽しんでゐると、人間界の温度の高い爲めメキ／＼伸びて數日なら

ず、姿態が全く崩れて不恰好のものとなつたので、高山植物の始末のわるいことを痛感したが、今度購つたのも昨今の暑熱のため、苔などはいつしか焼け失せ、他にも枯死したものが二三出來た。全體温度の足らないのを補足するには温室があるけれども、温度を低くするには冷蔵庫にでも入れる外に方便がなく、實際厄介である。西洋あたりでは、高山植物を其儘に保つには冷蔵庫宛がらの室に置き、高山ではしきりに霧が去來するから、それに擬して噴霧の設備まであるさうだが、そんな設備のない個人が満足に保つことは思ひもよらぬ。

つら／＼考へて見ると、此等小品植物はもと／＼仙客の身邊にのみあるべきもので、人間の玩ぶべきものでない。それを人間臭い下界に持ち來れば、忽ち醜惡の形となるのも無理のないことで「矢張り野に置け」の一歎なきを得ないのである。自分はこれに就て尙ほ感ずることは、現状維持の容易でないことである。現状が維持し得れば高山植物もいつまでも樂まれるのだが、現状維持既に容易でなく、更に縮少の一層困難であることをシミジミ感じさせらるゝ。例へば事業などの人事に就て、事の發展を望むのは人の常情だが、うまくゆかぬと、切めて現状維持を望んでも、それがなか／＼容易でない。それならばと

事業の縮少を計畫してもそれも又容易でない。全體植物は高温に在つて伸張するのが自然の道である、それを抑へて小さな儘になし置かんとするのが、既に不自然である。人間と云ふものも實は氣まぐれのもので、事業などに就ては發展を望む癖に、植物に就ては之れを欲しないのみか、逆に縮少を望んで、其伸張するのを見ると、愛想をつかすとは何たる我儘であらうか、我等は高山植物を玩んで多少の感なきを得ない。

一〇八 雪國の今昔

(一)

雪の國で大雪は豊作の前兆として喜んだものではあるが、今は大雪を別な意味で喜ぶやうになつた。スキーの遊戯が追々盛んになつてから、大雪を期待することは、雪のある國のみでない、スキーに關係あるものは雪の有無で喜憂するやうになつて來た。冬には雪がつきものであるから、雪國ではそのつきものを期待することは勿論だが、今は別に期待し

てそれを樂みとしてゐるものがある、隨つて雪が降らないと大いに失望する。數日雪の降りつゞく朝、上野のステーションに行つて見ると、あの長尺のスキーを携帯した若連が群をなして、停車場はスキーで塙屏を築いてゐる。世の中も大分變つて來たものだ、昔は雪國と云へば、冬分は戒めて誰も出かけなかつたものである。雪國を魔の國でもあること、危険を恐れて、雪なだれの話聞くだけでも戦慄したものである。久しい間雪國は秘密の處であつた。別して大雪を知らない暖地の人にはさう思はれた。勿論交通の開けなかつたことが大原因でもあつたが、雪國を一般に紹介することになつたのは、鐵道よりも寧ろスキーの遊戯に據ると云ふべきであらう。昔、危険地として避けた所が今は却て憧憬の處となり、費用惜まずどん／＼押しかける、雪待の爲めに幾日も滞在する客があるやうになつた。雪の國に居るものも斯うなると、其の心理作用も生活状態も自から變つて來て、昔は冬期を惡候として籠居するより外は無く、他人に傭はれて雪を拂ふ事が生活費を得る幾んど唯一の仕事であつた。だから雪國人は暖地の人を大いに羨やんだ。熱海あたりの宿屋が冬期に非常に繁昌するのは何故かと云ふに暖かい氣候を賣り物にして高々と賣つてゐるのである。寒地のもは極く反對であるからこれを羨むのも道理であるが、今は羨やむ

に及ばない。雪が寒地の賣物となつて来たからである。暖地を後にして續々寒地に赴くのは雪に趣味を感じたからである。仕合せものは雪國である。従前冬分旅客が少いので戸を閉じた宿は、今は満員で追々旅館の増築が出来る勢で、商賣が頓に繁榮を呈しつゝある。久しく冬期は手を收めて蟄伏を事としたものが、今は匆ね起きて大切な客を迎へねばならぬことになつた。こゝに開闢以來無い一生面がひらけた。雪國のものは天祐とするであらうが、實はスキーのお蔭に依るのだ。今雪國は何を誇らうとするかと云へば、スキーに適當の處を有してをる、と云ふて誇るのである。斯る處が最も繁昌するのである。もとは坂路などは最も嫌はれたが、今はそれが最も喜ばれるやうになつた。山麓などは概して邊鄙で、もとは人間の住むべき所でないやうに考へられたが、そんな處が却つてスキーヤーに喜ばれるので、それを誇るやうになつて来た。殊に温泉の湧き出る地が附近にあればそれが絶好の地とされるやうになつた。日本には云ふまでもなく温泉地が到る處にある。これだけは外國に無いことで、終日雪中に遊戯して疲れた揚句、湯にひたるのは如何にスキーヤーに幸福であるか、これ丈は日本のスキーヤーが獨り擅まゝにする仕合せである。外國ではこれが無いから暖爐を圍んで温を取るより外に方法が無い。白樺を焚いてキャンプ

に一杯を傾け疲れを直すのも一快に相違ないが、靈泉にひたつて温浴するのと孰れぞ、邊鄙の温泉も、これからは追々と其の設備を改めることになるであらう。地形によつてそれがスキー客を獨占することになるかも知れぬ。雪のある國は不幸だと云つたが、今は却つて仕合せの國だと云はれさうになつて来たのは意外の變と云ふべきだ。

(II)

自分は北越の雪國に生れたから雪に親しみがある。自分の若い頃には今のやうなスキーもなくそれを操縦する術も開けなかつたが、スキーに對しては理解が無いわけでもない、自分は此のスポーツを最も喜ぶもので、益々盛んならんことを欲する。あたら大自然の淨白を冷眼に見て、唯だ詠める景色に止めるのは餘りに勿體ない。切めてはもう少し人間が接觸するで無ければ、雪に對して相濟まぬやうな氣がする。滑走一番淨白の地に蜿蜒の痕を印するのが大自然に接するの第一着で、スキーで山に攀るもよし、懸崖ならばジャンプするもよい。大自然は人間とは大の仲よしで黙しては居れどそれを待つてゐるのである。さればこそスキーの先輩國スカンデナビアでは早くから此のスポーツで大自然と懇親を結

んでゐる。此の遊戯が人間の氣分を壯快にし、其氣宇を大にし、其の健康を引き立てることは絮説を要しないが、皆な大自然と懇意となる結果に外ならぬ。雪と云ふものにどれほどの趣味があるか、雪國のものは凡そ知つてゐるさうなものだが、實は餘りよく知つて居らぬ。雪國のものは概ね雪を厄介なものとしてゐるから悪い方面すら知らない。雪を愉快のものとして見るのと、厄介なものとして見るとでは甚しく其の趣が違ふ。楽しんで研究するでなければ真相は分りかねる。これから始めてこそ雪が研究され得るのである。實は雪が結晶形をなしてゐることは今日誰も知つてゐるが、それがそも／＼誰に研究されたのが初めてかと云へば、スキーで名高い雪國スウキーデンの僧に依つて發見されたと云ふではないか。雪に親しく交はればコンナ研究も出来る筈で、終には二百五十八種の結晶形があることまで分つて來た。しかしまだどんな秘密が潜んでゐるか知れない。唯だ雪路や雪嶺を縦横に踏破したばかりで自然を征服したとは云へぬ、雪のあらゆる秘密を暴露してこそ征服とも云ひ得よう。

(三)

雪のフェノメナも頗る多般で、卒然見れば一望一白の皚々たるものだが、太陽に照らさるゝ雪、雨を被る雪、風に飛ぶ雪、山の雪、谿の雪、里の雪、河の雪、樹上の雪、齊しく六花でも、それ／＼の特徴があるかも知れぬ。これまでは、何か變つたことがあれば雪國の人は初めて氣が付きもするが、常に無鑑識の目を以つて見てゐて、少しも研究などに意を用ひないから、どんな神秘が潜んでゐても知ることを得なかつた。雪地も譬へれば海洋の如きもので、海洋にはいろ／＼のフェノメナがある、それは多く研究されて多く分つてゐるが、若し航海者が無かつたら、一向に知れなかつたであらう。雪地に於ても備さに雪と親しむものがあつてこそ初めて雪のフェノメナも知れるであらう。雪地に住むものは餘りに雪に慣れてゐるから、却つてすべてを閑却する。雪の研究には勿論理化學的頭腦を要するが、暖地にあつて雪を知らないものが却つて、獵奇的趣味に驅られて功を奏するであらう。フッキにせよナダレにせよ、雪國のものには實驗はあるけれども、尙ほそれ以上の何物かを見出すかも知れぬ。すべて雪に就てのあらゆることは、雪と友達となつて見ねば分らない。スキーと云ふスポーツが、これまで交通の杜絶して、唯だ暗澹恐るべき所としてあつた雪國へ、かつて雪を知らない、九州四國臺灣の人までも誘ひ來るのは、スキーの

媒介に因るものであつて、鎖國同様の雪國が開かれた譯だ。雪地同志のこれまでのやうな交通は、云はゞ親類同志の交通であつたが、初めて他人が立入ることになつたから、新しい目で雪が鑑賞もされ研究もされる。随つて其の結果に吾等は期待を有たねばならぬ。更に雪上滑走ジャンプが精神上に及ぼす影響如何、健康上にどんな得失があるかなどさまざま考ふべきことがある。雪の誘惑は往々スキーヤーを危地に陥れることがある、だから多少の冒険を免かれないが、精神の興奮と共にそれを敢て意に介しないことが精神の修養に資するであらう。雪を知らない暖地のものが、初めて雪國に入つて汗を流して見ること身體の強壯を助くるの功があるに相違ない。尙ほ他に雪國の開放がその地のものどんな影響を與へるであらうか、經濟上に將た精神上に、これも極めて趣味ある問題である。雪地の壯丁はこれまでは排雪を仕事とする外何も爲すことがなかつたが、鎖國が開けた結果、彼等に新たな仕事が生じた。彼等は珍客の爲めに地理の案内に服するは勿論、輜重方となり、或る場合には救護班ともならねばならぬ、スキーが追々開けその區域が擴張されるれば、それ丈彼等の仕事も増して来る、尙又彼等は直ちにスキーの趣味を會得するであらう。潜在能力があるから彼等は追々指南役となるであらう。

(四)

雪國の風景もこれから一變する。今までは白皚々たる天地を、唯だ潔麗として鑑賞したが、實は悽慘の光景で、行人も無く人語も絶つ陰鬱な天地が雪國の常態であつたが、今度は雪上に人を見る天地となつた。歡聲の揚る活氣のある天地となつた。追々婦人スキーヤーが参加することになると、そこに派手な服装が彩つて、一層華やかな光景を演ずることであらう。スキーの滑走で生ずる蜿蜿たる道は宛がらカラ押の白紙の上の文様のやうに名状す可からざる美麗な線を示すが、これは雪地の外には絶對にない景色である。滑走ジャンプに成功するものは意氣揚り、敗るゝものは滑稽を演じて笑を博する。陰慘なる魔の地が清淨の樂土となるのも此のスポーツの爲めである。此の一變しつゝある雪國の光景は畫にかゝれ文章に綴られ、そこに雪の文藝が興るであらう。越後の最も雪の深い處から北越雪譜が出て、それが全國に流布し多く讀まれたがスキーなどの開けない頃でもあり、理化學思想の乏しい時でもあつたから、今後の雪の書物としては勿論物足りないものである。スキーに伴つての雪書がこれから追々生れるであらう。自分はそれの出るのを待望するも

のである。

一〇九 アルピニスト

自分は登山癖があつたので、老ても夏になると登山に關係ある圖書を見て、臥游に供してゐる。近來は外國のアルピニストに倣つて登山の設備が組織的となり、登山者も實に驚くほど多數になつて來たが、どうも登山の目的が餘り感服が出來ぬ。なんでも容易に登山の出來ない所を、嶮を冒してその目的を達せざれば已まぬといふが、登山の第一の目的であるかのやうに見える。かれ等は山の征服といふ言葉を用ひるが、人間のこれまで登り得ない處を登るでなければ、手柄でないと互に競つて、動もすると身命を賭するまでに至つてゐる、おそらくこれは外國のなすのに倣つてあらう。アルプスなどは随分高い處、すなはち一萬尺位なところまで鐵道が架せられてゐて、難所でないところは苦もなく行かれるやうになつてゐる。畢竟外國の登山の目的は、人間を拒絶する峻嶺を征服するにあつて、誰でも行き得る所に力を費さしむるを愚と考へて、登山鐵道まで出來てゐるのであら

う。自分とてもアルピニストの冒險を快とするものであり、峻嶺の征服を壯とするものである。しかし登山の目的がそれのみでありとすれば、目的が餘りに單純に過ぎて他のいろいろのスポーツの如く、勝を争ふ事が主となつて、只目的を達して凱歌を奏するので畢るのでは、趣味は餘りに索莫であると思ふ。自分は難攀の峻嶺を征服するのをもつて無趣味とはいはぬ。この目的を達するに附隨してその経過する所、キャンプする所、遭遇する幾多の危険についても、登山に固有なる趣味はあるに相違ないが、只一意征服のみを目的とする結果は、山中の種々の趣味を閑却する事になるに相違ない。自分は登山の目的をそんな單純なものと思つてゐない。人の行き難い處を窮めるのも幽を闢くので、最も大切な事であるが、山を趣味的に研究する事を忘れて貰ひたくない。山の征服者はいつも登山の苦難を多く語るが、齎すところは餘り多くない。畢竟征服すれば儂事足るのだからさうでもあらうが、登山を趣味として考へるものからすると、甚だ物足りなく感ずる。折角の冒險で漸く目的を達したとすれば、出來るだけ多く他人の知り得ない事を土産に齎して來て欲しい。要はもう少し研究に氣を入れて貰ひたい。アルピニストの流儀は自然日本の登山家の範となつてゐるやうだが、それが果してよいかわるいか。山には神秘なるものは澤山に

ある。決して人力の難しとするピークのみに神秘が潜んでゐるのではない。溪谷もあり、沼湖もあり、深林もあり、それにも神秘は潜んでゐる。風景美からいふても屹立千丈の主峰に、勿論侵すべからざるサブリミティーもあるはいふを俟たないが、溪谷美、沼湖美、深林美、さらに細かくいへば巖石美、卉草美、烟嵐美、飛瀑美等、さまざまあつて、高い深い山には他の低い級の山に見難い特別のものがあるのは、勿論である。私どもはこれ等のあらゆる風光美を遺憾なく研究し、その幽をあばき、その玄をあらはしてこそ初めて山の征服といひ得るのであつて僅に主峰の踏破をもつて征服などいふは、おそらく山神の笑を博するであらうと思ふ。とかく冒険が主となると、風雪の候にわざと登山する事にもなる。研究が主となれば必ずしも悪氣候を選んで、あたら身命を賭するにも及ばぬ。むしろ無難の氣候を擇ぶ方が研究の目的を達するであらう。冒険も一種の趣味であるけれども、それのみに捉はるゝ事はわれ等の興みせざるところだ。

二〇 屋上登攀

近年呉服店や百貨店で高層のビルディングを建てるやうになつてから六七階から身を投ずるものが頻々としてある。悲惨な事ではあるが高所から死を目的として墜落するのは奇とするに足らぬ。然るに近頃「屋上登攀」の四字が往々目に觸れる。誰であつたかコンナ標題の書物を著し、新聞の廣告欄に見た事がある。併し格別氣にも留めなかつたが、山岳登攀者の説くところを聞き、はじめて屋上登攀が山岳登攀に甚だ因縁の近いものである事を知つた。屋上登攀は墜落者の逆をやるものである。日本では七八階以上の屋宇はないが外國には五十階若しくはそれ以上の高層がいくつもある。地上で見ると青空を摩するものがある。その屋に攀ち登る事は直ちに霄漢に逼るもので、痛快は痛快でも危険の甚だしいものである。何人が斯様な事を敢てするかといふと、山岳登攀にあこがれながらそれを果たす事が出来ないところから、屋上登攀でせめて鬱勃を漏さんとするものによつて企てられ、外國の學生間にこれが實行されつゝあると聞くに及んで、初めて屋上登攀の四字を理

解する事が出来た。高層のビルディングや塔には多くリフトやエレベーターの設備があるは勿論だが、かれ等はこの便利に頼るものではない。直立した外壁に手足を托し一步／＼上るのである。綱などがどれほど助けるものか、足場をどう作るかは知らないが、マツターホンを攀る心持で攀るのであるから危険は覚悟の上の事で、見るものをして汗を握らせるに相違ない。マツターホン嶮なりといへども釘を打ちこむ事も出来る。よつて足場を作る事も出来るが建築物はそれが、出来難いから頗る扱ひ悪いものである事はいふまでもない。ある山岳の憧憬者は日課として必ず毎日一回これを行はねば気が済まぬとあつて、危険を冒すものがあるといふが、さて警察はこれをどう取締つてゐるか、よもやそのなすに委してもぬまい。劔橋の學生間に發行された雑誌に屋上登攀の事が書かれたゝめに禁版されたと聞くから、かゝる事の宣傳は有害と見られてゐるに相違ない。牛津の學生間に發行する雑誌には特に筆者の名を掩ふて屋上登攀の事が書かれ、それは禁止されずをるといふが、それは劔橋のよりも挑発的でないから不問に附されてゐるのではあるまいか。とかく、法律が如何に嚴でも、屋上の墜落者を禁ずる事が出来ないと同じやうに、深夜人定つて後などに試みる事は制しやうもなからう。ともすれば盜賊とも誤認されさうな事で、し

かもその人の志は青空に在るのだから妙な事である。追々は日本のクライマーにも移り來る事であらうが、これ等も尖端を行くものゝ一つか。

一一一 指 紋

造化は意匠の豊富を誇つてか決して同じものを作らない。山にせよ川にせよ、どこかに似寄りはあるにしても決してすべてが同じではない。人間にしても矢張り大體は似てゐても、細目に於ては親子でも兄弟でも姉妹でも同じくない。形貌既に然り、心に至つては人心の異なる其面の如し、とさへいはれて決して同じくない。尙ほ細かに立入つて手の平の筋や、指紋を調べてみても萬人萬様であつて之ほど個人的特徴のあるものはない。そこで掌の筋を見て運命を判じたり、指紋を見て賢愚吉凶を下する事が古くから行はれもした。またその人に限る個性の象徴として上代から印の代りに誓紙などに手の筋を朱肉で捺した事もあり實印の代りに拇印を捺す事は、今でも法廷や刑務所に行はれてゐる。今は指紋を寫真に撮り、それを犯罪捜査の有力な方法とさるゝまでに至つたが、よくも昔からこの個

人的特徴に氣が付いたものだ。しかし肝腎な事が往々没却された。すなはち拇印なれば指紋を印するがそれが爪印に代つたなどは可笑な事だ。血判などいふ事も亦同様である。指紋こそ個性の相違を現すが、爪をかけて捺すとなると爪が妨げて肝腎の指紋を没却することになる。爪は延びたのを切り縮めて形を變じ得るものだから拇印に代用するべきものでない。血判も血をもつて誠を表する事にはなるが、血のにじみで指紋を没するから實印の代りになりかねる。指紋に早く氣が付きながら捺法に變化を生じたのは是非もない事だ。

一一二 温 浴 史

日本の風呂の歴史も溯れば古いものである。上代の風習その儘を傳へてゐると云はれる大嘗祭に三殿が設けられるのが恒例だが三殿のその一、回立殿はすなはち浴殿である。神事をみづから司らせらるゝ陛下は、神事に先だち入浴あらせらるゝが例となつてゐる。神事に身を潔めることが如何に大切であるかゞ窺はれる。所謂「ソギ」なるものも浴に外ならない。佛教に於ても同じく浴を大切に考へ、之れを以て病を除く法として、極樂寺の忍性

上人は十八間の大浴室を設けて風呂供養を行つた。これより先、光明皇后はお手づから千人の民衆の垢を擦り落されたと云ふ著名な例もあるが矢張り風呂供養である。北條義時その他宗教的に之を行ふた例は少なからずある。しかし風呂も遂には享樂の爲めにする事になつた。いづごろからと云ふことは分らないが、豊太閤が桃山に營んだ飛雲閣、それは今移されて西本願寺にあるが、その中に黄鶴臺といふ浴場がある。確か蒸し風呂式であつたやうに思ふがまさしく享樂的のものである。東寺の洗心寮などいふ風呂も初めは宗教的であつたらうが、後には矢張り享樂的になつた。

風呂の形式もいろ／＼あつて今は幾んど皆温湯を湛へた浴槽に身體をひたすやうになつてゐるが、昔は専らむし風呂が行はれ垢をするといふよりは、温を取ることが主であつたらしい。湯氣を作るにも色々の法があつて、或は石を焚きそれに水を注いで作つたり、戸棚風呂など、唱へて湯氣を籠めた密閉の室へ入る形式もあつた。風呂の入口にざくろ口と唱へるものが維新後まであつたが、あれなどもむし風呂の名残りを留めたものであらう。今でも田舎に種々の形式のむし風呂が残つてゐる。釜の上に桶があつてその桶に人の出入し得る戸があるなどは一例である。風呂を享樂の具に供した事は、湯女が浴客に酒を侷め

三絃をかき鳴らして興を助けた事實に徴しても知らるゝ。古い繪に、浴場の垢すり場に浴客が杯を傾けてゐるのがある。それが即ち享樂を語るものである。土耳其は蒸風呂が有名で、今はそれに倣ひ日本にも相當にあるが、昔の蒸風呂は朝鮮あたりの式に倣つたと斯道の研究家は云ふてゐる。近江と佐渡に今も残つてゐる古風のむし風呂は、おろけと云ふてゐるが、これなどは朝鮮系統のものかも知れぬ。

日本は火山國である爲めに温泉の多いことは世界第一である。國民に温浴の習慣のあるのは温泉が豊富であるからだといふが、それは少しく説明が足りない。道、佛教共に身を潔めることを要求した爲めに、世界に類の稀れなる風呂好きの習慣が、宗教的に養成されたと云ふ方が寧ろ妥當であらう。

一一三 生殖器崇拜の餘風

今では、人間の性慾本能から生ずる行動を、飽まで蔽ふことが文明の形式となつてゐるが、溯つて生殖器崇拜が世界の宗教であつたその昔を考へると、世の中も妙に表面的にな

つたものだと思はれてならない。表面を整へるのが文明だとなつたから、偽善も公けに歓迎され、詐術が世間に満ちてゐるのも不思議はないが、併し讀書家としては、少しは生殖器崇拜の盛んであつた時代のその餘波が末代にまで及んでゐる事を、餘程コンシデレーンヨンに入れて讀まねばならぬと思ふ。今日ですらその必要はあるのだから、況んや今より五百年も千年も前の書物を見る時などは一概にその時分の人間に節度が無かつたとか、或は淫靡であつたとかなど、後世にいふやうな單純な解釋をしてすましてゐると、多くは正鵠を得ないことになる。西洋でも近頃性慾學が研究されて漸く本當の理解を得たが、それまでは矢張り古代の書物に淫行の記事の多いのをいろ／＼に曲解して強ひて粉飾したものである。

假に一例を擧げて、ヘブリユ一の聖書等をソツクリその儘露骨にさらけ出したら、どんなものであらうか。今ではそれが見たいと研究家が渴望するほど、露骨に情交の事が多く書かれてあつたらしい。その落ちこぼれで今あらはに譯されてゐるものでも、可なり多量に見る事が出来るが、それもさまざまに粉飾され聖化され、急所が省略されてゐる。併しそれでも聖書でないものとして冷然として讀む時は、まるで春畫の詞書を見るやうなも

のである。ソロモンの雅歌なども婚禮の歌だけに千首もあるのが皆閨房のおのろけで、それが多く聖書に取入れられてゐる。勿論相當取捨もあるであらうから簾を隔て、花を見るといった憾みはあるにしても、それが神聖的に理屈づけられてゐなければ、當然風俗壊亂として刑律に問はれる程度のものである。マホメットの聖典コーランなども同じやうなものである。

日本でも古事記などには猥褻のことがある。それから上代の記録はあまり残つて居らぬが、追々降つて奈良朝や藤原期などになると、随分多く性慾的の甚だしいことを書いたものがある。それが上代語に書かれたり、今では解しかねる雅語に書かれたりしてゐるから目に立たぬが、實はなか／＼露骨な内容をもつてゐる。これらも文明といふ被布が隠してから以後のものが存してゐるのであるから、既に亡びた文書には、更に驚くべくムキ出したものが録されてゐたものであらう。

ついでに書き加へて置くことは、今も民間の風俗に存して、神を祭る形式となつてゐるものゝ中に、少なからず露骨なものを見ることである。後世之に對して一概に邪祠淫祠など唾棄して下流蒙昧の徒の迷信に歸したりしてゐる。また上代の圖書に残つてゐるものに

も、後世の考へを以て種々附會の解釋を下したりしてゐるが、實はこれ皆生殖器崇拜の餘習から來たもので、それが今日よりもずつと鮮明に存してゐた、と解釋するよりほかはない。無理に變な理屈をつけて曲庇することに努めるのは却つて野暮だといはねばならぬ。國學者などでも碎けた連中は、性の崇拜の理論は知つて居らぬにせよ、事實を事實として強ひて曲解しなかつたものが多い。これらは所謂大いに話せる連中である。

元來、生殖器崇拜は、非常に古く世界何れの處にも行はれた普遍的宗教で、今の如何なる宗教でもその變體でないものはないとさへ言へよう。形はひどく變つてゐるが實はその範疇を脱しては居らぬので、近世でも昔その儘のことがいろ／＼ある。處女を神に捧げて所謂人身供御にしたことなどは遠からぬ昔にあつて、斯うした小話が徳川期に澤山あることは、誰も知つてゐる通りであるが、これらも生殖器崇拜から起つた極めて著しい事實である。上古は處女は神によつて初めて生殖作用を教はるものとしてあつた。神前に鐵の棒で處女膜を破る式があつたり、先づ神に第一番を差上げなければ結婚の出來なかつたりした時代もある。それが爲めに處女は神聖なものとしてされて羅馬でも法律は處女を罰することが出來ず、罰する時には誰かその貞操を瀆して後、初めて刑を加へたといふ程のものであ

つた。尤も神と言つたところで、素より實在のものではないから、僧侶が神の代理であつた。實際坊主ほど淫行に都合のよいものはなかつたので、或る寺院の如きは多くの謝金を取つて公然賣淫を行ひその金を神に捧げ、且つ寺を維持する極めて清淨の資としたこともある。日本でも本願寺の坊さんが到るところで活佛といはれて、良家の婦や藝者等までが喜んで御伽することを光榮としたなども、ツイ近頃までであつたことだが、これを淫亂といへばその通り、僧不相應といふても亦その通りではあるが、生殖器崇拜の上古の遺風を繼承したものと思へば、格別怪しむべきことでない。

一一四 偉人の暗黒面

昔から英雄豪傑に荒淫が幾んど常慣であるかの如く、いろ／＼の亂行が傳はつてゐる。一世を風靡した藝術家などにも、矢張り英傑並に同じやうなことがある。回々教の教祖と仰がれてゐるマホメットは、もと商家に仕へて、その主人が歿するとその寡婦の良人となつたのだが、その婦人が死ぬと、荒淫飽く事を知らぬ様な亂行があつて、他人の妻でも自

から欲すれば、それを取り上げたことが頻々とある。その經典コーランも實はこの荒淫の事蹟に満ち、その門派のものが甚だしい所を除き去つたと謂はれてゐる。多妻を主義とする教祖は流石に豪のものである。ナポレオンも好色で名高く、「戀のナポレオン」と云ふ一部の書物さへあつて、日本にも譯されてゐる。出征中或る士官の妻に戀して、その妻を奪はんために、士官を軍艦に載せて使に出し、地中海で軍艦を沈めて、士官を殺さんとしたが、事が齟齬して殺し得なかつた事がこの書に見えてゐる。ネルソンはあれほどの名將であるが、落命の時も戀愛の情婦を忘るゝ事が出来なかつたと傳へらるゝ。武將の男色好は勿論澤山ある。日本では武田信玄が其寵童春田某に與へた手紙が史徵墨寶に收めてある。文豪オスカー・ワイルドが男色を好んだ事も有名であるが、爰に男色の被告となる事を好んだ豪傑がある。意外にもシーザーが其一人であるが、文豪のアンダーソンも亦其一人である。世界的大藝術家ミケロ・アンジェロが男色を好み、刎頸の交りをした或る少年の爲めに不朽の肖像を畫した等も名高い話である。いつぞや内田魯庵の話に、名は忘れたが或る文豪が情婦の死を悲しみ、哀傷の餘り、その屍體の皮を剥ぎ取つて、最愛の書物の表紙としたと聞いたが、日本でも名妓吉野を妻にした灰屋淨益は、吉野が死ぬと遺骨を粉末にし

て抹茶に和して飲んだと云ふ話もある。ロシアの文豪連は賭博を好み兼ねて亦女色に耽つた。トルストイがクリミヤにゐた頃、しきりに賭博をやつて、金が無くなると家から取り寄せることが頻々であつた。執事がそれを諫めたのに對し、賭博は止めにするが女道樂は止められぬと拒絶した。ドストエウスキーも亦賭博を好んだ、女道樂は勿論であつた。その遺した書簡の内に、或る婦人に腰巻を買つてやることなどがチラボラ見えてゐる。日本の好色家で餘りによく知れてゐるのは、大雅堂の諫めを黜けた柳里恭などである。あの人は「獨り寝」と云ふ著書があつてその中に出來得べくんば、自分の學問と好いた遊女の腰巻と交換したいなど、卒直に告白してゐるから誰もこの人の好色は知つてゐるが、謹嚴その物の如き學者で幕府の大儒者であつた林述齋の好色は隠れてゐるが、餘りに内を好むことが健康に害ありしとして、知人が氣を揉みしばし諫めたが聞き入れなかつたと云ふ。コンナ例を東西に求めればいくらでもある。全體西洋の文豪程婦人に酷評を與へるものはない。必竟自家の理想が高く、それに副はないから減多に許さないのであらう。その代り自からはとし美として許すとその耽溺は非常であるやうだ。英雄豪傑も實はその闇黒面を窺ふとメチャクなものである。

一一五 羅馬法王とミル

浮田和民博士は、羅馬に法王の居室を訪ふた時の事を語り出していはるゝに、

この居室には大なる壁畫があり天女と見まがふ婦人幾人かを描いてある。よく觀れば脚下に英國の圖があるが、これこそ英國が羅馬法王に叛いた時の記念物で、その天女と見えるは、すなはち法王の嬖妾であると聞き、始めて法王なか／＼孤獨にあらざる事を知つた。また禮拜所にも一ヶ月より九ヶ月に亘りそれ／＼月を異にして禮拜する特設の所があるが、何故に月をもつて分ち、且つ九ヶ月以往には禮拜壇がないのかと案内者に聞けば矢張法王の妾の孕める者があるその経過の月數に應じてその特設の席に就くのである。十ヶ月で出産するからして九ヶ月目までの所を定めてあるのだと聞いて一笑した。

尙ほ博士はジョン・スチュアート・ミルの墓に參るに多くの時間を費したと語られた。

ミルの墓は佛境にあつて英京から行くには多くの時間を要するけれども單に展墓のために行つて見た。ミルはテールといふ商人の夫人と戀愛に落ち、その良人在命中は特に

その良人の許可を得て時々人を交へず自由に談話するを樂みにして、その良人の死後始めて結婚した。流石に結婚後は世の口やかましい論評を避けて社會の交際を絶つたといへ、實は外國の社會には戀愛を重んずる風習が盛んであるから、ミル式の戀愛に内實同情をよせるものが甚だ多い。随つてかゝる戀愛は珍しくないわけだと語られた。

一一六 花魁吟味

明治廿二年江川八左衛門氏の出版にかゝる、温故東の花第七編と題する錦繪三枚つゞきに、將軍家吹上において公事上聽の圖がある。花魁二人、一人は筵の上に坐し一人は立つて未だ坐に就かず、共に盛裝して奉行の取調をうくる圖を描く。奉行の背後に簾をかけ、將軍の簾を隔て、視聽さるゝ圖だ。白洲には幕を張り幕外にお城の天守を描く。これ畫の大略である。附帶の解説を見るに左の如くである。

この圖は徳川家御家例の一にして三奉行立會にて吟味の模様、下人の風俗舉動を知ろしめし給ふの例とかや。故に勉めて輕罪にして滑稽なるを上聽になすといふ。この事を知

る人世に稀也、依て將軍家透見し給ふさまを畫していさゝか説明を附す。 滋榮堂主人
敬白。

自分は偶然吉原三浦樓の當座日記一冊を得た。これは三浦樓内證の書留にて種々の事を記しある中に娼妓の吹上へお呼び出しの事が録してある。それは何故の呼出しなるか、その仔細は書いてないが、呼出されたのは、櫻屋大口新相模の遊女六七人で三浦樓の娼妓も若干ある。予はこれを読んで何故の吟味かを解し得ず吹上へ召喚するなどは妙な事と思ひゐたるがこの錦繪によつて、初めてかゝる慣例のあつたのを了解し得た。この當座日記は萬延二年より以降二三年間の事を記してをるが、吹上召喚文久二年四月の部に明後十二日於吹上御吟味有之事、とあり、さすればこの頃までもかゝる事があつたと見える。關係あるところを抄録すると

御吹上御呼出し

五人組持地借

らく後見

四郎左衛門抱

遊女 更科

召仕 まき

四郎左衛門願に付

豐藏

徳兵衛

五人組

同 文藏

名主 新八

髪結 おらく

明後十二日於吹上御吟味有之事

一 御場所柄之儀に付諸事相慎物靜可仕候事

一 焼飯にても聊づゝ懐中致可罷出尤辨當兩度御手當被下候間別段用意者不及候事

一 若雨天に候はゞ朝から傘等相用俄にふり出候はゞ各々宿より竹橋御門より差向候場所つめり申候はゞ右侍人共儀御門外に待(不明)竹橋御門より斷者より西の方吹上御

構外に御門外に罷在候事

一 着類並に髪飾り之儀御定之通り相心得其餘取飾申間敷候事

右に付十一日夜六ツ半頃より出立吳服橋柳屋にて支度調明七ツ過に南御番所行直に御呼出し程なく御吹上行吉原引合六軒店に更科一人岡本大岡(立花二人、當人勝見代)つる和泉二人(愛之助、小つる代)櫻屋一人當人新造代り(八千代、半太夫)一人大口(立花一人、當人代り)新相模(若緑)

店人數

四郎左衛門

更科

牧

若者豐藏

五人組文藏代徳兵衛

家主彦八

女髪結おらた

物持二人(吉五郎、不審番)

十九人

駕籠二挺

御吹上門迄駕籠夫より御門内左に小家二軒一ヶ所遊女小家右にて九ツ頃櫻屋大口新相模にて遊女三人御呼出し八ツ時頃に跡三家にて遊女五人御呼出し尤手引一人のみ餘人不相成尤病氣體に申抱方として髪結うた添一丁程行吹上御吟味所へは當人一人(このところ讀めず)上草履ならず

記事申讀み兼ねるところもあれど大略は右の如くだ。これによれば代人も許され髪結まで伴ひ、辨當を給され、ほとんど出廷の前夜は不寝にて用意した事がうかゞはれる。尙ほ吹上お呼び出しとある下に書きたる人名はあとの四郎左衛門人數とある人名と異なるところがあり、先きのは豫定にて後のが實地なりと知らる。

一一七 貞操帯

貞操帯、貞操錠、ヴキナス帯、ヴェニス格子、ベルガ錠等さまざまの名あれども皆性的接觸を妨げる目的で器官を制するの具を云ふのである。

これは世界の各方面に行はれてゐるものと見える、支那には無論ある。貞操帯の語は恐らく支那でつけた名であらう。妻や情婦の貞操を強制するため男子の嫉妬より生ずるものであらうとばかり思ふては、單純の觀察であると思はるゝのは、中古以後是を種々の場合に用ゐてゐる。現今東アフリカの住民の間には未婚の處女に器官を使用し得ざる手術を行ふ習慣があるといふ(結婚する時は反對の手術を行ふ)。或は宗教上破戒を制するために或る形式に是を應用する處もあり、或は歌手、俳優の聲を美しく保つ爲めに性的關係を禁ずる目的で、男にも其器官に輪をハメルことがあり、武勇の人の勇氣を減殺せざらん爲め同様の事をなす例あると云はれてゐる。

或は父母が少女の姦淫さるゝを防がん爲め貞操帯を用ひ、それを以て處女である證左と

する處もあると云ふが、多分いろ／＼のことから起つたものが、終には嫉妬の爲め器官行使防制の爲め専ら用ゐらるゝに至つたものであらうか？これにはいろ／＼の意匠も凝らされてゐるであらうが、鐵などで作つたものが佛蘭西の博物館に陳列されて在ると云はれてゐる。無論金銀などで作られたものもあり、今日では更にゴムやセルロイドやいろ／＼になつてゐるだらう、錠などでもさまざまの工風があるであらう。帯などの工風でもいろ／＼あらうが、アダムとイヴを畫いたり、彫つたりしたものもあると古書にあるが、錠を掛けて鍵は良人のみ握つてゐる所から、この機械を賣るものが密に正副二た通りの錠を作り、副の方を高價に賣りつけることもあるといふが、今日コンナものを製造して賣つてゐるものがあるとすれば、無論ソナ融通を考へてゐるに相違ない。

近世は西洋輸入があれば格別、要するに野蠻時代の遺風であることは言ふまでもない。ヴェニスに産するからヴェニス格子の名があり、ベルガといふ人の工夫だと云ふのでベルガ錠などの名もあるのだ。ウインや巴里では今も製造してゐる處があるといふが、多分好事の日本人は密かに所持してゐるであらう。

一一八 合理簡單化は容易ならず

近頃「合理化」「簡單化」などいふことが叫ばれてゐる。無用を省き費を節するには大切なことであるけれども、因襲はなか／＼抜き難く日本などでは容易に行はれ難い。

實は、日本ほど何につけても多様なものはない、別して趣味がからんでゐるものとなること、百のものを寄せ集めて見ると、同じ役目のものでありながら皆な形や大きさがちがつてゐて如何にも複雑を極め、それを統一して半分位にすることすら容易でない。アメリカの簡單化の申合せの如きは實に羨ましいものである。たま／＼三田村鳶魚氏の幕府の四回の儉約強要を讀んで行くに、樂翁侯が無益に長い紐を短くせんとして手を焼いた一話が收めてある。

松平定信侯が大奥で遣ふ文箱の紐は、拇指ほどの太さで八ツ打ちの長い紐であるから、文箱を幾巻も巻いてある。實用にはあの長さの半分でも十分だからと思つて、文箱の紐を短縮させようとした。さうするとお使番の女中が、是は御壽命紐と言ふ紐で、それを

縮めるのは、上の御壽命を短くすることになる、以ての外の御沙汰だと抗議して、とうとう強情を張り通した。

定信侯は晩年にこの御壽命紐の話をしては歎息されたと言ふ。

一一九 無 駄 征 伐

昨今不景氣濃厚の折柄、何れの會社工場も困難を極め、多くの會社は無配當の窮境に在りながら争議を恐れて給料の値下げもなし兼ぬる所から、切り抜けの爲め百方策を講じてゐるが、名案がないので、消極的に冗費を省くことが自然に行はれて来て、どこにも無駄征伐の叫びが聞える。無駄は目に見えない些細な損失であるので往々閑却されるが、積つて見ると吃驚するほどの大數となる。會社や工場の規模が大であればある丈、非常の數となる。無駄は譬へば人の眼を逃れて侵蝕を事とする白蟻のやうなもので、兎もすると鋼鐵の如き大機械をも喰ひ、うつかりすると會社や工場を滅すやうな事もある。無駄程不經濟のものは無い。無意識に散ずる冗費は、節約したからと云ふて、どれほどの不便どれほどの

の苦痛があるでもない。唯慣習に支配されて遣り來りだから、遣つてゐるまでのものに、無駄が決して少くない。

斯やうな無駄は所謂天物を暴殄するものである。これ等の無駄を金に換算すると數萬圓の巨額に上り、一國全體に就て計算すると幾百千萬にも達する。そこで昔から生産家などは、積極的に種々の考案を練ると同時に、消極的に無駄を節することを必ず要訣としてゐる。いつぞや著名の生絲家から聞いたことを今思ひ出す。この人の云ふのに、生産業の成績をよくするのに、秘傳でもあるかに思ふて、吾々に聞く人もあるが、決して人に語り得ないやうな秘密や手品のやうな不思議などがあるのではない。言ひ放つて見れば、そんな平凡の事かと人をして呆然たらしむるやうなものである。しかしその平凡な事に損得が繋がつてゐる。どうも何の事業でも競争のないものは無いから、互に出来る限りの働きをすることは言ふ迄も無い。随つて利益も大抵同じ程度まで獲得し得る。然るに五分々々を突破して幾許多くの利益を得ることのあるのは、種々の原因は素よりあるが、一般が閑却して注意を拂はない處から利益を産み出すことなどが一原因に相違ない。例へば生絲事業に先づ必要とするのは繭の買入れであるが、これを購入する時に堅實の繭を精選すると否と

が、既に製産の上に非常の相違を生ずる。又工女が繭から絲を引き出すに當り、最初は屑が出る。その屑は側らの容器に投げ入れるが常である。又絲を繰出して終には繭が薄くなり、中のピクが見えるやうになると、これも棄て去るのが常である、細かに計算を考へない所では、コンナ棄り物を全然顧みない所もあるが、大なる工場になると、この棄りが非常の嵩となつて、これを整理すると粗悪ながら絲や眞綿になり、代價に積つて一個年萬以上のものになる。萬以上の所得は會社の利益に一二分を添へることが出来るのだから、決して閑却してはならない。吾々に若し秘傳がありと云はゞ、斯る無駄を無駄にしないと云ふ位な事だ、とは某製絲家の談であるが、平凡の内に頗る至理が寓されてゐると感じた。何れの工場でも僅に注意を拂ふと否とにより、動力、燈火、燃料、諸材料等に於て、時々刻々に失ふ所が甚だ多い。それを一日の計算に見ると、左までの事でないが、大工場であつて半期若しくは一年の計算に見ると、驚くべき巨額に上る。これが取りも直さず無意識に配當率を低うするものであることを思はねばならぬ。自分が主宰してゐる印刷會社でも無駄征伐をやつて見た。先づ懸賞で無駄征伐の標語を募つたり、無駄な事項を條列させて見たり、日を定めて無駄征伐を實地に試みたが、頗る得る所があつた。少くとも職工に節

約經濟の觀念を喚起した丈でもこの試みは徒爾でなかつた。この試みの間に發見した著しいことが一つある。それは機械の事に關してゐる。印刷の輪轉機には卷紙が或る尺に斷截されるやうになつてゐることは説くまでもないが、輪轉機の或るものは紙を必要一杯に斷截するのと、五分程の餘地を存して斷截するのとがある。この五分の餘地のあるのは全く無駄なもので、一本の卷紙だけでもこの棄りが可なり大量となる。別して幾十萬の大量の本や雜誌を作る場合には非常の大數となる。今會社で引受けてゐる或る婦人雜誌は印刷部數が一回五十一萬だが、この數を基礎として五分の棄りを算すると、ザツト卷紙二十本に當る。卷紙一本の價は、約四十五圓であるが假に五十圓とすると、一千圓の無駄が生じ、一年に一萬二千圓の無駄となる。この無駄より生ずる損失を會社が負ふにしても、將た依頼者が負ふにしても、容易ならぬものであることを考へると、早く機械を改造せねばならぬことに氣がつく。會社の無駄征伐の試みに、實驗し得た最も大なるものはこれである。

二〇 百貨店は街路の延長

銀座や上野の大なる百貨店、白木、三越、松屋、松坂屋、その何れでも、今は下駄で大理石の階段や絨氈の上を歩かせるやうになつた。私はこれを歩する毎にいろ／＼のことを思ひ出さずには居られない。下足の問題では、どここの西洋建築でも長い間、頭を病ましたものだ。無論一時は下足を置いたものだが、日々何萬といふ人の出入に、一々下足を預かる事は出来ない相談で之が爲めに混雑を生ずる事は既往に頗る例が多く、自分等も幾度もその混雑に出合つてゐる。格別大衆の出入しない處では今も下足番が置かれてゐる。學校や圖書館などでも下足問題は毎々起るがどうもうまい方法が無い。大衆を取扱ふ百貨店に下足番撤去を實行したのは勇斷のやうでもあるが、打算的に考へれば、下駄や足駄に踏み荒されても大なる顧客を取入れたる方が利益であるに相違ない。下足の煩はしい取扱ひは或る意味に於て、入場者を制限することになる。各店が撤廢を斷行したのは、偶然でない。實を言へば百貨店は市街の延長とも見るべきものだ。どんな履物でも構はないとする

のが本當であらう、且つ靴と木履が建築物を汚損するにどれ程の差があるであらうか、成るほど鏡の如く磨いたギラ／＼する大理石の段階を下駄で履むは勿體ない氣がしないでもない、坐してもよい様な絨氈を足駄で歩くのはいくらか氣も咎めるが、それは長い間西洋建築を不相應に重んじた感情がなす業で、靴で歩いてよいとすれば日本の履物で歩いて悪い道理はない。西洋へ始めて出かけた人が立派な花氈を靴で踏み歩くのを見て驚いた例があり、椅子に慣れないで、靴で踏む花氈に座布團をしいて坐した例もある。全體外國のものと云へば、一概に珍重して靴で踏みちらす敷物を疊の上にしいて、今も飾りとするやうな家がいくらかもあるが、實はおかしなことでも人に對して無禮にも當るのである。併し家居にも靴を脱せず室内も靴で終始する西洋習俗からすれば、大理石の廊下を靴で歩いても誰も怪しむものは無いのである。日本の家屋は一切履物を穿つて入るを許さないことになつてゐる、疊の上は草履をすら許さない。その習慣である邦人が目を驚かすほどの壯麗な場所を下駄や足駄で歩くことを妙に感ずるのは無理もないが、實は習俗相違の感情と不調和から來るので、理窟から言へば靴も履物であり、木履も履物である。そこに差異があらう筈がない。また恐らく木履が革靴よりも場所を多く汚損することもあるまい。木履は質が

ト - パ デ
堅く當りが強いと言ふかも知れんが、靴の底には鐵釘もあつて、粗末な靴になると木履よりも當りが強いとも言へる。兎角洋風の建物に日本式の履物が調和を缺くのと洋風のものに偏重する考へがいつまでも抜け切れないので、吾とてもこの感情がないでもない。併し今の若い男女などは毫末もこんな思惑はなく、自分のこの説などを聞かせたら却て怪しむであらう。(昭和四年十一月)

二二二 デパート

日本のデパートメント・ストアも可なり進んで來たが、各科共に儲かつてゐる譯でもあるまい。英國あたりのこのシステムの商店の理想は人間一生のあらゆる需用に應ずると言ふので、生れて呱呱の聲を發する其際の入用品、搖籃でも襪襪でも乳でも供へる事は申す迄もなく、死んだ時のものまでもと葬具をも辨ずるといふが、亞米利加はこのシステムが最も發達してゐるのに、賣つて引合はないものは賣らぬさうで、そこが亞米利加流かも知れない。肉や魚類などは亞米利加のデパートに賣つてゐるといふが、最も多くの苦情はこ

れに在るさうだ。日本と違つて亞米利加ではデパートに買物に出かけるものは大抵婦人である爲めに、厠の如きも婦人用の外はないさうである。顧客を多く引く爲めに掛賣りもやつてゐるさうだ、これをするには、先づ客の財産や収入程度を興信所で調べて相當の信用ありと見れば、約束を結んで、證券(番號を入れたる)を興へる。その證券を目標に掛賣をするが、それには凡そ限度があつて、それを超ゆることが出來ない。又約束の期日に拂ひを爲すことは勿論である。亞米利加では更に一步を進めて、銀行と交渉して預金部をひらき、普通銀行利子より幾許か高い利息を附してやる。そして買物をする時は小切手でその預金から拂はしめることにまで進んでゐるといふが、利息勘定を主とする狡猾の徒は、金は預けるが一向物を買はぬものがあるといふ。

ト - パ デ
偕この百貨店はどれほど儲かるかと云ふに日本では一割五分位で、亞米利加では三割以上儲かると言ふけれども、その三割の内の半分は人件費の爲めに要すると言はれてゐる。百貨店は割合に経費がかゝると見える、最も経費がかゝらず儲かるのはチェーン・システム(連鎖店)であるといふ。チェーンはくさりで本店が一つあつて分店が幾十も幾百もクサリに繋がつてゐるかの如く、街衢の各所に設けある仕組である。日本でもと此法を用ひた

のは、いゝはと言ふ牛肉屋がそれであつたらう。分店は多く同じ體裁で、物の供給もその置き方なども同じやうになつてゐるから直に物の選定が出来る。百貨店は大規模で一ヶ所、すべての人を惹きつける法だが、これはどこにでもあるやうにするのだ、尤も規模は大なるものでない。この法の便利なのは中央の本店で仕入をやり廣告その他宣傳をやる、それが統一されて一つ廣告を出せば全部に共通するし、多くの物資を一舉仕入れるから安くあがる譯である。ある町に賣れないものは、收めて賣れる所に移すことなども出来る。百貨店も追々この法によらなければ困難であらうと言はれてゐる。勿論今の百貨店を中央として多くの分店を作ればチェーン・システムとなるのである。(昭四、一〇、四)

一三三 旅館は汽車の延長

都下四五の百貨店はその規模が壮大であればある程、街衢の延長であるかの思ひを爲す、又事實街衢の延長であらねば店も繁昌せず、人の便利にもならないのである。木履を穿いて大理石を踏ませる迄に開放したのは、畢竟街衢の一部と見ての遣り方であらうとは

前にも言ふたが同じ筆法で論ずると、旅館は汽車や汽船の延長であらねばならぬとも言ひ得るであらう。旅館が停車場や港灣に接続しない間は不便は實に甚だしい、この事は早く氣づかれて停車場附近には旅館の支店が設けられてもゐるが、多くは休憩の茶屋に過ぎないので、可なりの人の宿泊所に適しないから餘り役立たない。中央停車場にはステーションホテルが設けられたが、これこそ較々模範的に出来、汽車の延長である實を現してゐるが、廣い東京にこれ一つしかない。三都何れでも今なほ汽車を降りてから、自動車を驅つて可なり時間を潰さねば旅館に達する事が出来ない、この點は昔も今も少しも違はない。汽車や汽船には一定の賃があれども宿屋には賃は定まつてゐないとも言へる程區々で、茶代廢止も今以て行はれず、旅客はその顔觸れにより實費に相當する茶代を拂はねばならぬ苦惱もあり、必ずしも泊るを要しないのに汽車まで遠い爲めに泊ることにもなつて不便不經濟は緊縮の世の中に甚だしいものがある、これも改善を要する。(昭和四年十一月)

一三三 旅舎と茶代

日本の昔の旅に就き旅は憂きものつらきものといふけれども、それは一面を見た話で、考へやうによつては、旅ほど興味のあるものはない。毎日見るものが變化するのも一興だが、旅舎に泊つても一概にいふべきものとすべきでない。僅ばかりの心付けをすれば、行燈の燈心を添へて直ちに輝き出し、風呂の使も早く来る、番頭や主人が叩頭して用をきゝに来る。手を打ち鳴らせば女中が打ち捨て置かず顔を出す、更に茶代を氣張れば、部屋も立派な所に替へてくれる、夜具も立派のものを出す、僅ばかりの心づけで猫の目の變はるやうに意の如くなる事を思ふと旅舎は決して不自由のものでない、と或る昔の人は觀察してゐる。今日でも茶代廢止の實際に行はれないのは理由のあることである。旅行に慣れない人は、茶代の額を極めることに案外苦慮して、その面倒のあるのを厭ふて旅行を差控へる人もある、泊料は多く拂つても構はないが茶代を拂ふ面倒を取り除きたいと言ふて、西洋旅館の風を羨み内地の旅行に洋風の旅館を選んで宿する人も追々出て來てゐる、しかし

つくづく考へて見ると、洋風旅館もなか／＼殺風景である。すべて事務的に出來てゐるから簡單には相違ない、何から何まで自分でやつてのける趣向であるから、茶代は不要の筈である。食事は食堂で取り、浴は自室で勝手に栓を捻つて浴槽に湯を湛へて自から辨ずる、盥嗽も自室でやり厠も自室にある。萬事便利に出來てゐるやうなものゝ一人旅などでは話し相手もない、不時に酒を飲みたくもそれも一寸辨じかねる、深夜に歸つて來ても自から鍵で戸を開き、衣類を脱してもそれを整理してくれるものもない、西洋服なら室内の釘にブラ下げて置けるが、和服は一應整理を要する、ウエーターを呼んで畳ませる事も洋室では厄介である。平素日本風の生活をやつてゐるものには、自辨主義は氣樂のやうでも島流しにでもされたかの如き感があつて、氣が暢んびりしない。そこで二夜三夜は洋風旅館で辛抱もするが、日本風の旅館があれば、自然そこに移つて疊に坐し饌の上で酒食し疊の上で寝て、保養をすることになる。日本旅館は不定の茶代や心付が要るけれども、不經濟と知りつくそれに赴くのは、日本の因襲に擒はれてゐるからでもあるが實はそれ丈の愉快があるからである。相當の旅館には必ず客に受持の女中があつて、酒食の給仕をする、衣類の整理をする、外出の後には取亂したものを片づけもする、不時に客があれば酒食は

立どころに辨する、夜間に歸つて來ても寢酒位は飲める、出發の際には荷物を作る手傳ひもする、男子のウェーターに較べると柔味があつてよい、客扱ひに慣れてもゐるから細かい處まで届く、女中には心付けをやることは西洋旅館のウェーターに心付けをするのも同様であるけれども、實は茶代の厚薄が女中の品質や働き振りに關係がある。

日本の旅館には等級さまざまの室があつて、部屋に付て使用料が定まつて居らぬ、客の地位に依つて旅館が定るのであるが、實を言へば茶代がそれをきめるのである。一室に二夕間も附屬してゐるのと僅に狭い一室だけであるのと甚だしい徑庭がある、のみならず、よい部屋の調度寢具一切のものがそれ相應に吟味してあることも考へねばならぬ。地位に應ずる茶代を拂ふことの已むを得ない所以はこゝにあるのだ。又地位あるものが敢て茶代を拂ふを厭はない所以もこゝにあるのだ。何も氣分の問題である、よい氣分を欲する爲めに價を多く拂ふても遺憾はない筈である。自分は嘗て汽車と旅舎の連絡を論じ、旅館は汽車の延長であると云ふたが、旅客に安息を與へるには旅館は汽車と異なる所がなければならぬ。旅館は一時的家庭と見るべきものであるから、自から情味が無ければならぬ。そこになると西洋旅館は嚴正に汽車の延長で宿泊の室も車中の室と一般、唯だ坐席を大きくした

に過ぎぬ。車中の寢臺その物の如くである。いくら旅館は汽車の延長でも、さうまで車内と同一であつても困る。車中には心を許し難い他人ばかりで滅多に語ることも出来ぬ。旅舎に落着いてもなほ一室におさまつて錠を鎖し語るに人もなく、何をするにも車中の寢臺の如くであつては、旅行は全く事務的に墮ち、樂みといふものがない。氣の霽しやうもなし。經濟一方の論や事務家の旅行は全く別として、趣味の上から云ふと日本式の旅館は西洋のに優つてゐる。長く西洋にゐた人でも西洋の家屋には皆閉口して歸ることを考へると旅館に就ても思ひ半に過ぐるものがあらう。自分は西洋に出かけた事がない。併し西洋旅館に宿泊した経験は幾度もある、支那の燕京の北京飯店などは東洋一と稱せられ、日本にそれと比す程のものは無い位壯大のものである。自分の室と定めた所は二十疊もある廣さで、寢臺もあれば衣類棚もあり、箆筒もあり、鏡や装髮具もあり、物を書くテーブルもあり、一切が備はつてあつて、寢臺は廣く清き雪白の布で覆はれ、雪白の蚊帳が吊るされてあつて、枕頭に電話機も据付けてある。室に隣つて一室が附屬しそれには浴槽があり、洗面所があり便器があり、陰部を洗ふ器まで備はり、日光は十分に入り、申分無い氣持ちのよい部屋であつた。それにしても全く自辨主義で、語らんとしても絶対に相手がなく、酔

つて深更に歸つた時などはもとより授けるものもない。五日間の宿泊で朝から晩まで外出を事としてゐたから別に寂寥を感じる事も無く済んだが、若し疾病などあつて臥したとしたらどんなものかと案じて見ると、矢張り日本の旅館の方が人間の情味があつてよい様な氣持がした。奉天などでは最初西洋旅館に泊つたが何分窮屈でたまらず、終に日本旅館に移つて初めて暢びりした。(昭和五年二月)

二四 早稻田圃田の頃

(一)

私設の學府の所在地が、早稻田三田共に、其の地名に田の字があるのも妙だ。地名のみでなく、永く經營の衝に當つた人も高田の早稻田に於ける、鎌田の三田に於ける、共に田に因縁があり、早稻田は今も田中姓の人が總長である。早稻田と三田とは東京の兩極端に位置を占めてゐるが、新知識を耕し且つ培てることには其目的を同うしてゐる。

吾等は今五十年前の早稻田を振り返つて、早大の前身東京専門學校が呱呱の聲を揚げた頃を顧みると、先づ目前に浮び出るものは、早稻田界隈が満目田圃で、校門の前も大隈侯舊邸(今の大隈講堂大隈會館のある所)の周圍も皆田圃が迫つてゐた。そしてそれに多くの畑地が交つて、茗荷が多く植はつてゐた。

早稻田は都の西北に當る僻在地で、ツイ先頃大都市となるまでは、郡部に屬し、その爲めに水道の均霑に浴することが出来なかつたのだ。開校當時は早稻田の地名を知るものが幾んど無かつた。僅かに青物市場が此地名を知つてゐたのは、茗荷を市場へ持ち出したからの事だ、附近の小石川に今も茗荷谷の地名が存してゐるが、當時は茗荷谷から早稻田へかけて一帯の地が茗荷を産したのだ。

私は或る時茗荷のことにつき妙な考に耽つたことがある。それは何かと云ふと、俚言に茗荷を喰ふと物忘れをすと云ふことから、釋尊の門下に槃特と云ふ呆癡のものがあつたことである。此ものは己れの名すら記憶が出来ない癡漢であつたので、常に大きな板に己れの名を記してそれを胸部に吊るしたと云はれてゐる。此の癡漢が死んで墓を作ると、そのあたりから生へ出した草が即ち茗荷で、此の蔬菜の名も實は名を荷つて歩いた槃特の因

縁から来てゐると云ふ傳説もあるが、これは勿論著荷の冤罪に相違ないが、兎に角餘り喜ばしからざる健忘の草深い處に學府が生れて、それが中外の知識の淵藪となつたのは興味あることだと、自分は思つたことがある。

右のやうな片田舎に學校を設けたのだから、當初の不便は思ひやられる、開校の廣告を出しても其の所在地が分らないから、差向き地理の案内をせねばならないので、事務所は假に雉子橋の大隈家の邸内に置かれ、こゝで入學者を受付け且つ學校所在地の案内をしたものだ。

何故そんな邊鄙な所に地を卜したかと云ふと、市塵を離れた所でなければ清淨の空氣がない。不便な所でないといふ學生の風儀を正すことが出来ないといふやうな理由もあつたに相違ないが、學校の敷地とされた所が、大隈侯の所有地であつたこと、其の向ひに侯の別荘があつたことが重なる原因であつたことは言ふまでもない。

妙なことには學校の敷地となつた所も、大隈侯の別荘も皆な新學の教育には多少の歴史のあることだ。學校の敷地はもと井伊家の所有であつたと聞いてゐるが、こゝに山東直砥が小なる學舎を營んだことがある。大隈侯の別荘は松平頼壽伯の先代、讃岐守の下屋敷で

あつて、かつて尺新八が英學を教授した處であるから、早稲田の地は以前から教育に縁故があると云ひ得るのである。

(二)

早大の前身東京専門學校の開校は明治十五年であつて、講堂や寄宿舎は大隈侯一人の力で全部出来上つたが、當時の環境は如何にも寂寥たるもので、學校に隣る石黒子爵の高臺は子規が啼くので有名であり、田圃の用水に時々雁が下りたり、樹木の間には狐が出没したりした。無論夏時には蛙聲が咿唔と相和して喧すしかつた。附近には飲食するやうな家は堀部安兵衛が高田の馬場の仇討に参加する折、一杯飲んだと傳へる蕎麥屋が一軒あつたのみで、牛肉を食ふには、是非遠く神樂坂まで足を運ばねばならなかつた。

開校當時は大隈侯はまだ雉子橋の邸に居られて、早稲田には別荘がありながら、そこは空き家となつてゐて、一層寂しかつた。侯が早稲田に移られたのは開校の翌々年乃ち明治十七年であつた。

當時の早稲田邊の交通は非常に不便で、通路としては穴八幡の馬場下の道より外になく、

學校に來るものは此迂路を辿るか、捷路を田圃の畔に取るより外なかつたのである。勿論狭隘な汚穢な道で、田圃などは辛うじて人力車が通るやうなところであつた。

然るに大隈侯が早稲田へ居を移されると、其翌日から千客萬來で、草深い處が遽かに活氣を呈し、貧弱の道も車馬絡繹の處となり、追々大隈侯の聲望が中外に隆くなるに迫るは世界の道が早稲田に通ずるの盛況を呈するに至つた。世界の人が日本へ來ると、何を差措いても早稲田へ足を運んで大隈侯を訪ふのを榮とし、或は外務省所在の霞ヶ關を閑却してまで早稲田へ車馬を馳せた。昔、羅馬の盛時に世界の道は羅馬に通ずと云ふて羅馬人は誇つたが、世界の蜘蛛の如き海陸の大道路がコンナ草深い早稲田に通ずるに至つたのは早稲田の誇りではあるが、さて其道路はと云へば前述の如くであるから、顧みて窃かに恥ぢざるを得なかつた。

勿論學校の發展に伴ふて、すべて田圃が埋められて、新市街が起り、道路も今の鶴巻町の通りが開けたけれども、それは開校後十數年後のこと、此の田圃埋めも大隈侯の事業であつた。なか／＼大事業であつたが、案外容易に行はれた譯は、田圃は多く侯の所有であつたのと、田を埋める土が附近にあつたが爲めである。どこにそんな土があつたかと云

ふと、それは學校の構内にあつたのである。學校の敷地はもと前面が平地で、後部は丘陵であつた。學校を追々増築するには是非此の丘陵を平げねばならなかつたが、田圃を埋めることが誠に一舉兩得で、田圃が平地に變ずると共に學校の敷地が今の如く平坦となつたのであることを筆の序に書きつけておく。

私は一轉して少しく開校當時の事を考へて見たい。學校の開校は明治十五年の十月であつたが、乃ち十四年の政變で大隈侯が冠を挂けた其翌年である。

此政變は大隈侯が明治十七年を期し國會を開くべしとの議を建て、藩閥の激怒を買つて退官された時で、開校の頃も政情騒然たる時であつた。この政變の起る前から、政治に志のあつた吾等は、まだ東京大學に在りながら、小野梓氏を盟主と仰いで、しば／＼往來して、密かに政情を聞き、後には小野氏の紹介で大隈侯と謁し、改進黨の起る際にも秘かに

小野氏の帷幕に參し、大隈侯とは既に切つても切れぬ因縁が結ばれてゐた。大隈侯が挂冠後間もなく育英事業を思ひ立たれ、それが終に畢生の大事業となつた動機の一つは、小野氏が十人近くの將に大學を出んとする友人をもつてゐたので、それを有力の材料として、學校設置を進言したのだが、侯は小野氏の進言で直ちに著手されたものと

思はれる。但し大隈侯は米國に天文學其他の理科を學んで歸朝した養子英磨氏の爲め豫て學校を起すの念があつた所へ、小野氏の進言があつたので、一層計畫を早めたと思はれるが、兎に角開校に先だち各科を擔任する立派な教師がぞろり揃つたのは、學校のため此上のない仕合せであつたのだ、殊に此等の教師は方々より寄せ集めの烏合でなく、皆な志を校主に寄する面々であつたから尙更仕合せであつたのだ、尙ほ學校の評議員に列した面々は、皆な侯と進退を與にして野に下つた、大官其他當時第一流の政客であつたので、學校の規畫は眞に堂々たるものであつた。

(三)

明治十五年十月二十一日、開校の式を擧げた時には、英磨氏が校長で、小野梓氏は大隈侯の意を承けて大いに學問の獨立を高調し、評議員成島柳北氏は、祝辭を讀んで左の如く言ふた。

「抑々將來に於て、上は皇室を無窮に安んじ、下は國民を永世に利するの士は必ず此費に出づ可し、古今の治亂を鑑み、施政の要務を知るの士も亦此費に出づ可し。自治の精

神を煥發し改進の勢力を熾んらしむるの士も亦此費に出づべし。我心理を天下に明かにして、以て卑劣頑陋の小人を悔悟せしむるの士も亦此費に出づべし」

と云ふて、大いに皮肉の憤怒を洩らしたが、其言は痛快で、後日顧みれば皆柳北氏の豫言通りとなつた。此の式場ではエドワード・モールズが進化論の大要を講じたが、これも亦一異彩であつた。

さて開校はしたが來學者は僅かに數十名に過なかつた。それが段々に増加はしたが、學校の經營は頗る困難であつた。もとゞ此の學校は、大隈侯一個の力に依つて建ち、尙ほ創業時代は毎月相當の補給を約され、二三年は實行されたのであるが、藩閥の大隈侯を嫉視することが開校後一層甚しくなつて、非常の陰險手段を用ひて種々の妨害を試み遂には侯の糧道を絶つる甚しきに至つた。これには侯一家も困まられたから、學校の毎月の補給などは、左まで大きな額では無かつたが、それが追々遲滞して給料の支拂に困るやうなこゝとなつた。

此頃の政府の壓迫はひどいもので、間牒を寄宿舎へ入れたたり、學生の演說會に警部が突然臨監したり、まるで學校を謀叛人の製造所でもあるかのやうに虐待したが、最も痛さを

感じたのは糧道を絶つて校主の侯を困しめたことである。これに依り間接に學校は經濟的に難儀を感じたが、尙他に官立學校に教鞭を取る學者に向つて早稲田へ行つてはならぬとの内訓を發したので、これにも閉口させられた。然しコンナ不當の處置に憤慨して、早稲田に同感を表し、自由境遇に在る學者達は皆な無報酬である邊鄙の處へやつて來て後援を與へてくれた。これは實に忘れ難い好意であつた。

政府が大隈侯の糧道を絶つに如何にとめたかの一例として大隈侯自身の談がある。侯はどこの銀行も政府の命で金を貸さないので、已むなく舊藩主鍋島侯に金融を頼んで活路を得られた。然るにそれを知つた政府は、手を鍋島家へ伸ばして、宮内省を名として政府に喜ばれない大隈に金を融通することは、鍋島家に取つて不利益であらう。近頃大隈が宮廷に評判のわるいこともお考へにならねばならぬと云ふて脅かしたが、流石に鍋島侯は説客に餘計なことだと云ふて、刎ねつけたと聞いてゐる。

右のやうな次第で、侯は當時蛇蝎のごとく言はれた横濱の高利貸平沼專藏に融通を頼まれたことがある。侯は曾つて云はれた。平沼を蛇蝎のやうに憎むものがあるが、俺には平沼は恩人だ。無擔保で金を貸して呉れるものはあれだけだと云はれた。學校も困難時代に

大隈侯の口入れで千圓ばかりの金を平沼から借り入れたことがある。長い間元金を拂ふことが出來ず、毎年二季に利子を横濱に持つて行くのが幹事の任務の一つであつて、自分も幹事時代幾度も行き、其都度馳走になつたが、いつも平沼が自家の經歷を語り、鼈甲屋の養子となつて相當難儀したことなどをよく聞かされた。此の一千圓の借入金は到頭、前島男、中野武營氏などの盡力で、學校へ寄附することになつたが、平沼は實は學校へ寄附の率先者であるとも云へるのだ。

(四)

政府壓迫下にある學校も、開校後二三年を経て漸やく在學生も増加したが、經濟は相變らず收支償はず、頗る苦しかつた。時は英曆氏が校長を辭し、前島密氏が校長時代であつた。吾等は學校の現状並に將來に就て深く思ふ所があつて、終に意を決して學校經濟の獨立を策することゝなつた。

吾等は思へらく、學校は何人の手に建てられても、既に立つた上は天下の公器である。大隈侯の大度を以てして之を私有と心得居らるゝことは萬々無いと信するけれども、左右

にあるものは動もすれば、詔諛の餘り大隈家の私有の如く言ひ做すものがある。これ畢竟補給を仰ぎ居ることだ。學問をして開校の宣言のごとく、獨立ならしめんとするには、先づ以つて學校の經濟を獨立せしめねばならぬ。人より月々の補給を仰いでどこに獨立があらう。吾等は校主の苦しんで居らるゝのを見るに忍びない、設令補給を繼續さるゝにしてもそれを受くるのは校主に對する道でない。宜しく經濟の獨立を圖つて速かに校主の支給を辭すべしと、高田氏始め一同結束して案を立てたのが、月謝を倍額にすることであつた。

其當時何れの學校でも、月謝一圓は通り相場であつた。それを倍額にすることは當時に於て、事小に似て小なる問題でなく、學生の一和を得なければ校運の消長にも關するほどの問題であつた。當時在學生の數はどれだけあつたか、明かに記憶もして居らんが、三百人の在學とすると増収が三百圓となつて收支が償ふのであつたから、その頃の學校の經濟の規模の小なることは申す迄もない。しかし吾々は倍額増加を執行することに躊躇し、切めて二十錢を減じて學生の苦痛の幾許かを減すべしと、結局八十錢の増額を執行して、茲に月計の不足を充し、侯の補給を辭し得たのである。併しこの執行に就ては幹部の苦心は

一ト通りでなかつた。

あの頃の學生の氣合はイライラしてゐて、斯る他校に例のないことをやつて、どんな紛亂が起らないにも限らないので、時の幹事は三晝夜不眠で努力し、結局學校經濟の獨立の爲めとあれば、と學生も心よく納得したから事は濟んだやうなものだが、まだ學校の基礎の成らなかつたあの當時此事を行ふたのは實は大勇斷であつた。

月謝八十錢の増額と云へば甚だ瑣事で、校史の一隅に僅かにこの事實を書き留めてゐるに過ぎないが、實は其結果から見ると、事は甚だ重大である、學校が他人に仰がず、一人歩きの出来るやうになつたのは、全くこれからである。私はいつも早稻田の學問の獨立は八十錢で買つたのだと云ふてゐるが、決して戯れに云ふのでない。いくら學問の獨立は開校早々に宣しても、いつまでも大隈侯の補給をアテにしてゐたら、學校はどうなつたかわかつたものでない、私は藩閥政府の壓迫下にあつた當時吾が幼弱なる學校の事を思ふと轉た戰慄を禁じ得ないものがある。

以上の勇斷を行ふた時の校長前島密男は、日本の郵便制度を確立した人で、二錢三錢の郵便賃で百里千里何れへでも無事に書狀を運搬するの幸福を與へた。此人の校長時代に、

長く學校の經濟基礎を固める端を發したのも興味のある事で、八十錢で學問の獨立を買ふ如き目論見は前島校長が企てさうな事であるが、事實は高田氏を始め吾々が苦しまざれに、メノコ算で絞り出した窮策であつた。勿論前島校長も喜んで此案を容れ、大隈侯も之れを諒とされたが、自分などは高田氏の寓居に泊つて、徹夜で此際の改革案を筆作したことを想ひ出す。

(五)

五十年前の當時を考へて見ると、吾々もなか／＼狷介な生一本の人間であつた。政府が頻りに陰險手段を廻らして、當時しば／＼魔の手が早稻田に延び、吾々同志の學者を某々學校の教授に採用して高給を與へると云ふやうな勧誘があつたけれども、誰も應ずる者が無かつた。吾等は如何なる籠蓋手段にも乗ぜられない程狷介であつた。實は大學の在學中の學生の團體があつて、其の團體の内には早く官途に就き利達を欲する連中の團體もあつたが、それに對抗して人爵何ものぞと威張つた團體もあつて、小野氏の傘下に馳せ參じた者は即ち此の團體に屬するものであつた。

吾々の狷介であつたことは、大隈侯が深切に、君等はまだ獨身だから、自分の屋敷に来て居れと云はれても、それを斷つたり、時折大隈家の奥から呼ばれることがあつても、それは御馳走になるのだと知れてゐても成るべく辭退したものだ。吾々は大隈侯を崇敬してはゐたが、同家と私的關係を結ぶことを欲しなかつた。よく云へば氣骨稜々であるが、わゝるく云へば頑冥に近いものであつた。併し可なり長い間政府の壓迫下に立ち、能く堪へ、能く闘ひ、學校を護り果せたのも、吾々年少の氣魄が之を然らしめたと云ふてよからうと思ふ、學問の獨立なども此の氣魄が無ければ、就し遂げ得るものでないと、吾等は今になつて人憚らず自負するものである。

大隈侯も挂冠後長く不如意の地位に居られ、ある時の打ち明け話に、俺もあの際は困つて世襲財産らしいものまで全部賣却した、と云はれたことがある。併しいくら侯は困つても學校をもち立てることを忘れられなかつた。早稻田に大講堂が建つたのは開校後數年後で、まだ侯の不如意時代であつたのに、能くもあれ丈のものを建てられたと吾等は毎度感心した。惜しいことに大震災の時破壊に歸したが、あの講堂は長い間學苑の偉觀であつた。

侯が右のやうであるから、學苑に職を執るものも、皆な固より不如意の境遇にゐた。開校頃の會計帳簿を検すると、當時一番高い給料取が高田氏で一週數十時間を受持つたのに對し、僅かに月三十圓の報酬に過なかつた。世に法律家として政治家として名聲の高い人の報酬額は或は十圓或は五圓と云ふ少額であると、何人も驚きの目を睜るけれども、實は當時或る少數の専任の教師に對する外、俸給は全然拂ひ得なかつたので、知名の多くの人々の名の上に金額の盛つてあるのは給料ではなく、車代であつたのである。自分自身は開校後間もなく二三年、新聞記者などを遣つてゐたので、學校から給料を受けたのも稍々後の事だが、何でも其の當時、判事をして居るとか辯護士をして居るとかで、別に収入のあるものは、遠慮して學校から俸給を受けなかつた。併し之は同人の間の事であつたが、而して好意的に援けに來た人々に對しても、どうしても相應の謝禮が出來なかつたけれども、多くの名士が義侠的に來り援けた。これは政府の壓迫下にある學校の悲運に同情を寄せたのと、何と云ふても大隈侯の聲望が惹きつけた結果と見ねばならぬ。

(六)

斯る窮苦の間に學校は追々進展した。乃ち學校は堂で育つたのでなく風霜を凌いで松柏の如く根を固め枝を張つたのである。そして遂に坪内氏に依て文科が開け、爛漫たる華を發するに至つたのである。

文科の發展にも長い歴史があるけれども此限られた短篇には委しく書くことが出來ないが、其の徑路を細述すると、早稲田に文科の開けたのは開校後八年目で、丁度明治廿三年帝國議會が開けた年である。

全體一學科を創設することは決して容易の業で無い。經費其他の上から見て、當時まだ學校に餘裕なども無かつた頃に、此一科を開き得たのは意外の大發展と云はねばならぬ。此學科の主唱者は言ふまでもなく坪内博士であつた。君は此學科を開く使命を荷つて學校へ來り投じたとも云ひ得べき人であるが、君が開校の翌年學校の人となると、當分は諸般の科目を擔任し、譯讀以外に西洋史、英國憲法史、社會進化論等を教授された。就中西洋史には最も念が入つた。全體西洋史は何人が講じても多く學生の倦怠を生ずるのが常であるのに、君獨特の講義振りは宛がら講談を聞くやうな興味を興へたので、學生は皆喜んで傾聽した。君の講義は早く此頃から闔校の評判を博した。君はこの頃既に傍ら文筆を弄し

て、小説神髓を物し書生氣質を書き、沙翁のシーザーを譯し、今の富山房の前身東洋館書店より出版した。

坪内博士が早稲田に文科を起した趣旨は、博士自身が學んだ東京大學のそれに倣つたものと或は考へるであらうが、實はそんな單純な模倣でなく、深く時事に感ずる所があつて起したのであつた。當時我が國文學の最初の大過渡期に屬し、種々の思想と雑多の文體とが紛糾してゐた。甚しい歐化熱と其反動の國粹論とが最初の大衝突を経験した時であるのに、其思想を言ひ現す所の文體が混亂を極めてゐたから、敵も味方も其の是非を辯じかねた。

其頃の文體をザツト云ふと漢文崩しもあれば、翻譯體もあり、言文一致體もあつて、從來の文法を全く度外に置き語格などには頓著せず、銘々思ひ／＼に文體を創造することを競ふといふ風で、思想の混亂は愈々甚しからんとする虞れあるに氣づき、坪内博士は先づ文體を統一し之によつて思想の健全を得んことを庶幾し、和漢洋三文學の調和といふことを標榜して、さてこそ文科を開くに到つたのである。此の動機は坪内博士の近年吾等に親しく語られた所である。

七

右に云ふごとく文科創設の主旨は國民思想の調和を招來せん爲であつたので、凡そその爲めに必要な法科、例へば哲學、美學、倫理學、内外のクラシック等を置いたことは勿論である。それ／＼の教授には當代第一の學者を迎へたので、頗る壯觀を呈し、忽ち文科は早稲田の名物と稱せらるゝに至つた。

坪内博士は始終此の科の牛耳を取り、追々沙翁の諸作を講ずることになつては、これが亦大なる呼びものとなり、それが追々と出版されて遂に其全集四十卷——の完譯を畢つたことは文學界の偉觀と云ふてよい。博士は早くから朗讀法を工夫して講壇でしば／＼之れを試み、亦劇の改良を企て、曾ては文藝協會を起して幾多の自作を舞臺に上げさせたこともあり劇界に大功のあることは云ふ迄もない。

博士の長い間の功績は別に書く機會もあることと思ふが、文科を開いて輩出した得業生の面々は、皆な文壇に光彩を放ち、早稲田の名聲を一層高からしめたから、文科の創設は大成功であつた。實を云ふと文科の創設まで早稲田は政治教育に専らであつたので、藩閥

者流は氣を揉んで漫りに謀叛人の製造所とも見たが、文科が開けて見ると、彼等も漸く其の非を覺るに至つた。實は藩閥者流は極力、學校の發展を妨げても見たが、一向に其の效がなく、嘗つては法科を中央の二校（法學院の前身英吉利法律學校）と合併せしめて、早稲田の一角を崩さんとしたが、それも效を奏せず、法律は其後漸次發展するに至つた。全體自然に發達すべき學校を人爲で抑へんとするのは、無理の沙汰で、藩閥者流が壓迫を加へれば加ふるほど、其の刺激で反動を起し雄健なる歩みを續けた。

早稲田の田甫時代は云はゞ學校の難儀時代であり、亦大切の試鍊時代でもあつた。如何なる學校も其の創業時代の三五年は困難を感ずることが常であるが、早稲田の學校の感じた困難は、一種變態のもので、教育を助成せねばならぬ政府が、逆に妨害したのだから、如何にも奇怪極まる現象であつた。後年早稲田大學が大なる發展を遂げた折、始めて校門を潜つて演壇に立つた伊藤博文公は往時壓迫組であつたことをも忘れて早稲田の發展を祝し、官立學校の此私學に就て學ばねばならぬことは、特に經濟の點にあると云はれたが、經濟で苦しめたのは誰であつたらう、公も亦その一人であつたから、これに氣がついたのも無理はない。大隈侯は公の早稲田に來たのを以て、「伊藤の降伏」と評され、始めて流飲

を下げられたやうであつたが、吾等も往事を追懷して愉快に堪へないものがあつた。

現時早稲田の繁榮は何人も目前に見るごとくであるから、多く語るを要さぬが、振り返つて見れば、専門學校を改めて大學となす時には、明治天皇より特に三萬圓の御下賜を得た。大正天皇が東宮であられた頃、特に台臨を賜つた。私學の經營では、不可能とされてゐた理工科も今は既に基礎が成つた。常に萬五千の學徒を收容して卒業生は既に三萬人に上つてゐる。あらゆる建築は近代式の美を盡して今は舊時のものは一も留めず、昨年は文科の大なる講堂が建ち、本年は法科の講堂に添へて事務所が建てられ、近く圖書館の増築にも及ばんとしてゐる。開校後長い間尺寸の地も有たなかつた學校が先づ大隈侯から敷地の寄附を受けたのが土地を所有した始まりで、今は十萬坪に近い土地を有してゐる。就中恩人大隈侯の舊邸が學校の有に歸し、そこに大なる紀念講堂が設けられて都北の偉觀となつてゐる、半世紀と云へば長いやうで事實短かいものだが、田圃時代からこゝまで進歩したことを考へると、創業時代を知る吾等には何んとも云へない深い感慨がある。

一二五 古い銀座の回顧

自分が初めて東京に遊學したのは、明治八年である。そして銀座に煉瓦家屋の出来たのは、それより一年後といはれてゐる。尤も建築に着手したのは明治五年頃で、表通りから裏通り一等、二等、三等と等級を別けて建築が出来上つたのは明治七年で、自分の出京した時には出来上がつてホヤ／＼の家屋が建て並び、恰も外國に行つたかのやうに田舎書生を驚かした。當時煉瓦の家屋が珍らしかつたので、この新開町を銀座といはず煉瓦といふが通り名であつた。時の政府は堅牢な家屋を建築するの範を示すために、特に帝都の入口に文化的の經營をなし、これがために百幾萬かの金を費し、それを年賦拂下げとしたのである。百幾萬の投資は當時とすると奮發であつたといふわけは、當時の國家の歳計は千四五百萬圓に過ぎなかつたのに、都會の一部分にこれだけの資を投じたのは、如何に當局者が文化に熱中したかと窺はれる。併し自分が上京した頃は、明き屋が多かつた。煉瓦は窓が狭くて暗くて困る、冷へて困る、疊を敷くに尺が普通の家屋と違つて困るなどといふ苦

情が、盛んであつた。それでも政府の勧誘で追々塞がつたが、その塞がるまでには、明き屋を利用していろ／＼の見世物などが出た。なんといふても灰殻ハイカラなものが先づこの家屋を利用したわけで、多くの新聞社は皆な煉瓦家屋に看板をかゝげた。

自分の始めて見た銀座は柳が街樹であつたか、どうかハッキリした記憶がない。或はや後の事らしく思ふ。柳樹は銀座、殊に夜の銀座に風致を添へるものとして或る方面のものに、喜ばれたのが、大震災災後、取拂はれたので、是非々々柳樹を復活せよと熱心に市長に上申したのもある。それに對し市が街樹を改めねばならぬ理由を、細かに説明した文書の存してゐるのを見ると、如何に柳樹に或る人達が執着があつたかと窺はれる。柳蔭は一種の風致をなすものに相違ない。あの頃の浮世繪を見ると、柳蔭や烟雨が大いに風景を飾つてゐる。今日でも文士達は銀座の生命は柳闇の野趣にあるなどいふてゐる。慣習は抜き難いものと今更ながら感ぜざるを得ぬ。銀座は銀貨鑄造の處を意味するので、もと駿河の府中にあつたのを慶長十七年に江戸に移した。その銀座の跡は今の銀座二丁目にあつたといふ。それが寛政十二年に蠣殻町に移されたわけで、實は江戸の町でもそれほど著名であつたのでなく、今の濱町すなはち本兩替町にあつた銀座に對し、新兩替町といふたの

が、どういふわけか、銀座といふ通り名が出来て、今では銀座があるからには銀座の名も復せねばならぬ、と騒ぎ立つやうになつたのも妙な事である。しかし金銀萬能の世の中である事を思へば、それも敢て不思議はない。自分が内部までよく知つてゐる京橋角にあつた日就社、讀賣新聞は今も銀行となつてゐるが、あそこがもと向島に銅像の立つてゐる伊勢勝、すなはち西村勝三が始めて洋服屋を出したところで、西洋から仕立職まで備ふて来たが、まだ時勢が早過ぎたので失敗した。その後明治十年に日就社が移つたが洋服屋であつた名残りが、會計部にありくと存してゐた。それは何かといふと幅廣の棚が一面にあつた一事だ。その當時自分も氣が附かなかつたが、あの棚はまさしく洋服地を納め置くところであつた事が、うなづかれる。

自分が出京の前年だから、目睹はしないが、銀座に一番早く行はれた馬車は二階建て、芝口と、淺草の間を往來した。この馬車を原語そのまゝラムニバスといふた。車屋は英國製のものを取寄せたといふが、僅に二臺しかなかつた、といふはチト貧弱である。當時の銀座通りも随分悪道であつたので、二階建ての馬車を馳するには危険もあつてそれで差止めとなつたがこの馬車が四頭曳であつたといふから、どこまでも英國式にやつたのだ。今日

の電車、自動車でもまだ二階建てがないのに、當時早く用ひたるを思ふと、銀座には流石に突飛な灰殻があつたのだ。この事を營んだものは、陛下の初度のお馬車の馭者を承つた馬の名人紀州由良の伊東八兵衛といふ人であつた。これに次で鐵道馬車が起つた。それは自分も知つてゐる。自分が讀賣新聞に筆を執つてゐた頃、道を隔て、社前に松田といふ大衆料理屋があつた。此店でお客の下足が百番に達すると、下足番が聲高らかに呼ぶのでその聲がわれ等のゐる編輯局によく聞えた。兎もすると一日に三度位この叫びを聞くことがあつた。ひどく繁昌した事がわかる。もう一軒大衆料理店千歳といふが、新橋寄り今の百品館のあるあたりにあつた。これも松田と同式であつたが、松田よりは料理がよいので評判であつたけれども、松田ほどに繁昌せず、自分などは餘り出かかなかつた。

古い銀座の夜店は、案外盛んなもので、骨董店などに随分掘り出しものがあつた。あの頃は舊物打破といふ空氣が漲つて、家の貴重品でも無分別に道具屋に賣り飛ばした時代であつたので、心あるものは銀座の夜店を注意して見廻り、意外の掘り出しをやつたことが少くなかつた。今銀座で堂々たる構へをしてゐる服部時計店の先代の主人なども、大道商人から産を作りあげたのである。天麩羅をもつて名高い天金などは、其頃如何にも小さな

店で、客が膝と膝とを交へて飲食するやうな家であつたが、あれも夜間は屋臺店を大道に出したものだ。また舊銀座で店舗として人目を惹いたものは、岩谷松平の店で、薩摩がすり岩谷自製の薩摩煙草のシガレットを賣つたが、シガレットは盛んに賣れて、今の専賣局の煙草の如く一般に流布した。天狗煙草を賣るから岩谷天狗の綽名もあつた。薩摩の國産を販くからといふて、島津家の⊕紋を看板に用ゐた事が島津家の横鎗で、一時問題となつた。ところが島津家の定紋は十が輪廓に觸れてゐるのに、岩谷のは觸れてをらぬといふやうな分疎でもかくも事は治まつたが、岩谷はなか／＼の山師で、殊に主人は大の好色家をもつて聞えた。妾が十人も一家に同棲してゐると噂されたが、店に明眸の婦人がゐたのはその連中であつたかも知れぬ。かれは赤色の洋服を着け、馬車で市中を横行するのが常であつたが、無論宣傳であつたのだ。

煉瓦家屋が建築されない前の銀座邊は、どんなものであつたか自分などは知らないが、昔からこの邊に知名の人が多く住んだ。殊に藝術界の人がなか／＼に多い。その一端を擧げると、山東京傳は銀座一丁目の東側に住し、弟の京山は南紺屋町にゐたが、後に京傳のところへ移つた。文政頃には岸本由豆流が銀座一丁目、平田篤胤が三十間堀に各々住し、

木挽町には狩野尙信、常信の家があつた。大西圭齋、大槻磐溪、山内香雪なども銀座に住んだ。北川眞顔は數寄屋河岸に、眞淵門下の才媛油屋倭文子は弓町にゐた。幕末時代紀文をもつて擬せられ、春水が梅曆の材料にした細木藤次郎香意（或は香以）は山城河岸に住した。明治になつてからは岸田吟香や、成島柳北（その妾宅は出雲町にあつた）などは銀座に、久米邦武は三十間堀に、橋本雅邦は安女町に、篆刻家益田香遠は日吉町に、原胤昭は三十間堀河岸に原女學校を建てた。また戸川安宅も銀座の住人であつた。銀座はなかなか人物の淵藪であつたのだ。

一二六 銀座暗黒面

自分は散策毎に足が銀座に向くが暗黒面を探検するには年を取り過ぎて、濃厚なエロの享樂場に足を入れた事はない。併し實地を踏んだ人から往々聞かされてゐる。路次式の横町に巢食ふてゐる、種々の「バア」には夫々特徴もあるさうだが通例男女が直ちに接近し、一杯のウキスキーを煽るか煽らないかに古い馴染でもあるかの如く、ウエートレスが慣々

しく物言ふて體を擦り寄せたり、テーブルの下で客と兩脚を交へたり、ともすれば抱擁したり、接吻したり、互に口から口へ酒を移して飲んだり、飲食物を女がねだつたり、連れ立つて何れかへむぐりこんだり、或は「バア」に備へてある祕密室に寝こんだりする。そんな簡単な享樂場は江戸の繁榮時代……淫靡の最も甚だしかつた時でも、恐らくそんなに手取り早くエロの享樂を満足し得る所はなかつたであらう。女郎屋にせよ待合にせよ、這入る瞬間から享樂の目的の達し得る所はないのだ。この場に入るものには種々なる年輩の人がゐる。又種々の階級の人がゐる。血の氣の多い青春のものゝ多い事は、もち論だが、強ちそればかりでもない。チャンと家庭を有つてゐる立派な紳士達もこゝの客となる。毎夜の或る時間一たびこゝに足を踏み入れねば氣の済まぬ人達もある。もち論必ずしも凡てが春を買ふ遊蕩者ではない。只單に女に戯れるのを興とするものもある。かゝる簡単な享樂場が出来ては、藝娼妓の營業も成り立ちかね、現に藝妓が轉業して女給となつたものが少くない。追々はますます多くなるであらう。これ等は嫖客を操縦するの専門技術を有つてゐる。普通のウエートレスはいくら容色があつても、客を掌中にまらめて翻弄するの技術を有つてをらぬ。この道にかけてはかれ等はA、B、Cを知るに止まる。それだから客が時間

長く流連すると終に馬脚を露はす。かれ等の應接は萬遍一律で變化がないから、客に飽氣が生ずる。そこに行くくと藝妓の腕はさえてゐる。機略があり氣轉があり客の胸臆を透視して應變の技を揮ふので、容易に馬脚を露はさない。直に客に許すかに見へても實はさうでもなかつたりして、客にも多少の手腕を要する。實はそこに興味もあるので「バア」に藝妓出のウエートレスが幅を利かせるわけである。これまで待合遊びをしたものにいはせると、下司ばつてお話にならんと排斥するけれども、新式の通客にいはせるとコンナ簡單で安直で便利であるものが、どこにあるかい。場に入ると行きなり二三の女が相手になり、初回から熟交ある如く打ち解けて、膝をすり合せ、凭りすがつて隔てるところがない。そして彼等には去る時五十錢銀貨一ツづゝ攫ますればそれで済むのだと、なるほどさう聞けばこの新式の法には相當長所もあるやうだ。とかく人間の或る年輩には妻妾のみに満足が出来ず、道草を摘まねば氣が済まぬ時代があるから、いつの世でもそれを満足させるために相應の事があるはずだ。今の世相の一端としてこんな事も雑話の材料となる。

一二七 銀座

「銀座」と題する非賣品の書中、大島寶水といふ人の書いた廿五年頃の讀賣新聞、といふ項にふと自分の名が見えるから、何が書いてある、と讀んでみると自分の月給や、賞與金の事が社の記録によつて記されてある。自分は既に忘れてゐるが事實に相違ない。

今私の手許に明治廿五年の所謂お盆に、社から社員一同へ出した「社員賞與録」なる記録があるが、當時は物價も安くはあつたが、それで見ると其時の主筆は市島謙吉氏で、月給が金八十圓賞與金五十圓とある。しかも上欄に「改革の際盡力に付」といふ朱書があるところから見るとそれでも特別に氣張つたものと見える。(但感じの好い様に約束は年俸として極めたらしく、年俸一金九百六十圓——月割金八十圓とはしてある。)主筆にして如此。其以下の者の月給と云つたら今から見れば實に滑稽の様に思はれる。今代議士として巾を利かしてゐる匹田銳吉氏でも、此時は編輯長位の地位でありながら月給が廿七圓。(これも年俸一金三百二十四圓、月割金二十七圓とは書いてあるが)賞與金が十五

圓である。これにも上欄に「九圓の處主筆不在中盡力に付」と、但書がしてある。艶種書きとしては、當時第一人者と云はれてゐた堀紫山(誠之)氏でさへも、年俸百八十三圓としてあるから月給にすれば金十五圓廿五錢、賞與は四圓廿錢だ。劇評家の權威だと云はれてゐた芋兵横氏(鈴木彦之進)でさへも年俸金百廿圓、月割金十圓、賞與金七圓と書いてある。更に面白いのは、明治文壇の泰斗、紅葉山人尾崎徳太郎氏の月給が、金四十圓の事と、紅葉氏が(宅で苦心してゐる事などはわからないと見えて)碌々、社に顔も出さないで、社長の逆鱗に觸れて此時「除く」と、上欄に書いて同氏には賞與が出なかつた事である。是等も後年尾崎紅葉氏が、讀賣新聞の社長と意見合はずして、結局衝突して退社した事件と想ひ併せると、そこに當時の事がマザ／＼と眼に浮んで來て私は今昔の感に堪へぬのである。

銀座
この筆者は知らざる人だが讀賣に關係のある人と見える。讀賣は當時俸給が安いといはれた社であつた。自分が主筆になる前多くの文藝家が去つて、他社へ赴いたのは他社では倍額位な俸給をもつて迎へたからである。紅葉はさすがに俸給の多寡をもつて進退はせなんだ。

二二八 銀座の懐古

大島寶水氏の「銀座」といふ書には、いろいろの人が追懐談を書いてゐるので、面白く感じ、自分は銀座にドンナ関係があるかと默想して見るとなかく関係が少くない。

第一は讀賣新聞の日就社に關係があつたし、又同社の向ふに松田と云ふ大仕掛の料理屋があつて毎日の辨當はこれから取寄せたものだ。時には出かけた事も屢々ある。田舎漢相手の安料理屋で皿のりが多かつた。廁を立派に作つて田舎人の膽を奪つたものだ。

友人高田早苗君が帝大同窓時代西紺屋町河岸に居つたので、自分は毎休日、朝から訪ふたものだ。必ず天金のテンブラが御馳走であつた。大隈侯も明治二十年に銀座の弓町に借宅して事務所を構へ、毎週、日を定めて早稲田から出張されいろいろの人に爰で面接して居られたが自分も同所で多くの人に逢つてゐる。

又友人山田喜之助君が出雲町の藝者屋のマン中に辯護士の事務所を構へた。山田君もその頃は無妻で自分も獨身であつた。自分は九春社に毎日通つて執筆してゐたが便宜上日中

は山田君と同居したこともある。山田君の住居の背後に喜多川と言ふかなりな鰻屋兼料理屋があつた。山田君の物干しと先方の物干しが接してゐるのでいつも物干し傳ひに出かけて行つて酒を飲んだものだ。服部氏の九春社といふが、銀座の新橋寄の殆ど端れにあつて、服部誠一君が、東京新誌其他の雑誌を出した處である。自分は東京新誌に關係は無かつたが、内外政黨事情と言ふ隔日に刊行の新聞を出した時、山田一郎君と自分が執筆を擔當し經濟上の責任は服部君が擔つてゐた關係上この九春社へ半歳ばかり通つたことがある。この編輯局が狹隘だつたので自分は山田喜之助君の二階に同居してゐた譯だ。

増田義一君の實業之日本社が南紺屋町の河岸にあり、中村梧竹氏は在世中本通の伊勢幸といふ洋服屋の二階に居り、吉田守衛といふ梧竹氏の門人が尾張町に居つたので、これ等の人々を訪ふたこともしばしばある。

方面をかへて料理屋などから銀座關係を言へば、裏通りに伊勢勘といふ相當の料理屋があつたが、これへは讀賣新聞の編輯連と頻繁に出かけたし、大村屋と言ふ船宿へは小川爲次郎君と時々出かけ、きつねと言ふ三十間堀の鰻屋兼料理も、相當のものでこれにも出かけ、華月、湖月は勿論、種々の會合で出かけ、甘いものは本領ではないけれども十二ヶ月

といふしるこ屋へも三度や五度は出かけたであらう。

待合は八官町に二三軒懇意の處があり、鍋町の風月には議員時代時に午餐(洋食)を取りに出かけ、竹葉へは幾回行つたか數へ切れぬほどである。自分が大隈伯後援會を設けて解散後の總選舉を指揮する會長となつたその折の事務所は、鍋町の辯護士守屋此助氏の家であつて、これへ二ヶ月ばかり毎日往復したが、日々の辨當は此竹葉の鰻飯であつた。數へ來れば銀座にはなかなか淺からぬ緣故がある。

そして最後に漏らすべからざるは帝大學生時代坪内逍遙君と下谷の某亭に飲んだ時のことだ。傾酒深更におよんで宿るべき所がない。やむを得ぬ、夜明けまで散歩しようとして下谷から歩いて銀座を通り新橋に到つて更に又同じ路を戻り九段に行つて芝生の上に臥し天明に迫んだことがある。夜三時頃の銀座をかうも丁寧に歩いたものはあまりあるまい。

(大正十二年一月)

一二九 用語の變遷

西洋の言葉が譯されたり、或は原語其儘に維新以來行はれてゐるものが少くない。近來は別してそれが多く、譯することなく原語そのままに用ゐらるゝことが多くなつた。なほこの外に西洋語ともつかず、日本語でもないいろ／＼の言葉も流布した。随分譯語に窮しておかした言葉を用ひたこともある、また物に名を命ずるに奇警な言葉を用ひたこともある。今はソサイテーを社會と言ひ、バンクを銀行と言ふてゐるが、維新匂々にはこの二語もなかつた。ソサイテーの譯語には頗る困んで、世俗或は俗間などと言ふたこともある。食品のチーズを白牛酪といふたし、石油を石腦油と言ふた時代もある。マツチを燐寸と譯したのは當つてゐるが、リンスンと唱へたのでは當らぬので、唱呼に苦んで摺火口と言ふた事もある。兎角燈の聯思を離れ兼ねて、マツチ製造の社を新燈社と言ふた。端艇競漕即ちボートレースの初めて大學に催された時には走舸と言ふ語を用ひた。船に花魁丸といふのがあつた、乗るといふ所から名をつけたのであらう。酒にも「おいらん」と言ふが一時

行はれた、自分の大學にある頃は常にこの酒を飲んだ。吾々學生の間には娼妓をプロといふた。プロステチュートを約したのである。北里をノルスと言ひ品川をサウスと言ふた。高利をアイスと言ふたのは氷の音が近いからだ。自転車のゴム輪の破れたのをパンクと言ふのを藉りて、婦人の孕むことに應用したり、不見轉(ミズテン)と言ふ言葉は今も行はれてゐる。同じ意味でフランネル(振らず寝る)といふ言葉もある。これは廣く行はれてゐない。休日をドンタクといふたことがある。巖谷一六に吞澤山人の戲號のあるのは一六の日が休日であつたので、それから命じた戲號である。官費から思ひ付いて或る社會にチャンピといふ語が行はれた、市井に父をチャンといふから來たのである。横濱ではベケ、サラパンといふ言葉が外人と交るに用ひられた。ペケは「嫌ひ」サラパンは「打捨」であるが、こんな言葉は最早私語となつた。今は飲料が頗る種類多くなつたが、曾てジン／＼ピヤといふのがあつた。また曹達水を沸騰散といふたことがある。乞食の社會には種々の隠語がある、浮浪人をグレ、殘飯をツゲと今も言ふてゐる。近頃洋語を其儘に用ひることが行はれ出した、譯しては適切を失し原語其儘の方が呼ぶにも都合がよくなつた、畢竟世の進歩であらう。正午を報ずる午砲が廢せられて電氣仕掛で時を報ずるのがサイレンであ

る。監獄と言ふ名が嚴めしいと言ふので刑務所と命名されたり、市街に自動車が輻輳して危険である所から、交通整理の警官が出來たり、婦人の職業が多く出來た中に派出婦があり、タイピストがあり、マネキンがあり、モデル女があり、バス・ガールがあり、ウエイトレス(女給)があり、女事務員があり、エレヴェーター・ガールがある。女優やダンサーの殖えたことは言ふまでもない。建築にもいろ／＼の名が命ぜられ、大建築をビルディングと原語を用ひそれを約してビルとも言ふてゐる。呉服店が百貨店となつて、デパートメント・ストアと言ひ約してデパートと言ふてゐる。下宿屋が追々衰へてアパートメントに宿することが漸く行はれ、クラブが初めて理解され且つ調法がられて來た。大震災後はチェーン・システムの店舗が多く出來た。高架鐵道の下にガードが出來それいろ／＼の店が出來もした。飲食店は震災後多く簡易のものになつた、食堂といふ名が多く用ひられてきた。バーやカフェー・ハウスの繁昌し出した事は著しい。サヴァタージ(怠業)、ストライキ(罷業)の用語が行はれ出したのは、可なり早いことで、これ等の事が實地に行はれてゐる。無産黨社會黨などが出來てから、ブルジョアとプロレタリアの二語が頻りと叫ばれてゐる。遊戯(スポーツ)の方面では、野球(ベース・ボール)、テニス、ラグビー、シングル

ス、水泳、競漕、競走等人氣はこれに集まり、相撲を壓倒しつゝある。演劇に對抗して映画寫眞が流行し、大組織の撮影所が出来大なるキネマ館が築かれ、外國の映畫會社パラマウントの名は誰も口にするやうになつた。遂にトーキーまで行はれてゐる。これ等遊戯の隨喜者は外國でファンといふが、その語も通例用ひられてゐる。ラヂオは各戸の娛樂機關となり又報道器となつて來た。野球の勝敗、角觥の立合それが居ながらにして目睹の如く説明さるゝまでに開けた。銀座は大震災後の盛り場となり、「モガ」や「モボ」が横行する、それを銀ぶらと言ふのは銀座散策の意味で、夜分九時過ぎでなければ銀座の眞味が知れぬと言はれてゐる。婦人が莫迦に洋装する事が流行し、スカートの下から兩脚をつき出して美を競ふてゐる、近來可なり脚部の格好がよくなつて來た。オペラバツクやハンドバツク、帽子に手袋にパラソルに西洋婦人と競つてゐるが、遺憾ながら身尺が短く、これ丈は競争が出来ない。敷多き化粧品や藥品で洋名を以て呼ばれてゐるものが十の八九を占めてゐるが、一々舉げ兼ねるほど多端である。明治の初年には飛行機もなかつた、電車もなかつた、オートバイもなかつた。印刷の輪轉機も無かつた、グラビヤ、オフセットも無かつた。ラヂオもトーキーもなかつた。それと今とを較べると世の中の時相は甚だしく變つ

たと謂はざるを得まい。(昭五、二、二五)

一三〇 新らしい言葉

近來のやうに刺激的の極端な言葉が多く用ゐらるゝことはない。曾ては最大級の言葉が若い人達に使はれ、「大いに」とか、「頗ぶる」とか、「最も」とか、「盛ん」だとか、さまでの事でもないのに、大袈裟にいふ事が行はれた。必竟大袈裟に語氣を強めなければ人の注意を惹かないから、行はれ出したのであらうが、實はさまでの事でもないのに最大級の言葉で驚歎したり、讚辭を呈するなどは、その人の見識の低さが見透へて、心あるものをして厭氣を感じしめたものだ。然るにこの節はどうかといふと、最大級以上の言葉でなければ到底人の注意を呼び起す事が出来ないやうになつた。人を刺激するに足る言葉なれば、どんな露骨な、粗硬な、醜憎な言葉でも、處嫌はず男子には、ち論、女子にも使はるゝやうになつた。一時汽車などに特急といふ言葉があつたが、それは緩慢だとあつて今は「超」の字が上に冠らさるゝやうになつた。嶄新の二字は最も新しいといふ形容詞であつたが、

今はそんな語では形容が足りないであつて、尖端を、行くとか走るとか、いふ言葉が行はれ出した。極度などいふ語も新らし味がないといふて百パーセントといふ語が流行り、困難に打勝つた事を強くいふために征服の二字が頻に用ゐられ、山を征服したとか、海を征服したとか、空を征服した等と大袈裟にいはれてゐる。音楽には旋風の形容語があり、演説には熱辯の評語が行はれ、確にさうだといふのが語氣が弱いとあつて断然さうだといひ必ず行くといふを強めて断然行くなどいふて、断然の語が會話にも文章にも無闇に用ゐ出されて來た。提携して事を行ふ事に、共同戦線に立つ等いふ殺伐な言葉が不似合の場合にも用ゐらるゝやうになつた。エロとグロが對句のやうに用ゐられ、性病、接吻、抱擁等の言葉が遠慮なく公然と用ゐられ、地獄といふ言葉が試験の難きに用ゐられ、監獄の二字は刑務所と改まつたに拘らず、監獄部屋といふ語が虐待の場合に用ゐらるゝやうになつた。大衆の二字が流行してから、大衆文藝だの、大衆作家等いふ事が文界の通語となり、ナンセンスが文藝の一體となつて來たのも一奇である。今はなんでも蚊でも新語を使はなければ、その人は古いといはれ、モダンでないと嘲笑されて幅が利かぬ。この頃もある宴會席に藝妓が頻に、オーケーといふから、なんの事だと聞くとオーライは古いからオー、ケ

ーといふのだといふた。オーケーはオール・コレクトの冠字を取つたのである。自分はその時笑つて、君らの如きオーライ藝者をこれからオーケー藝者と呼ばねばならぬかといつた事がある。實に昨今流行の言葉は目まぐるしい程に變つて行き、新語が日々夜々に製造され、雑誌や小説などにそれが満ちてゐる。現在ですら之等の語を読んで理解が出來ない位である。況して三十年、五十年の後の人が讀んだらどうであらうか。ブルジョアジをブルと略し、プロレタリアートをプロと約し、ブルとプロといふ事は今日理解されても他日はどうであらうか。吾々はこれを思ふと、徳川期のコンニャク本や、黄表紙や、人情本などの讀みにくゝ解り兼ねる事が寧ろ當然と感ぜざるを得ない。

一三一 同盟罷業と高野山

同盟罷業も追々組織的となつて來た。時にはなか／＼巧妙な戦略を用ゐる。私が最も感じたのは、大正十三年の夏大阪に行はれた電車従業員の同盟罷業であつた。あの際の罷業はなか／＼頑強で、十數日交通が杜絶したので、警官や吏員や學生や在郷軍人が臨時に運

轉をやつた。その點は東京の場合と同様であつたが、彼等の作戦の意表に出でたのは、同盟罷業員を一括して高野山へ押し込めた一事である。高野山とは彼等はよくも考へた。人間を一つに纏めて動きのつかぬ様にしておく場所としては、實に屈竟の處である。昔浮屠氏が多くの僧を檢束して或る戒を強ひた。それに適當する様に出來たあの山は、恰も同盟者をその誓ひのごとく強ひるには最もお誂ひの處である。親族故舊も近づくことが出來ない。内心困んで降參を欲しても聲息が下界と通じ兼ねる。山の一方だけを警戒すれば一人と雖も逃げるものが出來ぬ。近來監獄部屋と云ふ一種の語が行はれ、浮浪者を捕へて労働者の群に連れこみ、苛酷の勞役を課することを云ふのであるが、これ等に捕はれとなると如何にしても脱出が出來ぬと云ふが、その脱出の出來ない趣きを比較すると高野山も亦監獄部屋である。高野山は廣しと云ふても二千に餘るコンナ連中が入り込んでは随分厄介なことである。併し衆生を濟度するのが寺の本領だとすると、まさか厄介者あつかひも出來ないであらう。見兼ねて仲裁者が山のお寺から現れ、それが斡旋してゐるといふもおもしろい現象である。二千人のお客様だからその食費も少くはあるまい。關東方面の労働組合から三萬圓の食費を贈つて持久の策を立てるとかだが、如何にも斯く無ければ續き兼ね

る仕末である。併し山上のものが食費を得ても山下の妻子は飢餓に泣くに相違ない。その妻子等も救はねば持久はむづかしいが、今はそこまで手は及びかねる處から、同盟も妻子に泣かれて解け出したとはこれも面白い。昔、髪まで落した僧とても妻子に泣かれては人情、山を下らねばならなかつた。有髪の俗、いかで堪へ得べき。兎に角相當の日數同盟を維持し得たのは、山を押し込め場所を選んだ作戦の妙によると謂はざるを得ぬ。同盟罷業もなか／＼悔りかぬる形勢となつて來た。大阪市電の同盟罷業などはその好例であらねばならぬ。

一三三 文明の行づまり

米人パトリックはその著、弛緩心理論に物質文明の弊を論じ、心身の弛緩の必要を説く事頗る周到である。多分文明の行づまりを論じた書物の内で之が最も好著であらう。若し古臭く書けば、戀舊思想の發露だと云はるゝであらう。反動より起る論は、全體かうしたものだ。唯だ論據が進化論にあるだけに、僅に陳腐の説を免がれてゐる。兎に角米國人を

してこの説を爲さしむるに至つては、物質文明も行詰まつてゐることを立證する。結論中の警語を掲げて見よう。

二十世紀は比較的豊富時代であるのに、世界の戦争中最も残念な戦争が起つた、國民的にも個人的にも富の増加といふ事は平和を齎さず、却つて争ひを生じた、イルビー・シヤツクス氏が「歐洲戦争は道徳を伴はない國民的富力の大増加の爲めに勃發した」と論じたのは至言である。今日人間の歩調は餘りに速や過ぎる。個人も社會もモットゆつくり歩んで、もつと深く呼吸しなくてはならぬ。

フアレロはその著「古代羅馬人と近代米國人」に於て曰く、「人間は未だ曾つて今日の如き、不斷に發達する興奮状態で生活した例は無い。若し古代人が生れ變つて、今日の世態を目撃したならば、その第一に受くる印象は、今や人類は發狂したと云ふ疑ひであらう。」

吾人が必要とする處は、激烈に働く事でない、即ち壓迫の下に働く事ではなくして、一層の緩和と平均と相稱ふ調和に達する事である。吾人はラスキンの云つた「この世の大事は大努力に依つて成るにあらずして却て最も容易に成るものである」と云ふ語の意味を

深く味はねばならぬ。今日、筋肉活動が失はれて行く事は、人間に取つて致命傷であつて、これ終局が近づいた證據である。よしこの終局の幾年かは光彩を放つとするも、それは滅せんとする燈火の如きものである。人間は頭腦のみを素晴らしく發達させ、この頭腦を以て征服し富を蓄積した。しかし是等の富は社會の安定よりは身體の退化を齎した。

幾千萬年間、足で立つて屋外に住み、生命の爲めに戰つて來た人間が、今日のやうに電車、自動車、蒸汽温室、ハンモック、安樂椅子で長く榮て行くとは思はれない。吾々は今や座つてゐる人間となつた、併し座つてゐる人間が長く生存し得るかどうかは疑問である。事實吾人はキッチンと行儀能く座つて居る事が出來ないで、背で支へるやうになつた。漸次吾々は凭れる形になつて行くのである。又ハンモックに寝たり、何かに足を頼りかけるといふ事は重大な惡兆候である。人間は長い淘汰の年所を経て、直立の姿勢を得たのに、今や折角の姿勢を失ひかゝつてゐる。

パトリックは尙ほ左の如く云ふてゐる。

人間が日輪の照る間を眠つて長夜の遊びをする事は、頽廢の原因で且つ結果である。生

命を與へる朝の日光の二時間乃至四時間は、晩の人工燈火の時間と取換へられた。人間が二時間早起きして、晩に二時間も早く臥床に入る事は利益がある。日光は電燈よりも明るく、健康で廉價である。併し現代の傾向は、この朝と晩の二時間の變更を喜ばない。そして我々は人工的光明を喜び、我々の子孫は一層に夫れを喜ぶであらう。現代は強烈な男性時代である……今世紀の神はタイオニサスである。吾人はアポロの神を忘れてゐる。タイオニサス主義の動機は、奮闘生活であつて、これをアポロの神の奉ずる平均、調和、安息の精神で制御する事は出来ないのである。

ニーチェ云く、「生理的強健こそは、人間平安の唯一の持久的基礎である」と……今日の人間は宛かも高層家屋の如きもので、立派さうではあるが、併し、相稱的な堅實な耐久性をもつてゐない。その大脳發達の爲めに安定性と耐久性とは犠牲にされてゐる。

パトリックは尙ほ人は平和を好むものでなく、むしろ争闘を好むものであると論じ、それが祖先の野蠻性の遺傳であると説き、前年の世界の大戦をもコンナ理屈から説いてゐる。人間が平和を喜ばない一例として擧げてゐる實例を見るに、米國の某大學教授が、理想的の平和村に出かけて、そこに住居を試みたが、何もかも調ふてゐて不自由もなければ、階

級もなく窮屈もなく、飽まで理想的に出来てゐて眞に平和村の名に背かないが、さて「無事乃神仙」と云ふがごとく、これは超人間の生活にこそ適すれ人間には餘り變化も波瀾もなく、趣味も感興もないので、直ぐに退屈を生じて連も長く留まることが出来ず、あんな處は眞平御免と云ふて遁げ出したと云ふ事實があげてある。すべて主義者などが夢に見てゐるその空想を假に實現したとなると、恰もコンナやうなもので、主義者自身先づ御免を蒙るであらうと思はれる。

要するに物質文明の弊は何もかも機械づくめであるから、人間の手足を勞する必要がない。手足勞せず事を辨じ得れば、便利は便利だが、運動を缺く結果として身體を時々刻々衰亡に導くことは必至の數である。尙ほ身體の運動を缺く恐るべき結果は、神經が亢奮して少しも寛ぐことがなく、終に神經衰弱となり發狂となる。頭腦と身體の働きが調和すればこそ人間も強健であるのに、物質文明はその調和を破つて、無闇矢鱈に重荷を頭腦にのみ擔はしめるから、人間は到頭發狂するの外はないので、世界の大戦なども、煎じ詰めれば、神經衰弱の發露とも云ひ得るのである。どうしてもパトリックの説くごとく心身に弛緩がなくては立ちゆかぬ。近年世界各國に身體を勞する種々のスポーツが行はれるのは單

に遊戯とのみ見るべきではない。身體を斯く勞せざれば身體が亡びるからである。西洋では若いものばかりがスポーツに熱するのでなく、壯年も老年も皆、これを事とし、これを以て身心を養ひ保健を庶幾してゐるが、これ等はパトリックの説く弛緩説を幾何か實行してゐるのである。

一三三 「笑」に就いて

(一)

文明の行詰まりを説き人間の心身は弛緩作用が必要であることの大要は前項の如くであるが、然らば何が弛緩に効果があるかに就て聊か説いて見たい。

「笑」と云ふものゝ如きはその效能のある一つに相違ない。パトリックは笑に就ていろ／＼云ふてゐるが先づ左の如く説いてゐる。

笑は大變に弛緩作用の効果がある。凡ての緊張した困難な社會局面も、佳良な傳染性の

笑で救済される事が多い。そして笑は吾人の弛緩の時に起り、又日常生活の重荷から解放された時に起る。で、精神の修養、整理の用を爲す。つまり緊張からの解放である。そして笑は普通遊戯に伴ひ、又競技、遊樂、饗宴、飲酒が弛緩作用に隨伴して居る。パトリックは更に一步を進めて左の如く説いてゐる。

笑は緊張とこれに伴ふ息を呑んだ形から解放された時起る當然の自發活動である。吾人は意識して物を注意する時、必然息を呑む形になる。その際、筋肉の緊張が伴ふ。喜悅や、滑稽を感じた場合、又期待が意外の結果を齎した場合、吾人のこの息を呑んだ形が中斷される。その時、顔や、口や、呼吸に關する筋肉の神經作用は笑となる。

この説明で一層「笑」の本體が分る。進化論者の言ふ所では、原始時代には人が放縱で喜べば笑ひ、勝てば笑ひ、其衝動が自由自在で少しも遠慮もなく、斟酌もなかつた。之が遺傳的に人間に傳はつてゐる、一證は孩兒が無意味の笑を爲すことで分る。彼等は喜ぶから笑ふのでなく、恰も彼等は兒童だから遊ぶと同じことで、彼等の笑は喜悅の表現でない。唯生理的に原始種族の習慣を繰返すのに過ぎない。但し孩兒と雖も筋肉緊張開放の後に笑ふことがある。乃ち孩兒が一步あるき出した時である。その際小兒は緊張し、心配と不安と

を感じる。そして注意力が満たされ、筋肉が張り切つて、顔は据はつてゐる。この大事業が仕遂げられると、その時弛緩と共に笑が起る。そして顔の筋肉が弛み、再び小兒らしくなることは誰も知る事實である。

原始人の放縱なる感情の表現は、文化の禮式などで抑制され壓迫され、漫りに發することを許されないがそれに拘らず、往々笑が爆發することがある。これに就てパトリックは次の如く云ふてゐる。

笑は不斷の進行力の壓迫から、忽然か又は一時的の脱出を現す、即ち禮儀、適度、優雅、嚴肅など云ふ事から、開放された姿である。その時人心は古い本能的衝動的な方面へ一時走るのである。而も進行力がすぐ本へ復して壓迫を加へることは判つてゐる。故に笑は文明に對する一時の反逆作用である。

如斯、笑は喜悅の破裂であつて、社會の嚴肅性から一時原始の放縱へ逃げ戻るのである。文化が段々に進めば進むほど社會の壓迫が激しくなり、世の中がセチ辛くなり人間に緊張のみあつて寛ぎがない。斯る行詰つた文明に處しどうせねばならぬかと云へば、文明に對して反逆を教唆するのが一法である。即ち笑の機會を作る事である。すべて身心に弛緩を

與へるものは遊樂にせよ、競技にせよ、睡眠にせよ、旅行にせよ、宴會にせよ、皆な大切であつて、氣任せの事が無ければ、人間は遂に發狂するの外ないのだ。

(二)

昔、支那の宰相王安石は、好んで文字に故事附けの説を弄した。蘇東坡は、それを忌んで、揶揄的に問ふた。「笑」の字は竹下に犬がゐる、犬が竹の下に居れば何故におかしいかと。王安石は返答に窮しギヤフンと參つたと云ふ挿話がある。これも一笑話たるを失はぬが、昔から「笑」を幸の形象としてゐる、笑ふ門には福來ると云ひ、笑堂福聚なども云ふてゐる。誰やらの詩に、仙人の住居と云ふものは格別の相違があるのではない、唯だ通常人の家に較べれば、笑聲が多く聞える、と云ふたのも、畢竟繫累のない境遇を形容したのであらう。

笑は身體の弛緩に由つて生ずるもので、愉快な形である。人は緊張してゐる時には笑はない、憂鬱の時にも笑はない。憂悶から脱すると笑が起るのには、身心が弛緩するからである。どう堪へても堪へ切れないで笑を爆發することもある。笑は陽氣な形である。噴飯

など云ふ話は、堪へ切れず笑ふ極端の形容である、笑は愉快のものであるから、世には笑を賣る商賣がある、そしてそれを買ふものもある。幫間などは此稼業だし、賣笑婦と云はれる如何はしい女もある。併し賣り物の笑には眞實がなく虚偽である。それにも拘らず買手があるのは、笑が人を魅する偉力を有するからだ。美人の一笑、國を傾けた例もあり、「越女一笑三年留」と云はるゝまでの引力を有する。笑は魔である。女の靨は人を擒にする陷阱である。

笑には種々の形貌があつて決して單純でない。俗に泣き笑と云ふものがある。これは悲喜交々到つた場合に起る複雑の笑である。苦笑など云ふ笑は不愉快の爲に生ずる笑で、據どころなく笑ふて其場をまぎらすのである。嘲笑となると積極的に反感を表現するものである。尙他に豪傑笑と云ふがある、磊落豪放の笑ひ振りで、物に頓着しない態度を示すものだが、随分質物があるから氣を吞まれてはならぬ。又極めて沈着の笑がある、何か物を問ふても濟まし込んで答へず隠者氣取のものもあるが、これも油斷はならぬ。

自分などの好まない笑は、氣味のわるい笑、意味ありげの笑、おかしくもないのに笑ふ笑、キザ味を帯びた笑、利口振る笑などは皆不愉快の笑である。全體多くの場合、笑には

詔諛追従が潜んでゐる。往々相手の氣分を和けて、其虚に乗らんとするものもある、低級の商人などが、因習的に媚びた笑を呈するのは甚だ卑陋の形貌で、人をして嘔吐を催さしめる。笑は往々愚弄と相隣ることがあつて、此種の笑は一種の侮辱である。昔、借用證文に違約の時はお笑ひ下さいとあるのも、侮辱を甘受すると云ふのである。

笑は天真のものでなければならぬ、小兒が無心に嬉々として笑ふのはよい心持である。少女がユーモアに接して笑ひ崩るゝのも氣持がよい。敢て聲を發せず微笑を漏すのも奥ゆかしい。西洋人は日本婦人の笑顔を評し、西洋人の笑ひ顔が美であるのに反し、日本婦人は笑顔がよくないと云ふてゐる、多分笑ふ時大きく口を開けて、相好を崩すからであらうが、天真爛漫は却つて此處にあるとも云へよう。或る詩人は「春雨や土の笑ひも野に餘り」と歌ひ、又「山々に笑はせて富士の高根かな」と歌つてゐるが、如何さまのんびりしておもしろい。吾等は斯る純眞無垢の笑を好む。

「小精廬雜筆」了

昭和八年十一月二十日印刷
昭和八年十一月二十五日發行

定價金貳圓八拾錢

版權
所有

著者

東京市牛込區東五軒町三五番地

市島謙吉

發行者

東京市下谷區金杉上町八〇番地

庄司喜藏

印刷者

東京市京橋區銀座西八丁目五番地

渡邊安雄

發行所

東京市下谷區金杉上町八〇番地

ブツクドム社

振替東京四九四一四番



肆書
堂明光
田神京東